



(公財)日本学校体育研究連合会

第55回 全国学校体育研究大会

福島大会 研究紀要

研究主題

『仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって
運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業』
～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～

平成28年11月10日(木)・11日(金)

福島大会実行委員会

あしく

“足育”を学校教育に位置付けよう！

足育指導資料
第二集発行！

JES
Just Evidence Shoes

みんな足守(あしもり)
日本教育シューズ協議会
<http://www.jes.gr.jp>

「足育」パンフレット - 足育指導資料 - 第二集

(公財)日本学校体育研究連合会は、多くの児童生徒が足のトラブルを抱えていることに対応するため、平成23年から足育についての研究をスタートし、児童生徒の足の健康についてその発達段階に応じた適切な指導のあり方を、体育科運動領域と特別活動の学級活動を中心として、授業を通じた実践的研究を行ってきました。

その成果をもとに、足育推進園・足育推進校の実践報告等も加え「足育」パンフレット-足育指導資料集-第二集を発行、無償配布が始まりました。(公財)日本学校体育研究連合会までお申し込みのうえ、ご活用ください。

私たちJESは、足育事業共催団体として協力しています。

「足育」パンフレット 第二集 目次

I 子どもの足と靴 その現状と課題

- 1 なぜ今、足の健康教育「足育」が必要か？
- 2 子どもの足と靴の実態
- 3 子どもの足と靴の知識
- 4 今、何をすべきか？！ <3つの提言>

II 足育の概要

- 1 足育の考え方
- 2 足育のプランニング
- 3 研究の内容
- 4 足育の目標

III 実践事例

- 1年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 2年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 3年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 4年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 5年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 6年 特別活動「学級活動(2)」保健指導
- 2年 体育科「体づくり運動」多様な動きをつくる運動遊び
保健室で使える！ 足育指導推進資料

IV 足育推進園・推進校 実践報告

- 実践報告1 江戸川区立船堀幼稚園
実践報告2 練馬区立大泉西小学校

V 資料

- 資料1 簡易足計測器
- 資料2 フットプリンター
- 資料3 足指体操
- 資料4 学体連 足育マイスター
- 資料5 本書教材のダウンロードについて



「足育」パンフレット - 足育指導資料 - : 発行者
公益財団法人 日本学校体育研究連合会
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1
TEL.0-3465-3954 FAX.03-3465-7464
URL <http://www.gakutairen.jp/>



(公財)日本学校体育研究連合会

第55回全国学校体育研究大会 福島大会

研究紀要

研究主題

『仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって
運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業』
～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～



御 挨拶

(公財)日本学校体育研究連合会
会 長 本 村 清 人

第55回全国学校体育研究大会福島大会を、ここ、とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）で全体会を、そして、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校合わせて11の学校で分科会を盛大に開催できますことを主催者のひとりとして、ご参会の皆様方と共に喜びたいと存じます。

日本学校体育研究連合会（通称、学体連）は、歴史的に見ますと、発足は昭和22年結成の日本体育指導者連盟です。その後、改組・名称変更しつつ、平成25年4月から、「公益財団法人」日本学校体育研究連合会として新たな歩みをしているところです。公益目的事業として、全国学校体育研究大会の開催・支援事業、指導資料作成・配布事業、指導者講習会の開催事業、全国学校体育研究最優秀校・優良校・功労者表彰の表彰事業、広報事業等を大きな柱としております。

さて、平成23年3月11日の東日本大震災とその後の原子力発電所事故に対し、改めて心からのお見舞いを申し上げます。復興半ばにもかかわらず、福島大会は、大会主題を、「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～」とし、さらには各学校種に応じて分科会研究主題を掲げて、福島県におけるこれまでの研究実践の成果を踏まえ、公開授業・保育をもとに主題に掲げる体育学習の在り方についてご提案いただけることになっております。全体会のシンポジウムはもとより、大会二日目の分科会が多くの方のご参加を得て公開授業と熱心な研究協議が成功裏に行われることをご期待申し上げます。

次期の学習指導要領改訂に向けては、中央教育審議会教育課程企画特別部会による「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が、本年9月9日、文部科学省HP上にアップされました。この中で、改善すべき事項について、何ができるようになるか（育成を目指す資質・能力）、何を学ぶか（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）、どのように学ぶか（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）、子供一人一人の発達をどのように支援するか（子供の発達を踏まえた指導）、何が身に付いたか（学習評価の充実）、実施するために何が必要か（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）の6点が示されています。

体育・保健体育では、すでに、学校段階間の接続及び発達段階のまとまりに応じて運動に親しむ資質や能力とは何か、実践的に研究を進め、授業づくりに励んできました。福島大会を契機にその資質・能力のさらなる具体化に向けて一層の充実を図っていきたく存じます。そのためには、先輩諸氏の実績を中堅教員が引き継ぎ、発展させ、若手教員を引き立てていかなければなりません。関係の皆様のご努力とご協力をお願いいたします。

終わりになりますが、文部科学省はもとより、共催である福島県教育委員会、福島市教育委員会、主管である第55回全国学校体育研究大会福島大会実行委員会の皆様方に衷心よりお礼を申し上げます。



御 挨拶

第55回全国学校体育研究大会
福島大会実行委員会

会 長 森 知 高

第55回全国学校体育研究大会を、全国からたくさんの学校体育研究に携わる皆様に御参会いただき、ここ福島県において48年ぶりに開催できますことに厚く御礼申し上げます。

福島県では、平成23年度に本大会の開催が決定されて以来、福島の子供たちが、生き生きと活動する姿を全国の多くの先生方に見ていただきたいという思いで、大会に向けた準備を進めて参りました。

研究においては、学習指導要領に示されている内容を各教師が十分に理解し、指導と評価が一体となった授業づくりを重視してきました。また、指導内容の体系化の視点を取り入れながら、確実な定着に向けた体育学習の充実を図ってきました。さらに本年度からは、福島県教育委員会における「第6次福島県総合教育計画平成28年度アクションプラン」により、児童生徒の主体的な学びを促す教育活動に取り組んでいます。

本大会では、大会主題を「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～」と設定しました。県内の幼稚園1園、小学校4校、中学校3校、高等学校2校、特別支援学校1校、合わせて11園・校が、大会主題の具現化に向け、運動に親しむ資質や能力を確かに保証する質の高い体育の授業づくりを目指して創意工夫を凝らし、取組を進めてきた成果を発表いたします。

福島大会では、研究主題に迫るために、幼稚園から高等学校までを見通した4つの時期とともに、特別支援学校における発達の段階や障がいの特性に応じて「技能」「態度」「知識、思考・判断」の学習内容を身に付けさせる授業の展開を是非ご覧ください。また、協働的な学びを活用し、かわり合いながら主体的に学習に取り組めるよう、発達の段階に応じた指導方法を工夫している点についてもご注目ください。

本大会の開催の機会を得たことで、本県における幼、小、中、高、特別支援学校のそれぞれの研究組織がさらに充実したこと、大学等との連携を通して学校体育の研究体制が整備されたことが私たちにとってかけがえのない財産となりました。

2日間の大会を通して、御参会の皆様には本県が目指す体育学習の在り方を御覧いただき、御意見や御指導を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり御指導・御支援を賜りましたスポーツ庁、公益財団法人日本学校体育研究連合会をはじめ、関係大学の指導助言者、福島県教育委員会、福島市教育委員会の皆様方に厚くお礼を申し上げます。また、この度、表彰を受けられます学校や指導者の皆様にも心よりお祝いと敬意を表し、挨拶とさせていただきます。

目 次

1	御 挨 拶	(公財) 日本学校体育研究連合会会長 本 村 清 人	
2	御 挨 拶	福島大会実行委員会会長 森 知 高	
3	開 催 要 項		1
4	開 会 式 次 第		7
5	主 催 ・ 共 催 ・ 後 援		8
6	実 行 委 員 会 役 員 等		9
7	分 科 会 一 覧		14
8	分 科 会 運 営 担 当		16
9	基 調 報 告		19
10	ア ト ラ ク シ ョ ン		31
11	解 説		35
12	シ ン ポ ジ ウ ム		39
13	特 別 講 演		47
14	分 科 会 研 究 発 表 資 料		51
	< 幼稚園部会 >		
	第 1 分 科 会 福 島 大 学 附 属 幼 稚 園		53
	< 小学校部会 >		
	第 2 分 科 会 福 島 大 学 附 属 小 学 校		67
	第 3 分 科 会 福 島 市 立 北 沢 又 小 学 校		81
	第 4 分 科 会 福 島 市 立 御 山 小 学 校		95
	第 5 分 科 会 福 島 市 立 平 野 小 学 校		109
	< 中学校部会 >		
	第 6 分 科 会 福 島 大 学 附 属 中 学 校		123
	第 7 分 科 会 福 島 市 立 福 島 第 一 中 学 校		137
	第 8 分 科 会 福 島 市 立 福 島 第 四 中 学 校		151
	< 高等学校部会 >		
	第 9 分 科 会 福 島 県 立 橘 高 等 学 校		165
	第 10 分 科 会 福 島 県 立 福 島 東 高 等 学 校		177
	< 特別支援学校部会 >		
	第 11 分 科 会 福 島 大 学 附 属 特 別 支 援 学 校		191
15	分 科 会 指 導 助 言 者 紹 介		205
16	広 告 協 賛		213

第55回全国学校体育研究大会福島大会

開催要項

1 趣 旨

生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力を育むためには、幼児期からの適切な運動の経験により、仲間とともに運動の楽しさや喜びを味わい、興味・関心や意欲を高め、自ら考えたり、工夫したりする力や運動の技能などをバランスよく身に付け、運動・スポーツに対する有能感を高めることが大切である。

これらの実現に向け、学習指導要領では、「明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる」ことを目標に、児童生徒の発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校、高等学校を見通した指導内容の体系化が図られた。また、指導内容の確実な定着を図り、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育成することを目指している。

しかしながら、児童生徒の体力・運動能力は、低下傾向には歯止めがかかっているものの、体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると、依然として低い状況が見られる。

このため、運動・スポーツへの興味・関心や意欲の向上を図り、自ら課題を発見し、その課題解決に向けて楽しく主体的・協働的に探究するとともに学びの成果等を表現して、さらに運動実践に生かす体育授業の在り方を探究することにより、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力を育んでいくことが不可欠である。

そこで、本大会では、福島県の児童生徒の実態やこれまでの研究の成果を踏まえ、研究主題を「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業」と設定した。

この研究主題にせまるために、幼稚園から高等学校までを見通した四つの時期とともに、特別支援学校においても発達の段階や障害の特性に応じ、「技能」「態度」「知識、思考・判断」の学習内容を身に付けさせる授業の充実を図っていくこととした。

研究の推進にあたっては、「特色ある年間計画・単元指導計画」「子供の主体的な学びと学び合い」「授業の改善や支援に生きる評価」を研究の柱として研究を進めてきた。

本大会では、全体の研究主題をふまえ、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校とそれぞれの校種において研究主題に掲げる体育授業の在り方について提案し、5校種11分科会で、研究協議を行うものである。

2 大会主題 「仲間とともに運動の楽しさを味わい、

生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業」

～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～

幼稚園研究主題 「心が動く」「体が動く」子供を育てる

小学校研究主題 教え合い、学び合い、高め合う、たくましい子供を育てる体育授業

中学校研究主題 運動のよさを実感し、主体的に運動や課題に取り組む態度を育む体育授業

高等学校研究主題 豊かなスポーツライフを実践する資質や能力を高める体育授業

特別支援学校研究主題 生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて、
運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

3 主 催 スポーツ庁 公益財団法人日本学校体育研究連合会

4 共 催 福島県教育委員会 福島市教育委員会

5 主 管 第55回全国学校体育研究大会福島大会実行委員会

6 期 日 平成28年11月10日(木)～平成28年11月11日(金)

7 会 場

(1) 全体会会場 (第1日) とうほう・みんなの文化センター (福島県文化センター)

〒960-8116 福島県福島市春日町 5 - 54

(2) 分科会会場 (第2日) 福島市内11会場

幼 稚 園	第1分科会	福島大学附属幼稚園
小 学 校	第2分科会	福島大学附属小学校
	第3分科会	福島市立北沢又小学校
	第4分科会	福島市立御山小学校
	第5分科会	福島市立平野小学校
	中 学 校	第6分科会
高 等 学 校	第7分科会	福島市立福島第一中学校
	第8分科会	福島市立福島第四中学校
	第9分科会	福島県立橘高等学校
特別支援学校	第10分科会	福島県立福島東高等学校
	第11分科会	福島大学附属特別支援学校

8 参加対象

(1) 全国の幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校，特別支援学校の教職員並びに保健体育行政関係者

(2) 社会体育等の指導者及び大学等の研究者

(3) 一般参加者 等

9 内 容

(1) 全体会 (第1日)

開 会 式

表 彰 式

基調報告

解 説 「育成すべき資質・能力を踏まえた体育・保健体育科の指導と評価の在り方」

森 良 一 (スポーツ庁政策課教科調査官)

シンポジウム 「体育・保健体育で育成すべき資質・能力について」

コーディネーター 山口 香 (筑波大学)

シンポジスト 福井 直美 (東京都江戸川区立船堀幼稚園)

近藤 浩人 (神奈川県横浜市立潮田小学校)

藤田 弘美 (福岡県立育徳館中学校)

佐藤 真一 (福島県立福島北高等学校)

野津 有司 (筑波大学)

特別講演 「スポーツの現場取材から学校体育に期待すること」

講演者 宮嶋 泰子 (株式会社テレビ朝日スポーツ局スポーツコメンテーター)

(2) 分科会 (第2日)

公開授業・公開保育

研究発表・研究協議

指導講評

閉会式

10 日 程

11月10日(木) 全体会 (とうほう・みんなの文化センター)

9:00	10:00	10:40	11:30	12:00	13:10	14:00	15:50	17:00
受付	開会式	表彰式	基調報告	昼食	解説	シンポジウム	特別講演	

なお、12:00~12:10にはアトラクションを実施いたします。

11月11日(金) 分科会 (公開園・各学校)

第1分科会 福島大学附属幼稚園

9:00	9:30	11:00	11:20	12:30	15:00	
受付	公開保育	園児降園	昼食	開会式	研究発表 研究指導 表議 協議 講評	閉会式

第2分科会 福島大学附属小学校

9:00	9:30	10:15	10:30	11:15	11:30	12:15	13:15	15:00	
受付	公開	移動	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究発表 研究指導 表議 協議 講評	閉会式

第3分科会 福島市立北沢又小学校

9:00	9:30	9:50	10:10	10:55	11:15	12:00	13:00	15:00	
受付	業間運動	移動	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究発表 研究指導 表議 協議 講評	閉会式

第4分科会 福島市立御山小学校

9:00	9:30	9:50	10:15	11:00	11:15	12:00	13:00	15:00	
受付	業間運動	移動	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究発表 研究指導 表議 協議 講評	閉会式

第5分科会 福島市立平野小学校

9:00	9:30	9:50	10:10	10:55	11:15	12:00	13:00	15:00	
受付	業間運動	移動	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第6分科会 福島大学附属中学校

9:00	9:40	10:30	10:45	11:35	13:00	15:00	
受付	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第7分科会 福島市立福島第一中学校

9:00	9:30	10:20	10:40	11:30	13:00	15:00	
受付	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第8分科会 福島市立福島第四中学校

9:00	9:35	10:25	10:45	11:35	13:15	15:00	
受付	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第9分科会 福島県立橘高等学校

9:00	9:45	10:35	10:55	11:45	13:00	15:00	
受付	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第10分科会 福島県立福島東高等学校

9:00	9:45	10:35	10:45	11:35	13:00	15:00	
受付	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

第11分科会 福島大学附属特別支援学校

8:40	9:10	10:00	10:10	10:55	11:10	12:00	13:00	15:00	
受付	公開	移動	公開	移動	公開	昼食	開会式	研究指導 発表 協議 評価	閉会式

11 問い合わせ先 福島大会実行委員会事務局 (福島県教育庁健康教育課内)

〒960 - 8688 福島県福島市杉妻町 2 - 16

TEL : 024 - 521 - 8409 FAX : 024 - 521 - 7167

12 その他

公益財団法人日本学校体育研究連合会評議員会は11月9日(水)13時30分から、「ザ・セレクトン福島」で実施されます。

(〒960 - 8068 福島県福島市太田町13 - 73 TEL 024 - 531 - 1111)

第 55 回全国学校体育研究大会福島大会会場一覧

全体	とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）		
第 1	福島大学附属幼稚園	第 7	福島市立福島第一中学校
第 2	福島大学附属小学校	第 8	福島市立福島第四中学校
第 3	福島市立北沢又小学校	第 9	福島県立橘高等学校
第 4	福島市立御山小学校	第 10	福島県立福島東高等学校
第 5	福島市立平野小学校	第 11	福島大学附属特別支援学校
第 6	福島大学附属中学校		



【MEMO】

開会式次第

- 1 開会の言葉
福島大会実行委員会副会長
荒井孝祐
- 2 国歌斉唱
- 3 開会挨拶
福島大会実行委員会会長
森知高
- 4 主催者挨拶
スポーツ庁長官
鈴木大地
公益財団法人日本学校体育研究連合会会長
本村清人
福島県教育委員会教育長
鈴木淳一
- 5 来賓祝辞
福島県知事
内堀雅雄
- 6 歓迎の言葉
福島市長
小林香
- 7 次期開催県挨拶
和歌山大会実行委員会会長
西川彰彦
- 8 閉会の言葉
福島大会実行委員会副会長
比佐功

主催・共催・後援

スポーツ庁

スポーツ庁長官	鈴木大地
スポーツ庁次長	高橋道和
スポーツ庁スポーツ総括官	平井明成
スポーツ庁政策課課長	澤川和宏
スポーツ庁政策課学校体育室室長	八木和広
スポーツ庁政策課教科調査官	高田彬成
スポーツ庁政策課教科調査官	高橋修一
スポーツ庁政策課教科調査官	森良一

公益財団法人日本学校体育研究連合会

(平成28年11月9日任期満了改選予定)

会長	本村清人		
副会長	友添秀則	副会長	後藤一彦
理事長	岡出美則		
理事	菅原健次	理事	池田延行
理事	村上みな子	理事	細越淳二
理事	近藤智靖	理事	吉原昌子
監事	奈尾力	監事	関毅彦
参与	櫻井康治	参与	加藤正克
参与	田中美智子	参与	手打和明
参与	古川浩洋	参与	吉永武史
参与	深見英一郎	参与	吉野聡
参与	白旗和也		
事務局	藤井かね子	事務局	山崎寿美子

開催県・市教育委員会

福島県教育委員会教育長	鈴木淳一
福島市教育委員会教育長	本間稔

福島大会実行委員会

顧問	鈴木 淳一	福島県教育委員会教育長
	本間 稔	福島市教育委員会教育長
参 与	佐藤 明彦	福島県国公立幼稚園・こども園長会長
	福士 寛樹	福島県小学校長会長
	福地 憲司	福島県中学校長会長
	久保田 範夫	福島県高等学校長協会長
	阿部 教夫	福島県特別支援学校長会長
会 長	森 知高	福島大学人間発達文化学類 名誉教授
副 会 長	(佐藤 明彦)	福島市立にしね幼稚園長
	鈴木 卓	郡山市立開成小学校長
	荒井 孝祐	川俣町立山木屋中学校長
	比佐 功	福島県立好間高等学校長
	塚野 薫	福島市立福島養護学校長
常任委員	香内 一宏	福島市立福島第三中学校長
	長澤 芳明	福島市立水保小学校長
	酒井 祐一	福島県立福島西高等学校 教諭
	(荒井 孝祐)	川俣町立山木屋中学校長
	大知里 重政	川俣町立山木屋小学校長
	星 俊子	福島大学附属幼稚園 副園長
	山崎 雅弘	福島県立富岡高等学校長
	野木 勝弘	福島大学附属特別支援学校副校長
	慶徳 秀夫	福島市立平田小学校長
	鈴木 雅広	福島県立福島商業高等学校 教諭
	小椋 敬次	福島市立立子山小学校 教頭
	須田 尊	福島市立大森小学校長
	大内 淳	福島市立南向台小学校 教頭
	矢館 実也	福島市立吉井田小学校長
	佐藤 勉	川俣町立川俣南小学校長
委 員	渡辺 隆	福島大学附属幼稚園長
	鶴巻 正子	福島大学附属小学校長
	茂木 巧	福島市立北沢又小学校長
	阿部 正明	福島市立御山小学校長
	佐藤 博英	福島市立平野小学校長
	川本 和久	福島大学附属中学校長
	伊藤 隆幸	福島市立福島第一中学校長
	(福地 憲司)	福島市立福島第四中学校長

	青 山 修 身	福島県立橘高等学校長
	吉 田 豊 彦	福島県立福島東高等学校長
	飛 田 操	福島大学附属特別支援学校長
	吉 川 武 彦	福島県教育庁義務教育課 指導主事
	角 田 敏 文	福島県教育庁県南教育事務所 社会教育主事兼指導主事
	横 山 浩 志	福島県教育庁相双教育事務所 指導主事
	野 口 浩 文	福島県教育庁いわき教育事務所 社会教育主事兼指導主事
	阿久津 聖 子	福島県教育庁南会津教育事務所 指導主事
	小 林 雅	福島県教育庁県中教育事務所 指導主事
	佐 藤 信 行	福島市教育委員会保健体育課 指導主事
	小 林 義 弘	福島県教育庁会津教育事務所 指導主事
	笠 原 聡 美	福島県教育庁県北教育事務所 指導主事
	佐 藤 真 一	福島県立福島北高等学校 教頭
	鈴 木 嘉 人	福島県教育庁特別支援教育課 指導主事
	中 丸 美 穂	福島大学附属幼稚園 教諭
	吉 田 貴 史	福島大学附属小学校 主幹教諭
	茂 木 崇 志	福島市立北沢又小学校 教諭
	佐 藤 孝 浩	福島市立御山小学校 教諭
	廣 居 亮	福島市立平野小学校 教諭
	関 根 智 美	福島大学附属中学校 教諭
	今 村 恵美子	福島市立福島第一中学校 教諭
	武 石 昌 之	福島市立福島第四中学校 教諭
	坂 本 勝 久	福島県立橘高等学校 教諭
	菅 野 悟 史	福島県立福島東高等学校 教諭
	佐久間 紗和子	福島大学附属特別支援学校 教諭
監 事	住 吉 哲 也	二本松市立二本松第三中学校長
	五十嵐 隆 之	福島県立福島南高等学校 教諭
事 務 局	塩 田 正 信	福島県教育庁参事兼健康教育課長
	小 川 宏	福島大学人間発達文化学類 教授
	佐 藤 文 男	福島県教育庁健康教育課主幹
	佐 藤 隆 宏	福島県教育庁健康教育課主任指導主事
	山 本 秀 和	福島県教育庁健康教育課指導主事
	渡 邊 亮	福島県教育庁健康教育課指導主事
	(佐 藤 信 行)	福島市教育委員会保健体育課指導主事
	江 口 隆 広	福島市立杉妻幼稚園長
	井 上 明 浩	福島市立大笹生小学校 教頭
	福 地 誠 志	福島市立福島第三中学校 教諭
	(酒 井 祐 一)	福島県立福島西高等学校 教諭
	小 柳 美 緒	福島市立福島養護学校 教諭

運 営 委 員 会

総 務 部

部 長	香 内 一 宏	福島市立福島第三中学校 校長
副部長	長 澤 芳 明	福島市立水保小学校 校長
副部長	酒 井 祐 一	福島県立福島西高等学校 教諭 (事務局兼務)
庶 務	井 上 明 浩	福島市立大笹生小学校 教頭 (事務局兼務)
会 計	佐 藤 裕 子	福島市立吉井田小学校 教諭
	江 口 隆 広	福島市立杉妻幼稚園 園長 (事務局兼務)
	福 地 誠 志	福島市立福島第三中学校 教諭 (事務局兼務)
	小 柳 美 緒	福島市立福島養護学校 教諭 (事務局兼務)
	武 井 史 子	福島市立福島第二小学校 教諭
	高 橋 さなえ	福島市立信夫中学校 教諭
	酒 井 宏	福島市立信陵中学校 教諭
	高 橋 和 枝	学校法人東稜学園福島東稜高等学校 教諭

研 究 部

部 長	荒 井 孝 祐	川俣町立山木屋中学校 校長 中学校部会代表
副部長	大知里 重 政	川俣町立山木屋小学校 校長 小学校部会代表
副部長	星 俊 子	福島大学附属幼稚園 副園長 幼稚園部会代表
副部長	山 崎 雅 弘	福島県立富岡高等学校 校長 高等学校部会代表
副部長	野 木 勝 弘	福島大学附属特別支援学校 副校長 特支学校部会代表
	二 谷 京 子	福島市立笹谷幼稚園 園長
	中 丸 美 穂	福島大学附属幼稚園 教諭 (公開校研究推進者)
	田 村 高 弘	福島市立平石小学校 教諭
	松 本 大 光	福島市立蓬萊小学校 教諭
	丹 治 豊一郎	福島市立杉妻小学校 教諭
	鐵 真由美	福島市立清水小学校 教諭
	土 田 稔	福島市立三河台小学校 教諭
	舟 山 隆 雄	福島市立中野小学校 教諭
	吉 田 貴 史	福島大学附属小学校 主幹教諭 (公開校研究推進者)
	茂 木 崇 志	福島市立北沢又小学校 教諭 (公開校研究推進者)
	佐 藤 孝 浩	福島市立御山小学校 教諭 (公開校研究推進者)
	廣 居 亮	福島市立平野小学校 教諭 (公開校研究推進者)
	長 澤 敏 行	福島市立福島第三中学校 教諭
	菅 野 弘 和	福島市立北信中学校 教諭
会 計	古 川 真理子	川俣町立川俣中学校 教諭

庶務	加藤 芳史	川俣町立山木屋中学校 教諭
	今村 恵美子	福島市立福島第一中学校 教諭 (公開校研究推進者)
	武石 昌之	福島市立福島第四中学校 教諭 (公開校研究推進者)
	関根 智美	福島大学附属中学校 教諭 (公開校研究推進者)
	松井 暢彦	福島県立福島高等学校 教諭
	室田 彦	福島県立福島南高等学校 教諭
	山田 敦子	福島県立福島高等学校 常勤講師
	山本 陽	学校法人東稜学園福島東稜高等学校 常勤講師
	坂本 勝久	福島県立橘高等学校 教諭 (公開校研究推進者)
	菅野 悟史	福島県立福島東高等学校 教諭 (公開校研究推進者)
	神村 崇	福島大学附属特別支援学校 教諭
	本間 久登	福島大学附属特別支援学校 教諭
	佐藤 純一	福島大学附属特別支援学校 教諭
	佐久間 潤	福島大学附属特別支援学校 教諭
	小林 直輝	福島県立大笹生養護学校 教諭
	安齋 和之	福島県立大笹生養護学校 教諭
	齋藤 弘樹	福島市立福島養護学校 教諭
	佐久間 紗和子	福島大学附属特別支援学校 教諭 (公開校研究推進者)

編集部

部長	慶徳 秀夫	福島市立平田小学校 校長
副部長	鈴木 雅広	福島県立福島商業高等学校 教諭
副部長	小椋 敬次	福島市立立子山小学校 教頭
庶務	本田 圭舟	福島市立平田小学校 教諭
会計	阿部 義人	福島市立吉井田小学校 教諭
	大竹 英明	福島市立福島第三小学校 教諭
	阿部 敏之	福島市立渡利小学校 教諭
	森 米吉	川俣町立川俣小学校 教諭
	佐藤 育男	福島市立飯野小学校 教諭
	小林 隆	福島市立岳陽中学校 教諭
	山田 光裕	福島市立北信中学校 教諭
	立谷 栄子	福島市立平野中学校 教諭
	東城 正幸	福島県立福島北高等学校 教諭

事業部

部長	須田 尊	福島市立大森小学校 校長
副部長	大内 淳	福島市立南向台小学校 教頭
庶務	佐藤 和暁	福島市立大森小学校 教頭
会計	永富 洋美	福島市立大森小学校 教諭 (附属幼稚園担当)
	清野 恭史	福島市立大鳥中学校 教諭
	五十嵐 隆之	福島県立福島南高等学校 教諭 (橘高担当)

遠藤心平	福島県立福島明成高等学校	教諭 (橘高担当)
伊澤充	学校法人福島成蹊学園福島成蹊高等学校	教諭 (福島東高担当)
齋藤妃呂子	福島県立保原高等学校	教諭 (福島東高担当)
星健次	福島市立信夫中学校	教諭 (附属中担当)
阿部仁	福島市立清水中学校	教諭 (附属中担当)
三瓶和久	福島市立松陵中学校	教諭 (福島一中担当)
阿部寛	福島市立吾妻中学校	教諭 (福島一中担当)
多田慎之介	福島市立蓬萊中学校	教諭 (福島四中担当)
穴戸啓光	福島市立西信中学校	教諭 (福島四中担当)
南大紀	福島市立野田中学校	教諭 (附属特別支援担当)
菅野昌宏	福島市立信夫中学校	教諭 (附属特別支援担当)
金山修治	福島市立月輪小学校	教諭 (北沢又小担当)
横山剛	福島市立福島第一小学校	教諭 (北沢又小担当)
横山章	福島市立笹谷小学校	教諭 (附属小担当)
野村茂彦	川俣町立飯坂小学校	教諭 (附属小担当)
木幡久靖	福島市立下川崎小学校	教諭 (御山小担当)
佐藤友美	福島市立荒井小学校	教諭 (御山小担当)
古山裕子	福島市立大久保小学校	教諭 (平野小担当)
川村浩昭	福島市立湯野小学校	教諭 (平野小担当)
駿河由美子	福島市立森合小学校	教諭 (附属幼稚園担当)
神洋子	福島県立福島工業高等学校	養護教諭

式典部

部長	矢館実也	福島市立吉井田小学校 校長
副部長	佐藤勉	川俣町立川俣南小学校 校長
庶務	西山要	福島市立下川崎小学校 教諭
会計	川島恭子	福島市立蓬萊小学校 教諭
	加藤美登里	福島市立庭坂小学校 教諭
	長澤のり子	福島市立瀬上小学校 教諭
	小野裕子	福島市立瀬上小学校 教諭
	吾妻仁	福島市立福島第二中学校 教諭
	中島伸樹	福島市立吉井田小学校 教諭
	田川卓史	福島県立福島工業高校 教諭
	佐藤ふさ子	福島市立岡山小学校 教諭
	一條早苗	福島市立大笹生小学校 教諭
	望月清志	福島市立岳陽中学校 教諭
	三浦武彦	福島県立福島明成高等学校 教諭
	小針宏昭	福島市立鎌田小学校 教諭
	本田祐一	福島市立矢野目小学校 教諭

分科会一覧

	分科会	会場校	分科会別主題	公開		
				領域 (内容)	学年	授業者
幼稚園	1	福島大学 附属幼稚園	「心が動く」「体が動く」 子供を育てる	健康：運動遊び（3歳児：遊佐早苗）		
小学校	2	福島大学 附属小学校	友達と共に運動の楽しさを 味わい「からだ」の高まりを 感じることでできるゲーム・ ボール運動の授業とは	公開 ゲーム (ボール投げゲーム)	2年	落合 和将
				公開 保健 (毎日の生活と健康)	3年	星 知考
	3	福島市立 北沢又小学校	運動の楽しさや喜びを味わい、 自ら進んで実践する力を身に 付ける体づくり運動の授業	体づくり運動 (多様な動きをつくる運動)	4年	水野 秀人
	4	福島市立 御山小学校	目標をもち、楽しみながら 運動する子供の育成 ～楽しくルンルン バンバン 運動 ケンゲンのびる 体育の 授業づくり～	走・跳の運動 (高跳び)	4年	室井 澄子
	5	福島市立 平野小学校	できる喜びを味わい、力 いっぱい運動する児童の 育成	器械運動 (マット運動)	3年	緑川 伸浩
中学校	6	福島大学 附属中学校	運動・スポーツの楽しさや 必要性を実感し、学習した ことを実生活において活用 しようとする態度を養う 体育学習	体育理論 (運動やスポーツの多様性)	1年	坂内 俊介
	7	福島市立 福島第一中学校	仲間とかかわる楽しさを 感じながら主体的に課題 解決を目指し、活動する 体育授業	球 技 (ネット型：バレーボール)	2年	富田 宏幸
	8	福島市立 福島第四中学校	合理的な運動を実践する ことによって、運動すること の楽しさや喜びを実感し、 主体的にかかわり合う 態度を育てる授業	器械運動 (マット運動)	2年	武石 昌之
高等学校	9	福島県立 橘高等学校	豊かなスポーツライフを 実践するために知識を 深めることができる 体育授業	球 技 (ベースボール型：ソフトボール)	2年	籠田あゆみ
	10	福島県立 福島東高等学校	自己や仲間の運動課題を 見つけ、課題解決に主体的 に取り組む学習により、 豊かなスポーツライフを 実践する資質や能力を 高める体育授業	球 技 (ゴール型：バスケットボール)	1年	菅野 真幸
特別支援学校	11	福島大学附属 特別支援学校	生活年齢・発達の段階・ 障がい特性に応じて、 運動や課題に楽しく 取り組む態度を育てる 体育授業	公開 いろいろな スポーツ ～球技～ (ふよう ベースボール)	高 等 部	中村 誠 (T1) 他 公開 歩く、走る、 跳ぶなどの 基本的な運動

公開					研究発表 (発表者)	指導助言 (大学教授等)
領域 (内容)	学年	授業者				
4歳児：中丸美穂 5歳児：佐藤久美子)					中丸 美穂	福島大学 人間発達文化学類 教授 菅家 礼子
公開 ボール運動 (ゴール型：ディスクサッカー)	5年	吉田 貴史			吉田 貴史 中村 崇史 落合 和将	秋田大学 教育文化学部 教授 佐藤 靖
公開 ボール運動 (ゴール型：Tゴールサッカー)	6年	中村 崇史				
体づくり運動 (体力を高める運動)	6年	遠藤 貴久			茂木 崇志	信州大学 教育学部 准教授 渡辺 敏明
陸上運動 (ハードル走)	6年	泉 光			佐藤 孝浩	早稲田大学 スポーツ科学学術院 准教授 吉永 武史
器械運動 (跳び箱運動)	6年	武田 裕巳			廣居 亮	宮城教育大学 保健体育講座 教授 木下 英俊
体づくり運動 (体力を高める運動)	3年	関根 智美			関根 智美	東海大学 体育学部 准教授 内田 匡輔
ダンス (創作ダンス)	3年	今村恵美子			菊地なつみ	筑波大学 体育専門学群 准教授 寺山 由美
球 技 (ゴール型：バスケットボール)	3年	安斎 美輝			菅野 義広	群馬大学 教育学部 准教授 鬼澤 陽子
球 技 (ネット型：バレーボール)	2年	山下 訓史			坂本 勝久	福島大学 人間発達文化学類 教授 小川 宏
武 道 (柔道)	1年	佐藤 裕隆			菅野 悟史	甲南大学 スポーツ・健康科学教育研究センター 教授 山崎 俊輔
小 学 部	数間 靖徳 (T1) 他	公開 簡単なスポーツ ～球 技～ (ティーボール)	中 学 部	鈴木 直樹 (T1) 他	神村 崇	筑波大学 体育専門学群 准教授 澤江 幸則

分科会運営担当

分科会	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会
会場校	福島大学 附属幼稚園	福島大学 附属小学校	福島市立 北沢又小学校	福島市立 御山小学校
分科会会長	渡辺 隆	鶴巻 正子	茂木 巧	阿部 正明
運営委員長	星 俊子	大石 正文	馬場 秀之	伊藤 勝彦
会場責任者	(星 俊子)	吉田 貴史	佐藤 裕昭	石倉 徳江
研究発表者	中丸 美穂	(吉田 貴史) (中村 崇史) 落合 和将	茂木 崇志	佐藤 孝浩
研究推進委員	(中丸 美穂)	(吉田 貴史)	(茂木 崇志)	(佐藤 孝浩)
授業者	遊佐 早苗 (中丸 美穂) 佐藤 久美子	(吉田 貴史) (中村 崇史) (落合 和将) 星 知考	水野 秀人 遠藤 貴久	室井 澄子 泉 光
司会・進行	吉川 武彦	角田 敏文	横山 浩志	野口 浩文
記録係	本田 圭舟 本須 早苗 斎藤 亜希子	大竹 英明 長澤 昭仁	阿部 敏之 横田 安弘	森 米吉 古山 武彦
授業・分科会補助	江口 隆広 二谷 京子	土田 稔子 武井 史子	田村 高弘 鐵 真由美	丹治 豊一郎 舟山 隆雄
受付・弁当係	永富洋美子 駿河由典子 河野典敦子 片平敦真澄子 鈴木部裕子 阿大越保子 長沢由加子	横山章彦 野村茂勉 佐藤山要樹 西島伸千晶 中安齋朋子 黒岡	金山修治 横山剛浩 井上明和 佐藤恭宏 川島恭宏 本田美穂子 伊藤美穂子	木幡久靖 佐藤友美 大内裕子 佐藤裕寛 東城道夫 梅津
接待係	斎藤 典子	肥沼 志帆 溝口 里奈	佐藤 心さ子 長澤 のり子 佐藤 菊江 根本 優奈	加藤 美登里 一條 早苗 小野 朋恵 二木 直子
救護係	富岡 美穂	鈴木 智恵	阿部 恭子	二瓶 典子
誘導・駐車場 会場作成 警備物 荷物 校内案内	本森 祐一 坂内 香瞳 土屋 映梨 大堀 直美 清野 文絵 武藤 清香 菅野 葉月 近野 美千代 吉田 寿恵 野澤 喜久雄	紺野 純 高玉 宏太郎 馬場 雅人 加藤 怜子 浅見 明子 佐藤 文江 山下 美穂子 長谷川 正知 加藤 哲郎 附属小 保護者	柝窪 芳光 遊佐 富子 佐藤 真智子 根本 卓子 原 みき子 箭内 美紗 二階堂 由美子 北沢又小 保護者	伊東 廣樹 安彦 恵美子 黒澤 由美子 安濃 幸子 御山小 保護者

分科会	第5分科会	第6分科会	第7分科会	第8分科会
会場校	福島市立平野小学校	福島大学附属中学校	福島市立福島第一中学校	福島市立福島第四中学校
分科会会長	佐藤博英	川本和久	伊藤隆幸	福地憲司
運営委員長	菅野智	大越一也	遠藤久典	千葉英一
会場責任者	佐藤雄二	澤藤晃治	若松幸一	多田晋
研究発表者	廣居亮	関根智美	菊地なつみ	菅野義広
研究推進委員	(廣居亮)	(関根智美)	今村恵美子	武石昌之
授業者	緑川伸浩 武田裕巳	(関根智美) 坂内俊介	(今村恵美子) 富田宏幸	(武石昌之) 安斎美輝
司会・進行	阿久津聖子	小林雅	佐藤信行	小林義弘
記録係	佐藤育男 宗形雄大	小椋敬次 小林隆範 石田和範	山田光裕 島貫健 高野久美子	立谷栄子 佐藤徳之 花岡裕美子
授業・分科会補助	松本大光 大知里重政	古川真理子	長澤敏行 加藤芳史	菅野弘和
受付・弁当係	古山裕子 川村浩昭 長澤芳明 田村貴千世 渡辺はるみ 室井誠子	星健次 阿部誠志 福地友史 小野島稔 栗山雄	三瓶和久 阿部寛仁 吾妻仁史 清野恭悦 加藤藤子 本田馨	多田慎之介 穴戸啓光 酒井宏志 望月清昌 横田中英邦
接待係	小野裕子 沼美喜子	加藤久美子 鈴木敬子	高橋さなえ 高橋裕美	本田邦子 大田原栄子
救護係	鈴木三穂	相模由紀	大場馨	小針知絵
誘導・駐車場 会場作成 警備 荷物 校内案内	阿部公一 小針宏昭 太田淳一 平野小保護者	(澤藤晃治) 鈴木英之 丹野友貴 吉川修司 橋本洋二 鈴木仲子 渡辺泉 西山淑 附属中保護者	(若松幸一) 菅野圭祐 瀬戸善章 田中裕一 朽木毅 松浦志 鈴木拓志 野木妙子 片倉美津子 杉本洋子 佐藤ひろみ 山葉早恵子	(多田晋) 齋藤智浩 穴澤宏 佐藤記詩 加藤義昭 平間昌文 鈴木由美 佐藤和也 渡辺典之 福島四中保護者

分科会	第9分科会	第10分科会	第11分科会
会場校	福島県立 橘高等学校	福島県立 福島東高等学校	福島大学附属 特別支援学校
分科会会長	青山修身	吉田豊彦	飛田操
運営委員長	伊東光司	森和茂	野木勝弘
会場責任者	宮本英雄	荒川政浩	佐藤純一
研究発表者	坂本勝久	菅野悟史	神村崇
研究推進委員	(坂本勝久)	(菅野悟史)	佐久間 紗和子
授業者	籠田 あゆみ 山下 訓史	菅野 真幸 佐藤 裕隆	数間 靖徳 吉田 奈津美 山内 淳香 清水 彩津子 清田 志津郎 木村 至郎 鈴木 直樹 神村 上真 二池 貴純 菊部 友 渡本 野田 浅富 篤 中村 智久 大原 由和裕 高沼 藤間 佐藤 針澤 本小 長平 谷渡 谷邊
司会・進行	笠原 聡美	佐藤 真一	鈴木 嘉人
記録係	鈴木 雅広 菊田 剛史	東城 正幸 安齋 司	阿部 義人
授業・分科会補助	小柳 修紀 小澤 邦彦 小松 暢一 酒井 祐一	阿部 秀男 齋藤 克幸 山崎 雅弘 室田 彦陽 山本 陽	小林 直輝 安齋 藤和 齋 弘樹
受付・弁当係	五十嵐 隆之 遠藤 心平 石田 智宏 佐藤 理恵 千葉 眞佐 本多 信春 武田 正弥 渡辺 志一	伊齋 充子 澤藤 妃呂 三浦 武彦 鈴木 清文 浅野 雅彦 我妻 隆徳 三浦 正智 林 子映	廣居 美貴子 森口 香代 松浦 里子 生田 目宏 岩城 智美 菅野 大紀 野 昌宏
接待係	渡山 邊芽衣 山田 敦子	對馬 綾子 林 芳映	石井 礼子 小柳 美緒
救護係	鈴木 陽子 神 洋子	佐藤 和子 高橋 和枝	原 伊津子
誘導・駐車場 会場作成 警備物 荷物 校内案内	(宮本英雄) 田川卓史 渡部浩一 山寺清司 亀岡 文朗	(荒川政浩) 吉成 啓夫 佐藤 茂夫 小野寺 浩亀 大井 信二 瀬田川 行 岩倉 徹 馬場 大	佐久間 潤子 中川 陽宏 後藤 和宏 佐々木 珠水 松岡 悠生 高橋 季公 佐藤 健太 菅野 利三 高橋 弘明

基調報告





浄楽園のお茶屋から望む風景（写真提供 福島市）

I 研究主題

1 研究主題

「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業」

～ふくしまの未来を担う心身ともにたくましい子供の育成を目指して～

全国的に児童生徒の体力・運動能力の向上が求められる中、本県においては、2011年3月11日に起こった東日本大震災とその後の原子力発電所事故により、未だふるさとに戻れず避難生活を余儀なくされ、心身ともにゆとりのない幼児・児童生徒も数多くいる。また、震災事故後しばらくの間、屋外での運動を制限された影響もあり、肥満傾向や運動習慣の二極化が進み、児童生徒の体力・運動能力は全国平均を下回っている。

我々教師は、幼児・児童生徒の運動・スポーツへの興味関心や意欲の向上を図り、自らの課題を発見させ、その課題解決に向けて楽しく、主体的・協働的に学ぶことを支援し、やる気を引き出したい。よって、運動実践に生かす体育授業の在り方を探究することにより、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力を育み、本県幼児・児童生徒の現状を改善していきたい。

そこで、本大会では、本県の幼児・児童生徒の実態やこれまでの研究の成果を踏まえ、研究主題を「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業」と設定した。

2 研究主題設定の理由

(1) 学習指導要領の趣旨

学習指導要領の体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」と記され、発達段階に応じた学年の目標、さらには各運動領域の内容と一貫して生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成に向けて構成されている。そのための基本理念として「運動を楽しく行う」ことが求められている。

さらに、小学校から高等学校までの12年間の教育内容は、楽しく運動することにより各種の運動の基礎を培う時期、運動の特性に触れる楽しさを味わい多くの領域の学習を経験する時期、得意な運動を作り卒業後に少なくとも一つの運動・スポーツを継続することができるようにする時期と4・4・4の3段階の時期で構成されている。

特に、豊かなスポーツライフの実現を図ることを考えたとき、幼稚園から高等学校までを見据えた指導内容等の系統化を図ることは重要であり、小学校低・中学年は「基本的な動きに幅広く取り組む楽しさを味わわせる」、小学校高学年・中学校1・2年は「全ての領域の特性や魅力に触れる楽しさを味わわせる」、中学校3年・高等学校は「自分に合った運動を選び深める楽しさを味わわせる」ということを各発達の段階と捉え、指導内容を明確にすることが重要である。

幼稚園においては、運動習慣の基盤づくりの時期と捉え「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」ことが幼稚園教育要領に示され、特別支援学校においては、生活年齢・発達の段階・障が

い特性に応じて、運動し、体を動かす楽しさや喜びを味わい、満足できる経験を積み重ねる」ことが示されている。

また、各運動領域における学習すべき内容を技能、態度及び知識、思考・判断の三つのフレームで示しており、この三つをいかにバランスよく培うかがポイントの一つとなる。運動に親しむ資質や能力とは、『運動の関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲良く運動すること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などを指しており、「技能」「態度」「知識、思考・判断」の三つの内容の関係性の中で育まれる身体経験こそが、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力である』と捉えている。

(2) 福島の幼児・児童生徒の実態

本県では、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故後、1～2年は、外遊びの禁止や制限（時間、場所）等が行われた。それにより、「幼児・児童生徒の体力・運動能力の低下」、「生活習慣や生活環境の変化と運動不足の重なりによる肥満傾向児の増加」等の健康課題が顕在化し、事故後5年を経過した現在も大きな課題となっている。

平成27年度に行われた「全国運動能力、運動習慣等調査」の結果を見ると、「体力合計点」については、小学5年男子は全国平均をやや下回り、小学5年女子は上回った。中学2年男女は全国平均を下回った。全ての学年・男女において、平成26年度の「体力合計点」の本県平均を上回り、全体的には体力・運動能力の改善傾向が見られるが、全国と比較すると依然として低い状況にある。

(全国体力・運動能力調査 体力合計点の比較と本県の推移)

	27年度全国平均	27年度本県平均	26年度本県平均
小5男子	53.81	52.86	52.62
小5女子	55.19	55.23	54.85
中2男子	41.80	40.77	40.56
中2女子	48.96	47.77	47.74

「福島県教育委員会 健康教育課『平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査』結果の概要から抜粋」

また、平成27年度学校保健統計によると、本県の幼児・児童生徒の肥満傾向児の出現率は、改善傾向が見られる。しかし、全国との比較で見ると、女子の11歳を除き全ての年齢で全国の割合を上回っており、こちらも依然として深刻な状況にある。

このような現状を踏まえ、本県では、総合的で継続性のある取組を実施するため、平成27年度から「ふくしまっ子体力総合プロジェクト」を展開している。このプロジェクトでは、体力・運動能力の向上及び肥満傾向児の出現率の減少を目指し、「運動身体づくりプログラムの普及・定着」や「体育専門アドバイザーの派遣・支援」、「自分手帳の活用と生活改善」、「食習慣の改善のための専門家派遣・支援」等の様々な取組を行っている。

平成27年度の各調査において、本県の幼児・児童生徒の体力・運動能力や肥満傾向児の出現率に改善傾向がみられてきたのは、このプロジェクトを受け、各校において努力を継続した結果が現れてきたものと捉えることができる。

表6 年齢別 肥満傾向児の出現率

(単位：%)

区 分	本県						全国		本県と全国との差		
	男			女			男	女	男	女	
	H27 (A)	H26 (B)	前年差 (A-B)	H27 (C)	H26 (D)	前年差 (C-D)	H27 (E)	H27 (F)	(A-E)	(C-F)	
幼稚園	5歳	5.29	5.81	△ 0.52	5.96	5.71	0.25	2.34	2.24	2.95	3.72
	6歳	6.97	8.62	△ 1.65	5.91	7.07	△ 1.16	3.74	3.93	3.23	1.98
小学校	7歳	7.05	9.00	△ 1.95	5.20	10.29	△ 5.09	5.24	5.60	1.81	0.20
	8歳	10.36	10.86	△ 0.50	6.46	10.42	△ 3.96	6.70	6.31	3.66	0.15
	9歳	16.22	17.34	△ 1.12	9.21	12.68	△ 3.47	8.93	6.99	7.29	2.22
	10歳	12.83	14.85	△ 2.02	12.69	9.39	3.30	9.77	7.42	3.05	5.27
	11歳	13.39	15.12	△ 1.73	7.51	13.71	△ 6.20	9.87	7.92	3.52	△ 0.41
中学校	12歳	12.49	15.76	△ 3.27	12.54	13.12	△ 0.58	9.87	8.36	2.62	4.18
	13歳	10.50	15.02	△ 4.52	11.74	13.78	△ 2.04	8.37	7.69	2.13	4.05
	14歳	10.81	9.83	0.98	9.93	10.32	△ 0.39	7.94	7.14	2.87	2.79
高等学校	15歳	18.10	17.26	0.84	9.90	9.71	0.19	11.34	7.82	6.76	2.08
	16歳	12.57	14.31	△ 1.74	10.64	10.55	0.09	9.21	7.48	3.36	3.16
	17歳	14.66	13.41	1.45	11.10	12.81	△ 1.71	10.22	7.75	4.64	3.35

(注) 肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。
 肥満度 = (実測体重 - 身長別標準体重) / 身長別標準体重 × 100%

「福島県統計課編 平成27年度 学校保健統計(学校保健統計調査)から抜粋」

(3) 福島県の体育研究

福島県では、「未来を担う健康でたくましいふくしまっ子」をスローガンに「ふくしまっ子体
 力向上総合プロジェクト」として下記の事業に取り組んでいる。

本県独自の「運動身体づくりプログラム(改訂版)」の活用

児童生徒の12年間にわたる継続調査(体力運動能力の調査及び食習慣調査)実施

健康診断結果等と「体力・運動能力調査」等の一元管理する自分手帳の活用

体育の授業への専門アドバイザーの派遣(小学校)

運動部活動への外部指導者派遣事業(中・高等学校)

健康と食をつくるための食育の推進

これらを通し、平成30年には、体力・運動能力は、全国平均を上回り、平成32年には、肥満傾
 向児の出現率を全国並にすることを数値目標にして取り組んでいる。

また、幼稚園は、幼稚園研究会、小学校は、小学校教育研究会体育科部会、中学校は、中
 学校教育研究会保健体育部会、高等学校は、高等学校教育研究会保健体育部会、特別支援学校は、特
 別支援教育研究会において学習指導要領の趣旨を踏まえ、それぞれに研究テーマを持ち研修して
 いる。その中で、遊びや運動のねらいやよさにふれさせるための用具や場づくりの工夫、言語活
 動を生かした学び合い等、県や市町村単位で保育実践や授業実践を重ね、発達の段階や障がい
 に応じた体育指導のあり方と保育・授業改善について研究を重ねてきた。

今後は、本県のこれまでの研究成果を生かし、幼児・児童生徒の実態を踏まえ、仲間ととも
 に運動する楽しさを感じ、自ら進んで課題を解決していくことにより重点的に取り組んでい
 きたい。特に、学ぶことで、これからの自分の生活の中にどのように生かしていくか、生かされる
 かをより意識できるようにしたい。そのためにも、指導においては、「何を教えるか」という知識
 の質や量の改善に加え「どのように学ぶか」という学び方の深まり、さらに、学びの成果として
 「どのような力が身に付いたか」について重視する研究を深めていきたい。

3 校種別主題

大会主題を受け、各校種毎に校種別主題を設定した。

幼稚園：「心が動く」「体が動く」子供を育てる
小学校：教え合い、学び合い、高め合う、たくましい子供を育てる体育授業
中学校：運動のよさを実感し、主体的に運動や課題に取り組む態度を育む体育授業
高等学校：豊かなスポーツライフを実践する資質や能力を高める体育授業
特別支援学校：生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて、運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

それぞれの設定理由は、以下のとおりである。

(1) 幼稚園

「心が動く」「体が動く」子供を育てる

幼稚園では、「幼児一人一人が環境とかかわりながら、明るく伸び伸びと行動すること、自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする事」を目標としている。そのためには、幼児が自発的に環境にかかわる遊びを通して、各領域の内容を体験的に学ぶ中で、体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすることが大切である。

身体及び運動機能を高めるためには、繰り返し「体を動かす」ことが効果的である。しかし、体を動かす楽しさを味わえなければ「またやってみよう」という意欲にはつながらない。そこで、「体が動く」ためには「心の動き」を伴うことが大切であると考え、環境構成を見直し工夫することにより、小中高等学校の体育科の基礎となる、周囲の環境とかかわり、体を動かす気持ちよさを感じながら、自ら体を動かそうとする意欲を高めることができると考え、本主題を設定した。

(2) 小学校

教え合い、学び合い、高め合う、たくましい子供を育てる体育授業

小学校では、幼稚園教育の基礎に立ち、「児童一人一人が生涯にわたって自ら運動に親しむ資質や能力の基礎の育成」を目標としている。そのためには、児童が各種の運動の特性に触れ、今もっている力で楽しく運動し、仲間とともに楽しさや喜びを味わうといった学習体験を通して、たくましく生きるための健康や体力を身に付けることが大切である。

そこで、自己の能力に適した課題を設定し、教師や仲間とかかわり合う中で、共に高め合う児童を育成する授業の創造と工夫改善に取り組むことにより、生涯にわたって運動・スポーツを豊かに実践していく資質や能力の基礎を養うことができると考え、本主題を設定した。

(3) 中学校

運動のよさを実感し、主体的に運動や課題に取り組む態度を育む体育授業

中学校では、小学校までの教育を踏まえ、「生徒一人一人が生涯にわたって自ら運動に親しむ資質や能力の育成」を目標としている。そのためには、生徒たちが各種の運動の合理的な実践を通して、運動の特性に触れ、豊かに実践する中で、主体的に運動や課題に取り組み、体力の向上、豊かな人間性を育むことが大切である。

そこで、それぞれの運動の特性に触れさせながら生徒の実態に応じた楽しみ方、仲間とのかかわり方を年間指導計画や単元ごとの指導内容の中で明確にした授業の創造と工夫改善に取り組むことにより、生涯にわたって運動・スポーツを豊かに実践していく資質や能力を養うことができると考え、本主題を設定した。

(4) 高等学校

豊かなスポーツライフを実践する資質や能力を高める体育授業

高等学校では、中学校までの教育を踏まえ、「生徒一人一人が生涯にわたって実生活、実社会において、計画的、継続的に運動・スポーツを実践する資質や能力を培い、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育むこと」を目標としている。そのためには、主体的な学習及び多様性を踏まえた運動の合理的、計画的な実践を通して、運動の特性を深く味わう中で、自己の状況に応じた体力の向上と豊かな人間性を育むことが大切である。

そこで、体系化された発達の段階のまとまりを踏まえ、生徒の実態に応じたスポーツライフに結び付く指導方法を工夫し、主体的・協働的に学ぶ機会を充実させることにより、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を養うことができると考え、本主題を設定した。

(5) 特別支援学校

生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて、運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

特別支援学校では、「児童生徒一人一人が、体を動かす楽しさや喜びを味わい、満足できる経験を積み重ねることにより、主体的に活動に取り組み、体力を向上させたり、生涯にわたって運動・スポーツを実践したりしていく資質や能力の育成」を目標としている。障がいのある児童生徒は、身体的に活動が制限されたり、ルールを理解が難しかったり、できなかったりする等の障がい特性がある。そのため、運動種目に合った動きや課題解決の方法が分かり、動きや態度を振り返りつつ、繰り返し練習することにより、自分の力の高まりを実感しながら楽しく運動することが大切である。

そこで、生活年齢や発達の段階、障がい特性等の実態を把握した上で、「動機付け」「できる状況づくり」「振り返り」の内容・方法を工夫しながら、児童生徒一人一人が仲間と共に体を動かす楽しさや喜びを味わうことにより、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を養うことができると考え、本主題を設定した。

4 分科会別主題

第1分科会（福大附属幼稚園）

「心が動く」「体が動く」子供を育てる

第2分科会（福大附属小学校）

友達と共に運動の楽しさを味わい「からだ」の高まりを感じることでできるゲーム・ボール運動の授業とは

第3分科会（北沢又小学校）

運動の楽しさや喜びを味わい、自ら進んで実践する力を身に付ける体づくり運動の授業

第4分科会（御山小学校）

目標をもち、楽しみながら運動する子供の育成

～楽しくルンルン バンバン運動 ゲンゲンのびる 体育の授業づくり～

第5分科会（平野小学校）

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童の育成

第6分科会（福大附属中学校）

運動・スポーツの楽しさや必要性を実感し、学習したことを実生活において活用しようとする態度を養う体育学習

第7分科会（福島第一中学校）

仲間とかかわる楽しさを感じながら主体的に課題解決を目指し、活動する体育授業

第8分科会（福島第四中学校）

合理的な運動を実践することによって、運動することの楽しさや喜びを実感し、主体的にかかわり合う態度を育てる授業

第9分科会（橘高等学校）

豊かなスポーツライフを実践するために知識を深めることができる体育授業

第10分科会（福島東高等学校）

自己や仲間の運動課題を見つけ、課題解決に主体的に取り組む学習により、豊かなスポーツライフを実践する資質や能力を高める体育授業

第11分科会（福大附属特別支援学校）

生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて、運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

II 研究内容について

1 研究の基本的な考え方

本実行委員会では、現行学習指導要領の改善の基本方針「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを重視し改善を図る」を基に、幼児期と小学校から高等学校までを見通したそれぞれの四つの時期

自発的に様々な遊びを体験し、多様な動きを獲得する時期（幼稚園）

楽しく運動することにより各種の運動の基礎を培う時期（小1～小4）

運動の特性に触れる楽しさを味わい、多くの領域の学習を経験する時期（小5～中2）

得意な運動を作り、卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期（中3～高3）

を踏まえながら、学習すべき内容を「技能」「態度」「知識、思考・判断」の三点から捉え、授業の

充実を図っていくこととした。

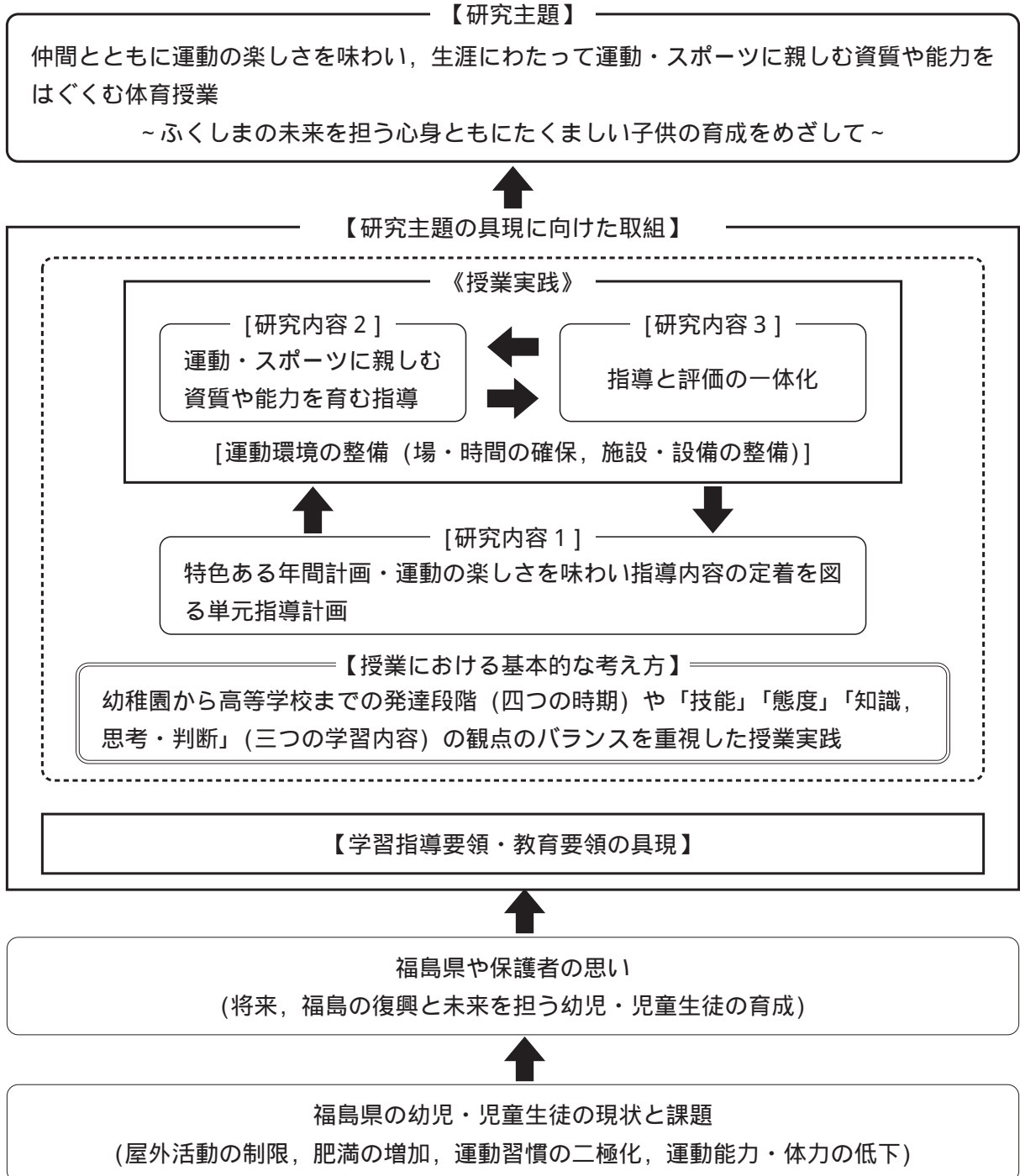
また、研究主題「仲間とともに運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ資質や能力をはぐくむ体育授業」にせまるために、下記の三つの視点から研究に取り組む。

研究内容 1 「特色ある年間計画・運動の楽しさを味わい指導内容の定着を図る単元指導計画」

研究内容 2 「運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導」

研究内容 3 「指導と評価の一体化」

2 研究の概要（研究構想図）



3 研究の内容

(1) 研究内容 1

「特色ある年間計画・運動の楽しさを味わい指導内容の定着を図る単元指導計画」

生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向かうためには、幼稚園から高等学校までの校種間及び学年間の学びの発達段階を捉え、どのような学習経験をもとに現在があるのか、今後どのような学習に結び付けていくのかを明確に捉えながら学習を進めることが重要である。特に、指導内容の体系化については、幼児・児童生徒の発達の段階や指導の系統性を踏まえ、当該学年でどのような内容を指導し、身に付けさせればよいのかを明確にし、計画を立てる必要がある。また、地域や学校の実態、幼児・児童生徒の心身の発達の段階や特性も十分に考慮し、指導内容の確実な定着を図ることができるよう、指導内容を2学年ごとに示し、運動の取り上げ方の弾力化を生かした計画を立てることができるようにしていきたい。

下記等のことが考えられる。(それぞれの学校の実態に応じて)

幼児期と小学校から高等学校までを見通した、指導内容の明確化・体系化
二つの学年をひとまとまりとした、運動の取り上げ方の弾力化
各学年や各領域で育てる資質や能力の明確化
実態(新体力テスト)を基にした自校の体力・運動能力の課題の解決
運動身体プログラムの確実な定着
実態に合った学校独自の単元等の開発
運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成
教育活動全体を通して行う体育指導全体計画の作成

(2) 研究内容 2

「運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導」

学習指導要領では、「運動に親しむ資質や能力の育成」「健康の保持増進」「体力の向上」の三つの具体的な目標が相互に密接な関連をもっていることを示すとともに、重要なねらいであることを明確にしている。授業場面においては、今もっている体力や技能で、その運動を「やってみよう」「やってみたい」「できるようになりたい」「自分もできるかもしれない」という前向きな思いで学習をスタートさせ、単元の終わりには、「できるようになった」「頑張ればできるんだ」「前よりできるようになった」と伸びや高まりを実感・自覚できるような授業こそが、運動・スポーツに親しむ資質や能力を育てている授業と言える。そうした学びの質や深まりを大切にしたい授業を展開するためには、個々の興味・関心や能力等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決する主体的な学びや、仲間と仲良く運動をすることや学び合いを中心とした協働的な学びを充実させていく必要がある。教師の指示のままに運動に取り組ませるのではなく、課題の発見や解決に向けて、自分(自分たち)で気づき・考え、自分(自分たち)で成し遂げるといった学習を展開することが必要である。そこで、「技能」「態度」「知識、思考・判断」の相互のバランスと関連性を考え、指導のねらいを明確にしながらか授業を構成していく。

また、その達成のために、教師が、各運動の技術のポイントを正しく捉えること(教材研究)

や児童生徒の姿、児童生徒の課題、課題解決のための方法を正しく捉えること（教師の目）、また、そのことをよりの確に把握するための学習カード、視聴覚機器の活用、児童生徒の運動をより充実させるための学習資料の準備、場や用具の工夫等が大事になってくる。

下記等のことが考えられる。（それぞれの学校の実態に応じて）

- 多様な動きが経験できる環境構成
- 幼児期の特性に配慮した楽しく体を動かす時間の確保
- 発達の特성에応じた遊びの提供
- 運動の楽しさを味わわせる場の設定や教材の開発
- 技能の向上に結びつく知識、思考・判断を高める方法の工夫
- 仲間と相互援助し合い主体的な活動ができる学習集団の育成
- 生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫
- 主体的・協働的に取り組む学習過程の構築

(3) 研究内容 3

「指導と評価の一体化」

新しい学習指導要領のねらいを実現するためには、学習指導要領に示す内容が児童生徒一人一人に確実に身に付いているかを適切に評価し、その後の学習指導の改善に生かすとともに、学校における教育活動全体の改善に結び付けることが重要となる。

本県では、国立教育政策研究所が作成した「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」に基づき、それぞれの小学校・中学校・高等学校において評価規準を設定している。その際、各学校においては、「単元の評価規準」を作成する。「単元の評価規準」は、実際の指導計画と照らし合わせた上で、国立教育政策研究所が作成した資料に示された「評価規準の設定例」を基に、必要に応じて修正を加えている。

評価方法については、評価の観点や評価規準、評価の場面や児童生徒の発達段階に応じて、観察、児童生徒との対話、学習カード等の様々な評価方法の中から、その場面における児童生徒の学習の状況を的確に評価できる方法を選択して評価する。また、このような評価方法に加えて、児童生徒による自己評価や児童生徒同士の相互評価、グループ評価等を工夫するとともに、それらを取り入れる段階や場も工夫する。

各学校では、授業の改善や児童生徒の支援に生きる評価とするため、児童生徒の学習状況を適切に評価し、評価を指導の改善に生かすという視点を一層重視して取り組んでいく。

下記等のことが考えられる。（それぞれの学校の実態に応じて）

- エピソード記録の累積と考察による保育の振り返り
- 教師や学習者の相互評価による適切な評価
- 規準を明確にした評価の実施
- 確かな学力を保障する指導と評価の充実

引用・参考文献

- ・幼稚園教育要領解説（平成20年10月 文部科学省）
- ・小学校学習指導要領解説 体育編（平成20年 8月 文部科学省）
- ・中学校学習指導要領解説 保健体育編（平成20年 9月 文部科学省）
- ・高等学校学習指導要領解説 保健体育編（平成21年12月 文部科学省）
- ・特別支援学校学習指導要領解説（平成21年12月 文部科学省）
- ・幼児期運動指針ガイドブック（平成24年 3月 文部科学省）
- ・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 体育】
（平成23年11月 国立教育政策研究所）
- ・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【中学校 保健体育】
（平成23年11月 国立教育政策研究所）
- ・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 保健体育】
（平成24年 7月 国立教育政策研究所）
- ・平成27年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査報告書
（平成27年12月 文部科学省）
- ・「平成26年度福島県体力・運動能力，運動習慣等調査」結果の概要
（平成26年11月 福島県教育委員会）
- ・「平成27年度福島県体力・運動能力，運動習慣等調査」結果の概要
（平成27年12月 福島県教育委員会）
- ・福島県統計課編 平成27年度学校保健統計（学校保健統計調査報告書）
（平成28年 3月 福島県統計課）

アトラクション





UFOふれあい館（写真提供 福島市）

余目一輪車クラブ プロフィール

< クラブ紹介と主な活動実績 >

- 2005年 7月21日 「余目一輪車愛好会」 3 か月間の期間限定 6 名で結成。
2005年11月 「余目一輪車クラブ」 15名となり昇格にて正式に設立。
- 2012年 7月 ユニコン16世界大会
フリースタイルグループ演技15歳以上 金メダル
フリースタイルペア15歳以上 銀メダル・金メダル
- 2013年 7月 全国一輪車演技大会出場
2010年 8月 東京一輪車演技大会
ジュニアペア小学 6 年生以下の部 優勝
ジュニアグループ中学生以上の部 第 3 位
- 2014年 8月 ユニコン17世界大会 (カナダ)
フリースタイル15歳以上グループ演技 銀メダル
ペアフリースタイル15歳以上 銅メダル
- 2014年 9月 全国小学生一輪車大会出場
2016年 6月 第12回東京大会出場
ジュニアグループ中学生以上の部 優勝
ジュニアペア小学4年生以下の部 準優勝
特別賞のダブル受賞



その他に、神奈川県や千葉県の大会にも出場し、優勝をしています。また、特別養護老人ホームや病院への訪問、わらじ祭りや各種イベントに出演し、一輪車の魅力を広めています。

プログラム

曲 名： グーニーズ&スターイズボーン

演技内容： 4歳～高校3年生までのクラブ全員で出演します。様々な技術レベルではありますが、世界に一つしかない皆で創り上げる一輪車による舞台演技をお送りします。

グーニーズと呼ばれている仲間たちが、宝の地図を発見！宝はナイルの国にあるはずだ！宝を探すべく旅に出ます！途中、いろいろな困難が待ち受けています。宝は探し当てることのできるのか…。それとも…。ナイルの国とは…？ナイルが守る宝とは…？謎だらけの冒険をぜひご覧ください。



わらじ祭りへ出演

【MEMO】

解 說





浄土平天文台（写真提供 福島市）

【MEMO】

シンポジウム





広瀬座（写真提供 福島市）



テーマ

「体育・保健体育で育成すべき 資質・能力について」

コーディネーター 筑波大学 体育系
准教授 山口 香

略歴

昭和62年 筑波大学体育専門学群 卒業
平成元年 筑波大学体育学修士課程 修了
平成19年 武蔵大学人文学部 教授
平成20年～現在 筑波大学 体育系 准教授
平成27年～ 教育課程企画特別部会 委員
平成28年 教育課程部会 体育・保健体育，健康，安全ワーキンググループ 主査

主な著書

平成24年 女子柔道の歴史と課題（日本武道館）
平成25年 日本柔道の論点（イースト出版）
平成26年 現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン（ミネルヴァ書房），第7章嘉納治五郎と女子柔道，第8章嘉納治五郎が理想とした柔道 女子柔道に託したもの，第10章女性スポーツの競技化とその課題 女子柔道競技の歴史と強化を例として
平成27年 残念なメダリスト（中央新書クラレ）

研究業績

平成26年 山口 香，Dieter TEIPEL，Reinhild KEMPER，浦井孝夫，市村操一：ドイツにおける柔道の技のイメージ研究がわが国の柔道指導研究に与える示唆，筑波大学体育系紀要第37巻，101-112.
山口 香：研究レポート「女性アスリートのセカンドキャリアを考える 現状の課題，今後の取り組み」月刊ウィラード 8月号6-9，公益財団法人 日本女性学習財団
平成27年 山口 香：女性アスリートの育成・支援，産婦人科医に期待されること．産婦人科の実際，女性ヘルスケア集中講義，次世代の女性医学の可能性を求めて．金原出版株式会社．vol.64 No11，193-200.
山口 香：女性スポーツを多角的に捉える・指導者からの視点．臨床スポーツ医学第32巻第6号，578-583.



提言テーマ

「健康な心と体を育てる運動遊び」

シンポジスト 江戸川区立船堀幼稚園 園長 福井 直美

略歴

昭和50年3月 日本体育大学女子短期大学卒
 昭和51年4月 世田谷区立多聞幼稚園教諭
 昭和54年4月 江戸川区立鹿本幼稚園教諭
 平成7年4月 江戸川区立松江幼稚園教頭
 平成11年4月 江戸川区立鹿本幼稚園園長
 平成14年4月より現在まで
 江戸川区立船堀幼稚園園長

主な著書・研究業績・委員等

平成23～26年度 東京都子供の体力向上推進本部委員
 平成23～24年度 スポーツ際東京2013実行委員
 平成24～25年度 第52回全国学校体育研究大会東京大会実行委員
 平成26～27年度 足育研究推進校「健康な心と体を育てる運動遊び～足育・心育・遊育を通して～」

概略

幼児期は運動機能が急速に発達する時期であり、多様な運動刺激を与えることが大切である。しかし幼児の実態は体を動かす機会が減少し、体力・運動能力が低下するなどの危機感がある。そこで幼児期には各幼稚園で、遊びを通して運動遊びに取り組み、体を動かす楽しさを味わわせていくことが大切である。

文部科学省からは幼児期運動指針が策定され、幼児期には自発的なさまざまな遊びを体験し、多様な動きが獲得できるようにすること、毎日60分以上楽しく遊ぶことが重要であることが示された。また、29年3月の幼稚園教育要領改訂に向けても「幼児期の終わりに育ててほしい10の姿」の中に「健康な心と体」があげられているほど幼児期の健康な心と体の育ちが重要視されている。

本園では5年前よりテーマを「健康な心と体を育てる運動遊び」として研究に取り組んできた。船堀の子どもは元気なふなぼりーと（船堀のアスリート）、運動会はふなぼりんぴくと称して活動しているので、この名称は地域にも認識されている。心も体も健康なふなぼりーとを育成するために次のような研究に取り組んだ。

<主な研究内容の抜粋>

健康な足を育てるための環境と指導の工夫・靴を正しくしっかりと履く・足を使った遊びの工夫

運動遊びの実践を通して自ら体を動かし、体力・運動能力の向上を図る環境と指導の工夫

イメージをもって自ら運動遊びに取り組む遊びや活動の工夫……忍者等のイメージで園庭や教師が工夫して設定したコーナーで多様な動きをとり修業する。

活動量を増やすための遊びの工夫……鬼遊びや遠足の内容を見直し、活動量を増やし、質の高い運動遊びを実践する。

<研究の結果>

- ・靴の履き方が基本となり、身のこなしがよくなり、積極的に体を動かすようになった。
- ・運動遊びの指導計画に基づき、時期や実態に応じた様々な活動の環境や指導を充実させた中で、意欲的に多様な動きをするようになった。結果として運動能力の向上や健康な心と体の育ちにつながった。
- ・足や足裏が育ち、力強い動きや俊敏な動き、バランス感覚など身体感覚が磨かれ、転倒や衝突などの事故やけがが減った。
- ・運動能力や足の育ちを数値化することで研究成果を客観的にとらえることができた。

このようにして、運動遊びの楽しさ、体を動かす心地よさ、できた喜びや満足感を味わえるようにして幼稚園を修了することが、小学校以降の体育の基礎になり、生涯スポーツを楽しめる大人につながると思う。



提言テーマ

「身近な運動課題，健康課題を よりよく解決する学習で資質・能力を育む」

シンポジスト 横浜市立潮田小学校 校長 近藤 浩人

略歴

昭和60年度 上越教育大学 学校教育学部卒業
 昭和61年度 新潟市立白山小学校 教諭
 平成2年度 横浜市立新吉田小学校 教諭
 平成15年度 横浜市立浅間台小学校 主幹教諭
 平成19年度 横浜市立桂台小学校 副校長
 平成20年度 横浜市教育委員会事務局指導主事
 平成26年度 横浜市立潮田小学校 校長

主な著書・研究業績・委員等

- ・横浜市教育課程委員（平成11年～18年）
- ・NHK教育「わくわく授業～私の教え方～」(平成18年)
- ・「横浜版学習指導要領」策定（平成21年～23年）
- ・「言語活動サポートブック」（共著）（平成24年）
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ委員

発表趣旨

今次の学習指導要領改訂は、これまでの改訂とどこが違うのか。

これまでの学習指導要領が「教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したもの」であったのに対し、今次は「育成を目指す資質・能力」を中核に「教育課程の構造化」を図った点が、大きな違いである。

ゆえに、学習指導要領全体の構造を踏まえて小学校体育科で育成を目指す資質・能力について考える必要がある。

「身近な運動課題・健康課題をよりよく解決する学習」が大切

小学校体育科では、身近な運動課題や健康課題をよりよく解決する学習を通して、児童自らが育成を目指す三つの資質・能力を獲得することができるような授業づくりが大切である。

「運動を楽しみたい」という切実な願いを学びの原動力とし、さまざまな工夫をしながら、より運動を楽しむ学習。「健康になりたい」という思いから健康課題を把握し、自分の生活を振り返りながら、より健康的な生活を創り出していく学習。そういった学習を通して、運動や健康の自分にとっての意味や価値を実感する体験が、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことにつながる。

身近な運動課題・健康課題をよりよく解決する学習を創り出していくことが、今後、さらに重要になる。

授業・単元レベルでは、「本気の課題解決」がポイント

体育科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、児童が「本気の課題解決」ができるような授業づくり、単元づくりがポイントである。「運動を楽しみたい」「健康になりたい」という切実な思いや願いをいかに喚起するか。児童の切実な課題を、いかに解決させていくか。

「本気の課題解決」をする学習が、深い学びを誘っていく。

教育課程レベルでは、「つながり」を意識したカリキュラム・マネジメントがポイント

豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するためには、校種間の「つながり」が重要である。幼稚園と小学校低学年、中学校と小学校高学年の「つながり」を意識した教育課程編成が必要である。

また、運動領域と保健領域の「つながり」、他教科等との「つながり」を意識した教育課程編成も重要な視点となる。

今後、「つながり」を意識したカリキュラム・マネジメントがますます求められる。



提言テーマ

「体育・保健体育で育成を目指す資質・能力について」 ～12年間の系統性から見る中学校の課題～

シンポジスト 福岡県立育徳館中学校 教頭 藤田 弘美

略歴

学歴

昭和61年 筑波大学 体育専門学群 卒業

平成16年 福岡教育大学大学院教育学研究科修了

主な職歴

昭和62年 行橋市立今元中学校 教諭

平成7年 行橋市立中京中学校 教諭

平成16年 福岡県 教育庁 教育振興部 スポーツ健康課 指導主事

平成19年 福岡県立育徳館中学校 教諭

平成21年 福岡県体育研究所 指導主事

平成24年 みやこ町立豊津中学校 主幹教諭

平成25年 福岡県立育徳館中学校 教頭

主な著書・研究業績・委員等

<著作等>

・『学校体育実技指導資料 第7集 体づくり運動』改訂協力者 文部科学省
・『観点別学習状況の評価規準と判定基準（中学校保健体育）』 図書文化

<委員等>

・中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 専門委員 文部科学省
・体力向上指導者養成研修 講師 教員研修センター
・学力の把握に関する研究指定校事業 企画委員 国立教育政策研究所
・2006年剣道世界大会 全日本女子チーム 助監督 全日本剣道連盟

発表趣旨

次期『学習指導要領』の改訂に向けて、中央教育審議会『論点整理』 2015.8 では、アクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメント等の新たな視点とともに、学校教育法で示されているいわゆる「学力の三要素」を出発点としながら、学校教育の中で育成を目指す資質・能力を「三つの柱」で捉え整理しています。

体育・保健体育も、生涯を通じて心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現し、明るく豊かで活力ある生活を営む力の育成を目指す「教科」として、この柱に沿って育成する資質・能力が示されています。

本シンポジウムでは、中学校現場の立場から、中央教育審議会 体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループでの論議を踏まえて、保健体育科において中学校期に育成を目指す資質・能力の重点について、現行の『学習指導要領』で明確にされた12年間の指導内容の系統性を踏まえながら、話題提供をしたいと思ひます。

(1) 中学校期の現状と課題

中学校期は、体育、保健体育の12年間の系統性の中で、小学校の「各種の運動の基礎を培う時期」と中学3年生以降の「運動やスポーツに多様な関わりを持つことができるようになる時期」をつなぐ重要な役割を与えられています。

その中で、「多くの領域の学習を経験する時期」である中学1・2年生では、科学的な理解と合理的な運動の実践をもとに、それぞれの運動が有する特性や魅力に触れることが十分に保障されているでしょうか。また、領域や種目を自ら選択し、これまでの学びをより深めて、高等学校へとつないでいく3年生の選択制の授業においては、主体的な学びが実現できているでしょうか。

特に、「体づくり運動」や「武道」、「体育理論」や「保健分野」の授業づくりに、その課題を探っていきたいと思ひます。

(2) 中教審WGにおける「審議の取りまとめ」から

これまで『学習指導要領』で示されている内容については、体育分野では、「技能」・「態度」・「知識、思考・判断」、保健分野では、内容のまとまりごとに具体的な指導内容が示されていました。今回、「審議の取りまとめ」では、体育科、保健体育科においても「知識」と「技能」が同じカテゴリーとして括られ、この観点から学習評価まで行うことが示されています。現場の指導者は、これをどのように捉えれば良いのでしょうか。この他の資質・能力についても、保健体育の中で育んでいくための課題を捉え整理しておく必要があると考えます。特に体育分野において、正式なルールを基にした運動文化財と出会い、種目ごとの特性に触れる学習が始まって、合理的・効率的な動き方の探究に興味が出てくるとともに、「好き・嫌い」や「できる、できない」が顕在化してくる中学校では、どのような課題があるでしょうか。加えて、「体育」と「保健」の一層の連携の在り方についても、その具体の姿を検討してみたいと思ひます。

(3) 資質・能力の育成を目指した中学校期での充実に向けて

上述した課題やこれからの方向性を基に、今後、中学校の現場で取り組んでいきたいことについて以下の3点を提案したいと思ひます。

「体づくり運動」の授業の一層の充実

学習評価の理解と「指導と評価の一体化」の充実

「運動やスポーツの価値」、「生活の質や生きがいの重視」を基にした「深い学び」の創造



提言テーマ

「これからの高等学校保健体育科で 育成を目指す資質・能力について」

シンポジスト 福島県立福島北高等学校 教頭 佐藤 真一

略歴

埼玉大学教育学部中学校保健体育科卒業
筑波大学大学院修士課程体育研究科修了
平成7年 福島県立矢吹高等学校 教諭
平成8年 福島県立光南高等学校 教諭
平成11年 福島県体育協会
平成14年 福島県立福島中央高等学校 教諭
平成18年 福島県立福島明成高等学校 教諭
平成25年 福島県教育庁健康教育課 指導主事

主な著書・研究業績・委員等

- ・高等学校における保健教育の指導参考資料の作成検討委員
- ・平成26年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査事例検討委員会委員
- ・平成27年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査企画分析WG委員
- ・学習指導要領実施状況調査(高等学校体育)結果分析委員

発表趣旨

現行の高等学校学習指導要領は平成25年度の入学生から年次進行により段階的に適用され，平成27年度で3年が経過しました。「高等学校保健体育科の目標」については，改正された教育基本法や学校教育法を踏まえながら改善が図られ，心と体をより一体としてとらえることを引き続き重視するとともに，生涯にわたって健康を保持増進し，豊かなスポーツライフを実現することを目指し，「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成」，「健康の保持増進のための実践力の育成」及び「体力の向上」の三つの具体的な目標が相互に密接に関連していることを示すとともに，保健体育科の重要なねらいであることが示されました。このねらいに沿った資質や能力を生徒達が身に付けるためのより良い手立てを模索しながら，全国の多くの先生方が日々の授業に向き合っていることと思います。

そのような中，次期学習指導要領の改訂へ向け，今年の8月に「審議のまとめ」が取りまとめられ，育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方としての「3つの柱」，「何を理解しているか，何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」，「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」，「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」が示されました。

3年ぶりに戻った現場では，「現行の学習指導要領がやっと全ての学年で実施されるようになったばかりなのに，もう次期学習指導要領の話題か…」という声も聞かれます。しかしながら，各先生方は，生徒や社会の変化に応じて，毎年，授業内容をマイナーチェンジしているのではないのでしょうか。現行の学習指導要領の趣旨・内容を踏まえながら，これから先も一層加速的に変化する社会に対応するために生徒達が身に付けておくべき資質や能力を見据えて，新たな視点を日々の授業に取り入れ授業内容の工夫改善と充実を図っていくことが，今後，より一層求められるのではないかと思います。

しかしながら，今の生徒達の体力・運動能力，運動及び生活習慣の現状をみると，その変化の激しい社会に対応できるかどうか不安を感じざるを得ない面が多々あります。このような状況からも，体育・保健体育の教科としての役割はますます重要性を増してくるものと実感しています。「審議のまとめ」には，“この教科を学ぶことで何が身に付くのか”という，各教科等を学ぶ意義を明らかにしていくことの重要性も示されています。シンポジウムでは，開催地の福島の現状にも触れながら，これからの体育・保健体育で特に重視して育成を目指す資質や能力とは何かについて，シンポジストの先生方，会場の皆様方とのアクティブな意見交換の場となればと考えています。



提言テーマ

「体育・保健体育の授業を担うこれからの教員に 求められる学習指導力の育成」

シンポジスト 筑波大学 体育系 教授 野津 有司

略歴

昭和52年 東京教育大学体育学部卒業
 昭和53年 筑波大学大学院中退，秋田大学助手
 昭和57年 秋田大学講師
 昭和62年 秋田大学助教授
 昭和63年 文部省在外研究員（西ワシントン大学）
 平成8年 秋田大学教授
 平成11年 筑波大学助教授
 平成20年 筑波大学教授
 平成27年 筑波大学附属中学校長（兼務）

主な著書・研究業績・委員等

- ・中央教育審議会専門委員（「総則・評価特別部会」，「体育・保健体育，健康，安全ワーキンググループ（主査代理）」，臨時委員（学校安全部会）
- ・国研「学習指導要領実施状況調査（高等学校・保健）結果分析委員会」委員
- ・（一社）日本学校保健学会常任理事
- ・（一社）日本体育学会代議員
- ・教員養成系大学保健協議会幹事長 等

発表趣旨

本年（2016年）8月に示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」の中で，新しい時代を担う子供たちに育成すべき資質・能力について，「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）」，「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」，「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」の3つの柱で整理された。

こうした資質・能力を育成するためには，学習内容はもとより，その内容を「どのように学ぶか」が鍵となり，それが子供たちの学びの質や深まりに大きな影響を与える。そうした中で，課題の発見と解決に向けて，主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）などが注目されており，そのための指導方法の改善，充実が不可欠となっている。学習内容をどう教えるかという指導方法や教材の工夫は，教科学習を担う教師の最も重要な役割であり，子供たちの学力の向上は，まさに教師の指導の在り方に懸っていることを改めて強く自覚する必要がある。

さて，これまで保健学習に関しては，授業の準備，評価，指導方法の工夫等の実施状況が良好である教師は，保健学習の指導意欲が高いことが，全国調査のデータ（日本学校保健会2012年）による「構造モデル」によって明らかにされている。また，そうした指導意欲は，保健学習に熱心な教師仲間がいること，有用な教材や教具が容易に利用できること，研修状況が良好であること，養成課程での保健科教育法等の履修や教育実習での保健学習の指導の状況が良好であること等によって支えられていること，さらに体育学習の指導意欲とも関連していることが示されている。すなわち，教員養成課程での教科教育法の充実と教育実習における学習指導の経験，現職教育での学習指導に関する研修の拡充やリーダーの育成等が重要であることが裏付けられた。

教師の学習指導力を高めるために，教員養成においては，教科教育法の授業自体にアクティブ・ラーニングの考え方を取り入れた指導展開の工夫が必要である。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「体育・保健体育，健康，安全ワーキンググループ」では，体育科・保健体育科（運動に関する領域）における課題発見・解決の学びのプロセスについて，「体育の見方・考え方」として「運動やスポーツについて，（中略）自己の適性等に応じて『する・みる・支える・知る』等の多様な関わり方について考えること」と示した。今回新たに「知る」の視点が加わり，中学校および高等学校のすべての学年で必修となっている「体育理論」をはじめとして，アクティブ・ラーニングを仕組む授業が一層求められる。そのためにまずは教員養成課程における大学の授業を変革し，今日の必要とされている教師の学習指導力を育成していかなければならない。

私は，授業を担当する教師は「教える内容の教育的価値について，子供の発達段階や実態を踏まえて慎重に吟味すること」，「魅力的な教材を開発し，全ての子供たちに真剣に考える時間と材料と仲間を保障すること」，「肯定的な指導の展開を重視し，自己を否定されない安心感のある学びの空間を確保すること」に，特に留意することが大切だと考えている。アクティブ・ラーニングの考え方から実践された指導により，こうした授業が実現できるものと期待している。

特別講演





四季の里（写真提供 福島市）

講演題目

「スポーツの現場取材から 学校体育に期待すること」

講師：宮 嶋 泰 子

株式会社テレビ朝日 スポーツコメンテーター

現在の出演番組

- ・報道ステーションリポーター兼ディレクター
- ・ザ・インタビュー～トップランナーの肖像～
(BS朝日) インタビュアー

役 職

文部科学省政策評価に関する有識者会議委員
文部科学省コーチング推進コンソーシアム委員
(公財) 日本バレーボール協会理事
(公社) 日本新体操連盟理事
(公財) 全日本柔道連盟MIND委員会委員
(公財) 日本障害者スポーツ協会評議員
日本女子体育大学招聘教授
順天堂大学客員教授



【略歴】

早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業後、1977年テレビ朝日入社。

女性では初のスポーツ関連番組のキャスターや実況中継を担当。

1983年からアナウンサーの仕事と同時にディレクターとして番組制作も始め、ニュースステーションや報道ステーションでスポーツ特集を220本以上制作してきた。1980年のモスクワ大会からリオデジャネイロ大会までオリンピック現地取材は18回を数える。またパラリンピックは1992年バルセロナ、アトランタ、長野、シドニーとニュースステーションで特集を制作。

早稲田大学スポーツ科学部で非常勤講師を6年間務め、順天堂大学客員教授などを歴任。

文部科学省中央教育審議会スポーツ・青少年分科会委員を2007年から15年まで務めるなど公官庁の仕事も多数こなす。

2015年株式会社テレビ朝日を定年退職。その後契約を結び現在に至る。

【MEMO】

幼稚園部会





中野不動尊（写真提供 福島市）

第1分科会

福島大学附属幼稚園

研究主題

「心が動く」「体が動く」子供を育てる

日程

9:00	9:30	11:00	11:20	12:30	15:00
受付	公開保育	園児降園	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評 閉会式

公開保育案内

学級	保育内容	指導者	場所
3歳児 ももぐみ	健康：運動遊び（表現遊び）	遊佐 早苗	遊戯室
4歳児 みどりぐみ	健康：運動遊び（鬼遊び）	中丸 美穂	園庭（雨天時遊戯室）
5歳児 きぐみ	健康：運動遊び（集団ゲーム）	佐藤久美子	園庭（雨天時遊戯室）

幼稚園所在地



交通機関

- ☆徒歩
JR福島駅下車 徒歩30分
- ☆路線バス
福島駅東口2番乗り場
福島交通
藤田・梁川・保原線
「東高校前」下車 徒歩2分

福島大学附属幼稚園



所在地 〒960 - 8107 福島市浜田町12 - 39
園長 渡辺 隆
園児数 54名 (3学級)
連絡先 TEL 024 - 534 - 7962 FAX 024 - 534 - 7972
E-mail youchien@adb.fukushima-u.ac.jp
URL <http://www.aki.fukushima-u.ac.jp/>

【教育目標】

「発達の過程で直面する問題を、自分で乗り越えていかれる力を徐々に高めながら、その可能性を最大限に伸ばしていける子ども」を育てるために次の具体的目標を設定する。

・健康で明るくたくましい子ども・よく見・よく考えて行動する子ども・心情豊かで思いやりのある子ども・表現することを楽しめる子ども・ひとりでも友達とも遊べる子ども

【園 紹 介】

本園は昭和41年に福島大学教育学部附属小学校第二体育館を仮園舎として開園し、同年12月には同小学校校舎東側に園舎が落成し移転した。昭和59年には現在の浜田町に新園舎が落成し、移転した。当初は2年保育2学級だったが、平成5年には3年保育が始まり、3歳児1学級増、翌年1月には保育室を増築した。平成17年4月には福島大学附属幼稚園となった。平成20年4月からは収容人員30人×3学級の完全3年保育の幼稚園となった。昨年創立50周年を迎えた本園は、福島市の中央部に位置しながらも、自然豊かな広い園庭で健やかな子供たちを育てている。

1 研究主題

「心が動く」「体が動く」子供を育てる

2 研究主題設定の理由

本園では次ページに掲げる教育目標・具体的目標の実現に向け、好奇心旺盛で様々なことに挑戦し、失敗を繰り返しても諦めずに自分の興味・関心を追求していける幼児を目指して遊びを育てる保育実践を行っている。

近年、豊かさの反面で幼児期に必要な動きの体験がないまま入園する幼児が増えている。幼稚園教育要領では、「幼稚園教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであること」が明記されており、体を動かす体験を遊びの中で取り上げていく重要性を感じているところである。また、幼児の体験不足については、幼児期運動指針でも取り上げられており、「毎日合計60分以上」を目安に体を動かすことが望ましいと示されている。

本来、体験とは心の動きを伴うことで意味をもつと考えられる。しかし、実際には幼児の心の動きを十分捉えきれないままに、保育者の思いで繰り返し体験させようとしている場面もあるのではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究仮説

幼児の心の変化を丁寧に見取り、記録し分析していくことで「心」と「体」の動きの関連性を探ることができるであろう。

幼児が自然に体を動かしたくなるような環境構成を工夫することで、無理なく体を動かしながら幼児期に必要な運動を体験していくことができるであろう。また、体を動かすきっかけとなる心の動きを探っていくことで体を動かすことを楽しめる子供や、困難なことにもあきらめずに挑戦する子供に近づけることができるであろう。

4 研究内容

「心が動き」「体が動く」実践・考察 主体的・協同的な学びへ

- ・ 話し合いを基に、幼児が主体的にかかわることで体を動かすことができる環境構成の工夫をし、実践する。それぞれの保育実践を互いに見合うとともに、意見交換を行い、その結果に基づいて、より望ましい環境構成について考察する。
- ・ 幼児の心が動いた場面、体が動いた場面を捉え、エピソード形式で記録する。その記録を基に意見交換を通して、保育者の援助のあり方について考察を行う。
- ・ 特に心の動きの点からは、「自由な形態における遊び」と「一斉の形態における活動」で、幼児が思いのままに活動できる可能性の範囲に差があることにも配慮する。

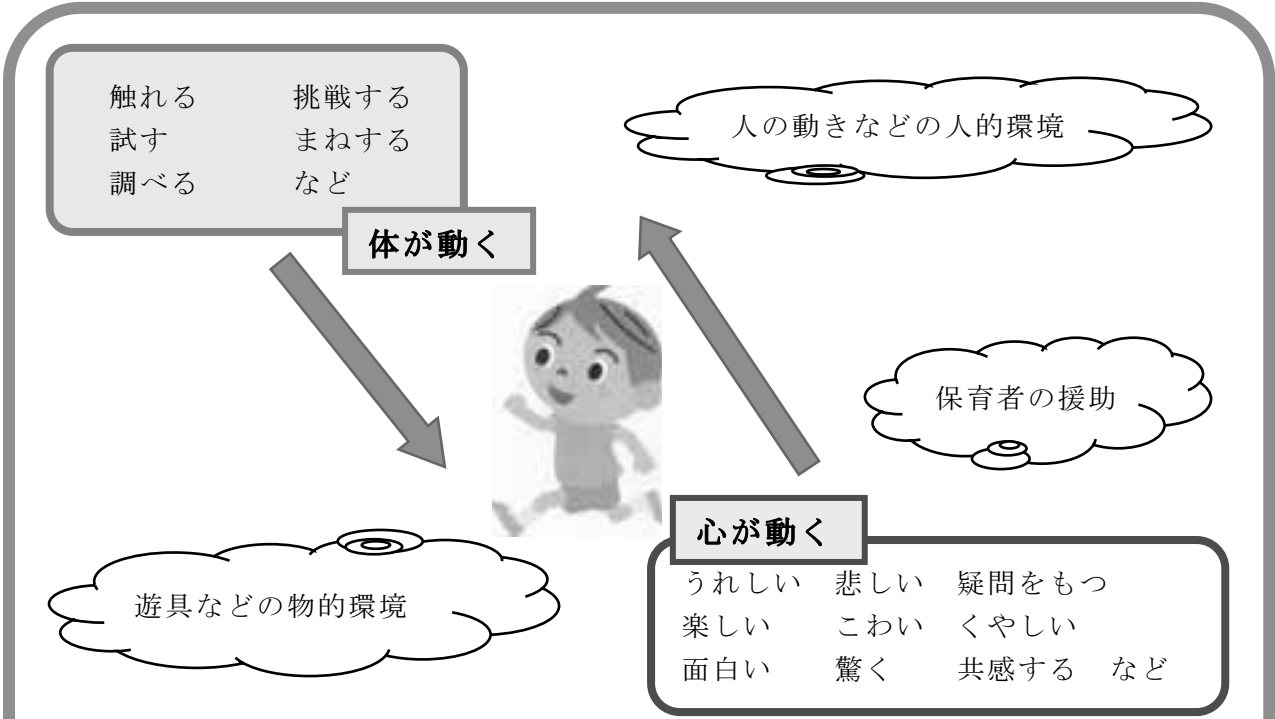
実態を踏まえた年間指導計画の見直し 日々の保育へ

- ・ これまでの指導計画から体を使った遊びや動きの体験をとり出して見直していく中で、心の動きについても探っていく。

【教育目標】
 発達の中で直面する問題を、自分で乗り越えていける力を徐々に高めながら、その可能性を最大限に伸ばしていける子ども

【具体的目標】
 ・健康で明るくたくましい子ども
 ・よく見・よく考えて行動する子ども
 ・心情豊かで思いやりのある子ども
 ・表現することを楽しめる子ども
 ・ひとりでも友達とも遊べる子ども

研究主題 「心が動く」「体が動く」子供を育てる



家庭との連携による土台となる体づくり
 食育・健康教育に関する情報提供
 個々の課題について保護者との連絡帳のやりとり

研究の内容と方法（方法は・）	
①「心が動き」「体が動く」実践（エピソード記録） ↓ 話し合い ↓ ・望ましい環境構成の工夫 ・保育者の援助のあり方 ↓ 幼児の主体的・協同的な学びへ	②実態を踏まえた年間指導計画の見直し ↓ 日々の保育に生かす ・指導計画から「体を使った遊び」「動きの体験」の抜粋・見直し ・「心が動く」きっかけとそれを促す環境構成のあり方の検討

5 研究実践

実践事例 「プリキュアでジャンプ！」

(3歳児 9月)

入園してから半年が経過する9月、園児たちは幼稚園での生活にも慣れ、比較的安定して遊ぶ姿が見られるようになった。この時期は、同じような遊びを繰り返す中で、おもしろさを見つけたり、自分なりに試したりする姿が、遊びの中で多く見られる。そのような時期に、普段の動きでは経験できない動きを体験させようと思い、「遊園地」という名前で遊びの場を設定した。ダイナミックな動きを引き出したくて、保育室よりも広い遊戯室（普段は年長児が使用）を借りて行った。「遊園地」は、巧技台とジャンボマットを組み合わせて作ったジャンプ台・両足ジャンプをするためのケンステップ・よじ登るための跳び箱・平均台・マット等を設定した。


多くの幼児たちが「遊園地」の環境にかかわって遊びを楽しむ中、スズは経験したことのある動きを繰り返し行っていた。スズは、体を動かすことに苦手意識をもっており、臆病な性格のため、保育者が援助してあげないと思いきり体を動かさそうとしない。「高いところから跳び下りる」「ジャングルジムに登る」ことなども、いまだ怖がってやろうとしないスズである。

様々なことに対して、やってみる前から「できない」とあきらめてしまうスズに、「挑戦したらできるようになった」という達成感をもたせていきたい。そして、少し難しいことにも挑戦してみようという気持ちをもたせ、自信がもてるようにしていきたいと考えた。

取組の姿 (エピソード)	心が動いた部分	環境の工夫と援助
<p>巧技台とジャンボマットを組み合わせて作ったジャンプ台から跳び下りる遊びを行ったとき、スズは、<u>高さが怖くて跳び下りることができなかった</u>。保育者が「先生が手を持っていてあげるから、大丈夫だよ。」と言い、<u>手を添えるとスズは恐る恐る跳び下りた</u>。</p> <p>普段の遊びの中でも、跳び下りる経験ができるようにとの思いで、翌日、<u>テラスに巧技台を準備し、天井からはビニール袋の怪獣をつるした</u>。始めは巧技台と壁で体を支えながら登れるように、巧技台を<u>壁際に設置したり、徐々に高くしたりする</u>など誰でも抵抗なく取り組めるよう工夫した。</p> <p>スズは、友達が次々とジャンプをしている様子を見てはいたが、自分からやってみようという<u>勇気はなかなかでない</u>ようであった。しかし、周囲の幼児がジャンプ台から勢いよく跳び下りたり、つるしてある怪獣に楽しそうにタッチしたりしている中、スズは近くでその様子を<u>じっと見ていた</u>。そこで保育者は、「本当はやってみたいのかもしれない」と思い、前日と同じように声をかけ、手を添えてやるとスズは数回ジャンプをした。しかし、その後は<u>その場を去ってしまった</u>。スズにとっては、保育者が手を添えてやっても恐怖心が消えなかったのか、それとも手を添えてあげたことで達成感が得られなかったのだろうかと感じた。</p>		<p>ダイナミックな動きを引き出し、開放感や達成感を味わうことのできる環境</p> <p>高さに対する恐れを和らげ、安心感をもたせる援助</p> <p>普段の遊びの中でも経験できる環境</p> <p>タッチする面白さにつられ、何度も跳び下りに挑戦する環境</p> <p>幼児の育ちに合った環境</p>

<実践者による省察>

- ・ 環境構成については、おおむね当初の意図が反映されたように思う。
- ・ 大丈夫という言葉とともに「保育者の手を添える」という援助がスズに安心感をもたせ（心の動き）、恐る恐るではあるが跳び下りる（体の動き）ことにつながったと考えてよいだろう。
- ・ その後の意欲にもつなげたくて、保育者は積極的に手をさしのべ援助した。しかし、その時のスズの表情や様子から、スズはジャンプをした（体の動き）が、心は動いていなかったのではないかと捉えた。

取組の姿（エピソード）	心が動いた部分	環境の工夫と援助
<p>ある日、スズが自作のプリキュアのお面と風呂敷のマントを身にまとい、ジャンプ台の近くで遊んでいた。保育者は、スズが憧れのプリキュアになりきっていることを受け止め、挑戦してみたいという気持ちもてるように言葉をかけた。「すてきなプリキュアだね。プリキュアだったら、ジャンプできるんじゃない？」すると、スズは、自ら巧技台に上がり、何の躊躇もすることなく跳び下りた。そのスズの行動を認め、「わ～すごい！かっこいいプリキュアだね。」と笑顔で称賛した。「スズちゃん、ジャンプできた！」とスズは満面の笑みになってうれしそうに言い、その後も何度も繰り返しジャンプをした。</p> <p>そうこうするうちに、ジャンプをするだけでなく、前方にぶら下がっている怪獣にタッチし、その怪獣を揺らして遊ぶようになった。</p>	<p>自由な遊びを受け止める援助</p> <p>跳び下りることに自信をもって挑戦できることを願い、プリキュアになりきって遊んでいるイメージと結びつけた言葉かけによる援助</p> <p>勇気ある行動を認める言葉かけによる援助</p> <p>勇気ある行動を認め、自信をもたせる言葉かけによる援助</p>	

<実践者による省察>

- ・ スズの憧れでもある「強くてかっこいいプリキュア」になりきっている（心の動き）からこそ、できた跳び下り（体の動き）だったと思う。
- ・ 保育者の言葉かけが生きたのは、スズの自由な遊びをそのまま受け入れ、プリキュアになりきって遊んでいるというテーマに沿ったものだったからであろう。スズの気持ち（心の動き）を読み違えていたり、自分の意図に導こうという気持ちが強すぎたりしていたら、スズが何度も繰り返してジャンプに挑む（体の動き）ことはなかったのではないかと思う。
- ・ 前回と異なり、スズが何度も繰り返しジャンプした（体の動き）のは、ジャンプを取り入れたことによって発展したプリキュアになりきって遊んでいることが面白かった（心の動き）からではないかと推察する。

< 話し合いを通しての考察 >

前半は、高さへの恐れに対し安心感をもたせたいという保育者の思いから、スズに手を差し伸べて援助した時のエピソードである。この場面をもう一步踏み込んで、高さに対する恐れ以外のスズの気持ちを推察しつつ考察した結果、以下のことがあげられた。

- ・ 自由な形態での遊びの時間であることを思えば、スズはジャンプして遊びたいという気持ちはそれほど強くないのではないかと受け止める方がよいのではないかと。
- ・ 高さへの恐れがあったということは、まず高さへの慣れに目を向けた方がよかつたのではないかと。さらに、空中に身を投じた時の感覚（身体感覚）を味わう経験の少なさからくる不安、地に足がついていない状態への不安、ドスンという着地の衝撃がイヤという気持ち等がある可能性もないとは言えない。そうであれば、それらの不安を少しでも小さくしたり、解消したりする手の差し伸べ方、手の添え方、スズのジャンプのリズムに応じた手の添え方（力加減）のほか、添えた手を通したスズの心の動きの読み取りへも目を向けていくことが大切だろう。保育者という人的環境の影響の大きさを痛感する。
- ・ スズは、大好きな保育者が手を差し伸べてくれている温かな気持ちを受け止め、保育者が望んでいるならばそれに応えようとしてジャンプしたのではないかと。

後半は、プリキュアになって遊んでいるスズの姿を受け止め、保育者が遊びのテーマに沿った言葉かけを機にスズが自らジャンプに取り組んだエピソードである。スズの遊びを受け止める保育者の姿勢とかかわりがあったからこそその成果だと思ふ。しかし、この時のジャンプは依然一つの運動形態としての理解に止まっていたのではないかと。「ジャンプが、スズのプリキュア遊びの中にどのような意味をもって位置づけられたのか」を捉える視点を忘れないようにしたい。「怪獣にタッチ」は、もしかしたら「プリキュアが怪獣をやっつけようとしているが、なかなかやっつけられないでいる」といったスズの遊びの世界に入り込んだ理解が生まれたかもしれない。

幼児の成長を願うあまり、時として保育者側のはやる気持ちが前面に出てしまい、保育者の思いと実践にズレが生じるといったことも起こる。幼児の心の動きを捉えながら、幼児の心の動きに寄り添いつつ、「幼児期に身に付けたい動きの獲得」に向けて、援助していく大切さを改めて実感した。

実態を踏まえた年間指導計画の見直し 日々の保育へ

指導計画の中から運動的な遊びや発達にかかわる姿や活動を取り上げ、内容を見直していった。

3 歳 児	
1 期	<p>目についたものや面白そうなものに触れたり動かしたり自分の体を動かしたりして遊ぶ。 滑り台を滑ったり、ベビーカーを押したりすることで体を動かす楽しさを知る。 テンポが速く体を動かせる曲を流し保育者と一緒に動いたり、緊張感をほぐしたりする。</p>
2 期	<p>体を動かせる場や物にかかわって、体を動かすことの心地よさを感じる。 高さ60センチ程の台から跳び下りたり、広告紙の剣を持って戦いごっこをしたりして楽しむ。 ワンダートレイン、太鼓橋などの固定遊具にかかわり体を動かす楽しさを味わう。 三輪車・足こぎ自動車などにかかわり、「こぐ」「ける」などの動きに挑戦する。 ストローなどに紙テープなどをつけたものを持って走ったり踊ったりする。 テンポの速い音楽に合わせて自由に動くことを楽しんだり、「おおかみさん」の音楽に合わせて逃げたりする楽しさを味わう。 保育者を捕まえたり、保育者から逃げたりする追いかっこを楽しむ。</p>
3 期	<p>身に付けたり持ったりして好きなものになり、他の幼児とかかわって体を動かして遊ぶ。 跳び下りる台（90cm）から跳び下りたり、ゴムをつけたビニールの怪獣に飛びついたりして体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 身近な生き物や動物になって動き、友達と同じ場で自分を出していく楽しさを知る。 思い切り走ったり動いたりできる曲「はしってはしって」「ビューンビューン」などに合わせてみんなと一緒に体を動かす楽しさを知る。</p>
4 歳 児	
8 期	<p>自分の興味のある環境の中で体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 ゴムでつるした怪獣や段ボール箱で作った怪獣にかかわり、イメージのある中で体を動かして遊ぶ。 ジャンピングにかかわり、バランスをとったり、高く、遠くまでジャンプすることに挑戦したりする。 砂場遊びの中で、たらいに入った水を友達と運んだり、シャベルで穴を掘ったりする。 ランニングバイクやペダルなし自転車に挑戦して体を動かす楽しさを味わう。 積み木で基地やお家を構成する中で、積み木を運んだり持ち上げたりする。 ジャングルジムや太鼓橋、ワンダートレインなどの固定遊具にかかわって遊ぶ中で自分なりに挑戦をする。 わらべうた遊び（「あぶくたった」「おおかみさん今何時？」など）の中で逃げる、追いかけることを楽しむ。 音楽に合わせて踊ったり、体を動かしたりすることを楽しむ。（「遊びましょう」「しゅりけん忍者」など）</p>
9 期	<p>友達とのかかわりの中で体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 固定遊具を様々なイメージ（お家、基地など）に見立てて使う。 保育者が準備する巧技台（梯子、平均台、ジャンプ）をイメージの中で渡ることを楽しむ。 ボールを使って遊ぶこと（サッカー、玉投げ）を楽しむ。 音楽に合わせて踊ったり、体を動かしたりすることを楽しむ。（「はしって はしって」） 保育者の合図ですばやく動いたり友達を捕まえたりする。（「引っ越し鬼」）</p>

10 期	<p>イメージを膨らませながら友達とかかわり，体を動かす楽しさを味わう。 踊りや体操を遊びの中で楽しむ。（「白鳥の湖」「にんじゃでござる」「子ども盆踊り」） 「おおかみと7匹のこやぎ」のイメージで鬼ごっこを楽しむ。 ボールに触れ様々な動きを楽しみ，親しんでいく。 プールに入って遊ぶ楽しさや解放感を味わったり，水に慣れ水の中でできる動きをしたりして楽しむ。</p>
11 期	<p>友達と体を動かすことで解放感を味わう。 保育者が準備する巧技台やジャンピングを組み合わせた場にかかわり，体を動かす楽しさを思い出す。 1学期に楽しんだ曲で踊りを踊ることを楽しむ。 花火や波の表現をすることで自分の体を動かして表現することを楽しむ。 プールに入って解放感を味わったり，自分ができるようになったことを喜んだり，友達との触れ合いを楽しんだりする。</p>
5 歳 児	
16 期	<p>新しい環境を試しながら自分のやりたいことに挑戦していく。 補助なし自転車に挑戦したり，いろいろな場で乗りこなすことを楽しんだりする。 巧技台の使い方がわかり，いろいろな組み合わせ方を楽しむ。 大型箱積み木を使って遊びの場を作る。（大きいものを二人で持つ。大きいものを一人で持つ。） 砂場で大きな山を作ったり，川を作ったりして，重いもの（水や砂）を運ぶ。 ドッジボールの楽しさ（方形 チーム対抗 サイドなし）が分かり，みんなで楽しむ。 「トレロカモミロ」，「アルプス一万尺」など二人組のダンスを楽しむ。</p>
17 期	<p>友達とのかかわりをもちながら自分なりの課題の達成に向けて頑張ろうとする。 巧技台を使って忍者修行などイメージのある場を作って遊ぶ。 高いところからジャンプしたり，フラフープに挑戦したりする。 ドッジボールで新しいルール（当てたら内野に帰れる）が分かり，みんなで楽しむ。 ラインサッカーのルールが分かり，みんなで楽しむ。</p>
18 期	<p>友達とのつながりの中で自分なりの課題に取り組み，それを乗り越える喜びを知るようになる。 音楽に合わせて踊りの振りを考えたり，踊ったりすることを楽しむ。 探検ごっこなどで固定遊具や巧技台などの場を見立てて使うことを楽しむ。 鉄棒や雲梯，登り棒に挑戦し，できた喜びを味わう。 ラインサッカーでボールの数が増えて動きが大きくなる。 プールに入り，「できるようになりたい」という自分なりの課題を乗り越えたり，友達と触れ合ったりして解放感を味わう。</p>
19 期	<p>友達とのつながりの中で自分の力を発揮したり，友達の力を認めたりして遊ぶ。 1学期に楽しんだ曲で踊ることを楽しむ。 花火や波の形態表現をすることで，自分の体を動かして表現することを楽しむ。 プールに入って自分ができるようになったことを喜んだり，友達の力を認めたりする。</p>

6 研究のまとめ

(1) 成 果

「心が動き」「体が動く」実践・考察 主体的・協同的な学び

自由な形態の遊びの中で、幼児がどのような環境に「心を動かし」そして「体を動かし」ているのかに着目し、エピソード記録をとるようにした。幼児が主体的に繰り広げる遊びの中には、心を動かす場面がたくさんあり、それに伴って様々な動きも誘発されることが分かった。

遊びの中でみられる多様な動きを保育者が丁寧に見取り、個々の発達や遊びのイメージに添って体を動かす楽しさを味わえる環境を意図的に構成したり、イメージをもてるような言葉かけをしたり、保育者も同じように動いてみたりすることにより、幼児の動きがより自発的になり、環境への働きかけも活発になった。

自由な形態の遊びの中だけでは体験しきれない多様な動きについて、一斉の形態で取り上げることの必要性を改めて実感した。幼児の発達や興味に即した活動内容を取り上げることで、体を動かす楽しさに触れるきっかけとなり、自由な形態の遊びの中でも生かされることが分かった。

実態を踏まえた年間指導計画の見直し 日々の保育へ

運動遊びに着目した指導計画を作成し、 の観点から実践を積み重ね、反省評価を基に改善しているところである。3年間を見通した運動遊びの方向性が明確になり、発達にふさわしい遊びを展開するために環境構成の見直しを図ったり、体験させたい動きに添った活動の選択や教材の選択などにも配慮したりするようになった。

(2) 課 題

自由な形態の遊びの中では、体を動かす遊びへの取組に個人差が大きく、体を動かす機会そのものが少ない幼児や、多様な動きを引き出す必要のある幼児がいることが見えてきた。幼児の様子を見極めながら、環境構成を工夫し、個々の実態に応じた援助のあり方を探っていくことが大切であり、それを指導計画の改善に生かしていく必要がある。

幼児の実態を的確に把握することにより、どのような体験が必要なのかを明らかにすること、また、体力測定などを実施し、個々の能力の伸びを明らかにすることで、日々の保育を改善する手だてを探っていきたい。

7 おわりに

エピソード記録を作成したり、互いに保育を見合ったり、話し合ったりすることを通して、幼児の心が動いた場面を捉えることが一筋縄ではいかないことを痛感した。特に、心が動いた場面の捉えは、保育実践者、観察者それぞれの背景にある（それも暗黙と言えるような）興味・関心、価値意識、知識、経験、理論などが関与し、同じ場面であっても、その捉えには常に「ずれ」があることが分かった。この「ずれ」を知ることが、日々の保育実践の中で、自らの保育の在り様を見直す契機となっていることに気づいた。「ずれ」を積極的に受け入れ、幼児の心の動きを多面的に捉える糧とすることのできる保育者でありたいという気持ちを強める研究となったことを付記したい。

【MEMO】

小学校部会





福島市古関裕而記念館（写真提供 福島市）

第2分科会

福島大学附属小学校

研究主題

友達と共に運動の楽しさを味わい「からだ」の高まりを感じることのできる
ゲーム・ボール運動の授業とは

日程

9:00	9:30	10:15	10:30	11:15	11:30	12:15	13:15	15:00
受付	公開授業①②	移動	公開授業③	移動	公開授業④	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第2学年	ゲーム（ボール投げゲーム）	落合 和将	体育館
公開授業②	第3学年	保健（毎日の生活と健康）	星 知考	第3学年 2組教室
公開授業③	第5学年	ボール運動 （ゴール型：ディスクサッカー）	吉田 貴史	体育館
公開授業④	第6学年	ボール運動 （ゴール型：Tゴールサッカー）	中村 崇史	体育館

学校所在地



交通機関

☆路線バス
 福島駅東口9番乗り場
 福島交通
 市内循環1コース又は2コースに
 乗車
 「附属小前」下車 徒歩1分

福島大学附属小学校



所在地 〒960 - 8022 福島市新浜町 4 番 6 号
校 長 鶴 巻 正 子
児童数 612名 (20学級)
連絡先 TEL 024 - 534 - 3942 FAX 024 - 534 - 9250
E-mail fuzoku@aes.fukushima-u.ac.jp
URL <http://www.aes.fukushima-u.ac.jp>

【教育目標】

未来の可能性に立ち向かって 愛と英知をもち
たくましく前進する 創造性豊かな人間の育成をめざす

【学校紹介】

本校は、明治13年に福島小学校の校舎を借り受け、福島師範学校仮附属小学校として開校した。以来、何度かの校名変更や校地の移転、男子部、女子部の分離と統合等を経ながら、現在の福島大学附属小学校となった。

本校は、初等普通教育を行う施設であるとともに、福島大学の研究施設の一つとして、そして、地域社会の小学校教育の向上に貢献するよう教育の理論及び方法に関しての実証的な研究をしている。また、教師を志す学生に教育実習を行う場を提供し、指導を行っている。

1 研究主題

友達と共に運動の楽しさを味わい「からだ⁽¹⁾」の高まりを感じることでできるゲーム・ボール運動の授業とは

1 「からだ」...心と体を一体として捉えた言葉

2 研究主題設定の理由

東日本大震災から5年経った本県だが、原子力発電所の事故後の屋外活動の制限等の影響を受け、遊びの時間・空間・仲間が少なくなったことにより運動する時間が減少し、肥満傾向児の出現率増加や児童の体力・運動能力の低下が見られる。

本校は学区が広く、様々な地域から通学するため、近所の子供たちで集まって外遊びをする機会が少ない傾向にある。そのため、学校外で友達とかかわる機会が少ない児童がいることも、他の小学校にはない特徴といえる。また、本校の児童の多くは「学校の体育の時間が楽しい。」と感じ、運動に積極的に取り組むことができている。しかし、運動経験の不足からか、本来身に付けておくべき運動感覚の素地を養うことができず、新たな運動に出会ったときに積極的に運動に取り組むことができない児童もわずかが見られる。

そこで、積極的に運動する児童もそうでない児童も、一人一人が友達と主体的にかかわり、互いに思いや考えを主張したり受け入れたりしながら共に運動の楽しさを味わうための力を育てていくことを大切にしていきたい。また、運動を行うことで問い⁽²⁾を見だし、友達と共に学び高まった自分の「からだ」を実感することも大切にしていきたい。

そのために、友達と攻め方や作戦を共有し協力して動き合ったり、勝利を目指して競い合ったりしながら、友達と共に運動することの楽しさや喜びを味わうことのできるゲーム・ボール運動領域において、本主題を設定し研究を進めていくこととした。

2 「問い」...動いて感じたからこそ湧き上がってくる思い

「友達と共に運動の楽しさを味わい」とは

動いたからこそ得られる気付きを伝え合ったり、友達と互いの動きを見合って比べたり、進んで相手の思いに寄り添って動き合ったりしながら、体を動かすことそのものの楽しさや成就感、達成感などを味わったりすること。

「『からだ』の高まりを感じる」とは

動きや体力の高まりのみならず、友達と協力しながら運動することのよさや友達と見つけた動き方のよさを感じることに。

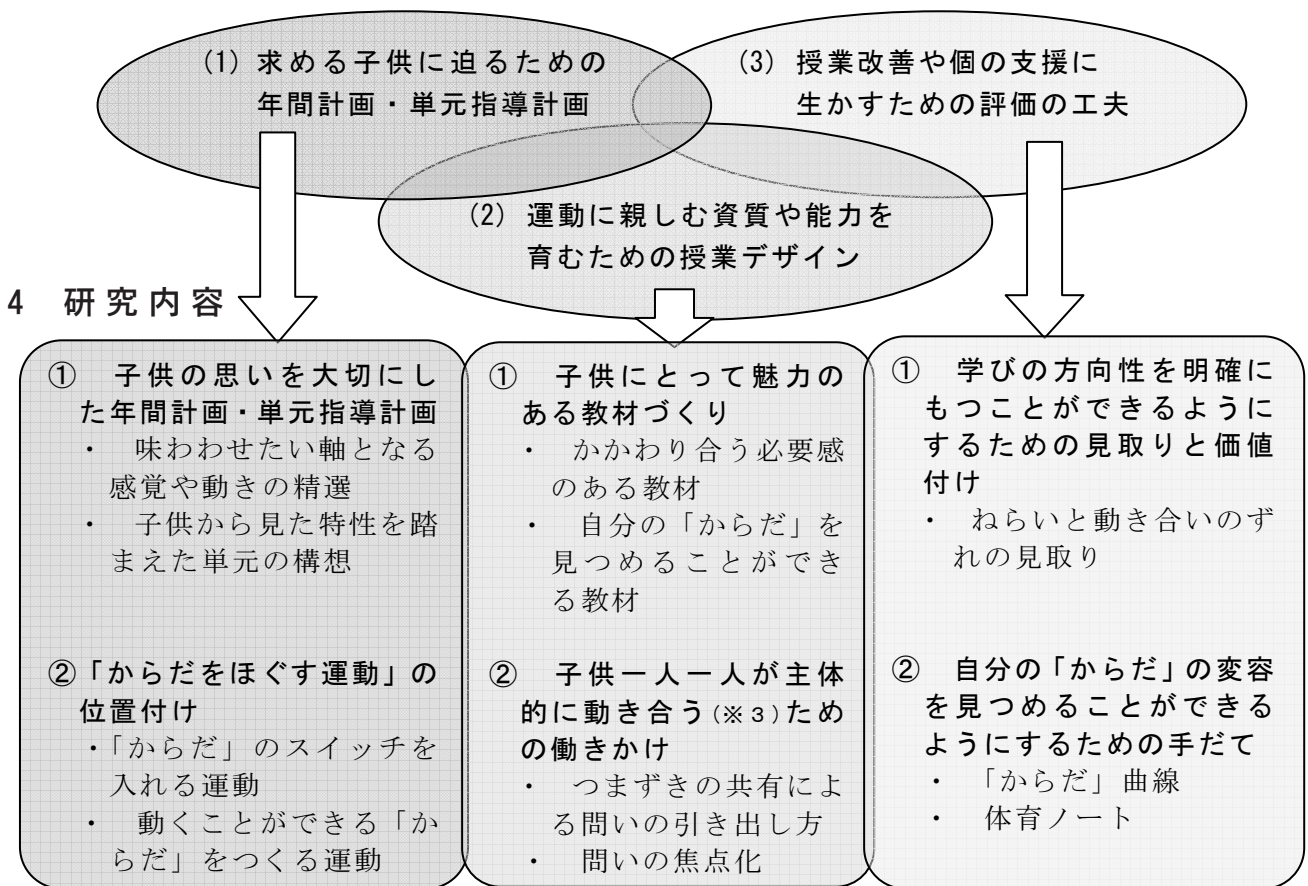
上記のような子供の姿から、主題に迫るために大切にしたい求める子供の姿を次のように設定した。

<求める子供の姿>

見いだした問いに向かって、友達、用具・器具と豊かにかかわり、
運動することの楽しさを味わうことのできる子供

3 研究仮説

体育科の学習（ゲーム，ボール運動領域）において，以下の三つの視点で構想した授業を繰り返し展開していくことで，求める子供の姿に迫ることができるであろう。



3動き合い...「からだ」の変容を捉え，動いたからこそ得られた感覚を言葉や動きを伴いながら伝え合うことによって，互いの「からだ」に寄り添い，高め合っていくこと

5 研究実践

(1) 求める子供に迫るための年間計画・単元指導計画

子供の思いを大切にした年間計画・単元指導計画

本校では，技が「できた」「できない」ということだけでなく，子供が「からだ」を動かして感じたことを基に自ら運動にかかわり続けていくことを大切にしている。そのような学びの中で，各領域で味わわせたい軸となる感覚や動きを見つけ出し，6年間を通して繰り返し取り組ませている（図1）。また，2学年ごとのまとまりの中で，領域内のつながりだけではなく「勝ちたい」「前に学んだ を生かせば...」といった子供の内から湧き上がってくる思いや学びの高まりも踏まえながら，運動の特性を見つめることを大切に単元を構成している。これらの視点を基に，どの運動に，どのようなルールに，どのような順番で出会わせていくかを系統立てて考えるようにしている（図2）。このことにより，少し複雑な動きに出会っても，今までに培い，たくわえてきた感覚や動きを生かしていくことで，より複雑な運動にも対応していくことができると考える。

さらに，本校では「勝ちたい」「やってみたい」「できるようになりたい」「できた。さらに...」な

どと、動いて感じたからこそ湧き上がってくる思いを「問い」と捉えて大切にしている。子供たちから「問い」を引き出し、課題達成に向けて動き合わせていくことにより、自分や友達の動きを見つめたり、動いたからこそ得られた感覚を豊かに感じたりしながら「からだ」の高まりを求めていくことができる考える。

図1 ゲーム・ボール運動領域E 子供に味わわせたい軸となる感覚や動き

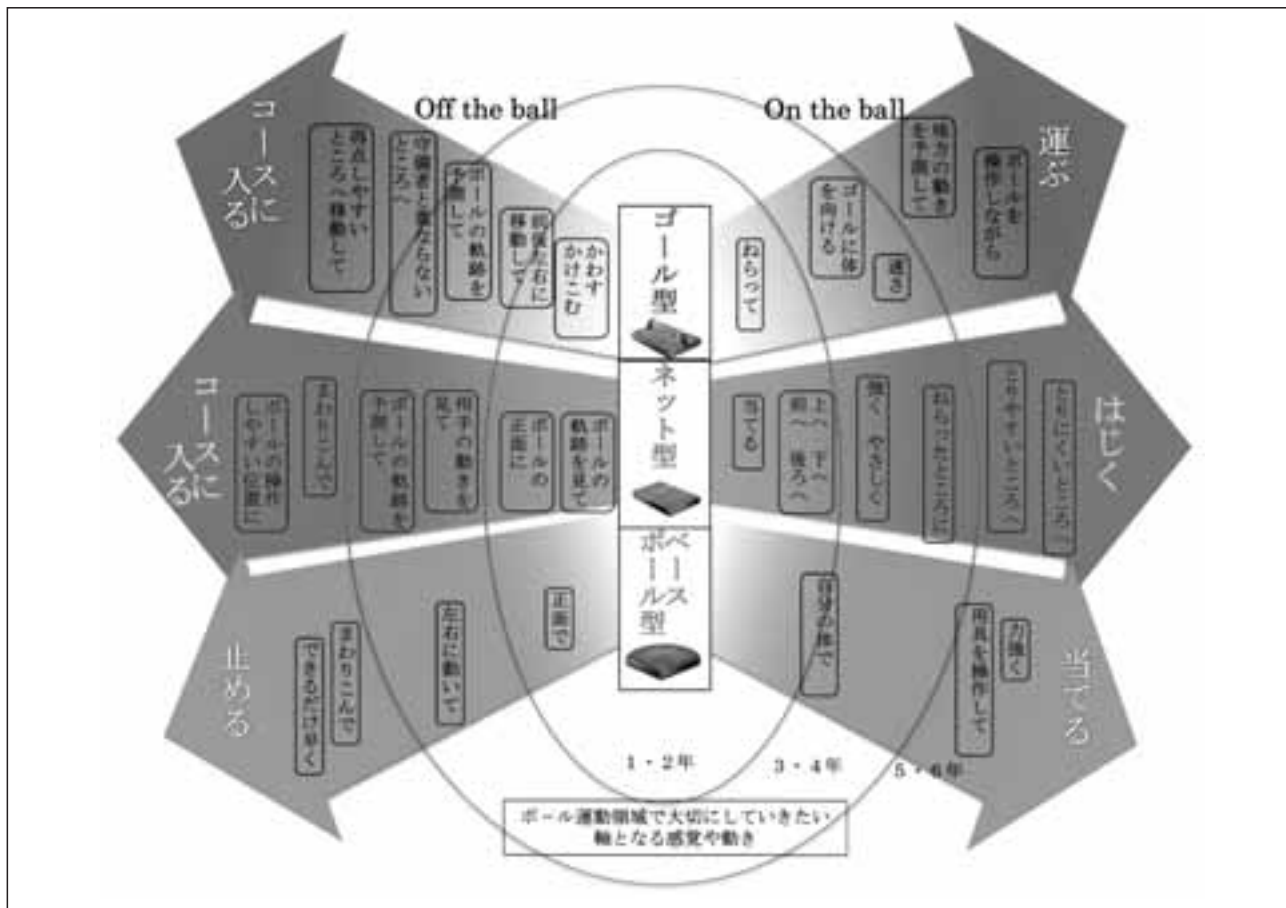


図2 ゲーム・ボール運動領域E 子供から見た特性を踏まえた単元のつながり

学年	ベースボール型	ネット型	ゴール型
6	ルールが複雑化し、動きや判断の選択の幅が広がる → 作戦を生かすための動きの高まり、ルールへの理解、プレーの判断が求められる		
5			
4	攻守が交代 → 得点する(得点を防ぐ)ための動きが、個の判断に任せられる部分が多い → 常に前から攻撃されるために、状況を絞ることができ、作戦を立てやすい	攻守が分離 → 得点する(得点を防ぐ)ための動きが、個の判断に任せられる部分が多い → 常に前から攻撃されるために、状況を絞ることができ、作戦を立てやすい	攻守が混在 → 緊迫感があり、自分や味方、相手、ボールの位置を判断して動く必要がある → 攻撃と守備が不定期に連続し、多様な作戦を考えることができる
3			
2	ボール投げゲーム	ボール蹴りゲーム	宝運び遊び
1	的当てゲーム	ボール投げゲーム	鬼遊び

「からだをほぐす運動」の位置付け

本校では、授業の導入時において体力づくりという趣旨だけではなく、以下のねらいで取り組んでいるのが「からだをほぐす運動」である。

「からだ」のスイッチを入れる。

動くことができる「からだ」をつくる。

- ・ 友達と共に運動をしていく心構えや雰囲気をつくる。
- ・ 単元で必要となる動きを取り入れ、主運動に生かすことができるようにする。
- ・ 6年間継続して取り組んでいくことで、感覚を培い、どのような運動に出会っても動くことができる「からだ」をつくることができるようにする。

体をほぐしながら心をほぐす、心をほぐしながら体をほぐす。

からだをほぐす運動の例 (学年・領域別)

学 年	1・2年生	3・4学年	5・6学年
領 域	ゲーム 鬼遊び	表現運動	体づくり運動
留意点	すれ違う動きを取り入れることで、友達の動きに合わせて動く楽しさを味わいながら、運動に取り組むことができるようにする。	動きの「くずし」を取り入れることで、いつもの動きをくずす楽しさを味わいながら、運動に取り組むことができるようにする。	回数や、時間に着目させることで、力強い動きや、素早いステップなどを意識しながら、運動に取り組むことができるようにする。
スキップ	腕を大きく振りながら、タイミングよくタッチして	回転しながらのスキップ	行き：1人で気持ちよく 帰り：3人組で隣の人を高く引き上げながら
犬走り	腰を上げて前を見ながら	静かなイヌ走り	太鼓を何回たたいた時にゴールできるかな
かに走り	空中で友達と両手タッチをして	低い姿勢でのカニ走り	手をつないでの折り返し競争
カエルの足打ち	しっかり足を振り上げて	何回打てるかな	何回打てるかな
ウサギ跳び	手を遠くに着いて	速いテンポのウサギ跳び	ゴールまで何回で行けるかな
カンガルー跳び	腕を勢いよく振って	センターラインまで何回で行けるかな	5回でどこまで行けるかな
アザラシ歩き	両腕で体を支えて	暴れん坊のアザラシ歩き	何歩で行けるかな
バック走 (帰りダッシュ)	つま先から接地して	大きな回転 (大股バック走)	小 大 (リズムを変える) ダッシュ
クモ歩き	おしりをしっかりと浮かせて	センターラインまで気の抜けたクモ センターラインから気合いの入ったクモ	ゴールまで手を何回着いて行けるかな
クロスステップ	足を素早く動かしながら、友達とタッチをして	行き：たこクロスステップ 帰り：ロボットクロスステップ	太鼓の数が何回目でゴールできるかな
投運動 (帰りケンケン)	投げる手と反対の足を踏み出して	2回でどこまで投げるかな	2つのグループに分かれて遠くにとばした方が勝ち

(2) 運動に親しむ資質や能力を育むための授業デザイン

子供にとって魅力のある教材づくり

運動と出会ったときや運動に取り組んでいく中で、子供一人一人が「やってみたい」「さらに…」という思いをもち、友達と主体的にかかわり合い、自分の「からだ」を見つめることができるような教材づくりを大切にしている。このことにより、運動することの楽しさや喜びを味わい、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を培うことができると考える。

実践例1 2学年「宝運び鬼」

かかわり合う必要感のある教材

鬼のいるエリアを、鬼にタッチされないように走り抜け、宝を運ぶ「宝運び鬼」では、攻めのチームの一人だけが、相手に分からないように金貨（3点、ほかの子供が持つ銀貨は1点）を持つことができるというルールを提示した。そうすることで、子供たちが「友達と力を合わせたい」とチームでの攻め方を考え、その攻め方を生かそうと友達と動き合っていく必要感が生まれることを期待した。



「おとり作戦」をつかって

子供たちは「チームで力を合わせて金貨を確実に運ぼう」という思いを基に「おとり作戦だ。」「いきなりバラバラ作戦だ。」と攻め方を共有し、互いの動きを確認しながら動き合っていた。また、「チームで見つけた攻め方を生かすには。」と、自分や友達、鬼の動きや位置を見つめて、動きを工夫しながら友達と一緒に鬼遊びを楽しむ姿が見られた。

実践例2 5学年「ディスクサッカー」

自分の「からだ」を見つめることができる教材

ボールの形状を球からディスク型にし、ボールの動きを3次元から2次元にすることで、ボール操作を容易にしたいと考えた。また、ディスクを踏んでいる間は、守備者が近づけないルール設定をすることで、状況判断ができる時間を確保し、味方や相手とディスクとの位置関係を捉えやすくした。



ディスクを踏んで

このような意図で、教材やルールを工夫することで「得点しやすい場所に移動してパスを受けてシュートする動き」や「ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないで立つ動き」を引き出していった。



得点しやすい場所に移動して

子供一人一人が主体的に動き合うための働きかけ

子供たちが感じたことを基に共通の問いを引きだし、友達とかかわりながら動き合っていく必要感をもつことができるようにする。さらに、動き合ったからこそ得られた自分と友達の動きや考えのよさを生かせるよう2回目の主運動を行うことで、高まった自分の「からだ」を感じることができるようにしている。このことにより、子供一人一人が主体的に動き合い、運動の楽しさを味わっていくことができると考える。そこで、動き合うことで感じたあこがれやつまずきなどから問いを引き出ししたり、友達の思いに寄り添って共に動きを高めていくことができるように問いを焦点化したりすることを大切にしている。

実践例1 6学年「キャッチアタックバレー」

つまずきの共有による問いの引き出し方

1回目のゲーム後、アタックを決めることができなかったK男の思いを全体に紹介し、動きを全体で見合わせた。そうすることで、その思いに寄り添いながら動きを見つめ、アタックを決めるには何を意識して、どのように動けばよいのかと気付かせることができると考えた。



ここから打てば...

K男 ネットが高いから上をねらったんだけどアウトになってしまって...

T K男くんはどうすればアタックを決めることができるようになるのかな。

C K男くんの動きを見て、アドバイスしてあげようよ。

~実際にやってみせる~

C もう少しネットの近くで跳ぶとアタックしやすいと思うよ。

C いや、ネットからもっと離れた方が打ちやすいよ。

T どちらがアタックしやすいのかな。

C 人によってアタックしやすい場所は違うんじゃないかな。

K男 ぼくがアタックしやすい場所はどこかな。

このように子供たちは、K男のつまずきを共有し、その思いに寄り添いながら「アタックしやすい場所はどこ」という本時の問いを見出していった。そして「もっと前から」「ぼくはここ」といった、動いたことで得られた気付きや考えを積極的に伝え合いながら動き合っていた。

実践例2 2学年「宝運び鬼」

問いの焦点化

「得点したい(目標とする問い(1))」と一人で走り抜けようとするS子がいた。しかし、何度もタッチされ、得点できないS子は悔しい表情を浮かべる。そこで教師はそんなS子の悔しい思いを全員に広げた。すると

H男 ぼくがS子さんを助けてあげるよ。
 T 助けるってどういうこと。
 H男 ぼくがね、おとりになって守りを引きつけるから、
 そのすきにS子さん、走ってよ。
 T S子さん、やってみる。
 S子 うん、協力して攻めれば得点できそう。
 (目標達成の方法をもった問い (図3 2))



図3

引きつけ作戦により協力して攻めるよさを実感したS子は、次の時間、守りを引きつけた瞬間に走り出したいという視点をもった問い (図3 3) をもち、攻め方を工夫していった。

このような子供たちの姿から、問いを焦点化することで、友達と視点を共有し、自分や友達の「からだ」を感じながら主体的に動き合うことができるようになっていったことが分かる。

(3) 授業改善や個の支援に生かすための評価の工夫

学びの方向性を明確にもつことができるようにするための見取りと価値付け

教師は子供の「ありのままの姿」を見取ることを大切にしている。うまくいったときもそうでないときも、子供が自ら考え、判断し、行動する姿は全て意味あるものと考え、肯定的に受け止めることを重視している。このように子供の学びを肯定的に受け止め、指導に生かしていくことで「からだ」の高まりにつながると考える。また、子供の動きや子供が発した言葉を教師が価値付ける際に大切にしていることは、学習のねらいの達成を称賛する価値付けに偏るのではなく、子供の学びから見取ったその子供なりの思いのよさを称賛したり、学びの方向付けをする働きかけをしたりすることである。

実践例1 3学年「みんなでヒット&ゴー」

ねらいと動き合いのずれの見取り

ベースボール型ゲームにおいて、本時は「ホームラン10点」「壁に直接当たっても+3点」という新たなルールに出会わせた。そうすることで、子供たちが初めて出会うベースボール型ゲームの特性である思い切りラケットを振り、ボールを打つ楽しさをとことん味わうことができると考えたからである。すると、子供たちは「一気に10点が入るホームランを打つには」と共通の問いを見だし、腰を回し思い切りラケットを振るようにして、打ち方を工夫して動き合っていた。そんな中、手前に軽く打っている、一見すると本時のねらいとずれているように見えるK男の姿があった。



下からすくいあげるように...

T K男くん。どうしてそのように打っているの？(根拠を問いかける)

K男 ホームランはいつでも打てるとは限らないでしょ。だから、守りがいないところにちょ

こんと打った方が、守備が集まるまでに時間がかかって点がたくさんとれると思ったんだ。

T なるほど。やってみてその方が確実に点を取れると思ったんだ。よく考えたね。でも、毎回ちょこんと当てていたらどうなるかな。

C 守備が気付いて前に来ちゃうよ。

K男 そうしたら、ホームランをねらって思いっきり打てばいいんだよ。

T それならK男くんの考えた打ち方も生かせそうだね。

C じゃあK男くん、ホームランを打つ練習も一緒にやろうよ。ボールを最後まで見て、腰を回すようにして力いっぱい振るといいよ。わたし2回も打てたよ！

K男 そうか。ありがとう。やってみる！

教師は、K男の思いや考えを大切にしながらも、K男にねらいに迫って動き合っていてほしいと考えた。そこで、動きの根拠を問い返し、K男なりの思いのよさを称賛し価値付けた。このように働きかけたことで、K男は、友達のアドバイスを基に、チームの友達と互いの動きを見合いながら得られた気づきを生かそうと、思い切り振ってボールを遠くに飛ばす打ち方を意識して動き合うようになっていった。

自分の「からだ」の変容を見つめることができるようにするための手だて

前時までの自分と、動き合ったからこそ変容した今の自分との違いを子供たちが感じ、変容した根拠と関係付けることができるようにしていく。そうすることで、本時の学びの意味を理解させ、次の学びに生かしていくことができると考える。そのために、体育ノートや「からだ」曲線などにより「からだ」の変容と、変容した根拠を関係付けることができたことへの価値付けを大切にしていく。

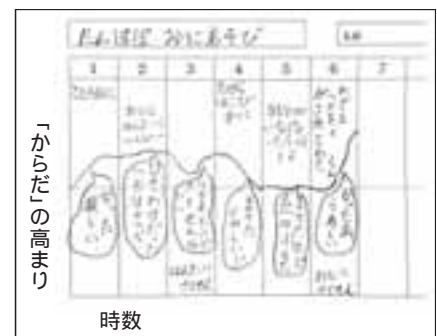
実践例1 2学年「宝運び鬼」

学びの軌跡を表す「からだ」曲線

2回目の鬼遊びを終えた子供たちは、チームの友達と喜びや悔しさを話しながら「からだ」曲線カードに曲線を描いていた。そこで、曲線が上がり始めた時に何があったのかを問うようにした。このことにより、動きが高まった時の具体的な場面を見つめ始めたS子の姿があった。

S子の「からだ」曲線には、前半低く、その後急激に上がっていく曲線が描かれていた。そして、そこには、最初は一人でやってうまくいかなかったものの、自分がおとりになって鬼を引き付け、できた隙間を友達に走り抜けてもらうことで点数が取れたことの喜びが書かれていた。

S子の「からだ曲線」からは、前時までの自分と、本時での自分との「からだ」をつなぎ、比べていく中で、変容した自分の「からだ」やその根拠を見つめていることが分かる。



S子の「からだ」曲線

実践例2 6学年「キャッチアタックバレー」

自分の「からだ」を見つめるための体育ノート

A子は授業の終わりに、本時で見出した共通の問い「アタックしやすい場所はどこかな。」を視点に、自分が感じたことや気付いたことを振り返っていた。

A子は、1回目と2回目のゲームを比べて感じた、自分たちの動きの変容について、根拠を明らかにして話していた。このように、本時の学びを振り返り、自分の「からだ」を見つめたことで「アタックしやすい場所は見つけたから、次は…」と、アタックしやすい場所を見つめ、動き合ってこそ気付く「フォーメーションを考えよう!!」という新たに生まれた問いを体育ノートに書き始めた。



A子の体育ノート

6 研究のまとめ

(1) 成 果

学年の発達段階に応じて味わわせたい「軸となる感覚や動き」を精選して教材を考え、その感覚や動きを味わう中で、子供たちから共通の問いを引き出してきた。このことにより、視点が明確となる問いを引き出すことで、互いの動きを見合い、自他の「からだ」を比べながら共に高まろうと運動を楽しんでいく子供たちの姿が見られた。

動き合いの過程や振り返りにおいて、子供たちの言動や体育ノートなどから自分の「からだ」の変容を感じている子供の思いを見取って紹介し、共通の問いを意識して動き合う良さを価値付けてきた。そうすることで、チームの仲間とこれまでの学びを振り返り、高まった互いの「からだ」を感じている子供の姿が見られた。

(2) 課 題

攻守に分かれることが多いゲーム・ボール運動領域では、一人一人の問いとねらいに差が生じてしまうことがある。そこで、子供一人一人の思いが学習のねらいに向いていくことができるような教材や教師の働きかけの在り方について研究していきたい。

【MEMO】

第3分科会

福島市立北沢又小学校

研究主題

運動の楽しさや喜びを味わい、自ら進んで実践する力を身に付ける体づくり
運動の授業

日程

9:00	9:30	9:50	10:10	10:55	11:15	12:00	13:00	15:00
受付	業間運動	移動	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第4学年	体づくり運動 (多様な動きをつくる運動)	水野 秀人	体育館
公開授業②	第6学年	体づくり運動 (体力を高める運動)	遠藤 貴久	体育館

学校所在地



交通機関

- ☆電車
JR福島駅下車
福島交通
飯坂線に乗換
「上松川駅」下車 徒歩15分

福島市立北沢又小学校



所在地 〒960 - 8251 福島県福島市北沢又字愛宕 1 番地
学校長 茂 木 巧
児童数 410名 (18学級)
連絡先 TEL 024 - 558 - 8681 FAX 024 - 558 - 4986
E-mail fkitasyo@educet.plala.or.jp
URL http://www.fukushima.gr.fks.ed.jp/?page_id=354

【教育目標】

「学びいっぱい」「やさしさいっぱい」「元気いっぱい」

【学校紹介】

本校は、昭和54年（1979年）4月に創設され、今年で37周年を迎えた。福島市の北西郊外に位置し、学校の北西側には田畑や果樹園が広がり、南側には吾妻山系を水脈とする松川が東流している。学校の南側から東側にかけて、県営・市営の住宅や個人宅が建ち並び、福島市のベッドタウンの一角を占めている。また、現在、学校に隣接して震災復興公営住宅が建設中で、新しい町並みができつつある。

東日本大震災後は、放射線の問題から屋外活動が制限されるなど、体力の低下が顕著になった。その後の除染活動により低線量となったため屋外活動の制限も無くなり、昨年ようやく新しい遊具も設置された。現在は体力向上を図るために、体育や業間運動はもちろん遊具の活用にも力を入れている。元々盛んであったサッカー、バスケットボール、ソフトボールなどのスポーツ少年団等の活動も、震災前の状況に戻ってきている。

1 研究主題

運動の楽しさや喜びを味わい、自ら進んで実践する力を身に付ける体づくり運動の授業

2 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題と現状

本市は東日本大震災から5年が経過し、現在福島の再生や復興に向けて力強く歩み始めているが、本校の子供は、昨年の秋まで遊具を使って遊ぶことにも規制があり、他校の子供たちよりも自由に遊ぶ場と体力を高める場を失っていた。運動する子とそうでない子の二極化の傾向がより一層見られ、取り組まなければならない課題は多い。本校の子供たちの発達状況や段階を踏まえると、将来の体力向上につなげていくためには、この時期に様々な基本的な動きを培っておくことが重要である。そこで、体育科の各領域の基となる領域において、扱われにくい様々な体の基本的な動きを培う「体づくり運動」領域を研究していくことが最も大切であると考えた。

(2) 教育目標の具現

本校では、「学びいっぱい・やさしさいっぱい・元気いっぱい」の教育目標の基、「めあてに向かって、互いのよさや違いを認め合い励まし合って、最後までやりぬくことができる子供の育成」を指導の重点とし、互いの考えや価値観を受け入れながら共に学び合う子供の育成を目指している。特に「元気いっぱい」については、自分の体力に合った目標をもち、主体的に運動に取り組む子供を育成することをねらいとしている。

(3) 子供の実態

本校の子供は、体力テストを基にした評価結果では、やや全国の平均レベルを下回っている。さらに、それぞれの種目の結果は、全国・県の平均を下回っている点が多く見られ、走力、持久力、敏しょう性などの力が劣っている。日常の体育の充実や業間運動の習慣化により、休み時間に校庭や体育館で積極的に遊んだり、運動をしたりする子供も増えているが、運動能力が高くても特設運動クラブなどに参加しない子供が多く、運動に対して前向きではないところがある。

また、体づくり運動にかかわる実態としては、ボールを使った運動としてのサッカーやバスケットボール、野球、ソフトボールといった小さいころから日常生活の中で遊びや経験・体験してきたものはできるが、そうではない様々な基本的な動きを培う動きに関しては、不得手な傾向を示す現状である。そのような中、「運動したい」、「やってみたい」、「動きたい」といった単純に子供が無意識に思うことを呼び覚ますことが、本校の目指すべきものの一つであると考えた。

3 研究仮説について

領域のねらいや特性に照らしながら子供の実態と系統性を踏まえた各学年の指導計画を作成し、基礎的・基本的な技能や知識を身に付けられるような授業の工夫改善、体力の高まりや達成感を味わえる評価や場の設定をすれば、子供は運動の楽しさや喜びを味わい、自ら進んで実践する力を身に付けることができるであろうと考える。

4 研究内容

(1) 子供の実態と系統性を踏まえた各学年の指導計画の作成

子供の実態と系統性を重視した指導計画

平成20年の学習指導要領の改訂では、運動する子とそうでない子の二極化の傾向が見られることや生活習慣の乱れが小学校低学年にも見られるとの指摘を踏まえ、「体づくり運動」の一層の充実を求めている。

本校では、先に述べたように子供たちの体力が全国平均を下回っている項目が多い。そこで、各学級ごとに体力テストの結果を分析し、強化すべき領域を明確にし、どのような運動をすれば全国平均、あるいは、上回る体力をつけることができるかを検討し、時数の配当を工夫した。

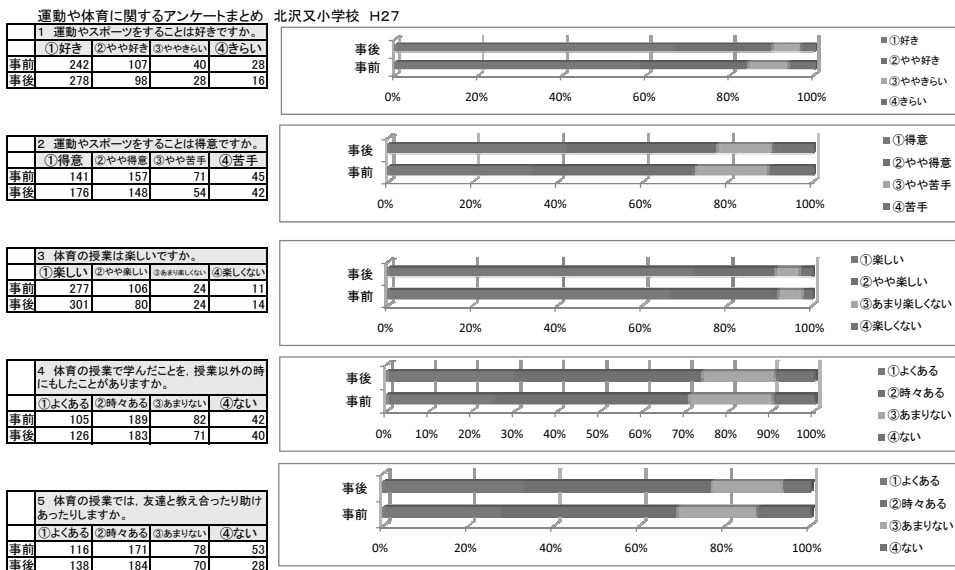
また、福島県独自に行っている「運動身体づくりプログラム」との関連も考慮し、主運動につながるプログラムとの運動内容を吟味し、指導計画の中に明記した。

アンケートを実施し、昨年(2019年)の6月と12月で比較した結果、ほとんどの質問項目でプラスに傾く項目が多かった。特に、「体育で教え合ったり、助け合ったりする」という項目では、伸びが見られた。お互いの動きを見て教え合ったり、チームやゲームに応じたルールや作戦を話し合ったりする活動を重視するという昨年からの配慮事項が確実に授業に反映されてきている。さらに、継続して教え合ったり、話し合ったりする活動を授業に取り入れ、引き続き今年度も配慮していきたい。

5 指導計画
(1) 各教科

指導の重点、工夫・配慮した事項		第6学年	
◎	学習カードを活用し、水泳、陸上運動、体づくり運動にめあてをもって取り組むことができる。		授業の導入部分で行う。 距離は15～20mが適当であるが学年の実態や能力によって回数も柔軟に変更することもできる。 教師がよい動きのイメージを具体的にしながら指導に当たる。
○	走力・持久力・調整力を高める。かけ足、なわの運動の配当時数を増やすとともに、季節や行事を考慮して単元配列した。		
○	互いの動きを見て教え合ったり、チームやゲームに応じた規則や作戦を話し合ったりする活動を重視する。		
月	単元(題材・主題)名	時数	運動身体づくりプログラムとの関連
4	○ 体づくりの運動 「体ほぐしの運動」(2)	2	○スキップ、イヌ走り、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、アザラシ歩き、バック走、クモ歩き、クロスステップ ○ふんどんほし、ぶたの丸焼き、つぼめ、こうもり振り、前回り、ほしがゆらゆら
	○ 鉄棒運動	4	
	○ 短距離走・リレー	5	
5	○ フォークダンス	3	○スキップ、カニ走り、バック走、クロスステップ ○スキップ、イヌ走り、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、アザラシ歩き、バック走、クモ歩き、クロスステップ
	○ 保健「病気の予防」	3	
6	○ ベースボール型ゲーム 「ソフトボール」	6	○スキップ、イヌ走り、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、アザラシ歩き、バック走、クモ歩き、クロスステップ、投擲運動
	○ 体づくりの運動 「体力を高める運動」	3	
	○ 水泳	5	
7		5	小計31
8	○ 水泳	6	2
9	○ 体づくりの運動 「体力を高める運動」	3	○スキップ、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、バック走、クロスステップ
	○ 走り高跳び	4	
10	○ ハードル走	6	○スキップ、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、バック走、クロスステップ ○スキップ、カニ走り、ウサギ跳び、カンガルー跳び、バック走、クロスステップ
	○ ゴール型ゲーム「サッカー」	7	

アンケートを基にした実態把握



○全ての質問項目において、事前調査より事後調査で向上が見られた。
○特に「体育の授業で教え合ったり助け合ったりする」という項目で、顕著な伸びが見られた。

新体力テストの結果

平成 27 年度 体力・運動能力調査結果（種目別全国平均値との比較）

【男子】

		握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (cm)	シャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ボール投げ (m)	A %	B %	C %	D %	E %
1年	全国	9.53	11.51	25.84	27.39	18.76	11.52	114.93	8.67	3	35	24	19	19
	本校	▼8.57	▼10.11	▼23.76	▼26.11	▼18.65	▼11.54	▼115.19	▼8.24					
2年	全国	11.16	13.95	27.33	31.85	28.33	10.61	126.15	12.38	0	3	50	37	10
	本校	▼10.63	▼13.67	▼21.73	▼30.43	▼23.63	10.53	▼123.33	▼12.13					
3年	全国	12.99	16.14	29.23	35.10	37.67	10.11	137.53	16.31	12	28	45	9	6
	本校	▼12.24	17.24	29.24	39.30	▼33.58	10.02	▼133.70	▼15.27					
4年	全国	15.03	18.16	30.49	38.80	46.05	9.67	144.71	20.33	0	26	30	30	14
	本校	▼14.33	▼16.33	▼29.22	▼38.37	▼34.81	▼10.03	▼135.48	▼18.48					
5年	全国	17.36	20.09	32.66	42.97	55.33	9.26	154.70	24.45	11	18	26	37	8
	本校	▼15.18	▼19.66	▼30.39	43.89	▼50.03	▼9.37	▼146.84	▼19.34					
6年	全国	20.04	21.69	34.08	45.79	62.62	8.90	163.72	28.41	4	43	33	18	2
	本校	▼18.82	22.47	36.16	▼43.02	▼60.91	8.83	166.20	▼27.36					

【女子】

1年	全国	8.72	10.63	28.01	26.11	15.86	11.80	107.37	5.74	8	17	39	14	22
	本校	▼8.11	▼9.83	▼26.39	▼24.14	▼15.50	▼12.08	▼103.50	5.89					
2年	全国	10.35	13.30	29.85	29.96	22.14	10.93	118.24	7.64	4	8	23	57	8
	本校	▼9.92	▼11.12	▼26.65	31.12	▼16.08	10.94	▼118.15	▼7.15					
3年	全国	12.10	14.88	32.00	33.57	28.25	10.45	129.33	9.71	10	40	40	10	0
	本校	▼11.96	16.25	32.54	36.89	▼27.36	10.16	▼125.46	10.00					
4年	全国	14.11	16.69	34.29	36.51	34.40	9.98	137.03	11.92	10	27	36	16	11
	本校	▼13.36	▼16.16	▼32.43	36.68	▼29.95	9.97	▼132.30	11.93					
5年	全国	16.55	18.55	37.25	40.69	42.79	9.55	146.52	14.37	9	23	56	6	6
	本校	▼15.15	18.65	▼36.24	42.21	▼40.65	9.54	▼140.74	▼13.71					
6年	全国	19.74	20.01	39.69	43.02	48.95	9.12	155.20	16.85	8	22	30	40	0
	本校	▼17.27	▼19.19	39.76	▼39.92	▼45.19	9.09	▼146.76	▼14.32					

- 男女ともに、反復横跳び・50m 走が全国平均より上回っている学年が多く、走力・敏捷性は高いと言える。
- 握力・シャトルラン・立ち幅とびは全学年において下回っている。筋力・持久力・瞬発力が高まる運動を業間運動などで全校で取り組ませていかなければならない。
- 男子は特にボール投げが低い。また、長座体前屈は男女共通で低い傾向にある。投げ・柔軟性を高める運動を継続して取り組ませていく必要がある。
- 3年・5年は総合評価が高い傾向であるが、2年・4年はAがなく、Eの児童が多かった。体育の授業の充実を図っていかなければならない。

各運動の基礎・基本や系統性を考慮した単元計画

本校では、あまり運動を好まない子供が各学級にいる実態から、「体づくり」だけでなく「体ほぐし」も重点的に取り上げ、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、自分や仲間の体の状態に気付いたり、交流したりすることができるようにさせたいと考えた。

低学年では、いろいろな運動遊びを通して、基本的な動きを総合的に見つけながら、体を動かすことの心地よさや楽しさ、集う楽しさを味わわせたい。

中学年では、ねらいに沿った数種類の運動を経験する中で、仲間と交流しながら動きのポイントを見つけたり、基本的な動きを総合的に組み合わせたりして多様な動きを身に付けさせたい。

高学年では、仲間と動きの質を高めるためのポイントや方法を話し合い、一つの動きから更に発展させた運動を考えたり、自己の体の状態や体力に応じた運動の仕方を工夫して練習したりするなどして、体力の向上に結び付けていきたい。

また、各学年において子供たちが「やってみたい」と思うような魅力的な教材を開発し、単元を通して子供たちが興味をもって、運動に取り組むことができるようにした。例えば、5年生の体力を高める運動では、巧みな動きを高める方法として、「北小の壁を突破せよ」という単元名で、まず子供のやる気を引き出し、様々なしっぽとり遊びを行ったり、カラーコーンタッチ、カ

ラーコーンジャンプ、ボール転がし、体操棒を利用しての移動などを行ったりしながら、それぞれの子供が単元を通して自分の課題に取り組むことができるようにした。

年間指導計画表（体づくり運動における各学年の計画表）

第1学年 体づくり運動単元指導計画

		1	2	3	4	5	6	7
学 習 内 容	○オリエンテーション（1時間目） ○整理・あいさつ ○準備運動 ○運動身体づくりプログラム ○用具や場の準備			○整理・あいさつ ○準備運動 ○用具や場の準備 ○運動身体づくりプログラム				
	1 学習課題の確認をする。 体ほくし運動を通してみんなで一緒に体を動かして楽しもう。			みんなで作る「わくわくスポーツランド」 （力試しの運動遊び・体を移動する運動遊び）				
	2 体ほくし運動の行い方を知り行う。			1 学習課題の確認をする。 「わくわくスポーツランド」でやりたい運動遊びを考えながら、様々な力試しの運動遊びと体を移動する運動遊びを行い、体をいっぱい使って楽しく動こう。				
	○いろいろなウォーキング・リズムに合わせて ○線上を歩く	○もうじゅうがりが ○ウォーキング・7、8でジャンプ	2 力試しの運動遊びと体を移動する運動遊びを行う。 第3時 力試しの運動遊び「ちからコーナー」 ○押しずもっ…肩を押し合う ○バスタオルで友達とはこび…丁寧にゆっくり ○おしくらまんじゅう		「わくわくスポーツランド」 ○自分たちがやりたい運動遊びで「わくわくスポーツランド」を作って、体を動かす。			
	○なべなべそこぬけ ○おしくらまんじゅう	○あつちいてほしい ○同方向に足ジャンプ	第4時 力試しの運動遊び「ちからコーナー」 ○おしくらまんじゅう…おしりをゆっくり押し合う ○ひっぱりっこ…タオルをしっかりとって ○からだ時計…腕で指示して足を動かす ○ともだち運び…手首を持ってゆっくり引く		○今までやっていたいろいろな動きを思い起こしながら、楽しく動く。			
	○だるまさんがころんだ	○反対方向に足ジャンプ	第5時 体を移動する運動遊び「うごきコーナー」 ○まねっこ…線上を様々な動きで歩く、走る ○とびとびうごき…ケンスステップを使って ○両足とびで ○片足とびで ○るるんマラソン…1分間自分の速さで走る ○大歩き…運動身体づくりプログラムで ○あざらし歩き…運動身体づくりプログラムで					
	○ストレッチング	○じゃんけん列車	第6時 体を移動する運動遊び「うごきコーナー」 ○体でじゃんけん ○ジグザグ走り…コーンを回る、並べ方を変えて ○しゃがみ歩き…1人で、人数を変えて、横向きで ○クモ歩き…運動身体づくりプログラムで					
	○動いてみるの感想 ○あいさつ	○片付け	○振り返り（学習カードへの記入） ○友達の良い動きの確認		○あいさつ ○片付け			
	学習 評価 規 準 に 準 拠 し た	関心・意欲・態度 ②観察	①観察・カード					
	思考・判断	①観察・カード		②観察・カード				
運動の技能			④観察		②観察		②④観察	

第1学年 体づくり運動単元指導計画

		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		○整理・あいさつ ○準備運動 ○運動身体づくりプログラム		○準備運動 ○用具や場の準備							
		みんなで作る「わくわくスポーツランド」Ⅱ （バランスをとる運動遊び・用具を操作する運動遊び）								「わくわくスポーツランド」Ⅲ （用具を操作する運動遊び）	
1 学習課題の確認をする。 「わくわくスポーツランド」でやりたい運動遊びを考えながら、様々なバランスをとる運動遊びと用具を操作する運動遊びを行い、体をいっぱい使って楽しく動こう。		1 学習課題の確認をする。 「わくわくスポーツランド」でやりたい運動遊びを考えながら、様々なバランスをとる運動遊びと用具を操作する運動遊びを行い、体をいっぱい使って楽しく動こう。									
2 バランスをとる運動遊びと用具を操作する運動遊びを行う。		2 バランスをとる運動遊びと用具を操作する運動遊びを行う。 第8時 バランスをとる運動遊び「バランスコーナー」 ○回る…右回り、左回り、軸足を替えて …おしりで、背中で、手を広げて、手を胸で組んで 用具を操作する運動遊び「ボールコーナー」 ○回す…体のまわりを、ボールの大きさを替えて、みんなでゲーム ○転がす、ぶつける、捕る…ボールの大きさを替えて 第9時 バランスをとる運動遊び「バランスコーナー」 ○寝転が、起きる…だるまころがり、小さくなって横まわり …ゆりかご、ゆりかご起きジャンケン、みんなで 用具を操作する運動遊び「わかっコーナー」 ○回す…床で、腕で、腰で、【人数】二人で一緒に ○転がす…一人で、二人で、【ゲーム】転がしリレー 第10時 バランスをとる運動遊び「バランスコーナー」 ○止まってポーズ…いろいろなポーズで、一人で、数人で 用具を操作する運動遊び「ボールコーナー」 ○ボール運び…【二人ではさんで】背中で、腹で、手で、頭などで 【人数を変えて】一人で、二人で、大勢で 第11時 バランスをとる運動遊び「バランスコーナー」 ○座る、立つ…手をつないで、背中合わせて、 【用具】ボールを背中にはさんで 【ゲーム】おしり立ちジャンケン 用具を操作する運動遊び「ボールコーナー」 ○投げる、捕る…両手で、片手で、座って、寝転んで、背中で 【用具】風船、新聞、様々なボール、輪など 第12時 バランスをとる運動遊び「バランスコーナー」 ○バランスをずらし…しゃがみ相撲、手でボールをはさんで 用具を操作する運動遊び「ボールコーナー」 ○投げる、捕る…【動きの追加】拍手、床タッチ、一回転してなど 【ゲーム】高さや距離や姿勢を変えて								2 4つの運動遊びを行う。 第15時 用具を操作する運動遊び 「なわコーナー」 ○くぐる、跳ぶ …【大なわで】 大波小波 くぐり抜け …【短なわで】 前回し跳び 後ろ回し跳び かけ足跳び 片足跳び あや跳び 第16・17時 「わくわくスポーツランド」Ⅲ ○今までやってきた運動遊びを思い起こし、遊び方を工夫したり、組み合わせたりして、「わくわくスポーツランド」を作って、楽しく体を動かす。 …力試しの運動遊びと体を移動する運動遊び バランスをとる運動遊び 用具を操作する運動遊び	
○振り返り（学習カードへの記入） ○あいさつ		○振り返り（学習カードへの記入） ○友達の良い動きの確認									
③④観察										①観察	
②観察・カード				②観察・カード		②観察・カード				①②観察	
		①③観察				①③観察		①③観察			
										①②④⑤観察	

(2) 体力の高まりや達成感を味わえるような授業の工夫

楽しさや達成感を味わわせる教材の開発

低学年では、挑戦意欲をかき立てる運動・遊びの経験（多様な動きをつくる運動）

中学年では、動きの広がりや操作の安定を目指した運動（多様な動きをつくる運動）

高学年では、自己の体力に応じた体力作りの実践（体力を高める運動）

子供たちの実態に応じた教材作り

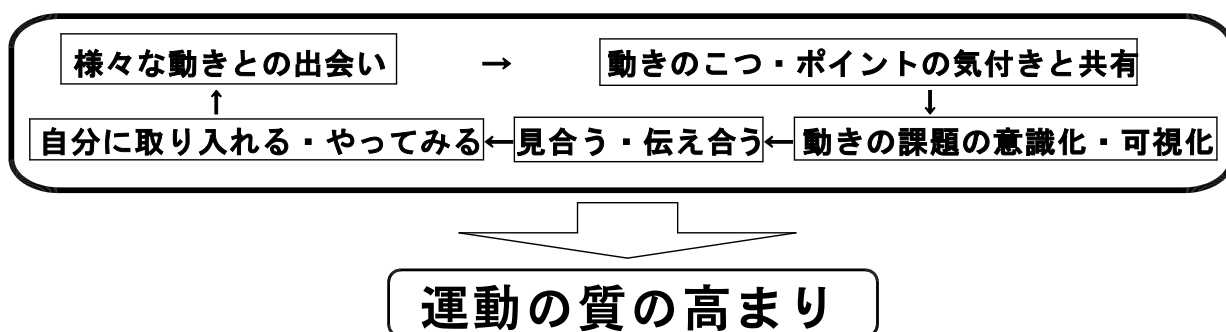
指導に当たっては、授業者が子供たちのつまづきを適切に把握し、それを解消する有効な手だてを工夫することで、どの子にも達成感を味わえるようにしたい。

学び合い活動の充実

本校における「学び合い」とは、自分が感じたこと、思ったことなどを仲間と表現し合うことで、解決への糸口を見つかけたり、学習することの楽しさを感じたりすること。また、友達の動きや考えを参考にしたら、自分の動き方に取り入れてみたり、変容が見られたりすること。「友達の動き方を参考にしたらできた」「タイムを縮めることができた」などの達成感を味わうことで、運動意欲が向上し運動の質が高まることを意味する。

具体的な授業の流れとしては、子供たちは、今もっている自分の力で「様々な動きに出会い」

ながら、課題を解決しようとする。その中で子供は、できるようになるコツや動きのポイントに気付く。それを学級全体で共有する話し合いをすることで、子供たちはそのコツやポイントを自分の動きにどのように生かしたらよいかを考え、自己の課題をもつことができるであろう。子供一人一人の動きの課題を、ガムテープやビブスなどを活用して可視化することで、子供自身に「自己の課題を意識」させるとともに、友達同士が見合う場合の「見るポイント」にもなると考えられる。このようにしてペアやグループでお互いの動きを見合いながら、どんな動き方をしているかを「伝え合ったり」めあてとする動きに近づくにはどうすればよいかを「アドバイスし合ったり」する。その話し合いを個々の子供が次に行う「自分の動きに取り入れて動いてみる」ことで、「動きの質の高まり」につながると考えた。これらのサイクルをスパイラル的に繰り返していくことで、より難しい動きや難しい場に挑戦できるようになり、運動の質が更に高まっていくと思われる。



体づくり運動に有効な指導のポイント

体ほぐしの運動では、自分の心と体の関係に気付くこと、体の調子を整えること、仲間と交流することの三つのねらいに合った運動を取り上げる。人数を変えたりテンポを変えたり、意図的に運動の組み合わせ方を変えて授業を行うことが大切である。

そのような中で本校では、各学級の実態を各担任が把握し、それらを克服するためにはどのような教材を開発すればよいかを考え、「北小の～を突破せよ、クリアせよ」といった子供が思わずやってみたくなる楽しそうなネーミング（場の設定）を考え、そこに到達していくために授業を進めるという形を全校で確立している。

また、多様な動きをつくる運動（遊び）は、意図的に動きを身に付けることをねらいとした運動（遊び）であるが、単調な反復に終わることがないように工夫することが求められている。また、児童の運動経験や動きの習得の実態を踏まえ「動きを確認しながら運動する時間」と「動きを選び、工夫しながら運動する時間」を設定し、その時間配分を考えることが大切である。子供にとって動きがやや難しい「基本的な動きを組み合わせた運動」を取り上げ、新しい動きに意欲的に取り組ませることが効果的である。

さらに、体づくりにおいては、「動きのコツ」をつかませる上で、良い動きを取り上げ、問いかけや言葉かけを工夫することが大切になる。アクティブ・ラーニングのかかわりからも主体的、共同的に学ぶ学習過程を考えると、動きの見せ合いや動きを言葉に置き換えたり、伝え合い・教

え合い・話し合う時間の確保に努めてきた。

体力を高める運動では、自分の体力を高めるために、人数、回数、距離、時間、姿勢、用具、方向などを変化させて運動を工夫しながら行うことが大切である。

また、体力の必要性や運動の行い方について理解を深めることも大切である。

福島県独自の「運動身体づくりプログラム」の実践

「運動身体づくりプログラム」とは、「動ける体」「動きたい体」を目指し、リズム感覚、腕支持感覚、逆さ感覚、投感覚の四つの動きから構成されている運動である。リズム太鼓を活用しながら、本校教師も体育の導入にて行っている。

また、各学級ごとに「劣っている点」や「子供へのアンケート16項目」を分析し、各担任が日常の授業の中で学級の実態を踏まえた授業を展開していく必要を感じている。本校では、体力向上に向けた教科体育の時間において、授業開始時に「運動身体づくりプログラム」を実施している。平成26年度からは毎週月・水・金曜日の2校時終了後の業間の時間に、『50mダッシュ』を校庭で、『運動身体づくりプログラム』を体育館で行っている。10、11月には、『マラソントайム』も位置付けて体力向上に努めている。今年度からは、校庭の遊具も新しくなり、今までの運動に鉄棒や登り棒、雲梯を加え、更なるバランスの取れた子供たちの体を育てられるよう取り組んでいる。



福島県独自の「体力向上推進計画書」に基づく、実践を通して、進んで体力向上に取り組む資質や能力を高め、運動の習慣化を図っている。

(3) 適切な評価の工夫

目指す子供の姿を明確にした評価

評価については、本時の課題に対する教師の評価を実施するとともに、「ねらいとする子供の姿」を明確にして評価する。

子供の個々の課題の可視化・意識化するための工夫

子供がどこに意識して取り組んでいるかを把握するためにビブスや色つきのガムテープ、ビブス、シールなどを用いて教師自身が、子供の課題の把握をする。これらを活用して子供の自己評価・相互評価に生かすことができるようにする。

授業のねらいに沿った学習カードの工夫

評価法の工夫として、評価の手がかりに運動の内容や技能の進度を表したり、結果や記録を記入したり、ねらいに沿ったりできる学習カードを活用する。教師にとって分かりやすくする。



5 研究の実践

(1) 楽しさや達成感を味わわせる授業

意欲を継続できるテーマの設定

2学年の体づくり運動の学習では、「北小にんじャランド」というテーマの基、様々な運動遊びを「修行」として取り組んでいくことにした。子供は「今日は、『ボールを操作する修行』でどんな修行をするの?」と意欲的に活動することができた。また、いつも同じパターンで授業が進むので学習の仕方が分かって運動することができた。



始めの修行は「魔法のじゅうたん」

学習したことを生かす競争やパワーアップした動きを取り入れる活動の設定

「力試しの運動遊び」の中の「魔法のじゅうたん」の動きをリレーの形でスピードを競うグループ対抗で実施した。競争のため、子供は前時より力を出して速く引っ張ろうとする様子が見られ、楽しく力試しの動きに取り組めた。しかし、速さを意識するあまり、動きが雑になったり、危ない動きになったりする場面が見られ、指示の与え方などを工夫する必要があった。また、グループ数が多く、担任一人では全体を見取れないところがあった。これらの課題の解決として、兄弟グループを作って見合う、2グループで組を作り相手チームが動きの正しさを確かめるなどの方法が考えられた。対抗戦の際、勝ったグループに紅白玉を与え累計していくこととしたため意欲につながった。「用具を操作する運動遊び」の「ボール投げ上げキャッチ」では、基本の動きを行った後に、班長を呼んで「グループみんながキャッチできるか、やってみよう」という指示を与えた。それにより、個人で投げ上げキャッチをする動きから、グループみんなで一斉にボールの投げ上げキャッチをする動きにパワーアップさせることができた。なかなか成功せずに何度も何度も挑戦したり、全員が成功して「やった〜」と声が上がったりする様子が見られた。

(2) 学び合い活動の充実

動き方のコツや気を付けるといいところの確認

2学年の体づくり運動の学習では、動き方のコツや気を付けるといいところを「忍法カード」と名付けて書くようにした。学習のまとめの時間に「今日の修行をやってみて、忍法が見つかったかな?」と問いかけ、子供の言葉を大切に「忍法カード」に書きためた。子供なりに、「手に力を入れて、おしりを下げて引っ張る」とか「ボールを見てキャッチする」とか「高さを考えて、ボールを高く投げすぎないとキャッチできる」などのコツが出された。これらの「忍法カード」は、次の時間に動きの確認をする際に活用した。また、以前にやった動きで出された「忍法カード」の内容が使えるということに気が付く子供も見られた。しかし、今までの「忍法カード」を全部掲示したため、本時の動きに必要な「忍法(コツ)」がはっきりしなくなった点が反省である。

グループで互いに見合ったり教え合ったりする場の設定

本時の「ボール投げ上げキャッチ」の「グループみんながキャッチできるか、やってみよう」という指示の動きでは、グループ内で「まっすぐ投げて」「どうすればうまく捕れるの」「手をこ



【忍法を見つけたよ】



【こつは、背中を丸めること】



【キャッチできるかな？】

う出して捕るといいよ」など教えてあげたり、やり方を聞いたりする姿が見られた。

低学年は自分の動きや自分の技の向上に気持ちが向いているので、互いに協力する必要がある動き方を指示したり、グループみんなが動きを向上させるとうまくいくような競争を取り入れたりとすることで、互いに見合ったり教え合ったりすることのよさを感じさせることが大切である。互いを認めて助け合う体育の学習にもつながっていくのではないかと考える。

(3) 体づくり運動に有効な指導のポイント

「運動身体づくりプログラム」の実施

「運動身体づくりプログラム」で身に付けたことは体育の学習を行うための素地となると考え、授業の中で必ず実施するようにした。1学年では動き方が分かることを目標とし、2学年になってからは、リズムに合わせることや正しい動き方を行うことなどを意識して指導した。本時の学習のねらいに迫るために短時間で実施できるようにすることが大切であり、子供は一定時間でプログラムの動きができるようになってきた。

動きの特性の明確化

低学年においては、今後の体づくり運動の基本となる様々な動きを体験させることが必要である。「多様な動きをつくる運動遊び」「体のバランスをとる運動遊び」「体を移動する運動遊び」「用具を操作する運動遊び」「力試しの運動遊び」の四つに分かれているが、その中でも体のどこの部分を使う動きなのかを意識させていくことが大切である。そのためには、教師自身が、動きの特性を知り、使う体の部分を明確にして指導していかななくてはならない。本時では、その点を明確にしないまま授業を行ったので、検討改善していく必要がある。

(4) 基礎的・基本的な技能や知識を身に付けさせる指導と評価

動きの特性の明確化

動きの特性を知り、体のどこの部分を使う動きなのか明確にして指導していかななくてはならない。また、この動きを行うことで子供にどういう力を付けさせたいのか、どういうことができるようにさせたいのかをイメージして指導することが大切である。

グループを活用した相互評価

様々な運動遊びを行う児童を教師一人で評価することは難しい。そこで、動きを指導した後、兄弟グループで見合って互いの動きの精度を上げていったり、グループ対抗で相手グループの動きを確認したりすることなどを取り入れていきたい。そして、それをカードなどに反映させるこ

とで評価につながっていくのではないかと考える。

友達のよさや頑張りを認めたり，楽しかった動きを発表したりする場の設定

カードを活用して，取り組んだ動きを明確にした。

2年生なので，自分で動けたという気持ちを大切にしたいカードにした。また，教え合うことのよさに気付かせたいと考え，「教えてもらってできるようになったこと」や「教えてあげたこと」を書くスペースを設けたが，一部の子供しか書くことはできず，指導の継続が大切である。

学習の最後に，付箋を利用して，友達の頑張りに対する言葉や自分自身の工夫について書く機会を設けたが，まだまだ書けない子供も多い。しかし，友達から頑張りをほめられて体育を苦手と感じている子供が楽しい，できたと感じている場面があった。また，自分が教えたことによって友達ができるようになったことを喜ぶ言葉も見られた。



6 研究の成果と課題

(1) 成 果

- ・ 各学年の発達段階を考えた単元指導計画を作成したことで，子供一人一人に運動の楽しさを味わわせることができた。
- ・ 視点や動きのポイント，話し合う時間の確保を行うことで，自分が感じたこと，思ったことなどを仲間と表現する「学び合う」姿が多く見られた。
- ・ 教師の評価を実施する上で，その子供が本時でどこを頑張ろうとしているのかをビブスや色が分かるガムテープを身に付けることで分かりやすくてできた。子供の自己評価・相互評価も学習カードや発表を通して行うことで，技能や意欲の向上を図ることができると考えられる。
- ・ タブレットを活用することで，自分の姿をしっかりと見ることができ，動きの向上につながった。

(2) 課 題

- ・ 仲間とかかわり合う中で，お互いの動きを見合っただけでなく，その動きを観察する視点や助言の仕方などをより分かりやすく行わせるための手だてについて考えていきたい。
- ・ 様々な活動・動きを行う上で，教師の場の設定や教材開発の重要性を更に考えていく必要がある。
- ・ 体づくり運動を進める上で，学級が学習集団として機能するためには，所属集団である学級を，子供たちがその集団の一員でありたいと望む集団へと高めていくことが必要不可欠である。そうすることにより，助け合うことや共感し合うことを基本とした支持的な風土，安心と信頼に根ざした学級づくりができると考える。
- ・ この領域において，投力や柔軟性の高め方についても，指導の在り方を研究していく必要がある。

【MEMO】

第4分科会

福島市立御山小学校

研究主題

目標をもち、楽しみながら運動する子供の育成
 ～楽しくルンルン バンバン運動 グングンのびる 体育の授業づくり～

日程

9:00	9:30	9:50	10:15	11:00	11:15	12:00	13:00	15:00
受付	業間運動	移動	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第4学年	走・跳の運動（高跳び）	室井 澄子	体育館
公開授業②	第6学年	陸上運動（ハードル走）	泉 光	校庭

学校所在地



交通機関

- ☆路線バス
 福島駅東口8番乗り場
 福島交通
 イオン福島店行き
 「清水学習センター前」下車
 徒歩5分

福島市立御山小学校



所在地 〒960 - 8252 福島市御山字長滝 1 - 1
校長 阿部 正明
児童数 419名
連絡先 TEL 024 - 559 - 4151 FAX 024 - 558 - 4967
E-mail yuzukko@educet.plala.or.jp
URL http://www.fukushima.gr.fks.ed.jp/?page_id=357

【教育目標】

豊かな心，深い英知，健康な体をもった人間性豊かな子供を育てる
思いやりのある子供（思いやりルンルン）
元気でたくましい子供（やる気一体バンバン）
進んで学ぶ子供（学び合いグングン）

【学校紹介】

本校は，平成7年4月に開校，今年で創立22周年目を迎える。本校の名称「御山」は福島市の中央に位置する信夫山の古くからの呼び名で敬い，親しまれてきた。この信夫山が「ゆず」の北限であることから，御山小の児童を「ゆずっこ」とも呼んでいる。比較的歴史の浅い学校ではあるが，学習支援ボランティアや見守りボランティアなど，地域の方々の協力や連携が非常に強く，日常的に地域の方々が学校を訪れている。

今年度は，「体づくりは心づくりの基盤であり，学力向上の礎である」ことを共通理念として「体力・運動能力向上」を目指す学校づくりを一層推進している。運動好きな子どもが多く，特設陸上部や水泳部の活動が盛んである。

1 研究主題

目標をもち、楽しみながら運動する子供の育成

～楽しくルンルン バンバン運動 グングンのびる 体育の授業づくり～

2 研究主題設定の理由

(1) 実態及び今日的課題から

福島市は、5年前の東日本大震災による原子力発電所の事故の影響で、しばらくの間、屋外活動の制限が続いた。このことを契機に、運動習慣の二極化傾向が際立ってきた。そして現在、体力が低下し、身体能力が十分に発達していない傾向が見られる。これらの問題を解決するため、生涯体育の基盤となる運動の楽しさや喜びを十分に味わわせ、進んで運動に取り組む子供を育成することが急務であると考えた。

また、今日の知識基盤社会においては、人とかがわりながら自己の課題に立ち向かっていくことが求められている。体育科でも課題解決に向かって主体的・協働的に学ぶ姿が求められている。そのため、体育科ならではの主体的・協働的な学びを通して、生涯にわたって運動に親しむことのできる子供を育成する必要があると考えた。

(2) 教育目標から

本校では「豊かな心、深い英知、健康な体をもった人間性豊かな子供を育てる」という教育目標を掲げ、体育科では、運動技能の到達目標設定と日常的な体力向上への取り組みを重点事項とした。心と体の一体的な成長を目指し、思考力、判断力、学び合う精神を同時に育てていけば、運動の楽しさを味わい、喜びを分かち合う子供を育てることができると考えた。

(3) 「ルンルン」「バンバン」「グングン」とは

本校は、今年で創立22年目を迎える。校歌の中には「ルンルン」「バンバン」「グングン」という特徴的な歌詞（擬態語）が用いられている。この歌詞は、子供たちに楽しさ、元気、やる気、そして時に勇気を与えてきた。と同時に、我々指導者も子供の学びを支援していく上で、大きな手がかりの一つとも言えるフレーズとして捉えてきた。

そこで、本校ではこの三つの言葉を体育の授業づくりと以下のように関連付けて考えることとした。

「ルンルン」＝運動の楽しさを味わう。

体育科の学習において子供たちが楽しさや喜びを感じるのは、身体表現できること自体だけではなく、「技能の習得」「記録の向上」「競争の楽しさ」「友達との協力」などいろいろな要素が関係してくる。また、それぞれの運動の特性に触れる楽しさもある。

さらに、より大きな「楽しさ」や「喜び」を味わうには、個人より集団での協働的な学びが効果を高めると考えられる。他者とかがわり合いながら学習することで、意欲を持続させたり、課題を共有したり、達成した喜びを分かち合ったりすることが期待できる。つまり、「一人ではできなかったことに挑戦し、できるようになる」「高まりを共感できる」「認め合い励まし合うことができる」学びにより、より大きな成果をもたらし、より大きな喜び、そして運動することの楽しさへと導きたいと考えた。時に他とかがわることが摩擦や障害になることも想定されるが、福島におかれた現状を乗り切る資質や能力が求められる子供たちにとって、よい学びの場になると

考えられる。こうした人間関係の構築の観点からも、いろいろな友達と上手にかかわれる「楽しさ」も大切にしていきたい。

「バンバン」=目標をもち、意欲的に運動に取り組む。

「運動」することにより、様々な身体表現をする心地よさを感じることができ、そのこと自体が運動する楽しさに結び付くことがある。このことは昨年度の子供への意識調査から明らかとなっている。しかし、限られた体育の時間の中で、より効果的に技能を高めたり、より高いレベルで運動の楽しさや喜びを味わったりするには、しっかりとした目標をもって運動に取り組ませる必要がある。

特に陸上運動の到達目標は個々に成立する。そのため、より自分に合った目標を設定し、その達成度合いを評価したり、新たに課題を設定したりしながら活動（運動）に連続的に取り組む学びが求められる。この評価に当たっては、自己評価、相互評価、教師による評価がバランスよく機能する必要がある。また、評価の規準がより明確で分かりやすいこと、子供の動きを見取る目を養うこと、そして教師の子供への動機付けや支援が重要になると考えられる。

そこで、我々教師は、それぞれの運動への出会わせ方、いかに学習意欲を持続させるか、そしてそれぞれの子供が技能の高まりをどう実感できるかを考えていく授業をデザインしていくこととした。

「グングン」=心と体の成長を期する。

体育科の学習活動、特に本校では伝統的に盛んな陸上運動の領域において、子供たち一人一人が運動に対する目標をもち、課題解決をしていく学習を積み重ねながら、楽しく学び合う授業づくりを行う。このようにして、主体的・協働的に運動に取り組ませながら様々な身体機能の発達を促し、運動に親しむ資質や能力を高める素地を養うことで、生涯にわたって心と体を成長させる（グングン）ことができると考えた。

3 目指す子供の姿と研究仮説

(1) 目指す子供の姿

目標をもち、楽しみながら運動に取り組む子供

この目指す子供の姿について、具体的に以下の三つと捉えた。



意欲をもって取り組む子供

仲間と学び合いながら運動する子供



目標に向かい最後までやりぬく子供



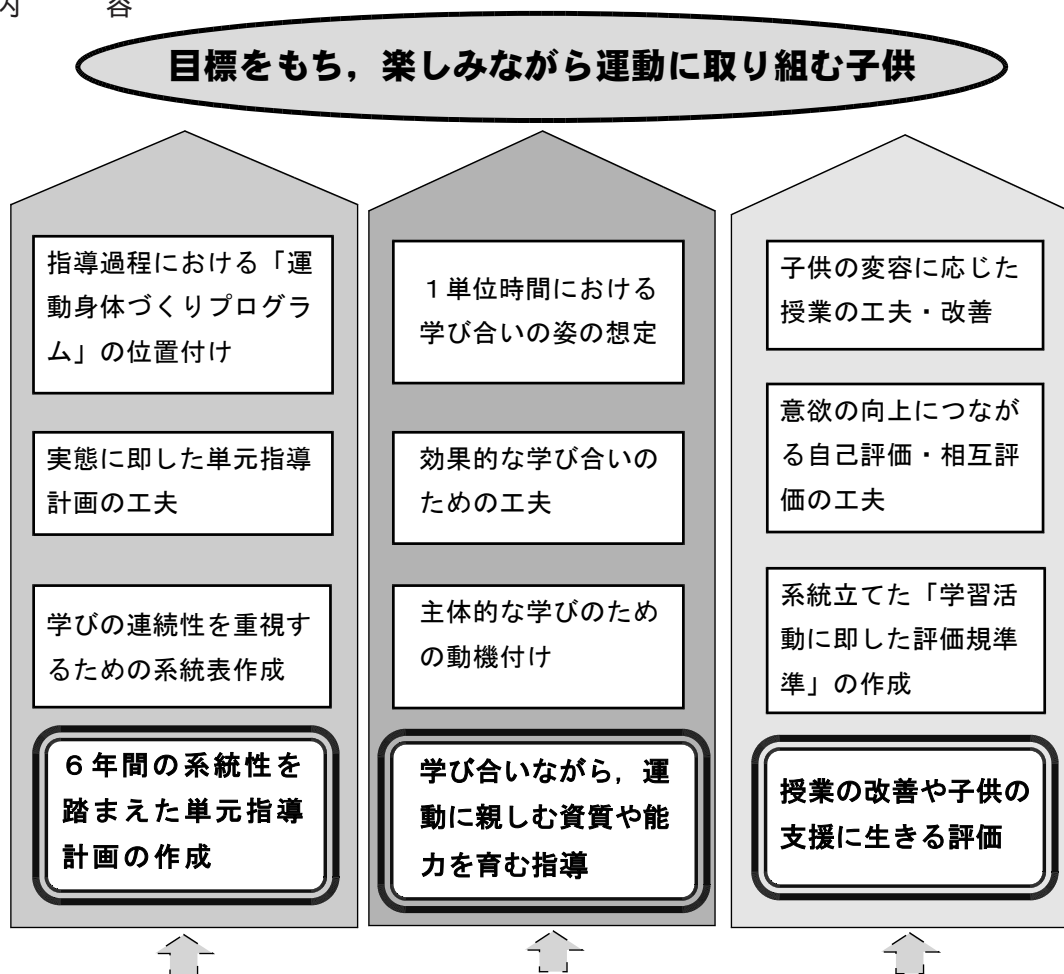
(2) 研究仮説

体育科の学習（陸上運動系）において、以下の三つの手だてを講ずれば、自ら目標をもち、楽しみながら運動に取り組む子供を育成することができるであろう。

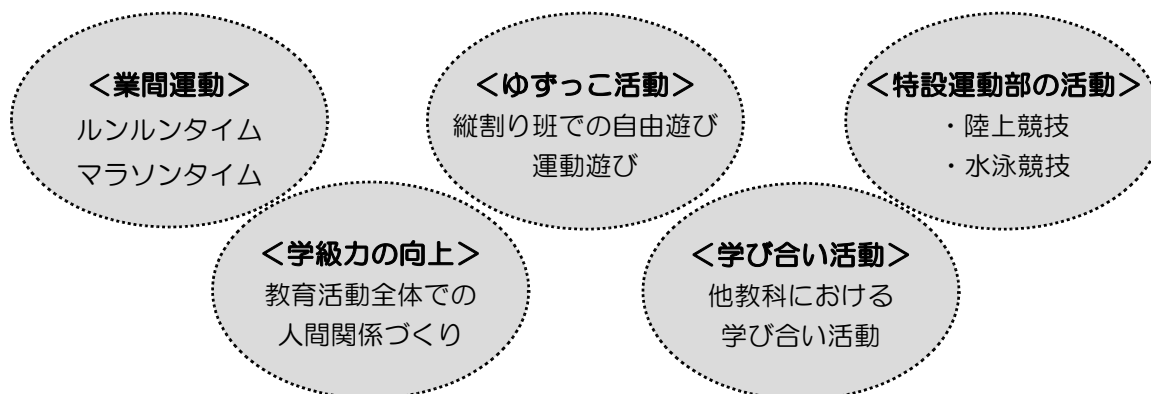
- ① 6年間の系統性を踏まえた単元計画の作成
- ② 学び合いながら、運動に親しむ資質や能力を育む指導
- ③ 授業の改善や子供の支援に生きる評価

4 研究内容

(1) 内 容



～ 体育の授業と関連する主な教育活動 ～



(2) 方 法

日頃の授業実践，意識調査，児童の体力の分析等を通して，課題を明らかにする。

領域は陸上運動系を中心とし，授業実践に取り組んでいく。P D C Aサイクルの機能を生かせる授業計画を立てる。

「主題研修班」「授業実践班」「環境構成班」の各部会に分かれて課題解決策を立案し，全体会で協議，共通理解を図りながら，研究を進めていく。

5 研究実践

(1) 6年間の系統性を踏まえた単元指導計画の作成

学びの連続性を重視するための系統表作成

陸上運動領域において，学習指導要領における6年間の系統性を踏まえ，各学年の目標や運動の内容を定めた。また，学年間の目標や内容を明確にするために各運動領域の系統表を作成した。これを基に，各学年に適した指導を行うこととした。

ハードル走の系統表

学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
単 元 名	走の運動遊び	走の運動遊び	小型ハードル走	小型ハードル走	ハードル走	ハードル走
実施時数	5	5	5	5	5	5
学習指導要領における内容	ア 走の運動遊びでは，いろいろな方向に走ったり，低い障害物を走り越えたりすること		イ 小型ハードル走では，小型ハードルを自分に合ったリズムで走り越えること		イ ハードル走では，ハードルをリズムカルに走り越えること	
学習指導要領における例示	ア 走の運動遊び 距離や方向などを決めて走ったり，手でタッチやバトンパスする折り返しリレー遊びをしたり，段ボールや輪などの低い障害物を用いてのリレー遊びをしたりする。 [例示] ○ 折り返しリレー遊び，低い障害物を用いてのリレー遊び ・ 相手に手の平を向けてタッチをしたり，バトンを渡したり受けたりすること。		イ 小型ハードル走 小型ハードルを自分に合ったリズムで走り越す。 [例示] ○ いろいろなリズムでの小型ハードル越え ・ インターバルの距離や小型ハードルの高さに応じたいろいろなリズムで小型ハードルを走り越えること。 ○ 40～50m程度の小型ハードル走 ・ 一定の間隔に並べられた小型ハードルを一定のリズムで走り越えること。		イ ハードル走 インターバルの距離やハードルの台数などのルールを定めて競走したり，自己の記録の伸びや目標とする記録の到達を目指したりしながら，ハードルをリズムカルに走り越えることができるようにする。 [例示] ○ 40～60m程度のハードル走 ・ 第1ハードルを決めた足で踏み切って走り越えること。 ・ ハードル上で上体を前傾させること。 ・ インターバルを3～5歩のリズムで走り越すことができる。	
学習のねらい	○ いろいろなコースをつかって走って跳び越したりリレーをしたりして遊ぶ。	○ いろいろなコースをつかって走って跳び越したり，自分や友達をつかってリレーをして遊ぶ。	○ いろいろなリズムで小型ハードルを走ったり，自分に合ったリズムで走ったりして競走する。	○ 一定のリズムで，小型ハードルを調子よく走り越して競走する。	○ ハードルの間を3～5歩のリズムでリズムカルに走って競走したり記録に挑戦したりする。	○ ハードルの間を3～5歩のリズムでリズムカルに走って競走したり記録に挑戦したりする。
技能の目標	○ いろいろなコースを調子よく走り越すことができる。(止まらなくて)	○ 障害物をリズムカルに走り越し，走りながらバトンパスができる。	○ 小型ハードルのコースを自分のリズムで調子よく走り越すことができる。	○ 一定の間隔に並べられた小型ハードルのコースを調子よく走り越すことができる。	○ インターバルを3歩～5歩でリズムカルにハードルを走り越えることができる。	○ インターバルを3歩～5歩でリズムカルにハードルを走り越えることができる。
単元計画	○ いろいろなコースをつかって走って跳び越す。 ・ ケンステップ跳び越し走 ・ 2本の木の板跳び越し走 ○ 真っ直ぐなコースでの障害物折り返しリレーをする。 ※手でタッチ ※距離30m程度	○ いろいろなコースをつかって障害物折り返しリレーをする。 ○ さまざまなコースでの障害物リレーをする。 ※リングバトンで振り向きタッチ ※距離30m程度	○ いろいろなコースをつかって，走って跳び越す。 ・ 走りやすいインターバル ・ ハードルの置く位置 ・ 3～5歩のリズム ・ 自分の跳びやすいコースの選択 ※距離40m～50m ※高さ30cm程度	○ 一定の間隔に並べられた小型ハードルを調子よく走って跳び越す。 ・ 走りやすいインターバル ・ 一定のリズム ・ 自分の跳びやすいコースの選択 ※距離40m～50m ※高さ30cm程度	○ 自分に合ったコース ・ インターバル 5～6.5m ・ 0.3×5台～50m走 ※距離40m～50m ※高さ45cm程度	○ 自分に合ったコース ・ インターバル 5.5～7m ・ 0.3×5台～50m走の記録と比較 ※距離40m～50m ※高さ50cm程度
教具等	コーン タイヤ 段ボール箱 ゴムひも ペットボトル ケンステップ 他	コーン タイヤ 段ボール箱 ゴムひも ペットボトル ケンステップ 他	ケンステップ 発砲スチロール 段ボール箱 ペットボトル 小型ハードル	ケンステップ 発砲スチロール ペットボトル 段ボール箱 小型ハードル	新聞紙ハードル 小型ハードル ハードル	新聞紙ハードル 小型ハードル ハードル

実態に即した単元計画の工夫

上記の系統表に基づき，児童の実態を考慮しながら基礎技能の定着を意図した単元計画を作成した。低・中・高と2学年にまたがる内容については，2年間を見通して計画を作成した。児童は段階的に基礎技能を習得し，技能の向上につなげることができた。

なお，この計画については，児童の実態等に応じて適宜更新していく。

第5・6学年「ハードル走」の単元計画

5 単元計画（指導と評価の計画）

学年時間	第5学年（5時間）				
	1	2	3	4	5
指導のねらい	学習の進め方や、よい走り方のポイントをつかむ。	3～5歩のインターバルでハードルを跳び越す。	スタートからスピードを落とさずに第1ハードルを走り越す。	低い姿勢でハードルを跳び越す。	場や方法を工夫して練習し、記録会をする。
予想される学習活動・内容	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。	3 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。	3 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。	3 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。	3 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。
教師の働きかけ	○ 個人と班の記録の向上がねらわれ、協力して自分たちの記録も向上することを意識させる。	○ 前時の試しの記録会の写真と模範の連続写真を比べ、服装や姿勢、走り方についてアドバイスを行う。	○ 恐怖心を軽減してハードルを走り越すこと、走りながら準備動作や踏み切り足に気を配らせたりする。	○ 見合い・分担や用具の分け担を分かりやすく提示する。	○ 前時までの様子やVTR・学習カードの記録から、適切な設定をするように助言する。
評価基準	①	④	①	②③	②
指導と評価の工夫	【学習カード・観察・発言】お互いに応援しあったり、声を掛け合ったりしながら楽しく活動しているかを評価する。	【学習カード・観察】3～5歩のインターバルで走るコースを選択しているかを評価する。	【学習カード・観察】スタートからスピードを落とさずに第1ハードルを走り越しているかを評価する。	【学習カード・観察・発言】スタートからスピードを落とさずに第1ハードルを走り越しているかを評価する。	【学習カード・観察・発言】選択した場で3～5歩のインターバルで走るコースを選択しているかを評価する。

学年時間	第6学年（5時間）				
	6	7	8	9	10
指導のねらい	学習の進め方やよい走り方のポイントをつかむ。	第1ハードルまでをスピードを落とさずに走り越すことができるようにする。	自分の技能に合ったコースを選択して練習し、ハードルを走り越すことができるようにする。	場や課題を工夫して練習し、記録会をする。	場や課題を工夫して練習し、記録会をする。
予想される学習活動・内容	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。 3 ハードル走の練習 (1)ハードル走の仕方を知る。 (2)練習方法を知り試したハードル走をする。	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。 3 ハードル走の練習 (1)ハードル走の仕方を知る。 (2)練習方法を知り試したハードル走をする。	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。 3 ハードル走の練習 (1)ハードル走の仕方を知る。 (2)練習方法を知り試したハードル走をする。	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。 3 ハードル走の練習 (1)ハードル走の仕方を知る。 (2)練習方法を知り試したハードル走をする。	1 準備運動 ○ 運動身体づくりプログラム ○ スキップ ○ 補助運動 ・ 踏み切り足と振り上げ足によるハードリング 2 学習の見通し（オリエnteーション） (1)学習のねらいと進め方を知る。 (2)場の準備を行う。 3 ハードル走の練習 (1)ハードル走の仕方を知る。 (2)練習方法を知り試したハードル走をする。
教師の働きかけ	○ フラット走の記録とハードル走の記録、走り方の違いを想起させる。問いかけを認めるように練習させる。	○ 第一ハードルをゆるめぬように踏み切り足を決めて練習させる。	○ 児童が前時の決めた課題を一覧に表し、お互いにめあてを確認できるようにしておく。	○ 児童の前時の決めた課題を達した段階のめあてを提示する。	○ 自分のめあての達成状況を記録し、競争して記録を向上させることを意識させる。
評価基準	④	① ②③	③	①	②
指導と評価の工夫	【学習カード・観察・発言】自分の力に合ったインターバルで走り越しているかを評価する。	【学習カード・観察】スタートの生ハカートを1歩走らせるかを評価する。	【学習カード・観察】自分合ったコースを選択して練習しているかを評価する。	【学習カード・観察・発言】自分の技能や課題に合ったコースを選択しているかを評価する。	【学習カード・観察・発言】競争して記録を向上させているかを評価する。

指導過程における運動身体づくりプログラムの位置付け

本プログラムの完全実施に向けて、その方法の理解と指導法の向上に取り組んできた。しかし、授業の目標に迫るためには時間が不足することもありプログラムの内容を主運動との関連を図って精選したり、不足分を業間運動の中で実施して補ったりするなどの自校化を図ってきた。今後も運動の目的や主運動との関連、子供の体力の実態等を踏まえ、望ましい自校化につながるよう研究を深めていく。

(2) 学び合いながら、運動に親しむ資質や能力を育む指導

主体的な学びのための動機付け

児童の運動欲求を高め、意欲的に運動しようとする子供を育成するには、運動との出会わせ方が重要と考えた。そこで特に低・中学年では「やってみよう」「楽しくてもっとやりたい」という思いを、高学年では「どうすれば自分の記録が向上するのか」という課題意識をもたせるようにした。



運動身体づくりプログラム



多様な動きを引き出す場

多様な動きを引き出す場の設定

1年生のハードル走の授業においては、導入でケンステップや人工芝、ロープ、箱などで多様な場を設定し、ケンケンパーや両足跳び、片足跳び等をさせることで動きを引き出した。

つまずきを感じさせる課題提示

3年生の小型ハードル走の授業においては、教師は意図的に間隔を狭く、また不規則にハードルを配置した。すると、子供たちは「跳びづらい」「もっとハードルの間を広げたい」などと意思表示をしてきた。そこで、ハードルの間隔に意識をもたせ、本時を捉えさせた。そのため、グループでの見合いや話合いが活発となり、協働して練習方法を工夫していった。

必要感をもたせる場づくり

5年生のハードル走においては、第1時目のオリエンテーションで50mのフラット走とハードル走を実施し、記録を取り、タイムの違いと走りの難しさを感じ取らせた。その後の話合いでは、ハードリングの技能の大切さを気付かせることができた。

効果的な学び合いのための工夫

「技能の習得」「記録の向上」「競走(争)」「友達との協力」という四つの観点から、楽しく学び合える効果的な場や教材教具の工夫が必要と考えた。

スモールステップによる技能の向上

1年生の障害物リレーでは、障害物として段ボール箱を、1個、2個...4個と増やしていき、チーム単位で無理なく試行錯誤させながら、リレーに取り組みさせることができた。

楽しさを味わうゲームや競争の導入

4年生の高跳びでは、跳んだ高さを点数化し、膝の高さ1点、腿の高さ2点、脚の付け根3点、へその高さ4点とした。子供たちは、グループでのより高い得点を目指し、一生懸命に声を掛け合い、励まし合いながら活動に取り組んでいた。

運動の特性に迫る教材教具の工夫

3年生の小型ハードル走の授業においては、段ボールや発泡スチロール、ペットボトル等を用いて自分たちでハードルを作った。そのため、子供の活動意欲が高まり、グループの実態に合わせながら様々な高さの場を選択して、「小型ハードルを調子よく走り越える」という目標を達成することができた。

友達と運動に浸れる運動量の確保

1年生の障害物リレーでは、第1時から練習の時間やリレーの時間を十分に確保した。運動量が十分であったこともあり、授業の最後には、「友達とたくさん走れて楽しかった」「ほめられてうれしかった」「もっとやりたい」という感想が多く出された。



場について意見する子供



フラット走とハードル走の比較



友達と運動に浸る子供

期待される学び合いの姿の想定

本校では、運動やスポーツに親しむ資質や能力を育むためには、指導過程に学び合いの場を位置付ける必要があると考え、下図のように作成した。45分の単位時間の中で学び合いの場面はどこにでも位置付けが可能だと改めて理解するとともに、課題達成のために望ましい場面の吟味につながった。

期待される学び合いの姿

	子供の思考	学び合いの姿	教師の働きかけ	資質・能力
はじめ	やってみよう。おもしろそう。	動き合い	○ 発達段階、学年間の系統性をふまえた課題意識をもたせる。	関心・意欲・態度
	どうやるんだろう？ なかなかできないね。 どうするとうまくできるのかな？			
	めあては〇〇にしよう。			
	ぼくは〇〇を課題にするね。			
なか	Aさんのようにやってみよう。	5年生のハードル走の授業では、タブレットで自分の動きと技能のポイントと比較して自分の課題にし、班で共有した。	2年生のジグザグ走の授業においては、教師がコーディネーターになり、児童の話合いを活発にし、児童からでた言葉で速く走るポイントをつくり上げることができた。	関心・意欲・態度
	ぼくのここを見ててね。			
	B君はなぜできるのだろう？ このやり方でいいのかな？			
	〇〇に気をつけてやってみたらできたよ。			
まとめ	次は〇〇に挑戦しよう。	4年生の高跳びの授業においては、動きのポイントを「ジャンプトント」とか「1, 2, さーん。1. 2」とオノマトペを使ってリズムを意識化し、班で声をかけ合った。	○ 新たな課題を共有化させる場の設定 ○ 学び合いのよさ、高まりを実感させる話合いのコーディネーター ○ 自己の変容に気付かせる感想 ○ 動きのポイントの確認	思考・判断 関心・意欲・態度
	〇〇が分かった。 〇〇ができた。			
	アドバイスを聞いてやってみたらできるようになった。			
	〇〇はどうやればいんだらう。			
	次回は〇〇に挑戦してみよう。	称賛 動き合い 見合い 話合い		

(3) 授業の改善や子供の支援に生きる評価

系統立てた「学習活動に即した評価規準」の作成

評価は、子供の学習成果を認め称賛したり、課題解決の手だてを講じたりするためにあり、指導と評価は一体のものである。そこで、どの場面でどんな評価をするか、そして次にどのような

手だてを講じるかについて、その評価場面や方法をより具体的に捉えたいと考えた。そのためには、各学年での学習活動に即した評価規準についても系統立てて考えていく必要があり、下表のように整理しながら規準を作成することとした。

2・4・6年「走り高跳び系」の評価規準表

観点	2年 跳の運動遊び		4年 跳の運動「高跳び」		6年 陸上運動「走り高跳び」	
	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準
運動へ心 意欲度	○ 跳の運動遊びに進んで取り組んでいる。 ○ 運動の順番やきまりを守り、勝敗の結果を受け入れて、友達と仲よく運動しようとしている。 ○ 友達と協力して用具の準備や片付けをしようとしている。 ○ 運動する場や用具の使い方を安全に気をつけている。	① 楽しみながら高跳び遊びに取り組んでいる。 ② 順番やきまりを守り、進んで友達と仲よく高跳び遊びをしている。 ③ 班のみんなと協力して準備や後片付けをしようとする。 ④ 場や用具の安全に気を付けている。	○ 高跳びに進んで取り組もうとしている。 ○ 運動の行い方の決まりを守り、友達と協力して練習や競走(争)をしようとしたり、勝敗の結果を受け入れようとしている。 ○ 友達と協力して、用具の準備や後片付けをしようとしている。 ○ 運動する場や用具の使い方などの安全を確かめようとしている。	① 運動の楽しさを感じながら取り組んでいる。 ② きまりを守り、友達と協力して練習しようとする。 ③ みんなで協力して用具の準備や後片付けをしようとする。 ④ 運動する場や用具の安全を確かめようとする。	○ 競争したり、目標を達成したりする楽しさを感じながら取り組んでいる。 ○ 記録しきり高跳びや走り高跳びに取り組んでいる。 ○ 約束を守り、友達と協力して練習しようとする。 ○ 用具の準備や片付け、計測や記録された役割を果たそうとしている。 ○ 運動する場を整えたり、用具の配りや安全を確保している。	① 記録の向上を目指し、自ら楽しんで運動に取り組んでいる。 ② 練習や計測の場で、きまりを守り、友達と協力して取り組んでいる。 ③ マットや踏切り板、パーなどの準備や後片付けを協力して行っている。 ④ 場の安全に気を付けて、運動しようとしている。
運動について の思考 ・判断	○ 跳の運動遊びの行い方を知るとともに、運動をする場や使用する用具などを変えながら、いろいろな運動の仕方を見つけて走り高跳びの仕方を工夫している。 ○ 走ったり跳んだりする動き方を知るとともに、友達の良い動きを見つけている。	① 高跳び遊びの行い方を知り、自分に合った場所を選び遊んでいる。 ② 高く跳ぶために、上手に跳ぶ友達を見て、自分も上手に跳ぶ工夫をしている。 ③ 跳び比べの場や行い方を工夫して遊んでいる。	○ 高跳びの動きのポイントを知るとともに、自分の力に合った課題を選んでいる。 ○ 高跳びの動きを身に付けるための練習の仕方を知らるとともに、自分の力に合った練習方法や練習の場を選んでいる。 ○ 仲間との競争の仕方を知らるとともに、競争の規則を選んでいる。	① 自分の力に応じた助走、踏み切り、着地の順番や場所を選ぶことができる。 ② 助走や踏み切り、着地の順番や場所を身に付けることができる。 ③ 方や動きのよい助走や踏み切り、着地を身に付けることができる。 ④ 高さに応じた回数や競争の回数を決めることができる。	○ 課題の解決の仕方を知るとともに、自分の力に合った課題や方法を自分で選んでいる。 ○ 仲間との競争や自分の記録への挑戦の仕方を知らるとともに、自分の力に合った競争の仕方を選んでいる。	① 自分の跳び方を確認したり、友達からアドバイスを聞いたりして、自分の課題を見つけている。 ② 課題に合った練習の場や練習の工夫をしている。
運動の 技能	○ 前方や上方に跳んだり走り高跳びなどができる。	① 片足で両足で強く踏み切ったり、安全に着地することができる。 ② 走をつけて片足で踏み切ったり、安全に着地することができる。	○ 短い助走から高く跳ぶことができる。	① 3～5歩の助走から、片足で踏み切って高く跳ぶことができる。 ② 膝を柔らかく曲げて安全に着地することができる。	○ リズミカルな助走から踏み切ることができる。	① 5～7歩のリズミカルな助走で踏み切ることができる。 ② 足の裏全体で強く踏み切り、振り上げ足と踏み切り足を高く上げることができる。 ③ 振り上げ足から順に着地することができる。

学習カード等による自己評価・相互評価の工夫

学習カードは、めあてや課題の確認、技能ポイントの意識化、運動の記録、及び情意面の記録と評価など、様々な面で有効活用を図ることができる。しかし、その要求が高ければ運動量の確保の妨げにもなる。そこで、各学年での学習カードや体育ノートでの表現の仕方を、発達段階に応じて以下のように設定した。

低学年...簡単なシールやマークなどで自己評価するもの。

また、簡単な文章記述による情意面の評価をするもの。

中学年...技能の向上、目標やめあての設定、評価に有効な内容のもの。また、発達段階を考慮し、イメージ表現で記述できる内容のもの。

高学年...中学年の内容に加え、体育ノート形式にするなど、自由記述をしながら評価できるもの。

さらに、より相互評価を活発にし、協働的な学びを助長する事例として、3年生の小型ハードル走の授業では、上手にできた友達に「プレゼントカード」を渡した。子供たち自身の観点で子供の技能の習得状況を捉えることができる上に、意欲の向上にもつながった。



中学年の学習カード

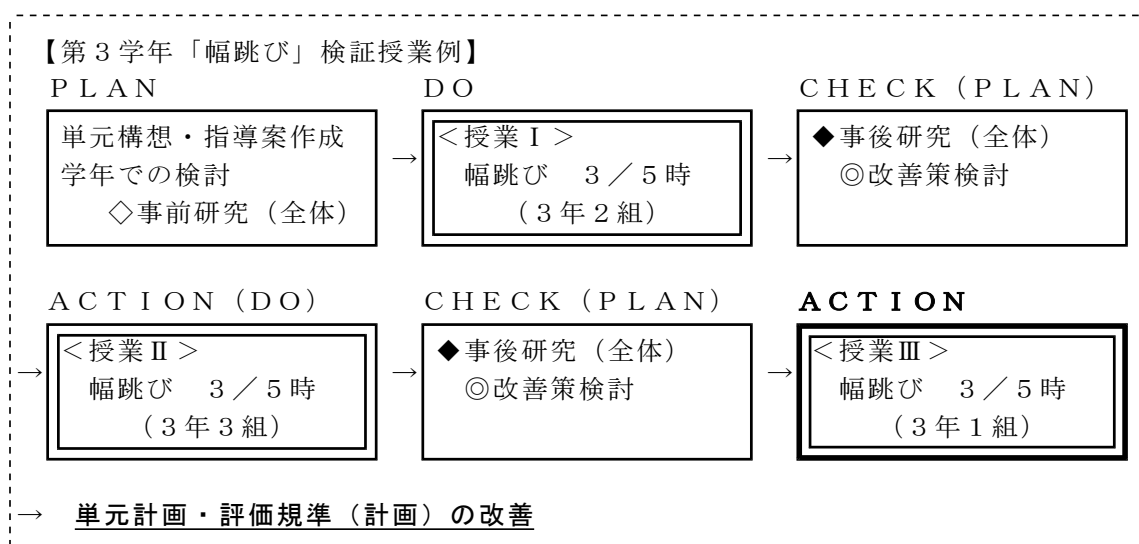


プレゼントカードをもらった児童

子供の変容に応じた授業の工夫・改善

本校では、今年度全17学級が体育科の授業研究を行ってきた。同学年で、P D C Aサイクルによる授業研究を積み重ねることにより、単元への理解が深まったのはもちろんであるが、子供の反応や技能の向上がどの程度まで期待できるかを想定できた。その結果、より子供の実態や変容に応じた授業を展開することができた。さらに、このように検証授業を進めたことで、場や教材、指導過程、単元計画や評価規準（計画）等を見直し、より児童の実態に即した授業展開がなされるようになった。

P D C Aサイクルによる授業の改善例（同学年、同単元・時間の授業改善）



6 研究の成果と課題

(1) 成 果

子供の実態に即した課題や目標記録の設定をすることで、子供一人一人が課題意識、挑戦意欲をもって、生き生きと主体的に運動に取り組むことができた。

評価規準を基に動きのポイントを明確化することで、学び合いの視点が焦点化された。このことで、他の友達の動きが可視化され、称賛し合ったり、動きのポイントを意識しながら話し合ったりすることができた。体育科における協働的な学び方が身に付いてきた。

運動が苦手な子供でも、単元を通して段階的に個人内評価を行うことで、成就感・達成感を味わうことができ、自己肯定感の高まりにつながった。このことは、子供の意識調査の「苦手でも運動が好き」という割合が高まったことに表れている。さらに、こうした関心や意欲の高まりは、校外的な陸上競技大会への参加者数の増加にも波及している。自分で新たな「目標をもち、運動を楽しもうとする」子供が増えていることは確かである。

(2) 課 題

授業は子供の実態で大きく変化する。これに対応するためにもP D C Aサイクルでの授業検証を基に、単元計画や評価計画を改善していかなければならない。

自校化を図ってきた「運動身体づくりプログラム」を、より効果的に主運動につなげる方策を探っていきたい。

【MEMO】

第5分科会

福島市立平野小学校

研究主題

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童の育成

日程

9:00	9:30	9:50	10:10	10:55	11:15	12:00	13:00	15:00	
受付	業間運動	移動	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第3学年	器械運動（マット運動）	緑川 伸浩	体育館
公開授業②	第6学年	器械運動（跳び箱運動）	武田 裕巳	体育館

学校所在地



交通機関

- ☆電車
JR福島駅下車
福島交通
飯坂線に乗換
「平野駅」下車 徒歩7分

福島市立平野小学校



所在地 〒960 - 0231 福島県福島市飯坂町平野字石堂10番地
校長 佐藤 博 英
児童数 439名
連絡先 TEL 024 - 542 - 2732 FAX 024 - 542 - 2790
E-mail hirano-e@educet.plala.or.jp
URL http://www.fukushima.gr.fks.ed.jp/?page_id=408

【教育目標】

校訓「至誠敬愛」の精神をふまえ、品位と判断力、実践力があり、かがやく瞳をもつ児童の育成

体をきたえ、命を大切にする子ども
礼儀正しく、思いやりのある子ども
自ら学び、よく考える子ども

【学校紹介】

本校は、明治6年、入江野・飯塚・平田の三村が連合し、大笹生小学校の第三支校として香積寺に開校されたのが始まりと言われ、今年度で創立143周年を迎える。

昭和52年には、保健体育優良校として全国表彰を受賞、昭和59年から63年までの5年間に福島市小学校水泳大会5連覇を成し遂げ、今なお、水泳・陸上とも成果を上げている。平成2年には、北海道・東北地区・県小教研家庭科研究大会、平成6年には、全国・東北・県小教研道徳研究大会を開き、その成果を見ることができた。

1 研究主題

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童の育成

2 研究主題設定の理由

体育科では、指導内容の明確化・体系化を図り、系統性を踏まえた弾力的な指導を行い、児童が生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を身に付けることを目指してきた。しかしながら、依然として「運動する児童としない児童の二極化」が進んでおり、「体力低下の傾向は深刻」という課題が指摘されている。こうした現状から、「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学び」を基に、グループ活動や話し合いなどの学習活動を介在させて、思考力や表現力をより活性化させる学習が必要になってきた。体育科の授業であれば、教師の教え込みや指示された運動を順番に行うだけの授業ではなく、自らの課題解決に向けて、動きを見合い、仲間と教え合い、運動の方法を工夫して主体的・協働的に追究する学習が求められている。このような状況を受け、本校でも運動の特性に触れる楽しさや喜びを一人一人の児童に応じて味わわせ、そこに生じる課題を仲間と共有させ、協力し合って解決できる学習を展開していきたいと考える。そのため、主題の捉えを次のように考え、本校の目指す児童像を設定した。

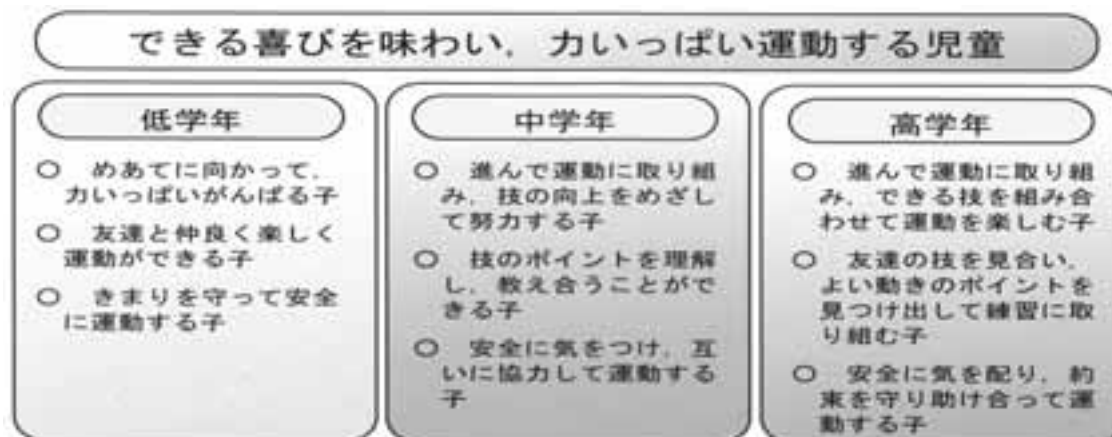
「できる喜びを味わい」とは

児童の「できるようになりたい」「どうしたらできるのか」という思いや願いをかなえられるように、教師は児童の動きの課題を見抜き、教具の開発や場の設定に取り組む。児童は仲間や教師と共に課題解決に取り組み、動きを見合い、技のコツを教え合うことを通して、自らの課題の解決を目指して練習に努める。「できるようになりたい」という思いや願いが、「できるようになった」と達成できたとき、運動の楽しさや喜びを味わうことができる。

「力いっぱい運動する」とは

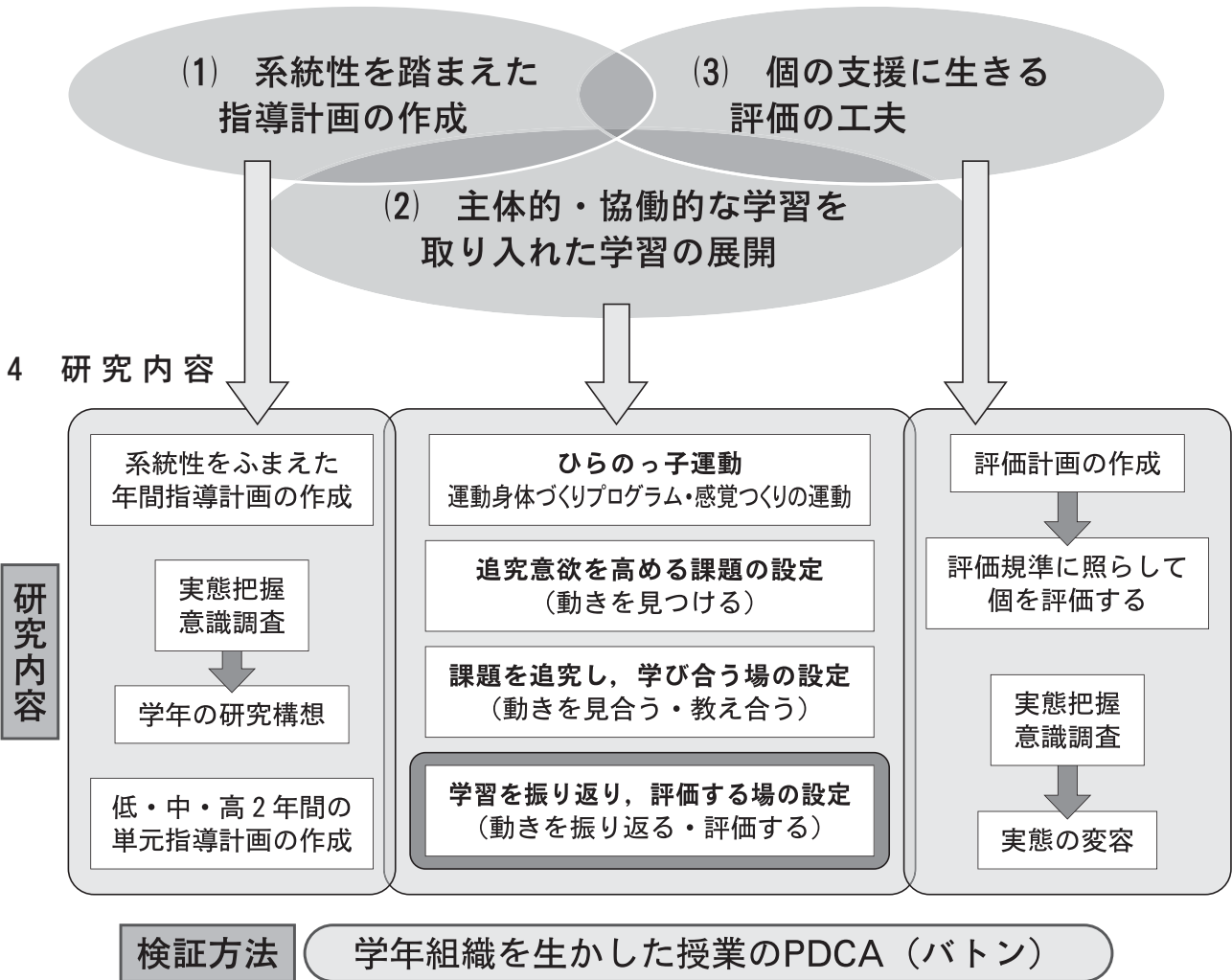
児童が仲間や教師と共に課題解決に取り組む中で、「動きのコツが分かった気がする」「もう少しできそうだ」という気配を体で感じたとき、追究意欲はがぜん高まる。児童は、その気配を逃さないように練習を繰り返す。途中で止めることが惜しくなり、その運動の特性の面白さや魅力に惹かれて、意欲的に運動する。「分かった気がする」という感じを得て、「力いっぱい運動したい」という内発的動機が高まったとき、主体的・能動的な学びが生まれる。

《目指す児童像》



3 研究仮説

体育科の学習において、次の三つの視点から授業実践をしていけば、「できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童」を育てることができるであろう。



5 研究実践

(1) 目指す児童像に迫るための指導計画の作成

年間指導計画の作成

学習指導要領に準拠し、運動の系統性、児童の発達段階、高めたい体力要素、具体的な運動例、学校行事などを考慮して、年間指導計画を作成した。

学年の研究構想の作成

学習指導要領で示されている当該学年の運動がどの程度できるかを調査し、研究構想を作成した。児童の運動の傾向や実態を把握し、既習内容がどの程度身に付いているか、どの技を重点的に指導していくかなどを考慮し、研究構想を計画した。

5年 体育			
◎ 指導の重点 ○ 工夫・配慮した事項			
◎ 自身の運動解決を目指し、運動の特性に応じた技能を身に付け、走・跳・投の基本的な運動能力を高めること が出来るようになる。			
◎ 体の不調、その健康や病気の予防について理解できるようにする。			
◎ 特性に応じた基本的な技能がバランスよく身につく、体力を高めることができるよう、各領域の実施時期や指導材料に配慮するとともに、「体づくり運動」の時間を多く配当し、実施期間を増やした。			
月	題材名	時数	◎高めたい体力要素・具体的な運動例(例示)
4	◎ 距離走・リレー ◎ バスボールゲーム	4 2(6)	◎ 敏捷性 ・ 50～80m程度の短距離走 ◎ 筋力 ・ ティーボール
5	◎ バスボールゲーム ◎ 表現、フォークダンス ◎ 数珠運動	4 4 3	◎ マイム・マイム、ジェンカ等 ◎ 運動会 ・ 逆上がり、後方支持体操、丹足踏み返し下り
6	◎ 鉄棒運動 ◎ 心の健康	4 4	※ 新体力テスト (8)
7	◎ クロール、平泳ぎ	7	◎ 全身持久力 ・ 呼吸しながらの25m以上のクロール ・ 呼吸しながらの25m以上の平泳ぎ (7)
8	◎ クロール、平泳ぎ	3	※ 校内水泳練習会 (3)
9	◎ クロール、平泳ぎ ◎ マット運動 ◎ ハードル走	1 7 2(10)	◎ 柔軟性、筋持久力 ・ 安定した前転、側転、後転、安定した後転 ・ 安定した前転、安定した側転で横跳び越し ・ 40～60m程度のハードル走
10	◎ ハードル走 ◎ 走り高跳び、走り高跳び ◎ 跳び箱運動	3 4 2(9)	◎ 筋力 ・ 助走距離が15～20mの走り高跳び ・ 安定した台上前転、なかよみ跳び
11	◎ 跳び箱運動 ◎ フォークダンス	5 3	※ 持久水泳練習会 (8)
12	◎ ゴールゲーム ◎ 体づくりの運動、体力を高める運動	3 4	◎ 柔軟性

学年研究テーマ		鉄棒運動のポイントをつかみ、友達と協力しながら課題に取り組み児童の育成	
(3) 児童の実態 ◎ 実態調査 (平成27年5月調査) (アンケート調査) ○ 体育の学習を心待ちにしている児童が多く、「鉄棒が好き」と答えた子の割合は35%である。「技ができる(少しできる)」という感情体験をもつ子どもが50%と多い。 ● 鉄棒運動は、技ができなかったり、恐怖心があったりすると学習意欲を失う。基礎的技から積み上げ、技のポイントを教え合うことを通してできる喜びを味わわせたい。 (運動の事前調査) ○ 練習の「ふとんぼし」「足踏みまわり」「前回り下り」などができるとの割合は80%を超え、ジャンプジムや雲梯などの運動器具で遊ぶ子どもも多い。 ● 練習の「ころもり」や「ゆらまわり」などの逆さ形を伴う運動は、恐怖心のためできない児童が25%多い。「逆上がり」ができない児童は60%を超える。 ◎ 期待する児童の姿(「こんな女子になりたい!」) ○ 一人で鉄棒運動に取り組み、できる技を組み合わせて運動を楽しむ子 ○ 友達のを真似し、よい動きのポイントを真似して練習に取り組み手 ○ 「補助逆上がり」「逆上がり」ができる子(あそび50%)			
(4) 授業公開時期 ○を付ける A: 1学期 (6月) B: 2学期 (7月) C: プレ大会 (11月4日)			
(5) 手立て ウォーミングアップ ○ 運動身体づくりプログラム(取り入れる動き) ・スキップ→カニ走り→大また走り→バック走→クロコスキップ→ダッシュ ○ 王道技につながる補助運動 ・雲梯にゅんけん ・ジャンプジム鬼ごっこ ・雲り棒 ・鉄棒 →2分間ずつのサーキット	課題をつかむ(動きを見つめる) ○ 練習の技から自分のできる技(あそび1)を選び、運動を楽しむ。基礎的技にフォームカードを貼る。あそびを可視化する。 ○ 全員集合させ、新たな技(あそび2)を紹介し、挑戦意欲を高める。 ・「逆上がり」 ・「ゆらまわり」 ・「支持運動」	課題を過す(まじまじとまじ) ○ 5人組(トリオ)を構成し、動きを見合ったり教え合ったりする。 ○ 良い動き・悪い動きを見合い、比較して動きのポイントを話し合う。 ○ 動きのポイントを棒さした手立で補助具を工夫して、練習に取り組ませる。 ・二人組の補助動作 ・さし、ゴムチューブ、跳び箱 ・ポール、回転補助具、マット	学習を振り返る(まじまじと見) ○ 学習カードに自分のできた技をチェックさせる。 ・「免許書(鉄棒編カード)」 ○ 学習感想を発表する。 ○ 評価シート ・実況の発言(事前→事後)

低・中・高2年間の単元指導計画の作成

学年間の指導の重複や逆転現象を避けるために、運動の関連や系統を踏まえ、2年間にわたる単元指導計画を作成した。一つの技を習得するために、全体で課題解決に取り組み、次のステップに向かう学習過程を取り入れた。

指導と評価の計画「跳び箱運動」(5学年: 1~7学期 6学年: 8~14学期)		基本の技					課題学習		
学習の段階	オリエンテーション	1	2	3	4	5	6	7	
0	1. オリエンテーション ○学習の認知 ○学習資料の配布 ○グループ学習の仕方	1. ひらのっこ運動(運動身体作りプログラム・感覚つくり運動) (動物歩き、うさぎ跳び、平均台跳び、馬跳び、舞台への跳び上がり、舞台からの回り下り)							
10	2. ひらのっこ運動 ○体の各部位をほぐす ○課題を行うための必要な基礎となる感覚を身につける	2. 本単の課題を知る							
20	3. 場の準備 ・グループで担当場所を決めておく	3. トライ かみえ込み跳び		3. トライ 安定した台の上転		3. チャレンジ1 切り返し系の技の課題学習 ○安定した開脚跳び ○かみえ込み跳び ・教え合、ができるように同じ技に取り組み見合いしてグループを組むようにする ・易し、場や条件のもとで取り組むことができるようにする			
30	4. できる技の確認 ○中学期までに取り組んだ自分ができる技の確認をする ○開脚跳び ○台上前転 ○かみえ込み跳び(発展) ○大きな台上前転(発展)	4. アドバイス 技のポイント 助跳 ふみ切り 首打 突き直し 着地 ・腕の振り引き ・お股への引きつけ ・ひざを曲げながら		4. アドバイス 技のポイント 助跳 ふみ切り 首打 突き直し 着地 ・姿勢高く ・腕で支える ・目線		4. チャレンジ2 回転系の技の課題学習 ○安定した台上前転 ○首はね跳び ・教え合、ができるように同じ技に取り組み見合いしてグループを組むようにする ・易し、場や条件のもとで取り組むことができるようにする			
40	5. 整理運動 6. 振り起り 7. 片付け	6. 振り起り 7. 今日の学習のまとめ 8. 整理運動、片付け							
評価	②・③観察	②・④観察		①・②観察		③・④観察			
思考・判断		①・②観察		①・②観察		②観察			
技能	①観察	①観察・カード		①観察・カード		①観察・カード			

オリエンテーション		基本の技				課題学習		
学習の段階	オリエンテーション	9	10	11	12	13	14	
0	1. オリエンテーション ○学習の認知 ○学習資料の配布 ○グループ学習の仕方	1. ひらのっこ運動(運動身体作りプログラム・感覚つくり運動) (動物歩き、うさぎ跳び、平均台跳び、馬跳び、舞台への跳び上がり、舞台からの回り下り)						
10	2. ひらのっこ運動 ○体の各部位をほぐす ○課題を行うための必要な基礎となる感覚を身につける	2. 本単の課題を知る						
20	3. 場の準備 ・グループで担当場所を決めておく	3. トライ 切り返し系の技 ○開脚跳び ○安定した開脚跳び ○大きな開脚跳び ○かみえ込み跳び		3. トライ 回転系の技 ○安定した台上前転 ○大きな台上前転 ○首はね跳び		3. チャレンジ1 切り返し系の技の課題学習 ○かみえ込み跳び ・教え合、ができるように同じ技に取り組み見合いしてグループを組むようにする ・易し、場や条件のもとで取り組むことができるようにする		
30	4. できる技の確認 ○中学期までに取り組んだ自分ができる技の確認をする ○開脚跳び ○台上前転 ○かみえ込み跳び(発展) ○大きな台上前転(発展)	4. アドバイス 技のポイント 助跳 ふみ切り 首打 突き直し 着地 ・腕の振り引き ・お股への引きつけ ・ひざを曲げながら		4. アドバイス 技のポイント 助跳 ふみ切り 首打 突き直し 着地 ・姿勢高く ・腕で支える ・目線		4. チャレンジ2 回転系の技の課題学習 ○大きな台上前転 ○首はね跳び ・教え合、ができるように同じ技に取り組み見合いしてグループを組むようにする ・易し、場や条件のもとで取り組むことができるようにする		
40	5. 整理運動 6. 振り起り 7. 片付け	6. 振り起り 7. 今日の学習のまとめ 8. 整理運動、片付け						
評価	②・③観察	②・④観察		①・②観察		③・④観察		
思考・判断		①・②観察		①・②観察		②観察		
技能	①観察	①観察・カード		①観察・カード		①観察・カード		

(2) 運動に親しむ資質や能力を高めるための授業デザイン

ひらのっ子運動 (運動身体づくりプログラム・感覚づくりの運動)

学習のはじめには、「運動身体づくりプログラム」を行い、腕支持感覚、逆さ感覚などを養う。指導の際には、リズム太鼓を打ちながら動きのポイントを助言していく。また、「感覚づくりの運動」では、器械運動の学習で、特に負担がかかる部位の運動を入念に行わせたり、技の系統として押さえなければならない動きを行わせたりする補強運動を行う。



ひらのっ子運動で技の感覚を養う

追究意欲を高める課題の設定 (動きを見付ける)

「課題」とは、「本時のめあてを達成するために、解決しなければならない個人及び集団の問題」である。「めあて」には、「目標の設定」「課題の選択」「活動の決定」の三つが含まれる。例えば、鉄棒運動の逆上がりであれば、次のように設定する。

<p>目標の設定</p> <p>「逆上がりができるようになりたい。」</p> <p>課題の選択</p> <p>「逆上がりができるためには、体を鉄棒に巻き付ける。」</p> <p>活動の決定</p> <p>「逆上がりの補助具を用いて練習したい。」</p>
--

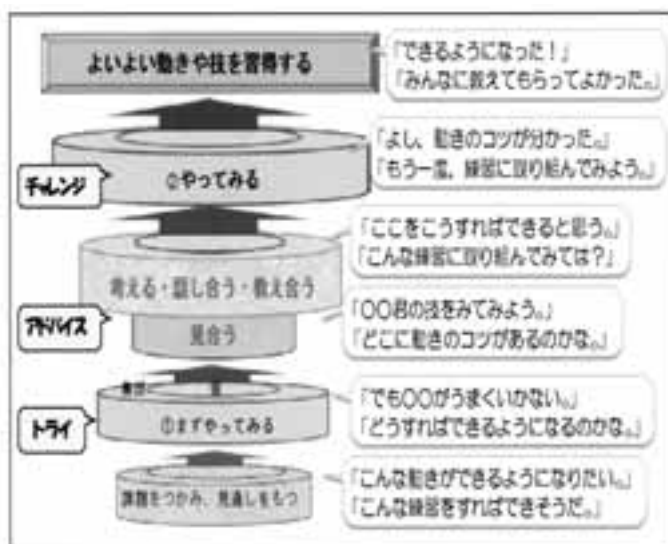


ネームカードを貼って「めあて」を決める

このような「めあて」を学習カードを活用して決めさせ、課題解決に取り組みさせていく。

課題を追究し、学び合う場の設定 (動きを見合い、教え合う)

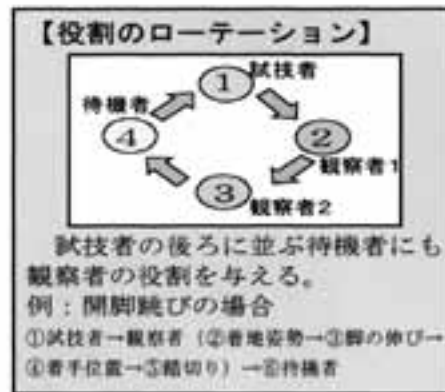
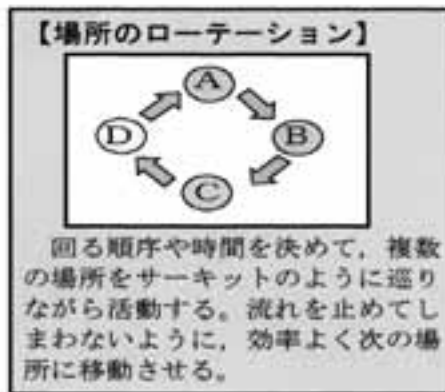
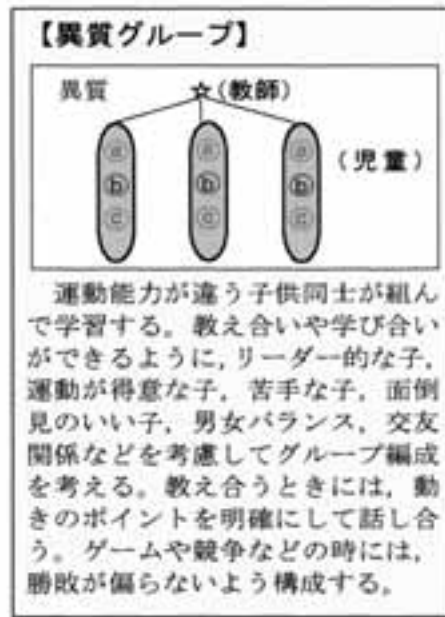
「学び合い」とは、「児童が友達や教師と共に、教材 (器械運動) に向き合い、自他の課題を解決するために、それぞれの見方、考え方、動き方、表し方を教え合って、よりよい動きを具現化する」ことである。「学び合う場」では、課題の解決を目指して「まずやってみる」(トライ)。



しかし、うまくできない児童が必ずいるので、全員で集まり、どこに動きのコツがあるのか、模範演技や視聴覚機器で動きを見合い、話し合い、補助具を使って教え合う (アドバイス)。

動きのコツやヒントをつかめたところで、再度「やってみる」(チャレンジ)。

こうした学習を繰り返し行えば、よりよい動きや技の習得ができるのではないかと考える。



このような「学び合い」を行うためには、学習のねらいに応じて運動能力や課題が同じ「等質グループ」や、運動能力が異なる「異質グループ」を編成して、見合いや教え合いを行わせる。その際、運動の順番待ちに時間を費やすことがないように「場所と役割のローテーション」を取り入れ、運動量を確保するとともに、観察やアドバイスを行わせる。

一方、教師は主運動がスムーズに行われているか観察し、各グループを巡って個別指導を行っていく。また、教師は以下のような発問を行って児童の考えを引き出し、ゆさぶり焦点化を図っていく。

さらに、教師は運動オノマトペを使い、動きの「ポイント」をイメージしやすい言葉で指導していく。

児童の課題に合わせて、「ポイント」を決めて見合う。
例「逆上がり」の『振り上げ足の方向』を見てみよう。
『鉄棒の握り方』『けり足の位置』を見てみよう。」

「足をサッと勢いよく上げて、体を後ろに回そう。」
「反対の足でグッと地面を蹴ってみよう。」
「お空をポーんと思いきり蹴ってごらん。」



仲間と協力し合い、課題を解決する

(3) 授業改善や個の支援に生かすための評価の工夫

学習を振り返り、評価する場の設定（動きを振り返る、評価する）

学習のまとめでは、本時の学習を振り返り、「どんなことが分かったか」「友達の動きのどんなところが参考になったか」など、感想を発表させる。

また、学習カードを使って自己評価を行い、本時の取組を振り返る。学習カードやノートは、学年の実態も考慮し、短時間で記入できるように工夫する。



学習カードを用いて自己評価する

一方、教師は、児童の自己評価（カード）と学習の様子を観察して、適切に評価する。教師は、学習の中で見られたその児童のよさをカードに書き留め、授業の中ではできなかった励ましや助言を与える。目指すめあてが達成できなくても、学習の中で見られた態度やその児童なりの伸びを評価し、運動が苦手な児童にも自信と励ましを

与えていく。

評価規準に照らして個を評価する

学習後は、児童が学習指導要領に示された内容を確実に身に付けることができたか評価する。単元の評価規準に振り返り、児童の達成状況を適切に捉えていく。

特に、「思考・判断」の評価は、「課題の解決のためにどんな練習をしたか」「練習で気を付けたことは何か」など、児童の考えを捉えなければ評価しにくい。運動量を確保しつつ、適切に評価できる方法を考えていく必要がある。

年	組	番	氏名	鉄棒運動（5月）												鉄棒運動（12月）											
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
3	3	1		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	3	2		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	3		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	4		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	5		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	6		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	7		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	8		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	9		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	10		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	11		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	12		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	13		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	14		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	15		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	16		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	17		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	18		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

《検証方法》

校内研究の充実は、新しいことや特別な試みを行うことではなく、児童のよりよい学びを促進・深化させるために、授業に工夫と改善を図っていくことである。そのために、次のような視点で学年組織を生かし、共同研究に取り組んでいく。

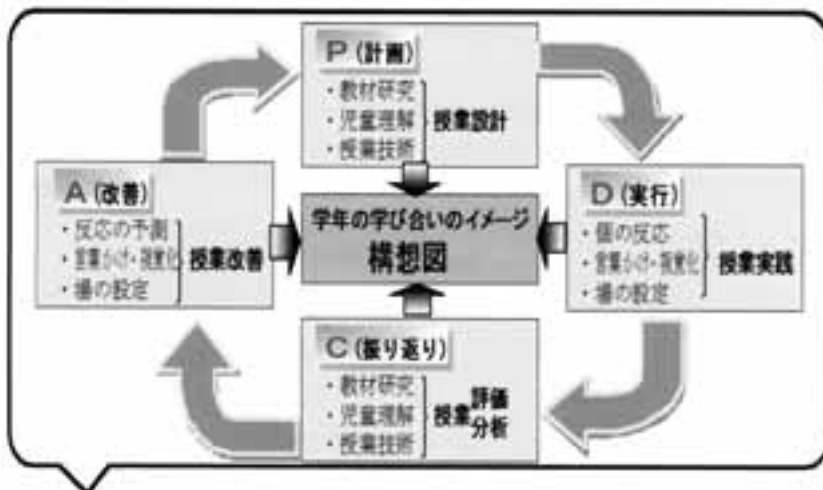
学年組織による 授業のPDCA

学年ごとに研究構想を立て、検証授業に努める。

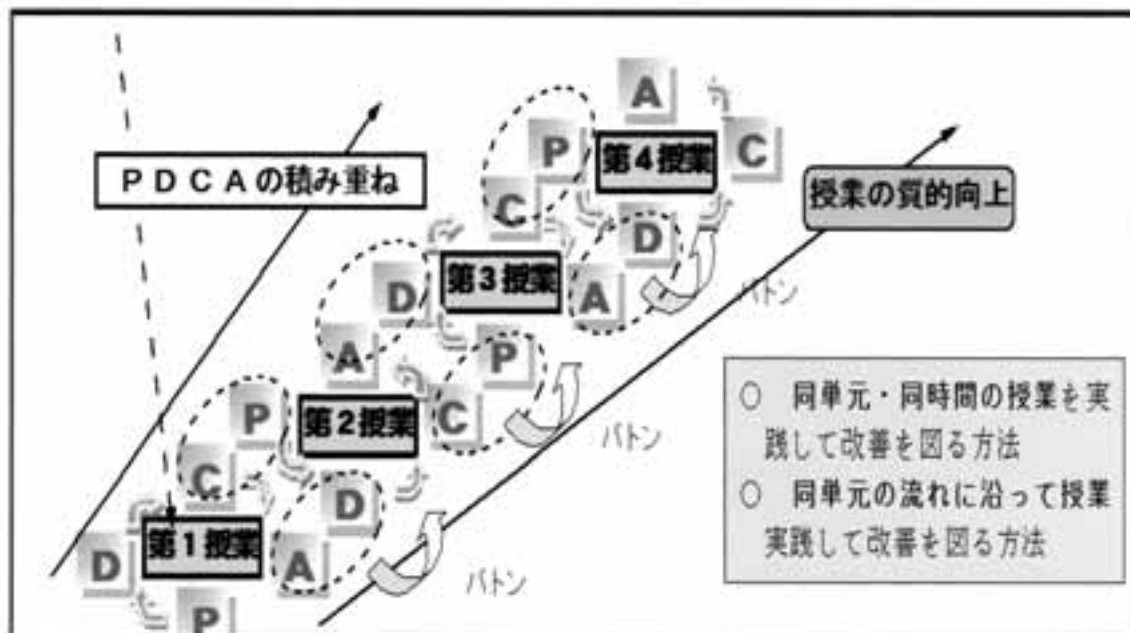
指導案を共同作成し、授業の追試（授業のバトン）をする。

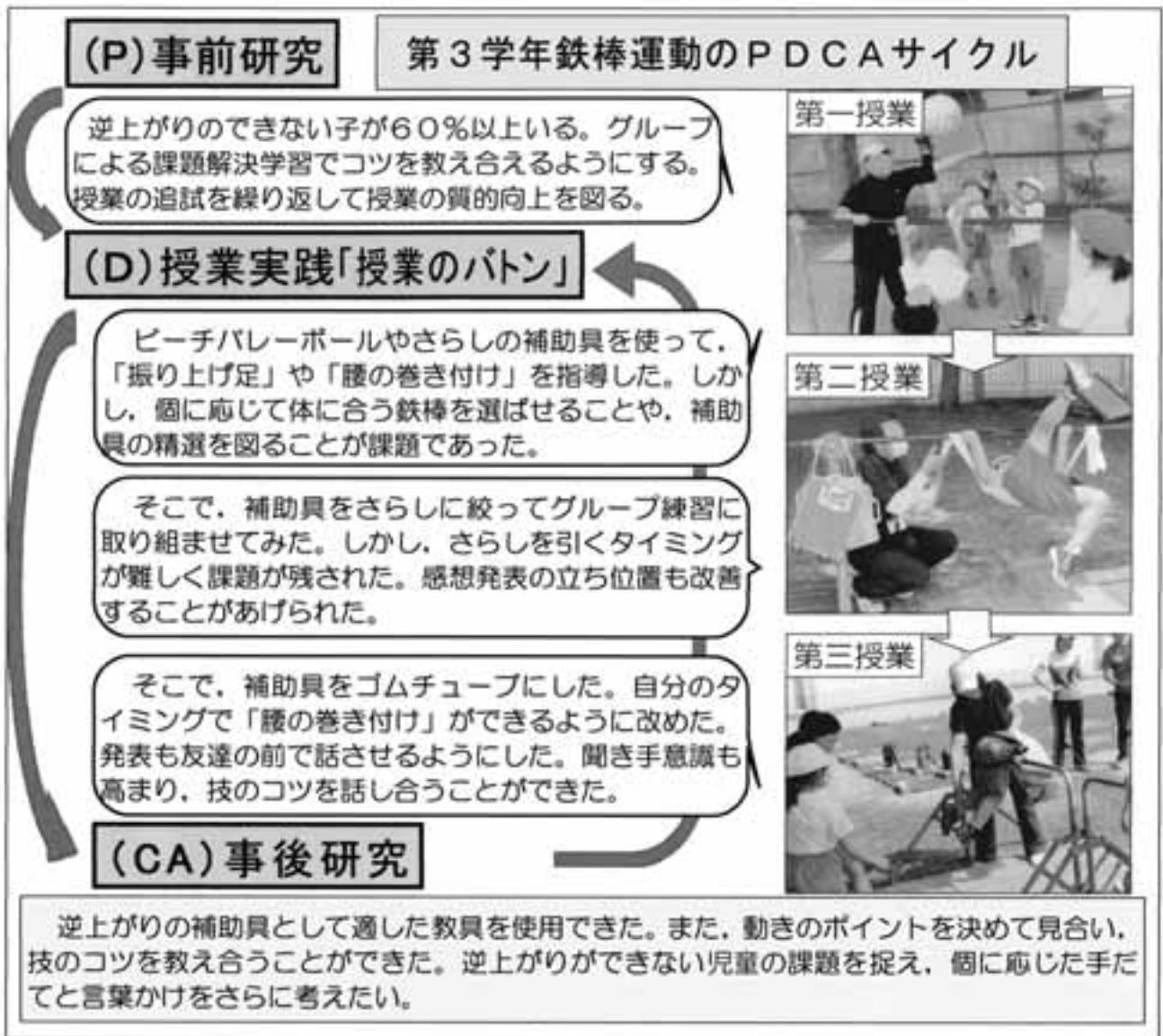
学年主催の研究会を設け、次回の授業の改善を図る。

改善したことを受けて、次の授業者が授業を行う。



各学年共に3学級あることを生かし、授業のバトンを進めていく。その中で見えてくる課題や、校内全体に広め共通理解を図っていくべきポイントを整理し、学年の「学び合いの姿」を全校の「学び合いの姿」として広めていく。





6 成果と課題

(1) 成 果

児童の実態を考慮し、2年間の単元指導計画を作成することで、児童の成長を見通して指導を進めることができた。

学習過程モデルのよさを効果的に取り入れながら指導に当たることで、児童の学び合う機会を意図的に設け、動きのポイントについての理解を深めることができた。

(2) 課 題

児童の「課題」に対して適切なアドバイスや言葉かけができるように、目指す児童像をイメージし、そのイメージに向かってどんな運動を行うことが必要なのか、何をポイントとして押さえるのかを考えて教材研究を進めていく必要がある。

【MEMO】

中学校部会





福島市民家園（写真提供 福島市）

第6分科会

福島大学附属中学校

研究主題

運動・スポーツの楽しさや必要性を実感し、学習したことを実生活において活用しようとする態度を養う体育学習

日程

9:00	9:40	10:30	10:45	11:35	13:00	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第1学年	体育理論 (運動やスポーツの多様性)	坂内 俊介	技術第2教室
公開授業②	第3学年	体づくり運動 (体力を高める運動)	関根 智美	体育館

学校所在地



交通機関

☆路線バス
福島駅東口2番乗り場
福島交通
藤田・梁川・保原線
「東高校前」下車 徒歩2分

福島大学附属中学校



所在地 〒960 - 8107 福島県福島市浜田町12 - 26
校長 川本和久
生徒数 419名 (12学級)
連絡先 TEL 024 - 534 - 6442 FAX 024 - 536 - 0314
E-mail fucyu@adb.fukushima-u.ac.jp
URL <http://www.ajh.fukushima-u.ac.jp/>

【教育目標】

豊かな知性と誠実な社会性をもち、実践力のある心身ともに健康な生徒を育成する。

【学校紹介】

本校は昭和22年に福島師範学校附属中学校として創設され、昭和41年に福島大学教育学部附属中学校と改称された。平成17年に国立大学の法人化に伴い、国立大学法人福島大学附属中学校と改称され、現在に至っている。

本校は、学校教育法の規定に基づく中等普通教育を行い、かつ、福島大学の附属学校として中学校教育に関する理論的・実践的な研究を推進するとともに、学生の教育実習を行う学校である。福島大学全学類の附属中学校として、大学との連携を一層強化しながら、教職員一丸となり附属学校の使命を果たすとともに、学校運営や教育活動等の充実・発展に努めている。

1 研究主題

運動・スポーツの楽しさや必要性を実感し、学習したことを実生活において活用しようとする態度を育む体育学習

2 研究主題設定の理由

本校では、平成21年に「学び続ける生徒の育成」を研究主題に掲げ、各教科において様々な視点から手だてを講じ、研究を進めてきた。

「学び続ける生徒」とは、「自分自身を高めるために学習し、行動し続ける生徒」のことである。これは文部科学省が、今後必要とされる力として示している「生きる力」や「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し、解決する力」を目指すものである。そのために本校では、「課題解決型」の授業こそがその理想的な姿であると考え、研究を進めている。「課題解決型」の授業は、身に付けた知識を基に、生徒が主体的に課題解決に取り組む姿を目指して行うものであり、「活用」する力を重視している。このような授業を計画し、継続して実践することによって、生徒はただ知識を獲得すればよいという受動的な姿勢から、自分のもっている知識・技能を「活用」しようとする積極的な姿勢に変容していくと考える。そして、課題解決に向けた取組から達成感やその教科の有用感を味わい、さらに学ぼうとする意欲を高めたり、新しい課題を発見し、さらに自己を高めるためにそれを解決しようとしたりする姿が、まさに「学び続ける生徒」である。

保健体育科では、「生きる力」につながる「健康の保持増進」「体力の向上」に焦点を当て、「生涯を通じて主体的に健康や体力を保持増進するために、自らの課題について考え、行動することができる力」つまり「健康行動実践力」を身に付けさせることが学び続ける姿につながると考えた。

本校では「体づくり運動」と「体育理論」の授業を関連させるとともに、授業以外での運動・スポーツの実施状況を記録する「セルフモニタリングシート」を活用し、「健康行動実践力」の一つである「運動習慣」を身に付けさせる取組を行ってきた。これまでの継続した取組により、運動習慣が身に付いた生徒が増加するとともに、体力の向上が見られた。このことから、運動・スポーツの楽しさを味わわせるとともに、運動の必要性を理解させることにより、習得した知識・技能を実生活に生かせるようにしていきたい。

3 研究仮説

「体育理論」と「体づくり運動」の授業において、運動・スポーツの楽しさを味わわせるとともに運動・スポーツの必要性を科学的に理解させることにより、習得した知識・技能を実生活において活用しようとする態度を育むことができるだろう。

4 研究内容

(1) 特色ある年間計画・単元指導計画

学校における体育・健康に関する指導との関連を図る取組

(2) 運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導

運動・スポーツの楽しさや喜びを味わわせる取組

- A. 仲間と協力し，励まし合う学習活動
 - B. 定期的に体力チェックを行い，達成感を味わわせる取組
運動・スポーツを科学的に理解させる取組
 - A. 運動・スポーツ経験の振り返り
 - B. ICT機器（TPC：タブレット端末）の活用
学習したことを実生活につなげる取組
 - A. 課題への気付きにつながる聴き合い活動
 - B. 学んだことを実生活につなげるセルフモニタリング
- (3) 授業の改善・子どもの支援に生きる評価
成果を振り返る学習活動

5 実践の実際

(1) 特色ある年間計画・単元指導計画

学校における体育・健康に関する指導との関連を図る取組

学習指導要領では「指導計画作成にあたり，関連の教科や道徳，特別活動のほか，総合的な学習の時間，運動部の活動などとの関連を図り，日常生活における体育・健康に関する活動が適切かつ継続的に実践できるよう留意する」としている。また，保健体育科の授業において，「運動の楽しさや喜びを味わえるような基礎的な運動の技能や知識を確実に身に付けるとともに，それらを活用して，自らの運動の課題を解決するなどの学習をバランスよく行うことが重要であり，これらのことにより，学校の教育活動全体に運動を積極的に取り入れ，実生活，実社会の中でも生かすことができるようにすることを目指したものである」としている。

図1～3は，各学年の運動習慣を身に付けさせるための年間指導計画である。「体育理論」と「体づくり運動」，さらに「保健体育科」や「総合的な学習の時間」と関連させるとともに，昼休みの活動や部活動，家庭での運動の取組（実施内容・時間）を「チャレンジカード」に記入させた。

領域	体づくり運動 「体力を高める運動」				保健 理論	教科外 (昼休み・家庭)								
	4～5月	6月		11月		7～12月	5～6月	5～7月	夏休み	9～1月				
学習活動	運動の 行い方の 学習	新体力 テスト	新体力 テストの 分析	トレ ーニ ング メ ニ ュ ー 作 成	トレ ーニ ング メ ニ ュ ー 修 正	5分間 トレ ーニ ング (帯活 動)	9月，12 月に 体力 テスト を 実施	呼 吸 器 ・ 循 環 器 の 発 達	運 動 や ス ポ ー ツ の 学 び 方	チャ レ ン ジ 1	⇒	チャ レ ン ジ 2	⇒	チャ レ ン ジ 3
										セルフモニタリングシートを週1回チェックし，個別支援				

<図1> 運動習慣を身に付けさせるための年間指導計画（1年）

領域	体づくり運動 「体力を高める運動」				体育 理論		教科外 (昼休み・家庭)
時期	4～5月	6月	10月	7～12月	6月	11月	4～3月
学習活動	運動の行い方の学習	新体力テスト	新体力テストの分析	5分間トレーニング (帯活動)	スポーツや運動が心身の 発達に与える効果と安全 な	運行 いや方 スポーツの安全な	チャレンジカード
				9月、12月に 体力テストを 実施			セルフモニタリングシート を月1回チェックし、個別 支援

<図2> 運動習慣を身に付けさせるための年間指導計画(2年)

領域	体づくり運動 「体力を高める運動」				保 健	総合	教科外 (昼休み・家庭)		
時期	4～5月		5～12月		11月	6月	3月	6月	年間
学習活動	体力分析	トレーニング体験	トレーニング作成	5分間トレーニング (帯活動)	健康に生活するための運動	運動と健康	高齢者疑似体験	調べ学習	体づくり運動 保 健
				9月、12月に 体力テストを 実施					↓
									<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">昼休み</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">部活動</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">地域</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 5px;">家庭</div> </div>

<図3> 運動習慣を身に付けさせるための年間指導計画(3年)

「体づくり運動」と「体育理論」の授業を関連させるとともに、授業以外での運動・スポーツの実施状況を記録する「セルフモニタリングシート」を活用し、「健康行動実践力」の一つである「運動習慣」を身に付けさせる取組を行ってきた。年間を通じて行った5分間トレーニングやセルフモニタリングで小さな成功を繰り返し経験することにより、自信や次への意欲を高めることができたと考えられる。さらに、体力チェックでトレーニングの効果を実感することにより、運動習慣につながったと考えられる。

(2) 運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導

運動・スポーツの楽しさや喜びを味わわせる取組

A. 仲間と協力し、励まし合う学習活動

6月に自分の体力分析を行い、個々の体力の現状に応じて5分間トレーニングを作成した。5

分間トレーニングは授業のはじめに帯活動として6月～12月の6ヶ月間継続して実施した。

トレーニング種目は個人によって異なるが、3～5種目のトレーニングを行い、種目間に体育館1周ランニングを取り入れるサーキット形式で実施した。ペアでできるトレーニングを1種目以上取り入れ、競争したりタイミングを合わせたりしながら楽しく取り組めるよう工夫させた。また、トレーニング終了後には毎回心拍数を測定し、その記録とトレーニングを行って感じたことなどをトレーニングカードに記入させた。

6月からトレーニングを開始したが、同じメニューを毎回こなすうちに「心拍数が上がらなくなってきた」「疲れなくなってきた」など、トレーニングの効果を実感している様子が記録から見て取れた。また、トレーニング間のランニング速度が速くなったり、制限時間内に行えるトレーニングの回数が増加したりしている生徒には助言を加え、トレーニング回数を増やすなどトレーニングメニューを修正させた。ペアと一緒にを行うトレーニングでは、友達と競争したりタイミングを合わせたりするなど、楽しみながらトレーニングを行っていた。また、5分間トレーニングを継続することによって運動が楽しいと思うようになり、家でも運動を続けようとするなど実践意欲を高めた生徒もいた。

<生徒のワークシートの記述内容から>

- ・ 6月から5分間トレーニングをやって、全体的に記録が上がったので、効果が出たと思う。これからもしっかりやりたい。
- ・ ハンドボール投げが3 m70cm上がった。続けることが大切だと改めて分かった。
- ・ 5分間トレーニングは、運動をするきっかけになったのでよかった。

B. 定期的に体力チェックを行い、達成感を味わわせる取組

5分間トレーニングの効果測定のために、9月と12月の2回体力チェックを実施し、数値の変化をペアで確認させた。(図4)自分の考えたトレーニングプログラムの内容についてトレーニング方法や回数などが適切であったかを分析させ、ペアからのアドバイスを参考にしながらトレーニングプログラムの修正を行わせた。

	トレーニング名	体力チェック方法	5月	9月	12月
①	なわとび(2重)	立ち幅跳び・シャトルラン	33回	37回 ①-1	54回 ①-1
②	フレンチプレス	ハンドボール投げ 9m	10m	9m ①-0	11m ①-1
③	ボールグーパー	握力を3回 6回	左 20.5 右 20	左 21 右 28 ①-1	左 31 右 29 ①-1
④	シャトル投げ	ハンドボール投げ	10m	9m ①-0	11m ①-1
⑤	なわとび(2重)	立ち幅跳び・シャトルラン	1m70cm	2m ①-1	1m68cm ①-0

<図4> 体力チェックカード

メニュー	効果
腹筋	4月は30秒で15回しかできなかったけれど、今は30秒で24回できるようになった。また、より負荷がかかる頭の後ろに手をあててできるようになった。
腕立て伏せ	4月は30秒で10回しかできなかったけれど、今は30秒で25回できるようになった。また、肘を90度まで曲がらなければいけないことに気がついた。
二重とび	4月は30秒で18回しかできなかったけれど、今は30秒で30回できるようになった。また、90度かかるとかよくわかった。
ももろのストレッチ	4月はつま先に指までしかかかっていたけれど今は手首16cmまでできるようになった。

<図5> 生徒のワークシート

図5は、体力チェックを基に1年間のトレーニングの効果を記述させたものである。全くできなかった腕立て伏せが25回できるようになるなど、自分が取り組んできた成果を数値の変化で確認することにより、達成感を味わうことができたと考えられる。

運動・スポーツを科学的に理解させる取組

生徒が生涯にわたってスポーツに親しみ、豊かなスポーツライフを送る上で必要となる運動・スポーツに関する科学的知識は、体育理論の授業において自らの運動・スポーツ経験を振り返りながら深めることができる。

2年体育理論「運動・スポーツが心身の発達に与える効果と安全」では「ブレインストーミング」「聴き合い活動」「タブレット端末（TPC）による調べ学習」の活動を行わせることにより科学的知識を身に付けさせたいと考えた。

A. 運動・スポーツ経験の振り返り

課題解決の場面では、昨年度から実施してきた5分間トレーニングや昼休み・家庭での運動の取組についてグループ内で伝え合う活動を取り入れた。トレーニングカードやチャレンジカードを活用し、運動・スポーツへの取組や運動による生理的・情動的变化について聴き合う活動を通して、運動・スポーツが心身両面に効果があることを理解させることができた。

B. ICT機器（TPC：タブレット端末）の活用

運動・スポーツが心身に及ぼす効果についての理解を深めるため、タブレット端末（TPC）を活用し、教師が事前に準備した動画や資料を自由に検索させた。特に、運動習慣が定着していない女子生徒は、運動・スポーツが肥満予防の効果に加え、ストレスを解消したり、リラックスしたりできるなど心の健康への効果があることについての理解を深めることができたため、運動に取り組むきっかけとなった。



ブレインストーミング



グループ活動



TPCの活用

学習したことを実生活につなげる取組

A. 課題への気付きにつながる聴き合い活動

習得した知識・技能を実生活に結びつけるためには、自分の課題への「気付き」を引き出す必要がある。これまでの実践では、自分と能力や目標に近い仲間と活動していく中で仲間の動きが上手になったり、記録が向上したりする姿を観察することで、運動への意欲が高まり、自分の課題への「気付き」にもつながった。

このように、友達とのコミュニケーション活動が生徒の気付きにつながったことから、聴き合い活動を取り入れていきたいと考えた。聴き合い活動は、成果の発表会に終始するものではなく、

主体を聴き手におく活動のことであり、目を見て聴く、うなづく、聴きながらジェスチャーをするなどの聴く姿勢や話し手の考えを引き出すような聴き手の尋ね方を大切にしていく活動である。聴き合い活動では、話合いのように話を合わせていくものではなく、一人一人の考えを肯定的に受け入れるので、一人一人の考えが大切にされ、全員の考えが尊重されると考える。したがって、次の活動への意欲が高まるとともに自分の課題への気付きにつながっていく。聴き手が主役となる聴き合い活動の中で仲間の思いや取組に触れることにより、自分の健康や体力の課題を解決する方法に気付き、適切に実践していくための思考力・判断力を高めるのである。

<実践事例>

2年体育理論「運動・スポーツが心身に及ぼす効果」

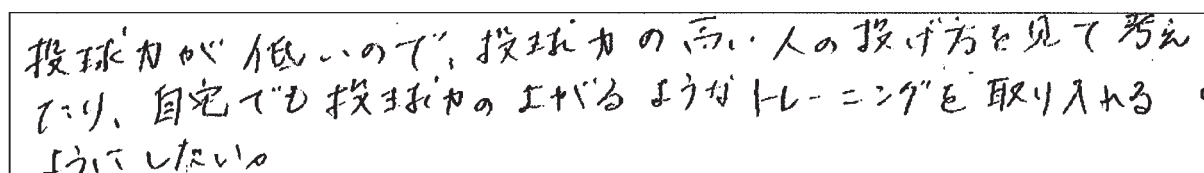
A. 聴き合い活動

トレーニングカードやチャレンジカードを活用し、運動・スポーツへの取組や運動による生理的・情動的变化について聴き合う活動を通して、運動・スポーツが心身両面に効果があることを理解させたいと考えた。また、仲間の運動への取組や思いを聴き合う活動を通して、継続して運動に取り組む様子や記録が向上している様子を知ることによって「自分にもきっとできる」といった自信を深め、今後の実践意欲を高めたいと考えた。



聴き合い活動

聴き合い活動を行う前に、教師が聴き合い活動の方法（活用する資料、具体的な尋ね方等）を提示したことで、チャレンジカードやトレーニングカードを活用して積極的に聴き合うことができた。聴き合い活動において、自分と友達の取組の違いを比較することにより、生徒それぞれが自分の課題を見つけることができた。（図6）



<図6> 生徒のワークシート（聴き合い活動）

聴き合い活動を学級の生活班に限定して行ったが、運動への取組によって意図的にグループを作ったり、自由に聴き合える時間を作ったりするなど、より思考を深めることができるグルーピングが必要であった。

B. 学んだことを実生活につなげるセルフモニタリング

自分が家庭でできそうな運動のめあてを決めて、×又は数字を書き込み、一言メモを記入させる形式の「チャレンジカード」を作成し、セルフモニタリングを行わせた。チャレンジカードは、週の初めと長期休業後に回収し、めあてに対する達成度を確認した。（図7）

最初は、部活動や塾などのためになかなか時間が取れない生徒が多かったが、5分間トレーニングを継続し、効果を実感し始めた頃から家でも運動を取り入れるようになってきた。実施種目を見ると、部活動に必要な体力を意識した種目や体力チェックで記録が大きく伸びた種目や逆に伸びなかった種目に取り組む生徒が多かった。運動が苦手な生徒はストレッチなどをできること

☆ トレーニングの記録

月	日	曜日	ぶんなん	7分以内	ダンス	腹筋	トレーニング	心拍数 1分以内 5分以内	継続	一言メモ
1	日		15分	30秒	1:30	10回	5分	5分	3分	これからも1ヶ月がんばる!
2	月		○	○	○	○	○	○	○	すぐてきたので、これからはついで
3	火		○	○	○	○	○	○	○	
4	水		○	○	○	○	○	○	○	
5	木		○	○	○	○	○	○	○	
6	金		○	○	○	○	○	○	○	
7	土		×:5分	○	○	×:5回	○	○	○	ついできたけど少しづつがんばる!
8	日		○	○	○	○	×:2分	○	○	トレーニングをもっとがんばる!
9	月		○	○	○	○	○	○	○	これからはついで!

< 図7 > セルフモニタリングカード「チャレンジカード」

から始めるように助言した。運動の時間が取れない生徒には、生活の中から運動を見付けさせたり、勉強の合間にできるトレーニング法を紹介したりするなど個別に助言した。

トレーニング後の感想を見ると、「回数が少しずつ増えてきた」「前より楽にできるようになった」「体力がついたような気がする」「楽しくなってきた」など、トレーニング後の疲労感の減少や回数の増加、体力の向上を実感している様子など生理的・情動的变化についての記述が多く見られた。

「チャレンジカード」を継続して実施してきたが、後半は心拍数や筋肉の疲労感など生理的变化を自分で感じ取り、運動強度や回数を変更して実施するなど目標設定スキルが身に付いている様子がうかがえた。

< 生徒のワークシートの記述内容より >

- ・ 握力を自主的に上げようがんばったら、記録が上がった。シャトルランもだんだん上がってきた。
- ・ やり始めの頃は、終わるとふらふらしたり心臓がバクバクしたりしていたが、5日間くらい続けてやっていると、そんなことがなくなってきた。

(3) 授業の改善・子どもの支援に生きる評価

成果を振り返る学習活動

体力テストの結果を分析し、自分が高めたい体力トレーニングを5分間トレーニングの中に取り入れ、年間を通じて行わせた。その効果を測定するために、9月と12月の2回体力チェックを実施し、数値の変化をペアで確認させた。(図8) 自分の考えたトレーニングプログラムの内容についてトレーニング方法や回数などが適切であったかを分析させ、ペアからの助言(図9)を参考にしながらトレーニングプログラムの修正を行わせた。

定期的に体力チェックを行い、これまでのトレーニングの成果を振り返ることにより、改善点を次に生かそうとする意欲につながった。また、教師やペアからのアドバイスを基にトレーニングプログラムを修正する活動を繰り返し行うことで、目標設定スキルを身に付けるとともに、個々の目標を達成したことが成功経験となり、自信が深まったと考えられる。

体力チェックカード

5分間トレーニングやセルフモニタリングで頑張った成果をチェックしよう!

項目	達成率	達成率	達成率	達成率
5分間トレーニング	100%	100%	100%	100%
セルフモニタリング	100%	100%	100%	100%
運動習慣	100%	100%	100%	100%
運動意欲	100%	100%	100%	100%
運動自信	100%	100%	100%	100%

<図8> 体力チェックカード

ペア()

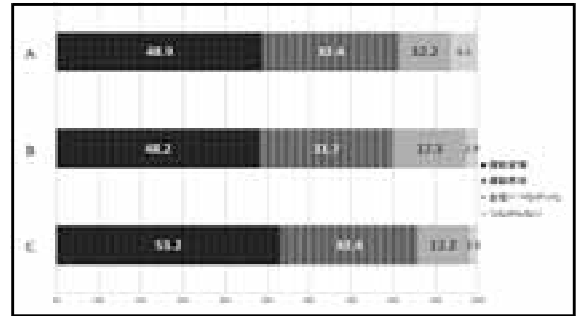
全体的に伸びているから難易度を増やしたほうがいいと思います。巻数を増やしてあげなく、回数も増やしてあげたほうがいいと思います。

<図9> ペアからのアドバイス

6 成果と課題

(1) アンケート結果から

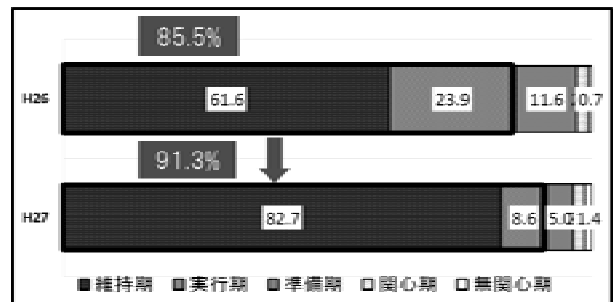
図10は、年間を通じた取組（平成26年度1学年140名）に関するアンケート結果である。この結果から、年間を通じて行った5分間トレーニング(A)やセルフモニタリング(B)で小さな成功を繰り返し経験することにより、自信や次への意欲を高めることができたと考えられる。さらに、体力チェック(C)でトレーニングの効果を実感することにより、運動習慣につながったと考えられる。



<図10> 年間を通じた取組に関するアンケート

(2) 運動行動ステージの変化から

一昨年度から運動行動ステージの調査を実施し、生徒（平成26年度1学年140名）の実態を把握してきた。運動行動ステージを5段階評定尺度で得点化した平均値の変化（図11）で見ると、一昨年度運動習慣が身に付いている生徒（維持期・実行期）の割合が85.5%だったのに対し、昨年度は91.3%となっている。



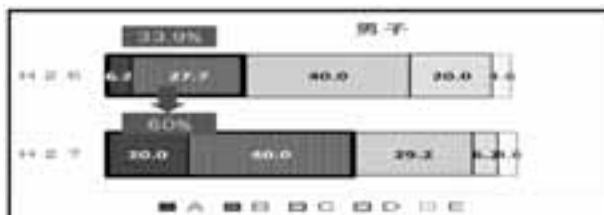
<図11> 運動行動ステージの変化

図10と図11の結果から、5分間トレーニングやセルフモニタリングに継続して取り組み、その効果を定期的にチェックすることにより、運動への自信や意欲につながり、運動習慣に結びついているものと考えられる。

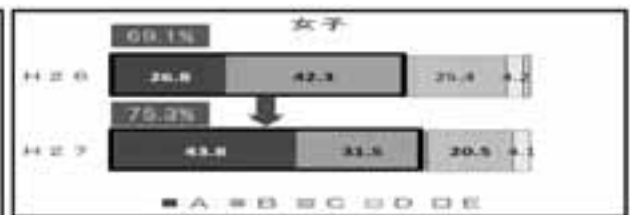
(3) 体力の変化から

一昨年度9月（平成26年度1学年140名）に実施した新体力テストの総合得点を全国平均と比較すると、一昨年度も男女ともに全国平均を上回っていたが、昨年度男子では3.65点（昨年度2.13点）、女子では3.14点（昨年度1.52点）と一昨年度よりも大きく上回った。

図12、13は総合評価の推移を示している。総合評価A・Bの生徒の変化を見ると、男子では一昨



<図12> 男子の新体力テスト総合評価の推移



<図13> 女子の新体力テスト総合評価の推移

年度33.9%だったのに対し、昨年度は60.0%と大幅に増加している。(図12) また、女子では69.1%から75.3%に増えていることが分かる。(図13)

7 おわりに

これまで、習得した知識・技能を実生活で活用しようとする態度を育む体育授業を目指し、実践を行ってきた。体づくり運動で5分間トレーニングを作成し継続して行っていく中で、仲間とかかわる楽しさや記録が向上する達成感を味わうことができたこと、また、体育理論や保健の授業と関連させ、運動の必要性を科学的に理解することができたことが、生徒の運動習慣につながり、体力の向上につながったと考えられる。今後は、仲間との協働的な活動を通して、運動への取組が消極的な生徒でも運動の楽しさを味わうことができるような授業づくりを目指していきたい。

【MEMO】

第7分科会

福島市立福島第一中学校

研究主題

仲間とかかわる楽しさを感じながら主体的に課題解決を目指し、活動する体育授業

日程

9:00	9:30	10:20	10:40	11:30	13:00	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第2学年	球技（ネット型・バレーボール）	富田 宏幸	体育館
公開授業②	第3学年	ダンス（創作ダンス）	今村恵美子	体育館

学校所在地



交通機関

☆徒歩

- JR福島駅下車 徒歩25分
- JR南福島駅下車 徒歩30分

☆路線バス

- 福島駅東口5番又は7番乗り場
- 福島交通
- 土湯温泉・医大・蓬萊団地・平田・荒井・鳥川・伏拝行き
- 「信夫橋」下車 徒歩3分

福島市立福島第一中学校



所在地 〒960 - 8162 福島県福島市南町480番地
校長 伊藤 隆幸
生徒数 602名 (22学級)
連絡先 TEL 024 - 546 - 3504 FAX 024 - 539 - 5140
E-mail fukushima1-j@fukushima-city.ed.jp
URL http://www.fukushima.gr.fks.ed.jp/?page_id=465

【教育目標】

「自主的・自発的で、心身ともにたくましい生徒」

【学校紹介】

本校は、昭和22年4月に福島市立福島第一中学校として創立、開校。

昭和27年4月に杉妻中学校と合併。昭和60年8月に新校舎改築完成、現在に至る。創立70周年、歴史と伝統のある中学校である。

本校では、「たくましい気力と体力をもつ、行動的な生徒」「豊かな知性と感性をそなえ、創造性に富む生徒」「自らの言動に責任をもち、主体的に行動できる生徒」「協調する態度をもち、すすんで奉仕する生徒」「感謝の気持ちに満ち、すなおで豊かな心をもつ生徒」を目指している。

1 研究主題

仲間とかかわる楽しさを感じながら主体的に課題解決を目指し、活動する体育授業

2 研究主題設定の理由

本校は、「自主的・自発的で、心身ともにたくましい生徒」を教育目標に掲げ、「知恵を出そう！声を出そう！汗を出そう！」の三つの生徒スローガンのもと授業や生徒会活動、部活動において主体的な活動を推進している。特に生徒会活動では、毎年スローガンを決め、委員会活動の活発化を図りながら、常に前進していく福島一中を目指し、全校を挙げて取り組んでいる。学校の実態としては、全体的に生徒の規範意識が高く、規律正しく、非常に落ち着いた学校生活を送っていることがあげられる。この学校全体のよさを生かし、お互いを尊重し、共に高め合える体育授業を展開したいと考える。

大会主題及び校種別主題を受け、本校では「仲間とかかわる楽しさを感じながら主体的に課題解決を目指し、活動する体育授業」と研究主題を設定した。仲間とかかわりながら課題解決に取り組む過程において、運動の特性や楽しさに触れることで主体的に運動に親しむ資質や能力が育成されるものと考え、研究を進めている。

保健体育科としては、これまでの実践から、以下の点を課題として捉えている。

運動の得意な生徒と苦手な生徒の二極化。

運動経験が少ないため身体操作能力が低い生徒が多い。

既習事項をもとに自分たちで課題解決に向けて工夫することが苦手。

教師が示した技術のポイントをもとに、互いの動きを見てアドバイスしながら練習に取り組める生徒が少ない。

昨年度は上記の課題に対して次のような手だてを講じると課題解決の手助けとなり、達成感や充実感を味わい、進んで意欲的に運動に取り組むことができると考え、研究を進めてきた。それはスキルテストやアンケートで実態を把握し、その実態に応じて課題を設定したり、互いに観察し合ったり、視聴覚機器を使用して動きをチェックしたりするなど、グループやペアで練習に取り組む場を設定することである。

その結果、学習課題をレベル別に提示することにより、自分の能力に応じた課題に取り組むことができ、その中で上位生徒が下位生徒に教えたり、動きを見せ合ったりしながら意欲的に練習に取り組む姿が見られた。また、ペア学習やグループ学習では、見るポイントを明確に示すことにより、生徒は互いに積極的にかかわり合ったり、改善に向けて話し合ったり、進んで活動する様子も見られた。

以上のことから、グループやペアでの活動を通し、仲間とかかわりながら力いっぱい体を動かすことによって味わえる爽快感や達成感を実感させるとともに、自ら進んで課題解決を目指して活動することで、本校の教育目標を達成できると考え本研究主題を設定した。

3 研究仮説

発達段階に合った時期に、適した内容を取り組ませ、自分に合った課題をもたせることができれば、主体的に課題解決に向かわせることができるだろう。また、仲間とかかわるよさやかかわり方を教えることで、より効果的に課題解決的な学習を促すことができるだろう。

4 研究内容

- (1) 「特色ある年間計画・運動の楽しさを味わい指導内容の定着を図る単元指導計画」
系統性のある単元指導計画の作成
- (2) 「運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導」
兄弟班の機能を生かした課題解決方法の工夫
ICT機器の活用
(実践しようとする運動についての明確な動きのイメージをもたせ、学習意欲を喚起する)
練習方法や技術ポイントを明記した学習資料、学習カードの活用
主運動につながる準備運動と補助運動の実施
- (3) 「指導と評価の一体化（授業の改善・子供の支援に生きる評価）」
1 単位時間ごとの達成度を確認できる学習カードの作成と活用
学習者による自己評価や相互評価の実施

5 実践事例

事例1【バレーボール】

- (1) 「特色ある年間計画・運動の楽しさを味わい指導内容の定着を図る単元指導計画」

系統性のある単元指導計画の作成

第1学年では、オーバーハンドパス、アンダーハンドパスなどの基本技能の習得に重点を置くとともに、バドミントンコートでの3対3によるポジション移動を取り入れたゲームを行い、三段攻撃の基本となる動きを身に付けさせられるよう計画した。また、体が小さく、筋力も弱い生徒が多いことから、ゲームでは軽量バレーボールを使用することとした。

2学年では、1学年の学習を踏まえ、三段攻撃におけるスパイク、それに対応するレシーブフォーメーションを学習する。

3学年ではバレーボール学習のまとめとして、段階的にコートの広さを広げ、最終的には正規コートでの6対6のゲームを行い、三段攻撃やそれに対応するブロックなどが多く出現する攻防ができるように学習を進める。表1は中学校3年間を見通した指導計画案である。

【表1 バレーボールの3年間を見通した指導計画案】

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年
課題	サーブレシーブ、オーバーハンドパス(トスアップ)から相手コートにコースを奪って(返しているスペースを見つけて)送球する					
目標	・オーバーハンドパス ・アンダーハンドパス ・送球の軌道・ボールの軌道	・ボールの送球(送球してからのレシーブ)	・サーブレシーブ ・トスアップ	・アンダーハンドパス ・トスアップ ・アタック	・アタック ・ブロック	・アタック ・ブロック ・フェイント
達成目標	バドミントンコート(3対3)	・バレーボールコート(3対3) ・バレーボールコート(4対4)	・バレーボールコート(3対3) ・バレーボールコート(4対4) ・バレーボールコート(5対5)	・バレーボールコート(3対3) ・バレーボールコート(4対4) ・バレーボールコート(5対5)	・バレーボールコート(3対3) ・バレーボールコート(4対4) ・バレーボールコート(5対5)	・バレーボールコート(3対3) ・バレーボールコート(4対4) ・バレーボールコート(5対5)
学習内容	・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ)	・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ)	・サーブレシーブ ・トスアップ ・アンダーハンドパス ・アタック	・アタック ・ブロック ・フェイント	・アタック ・ブロック ・フェイント	・アタック ・ブロック ・フェイント
学習方法	・バドミントンコートでの3対3のゲーム ・サーブは投げ入れる ・送球は送球し、受ける	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・サーブは投げ入れる ・送球は送球し、受ける	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する
評価	・送球の軌道 ・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ)	・送球の軌道 ・ボールの送球(送球してからのレシーブ) ・ボールの送球(送球してからのレシーブ)	・サーブレシーブ ・トスアップ ・アンダーハンドパス ・アタック	・アタック ・ブロック ・フェイント	・アタック ・ブロック ・フェイント	・アタック ・ブロック ・フェイント
学習資料	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・サーブは投げ入れる ・送球は送球し、受ける	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する	・バレーボールコートでの3対3のゲーム ・バレーボールコートでの4対4のゲーム ・バレーボールコートでの5対5のゲーム ・サーブはアンダーハンドパスで送球する

(2) 「運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導」

兄弟班の機能を生かした課題解決方法の工夫

生徒を3人ずつ8チームに分け、さらに2チームずつを組ませ、兄弟チームを作成した。その兄弟チームで互いのゲーム分析を行わせるようにした。また、チームにはキャプテン、分析係、マネージャーといった役割を設け、全員がいずれかの役割を担うようにした。

チーム内におけるそれぞれの役割は表2の通りである。

【表2 バレーボールの授業における役割分担】

キャプテン	<ul style="list-style-type: none">・チームリーダー・練習やゲームにおけるチームへの指示・チームでの話し合い活動の司会
分析係	<ul style="list-style-type: none">・ゲーム時の兄弟チームの分析・チームでの話し合い活動の際の分析結果の報告
マネージャー	<ul style="list-style-type: none">・練習場所、練習内容の確認・ゲーム順の確認・チームでの話し合い活動時の発表

ICT機器の活用

タブレット端末のアプリを使用し、ポジション移動のプレゼンテーションを作成した。それを大型テレビにつなぎ、コート上での動き方のイメージを提示した。

また、実際に自分たちの試合の様子をタブレット端末のカメラで撮影し、自分たちのコート上での動きをグループ内で共通理解することに役立てた。



主運動につながる準備運動と補助運動の実施

単元前半ではバレーボールの学習につながるようにジャンプ系の運動やフットワークを準備運動の中に取り入れた。

チーム編成後はチームごとの準備運動とし、キャプテンの指示により実施させた。前時までの学習内容の復習として、マネージャーを中心にあらかじめ実施内容をチームごとに決めておき、準備運動の中で前時の復習を同時に行うことができたようにした。

(3) 「指導と評価の一体化（授業の改善・子供の支援に生きる評価）」

1 単位時間ごとの達成度を確認できる学習カードの作成と活用

1 時間で1枚の学習カードを作成し（表3）、授業のねらいがどのくらい達成されたかを毎時

間自己評価できるようにした。その自己評価の内容を踏まえ、次時の学習を行うようにした。また、チームでの作戦やフォーメーションを工夫する場面では、表4の分析表を生かしチーム内での思考の変容や課題に対する解決策が明確になるようにした。

【表3 学習カード】

The learning card template includes the following sections:

- 目的:** フォーメーションを工夫し、三段攻撃につなげよう
- 振り返り:** チームの課題はどんなところにあるだろう
- 振り返り:** チームでの作戦・フォーメーション
- 振り返り:** チームの振り返り、振り返り、振り返り

【表4 ゲーム分析表】

経過	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
セーブ										
ミス										
アドバイス										
備忘										

事例2【ダンス】

(2) 「運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導」

ペア活動、グループ活動における役割分担の工夫

グループ編成は、前年度の授業の様子を基に、教師がスモールティーチャーを決め、その後スモールティーチャーがメンバーを選ぶ方法で行った。

グループには、ビデオ係、カウント係、アドバイザーといった役割を設け、全員がいずれかの役割を担うようにした。グループ内におけるそれぞれの役割は表5の通りである。

【表5 ダンスの授業における役割分担】

スモールティーチャー	<ul style="list-style-type: none"> ・チームリーダー ・練習におけるチームへの指示 ・チームでの話し合い活動の司会
ビデオ係	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタルカメラ撮影 ・グループ内での課題や成果の共有
カウント係	<ul style="list-style-type: none"> ・練習時のカウント取り ・練習の盛り上げ担当
アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に対しての客観的な意見提示 ・発表者

ICT機器の活用

デジタルカメラで、兄弟班が撮影したダンスを大型テレビの画面に写し、自分たちの動きやフォーメーションの確認をし、自分たちの動きを客観的に捉えることにより、共通理解を深めて目指す動き作りに役立てようとした。



主運動につながる準備運動と補助運動の実施

準備運動や補強運動、ストレッチ、基本の四つのステップ（ボックス、ペンギン、ポップコーン、ランニングマン）を取り入れたグループごとのオリジナルウォーミングアップを作成し、毎時間行わせるようにした。

このようにカウント係をリーダーとしてウォーミングアップを行うことは、ダンスで大切な「互いに息を合わせる」ことにつながると考えた。



6 実践の記録

【バレーボールについて】

(1) 指導計画の効果

決められたポジションに移動するゲームを展開するために、サーブレシーブの前には必ずスタートポジション（コート中央）に集まり、審判のホイッスルの合図で自分たちが決めたポジションに移動するようにした。また、チーム内でレシーブフォーメーション、アタックフォーメーションを決め、ゲームの中で実践させた。必ず一人1回ボールを触ってから相手コートに返球するというタスクゲームにしたことにより、全員が積極的にプレーすることができた。また、生徒の実態を考慮し、2回目のキャッチを認めたことにより、レシーブやパスが苦手な生徒をセッター役とし、ボールをキャッチしてからトスさせるなど、チームの中で役割を工夫させることもできた。

また、軽量バレーボールを使用することにより、パスが容易になり、ラリーが続きやすくなるとともに、ボールを怖がらずに触ろうとする姿が多く見られた。



スタートポジションでは3人で手をつなぎ、一人がコート上の決められたマークを踏むというルールで実施した。

それぞれが自分のポジションに素早く移動するため、体の向きや足の位置を考えていた。

(2) 話し合い活動での役割分担による効果

チーム内で一人一役の役割分担を行うことにより、自分の役割が明確になり、積極的にチームや仲間とかかわる姿が見られた。チームで作戦を立てたり、フォーメーションを考えたりする場面においても、司会者、ゲーム分析の報告者、発表者が決まっているため、スムーズに話し合い活動を行うことができた。

また、1チームの人数を3～4人にしたこと、話し合うポイントをホワイトボードに提示したこと、ICT機器を活用し具体例を示したことなどにより、自分の意見を出しやすく、話し合い活動も各チームの課題を確実に捉えたものになっていた。



発表の場面では、役割分担によって決まっている発表者以外にチームでサポート役をつけて発表するチームもあった。

(3) 事後アンケート結果より

単元終了後に1学年男女全員を対象にアンケートを行った。結果は【表6】の通りである。

アンケートの結果から、仲間とかかわりながら活動することに楽しさを見出すことができた生徒が多かったことが分かる。チームでの話し合い活動においても、そうした活動に楽しさを感じる生徒がいる一方で、思うように自分の考えをまとめたり、発表したりできず、スムーズな話し合いができなかったと感じている生徒もいることが分かる。

また、授業後の感想には、仲間とかかわり、協力しながら練習やゲームを行ったことにより、意欲が持続し、充実感を得られたとする記述が多く見られた。

【表6 バレーボール事後アンケート結果 (一部抜粋)】

質問内容	4 - とてもそう思う				3 - そう思う				2 - あまり思わない				1 - 全く思わない			
	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)
①グループ学習など仲間とかかわりながら活動することは楽しかったですか。	76%	22%	1%	0%	60%	32%	0%	0%	67%	32%	1%	0%				
②チームでの作戦や話し合い活動の時間が楽しかったですか。	54%	42%	2%	0%	68%	29%	2%	0%	61%	36%	2%	0%				
③チームで話し合うことで課題を解決することができましたか。	15%	41%	4%	0%	61%	37%	2%	0%	58%	39%	2%	0%				
④チームでの自分の役割 (キャプテン、分析員、マネージャー) を果たにすることができましたか。	74%	20%	6%	0%	57%	37%	6%	0%	65%	32%	0%	0%				
⑤自分の考えをまとめて発表したり、記述したりすることができましたか。	49%	33%	13%	1%	46%	47%	6%	1%	49%	40%	10%	1%				
⑥仲間と協力しながら課題を克服することができましたか。	70%	22%	2%	0%	63%	35%	0%	0%	60%	39%	1%	0%				

生徒の事後の感想（一部抜粋）

- ・ 今回のバレーボールの学習では、自分たちの分析をすることによって友達と意見を言い合うことができました。また、そこで出た意見をもとに「次はどうするか」という目標を立て、チームで協力することができました。
- ・ ただプレーするのではなく、アタックさせたくない人に1本目を触らせたり、誰かがブロックにいったら、打ってきそうなところに移動したりして、工夫できるようになりました。
- ・ チームでフォーメーションを考えたり、勝つために作戦を立てたりと、考えてプレーすることがとても楽しかった。みんなで協力し、だんだん良いプレーが増えていくのも楽しかった。
- ・ チームの人たちの個性を生かした役割分担で上手にできたと思う。
- ・ できなかったところはなぜできなかったのかチームの中で話したり、声を出したりしながらバレーボールをできたので、楽しく協力してやることができました。
- ・ 仲間と協力や団結するためには、やはり話し合いなどで自分の考えを相手に伝えることが大切でした。

【ダンスについて】

(1) 話し合い活動での役割分担による効果

1グループは5～6名にし、教師がスモールティーチャーを決めてから編成した。

スモールティーチャーは、話し合い活動や創作活動において常にグループの指揮を取りながら積極的に活動することができていた。また、グループごとにカウント係、アドバイザー係、ビデオ係の役割を分担して活動したことにより、自分の役割が明確になり、互いに目的意識をもって主体的に活動していた。



また、表現することへの恥ずかしさもなく堂々と大きく動くことができていた。

(2) オリジナルウォーミングアップの作成による効果

基本のステップの練習を前提にグループごとのオリジナルウォーミングアップを作成し、毎時間実施した。単元前半で一つの作品を作ることができたという達成感や充実感を味わうことができ、単元後半の創作活動への意欲付けにもつながった。

しかし、音楽に合わせて体を動かすことに関心が向いてしまい、互いに声をかけ合うことが少なかった。互いに声を出すことで、ダンスで大切な「息を合わせる」ことにつながるという意識付けが足りなかった。ウォーミングアップ中から声を出すことができれば、創作活動中でも自然と声が出て、さらに活発な活動ができたのではないかと思う。

(3) ICT機器活用による効果

兄弟班に撮影してもらい、自分たちの動きをチェックし、課題を見つけ、練習するというサイクルができ、自分たちの班に合った課題を解決するために有効であった。



(4) 事後アンケート結果より

単元終了後に2年生全員を対象にアンケートを行った。結果は【表7】のとおりである。

【表7 ダンス事後アンケート結果（一部抜粋）】

質問内容	男子				女子				男女			
	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)
①ダンスの授業は楽しかったですか。	80%	19%	1%	0%	79%	21%	0%	0%	80%	20%	1%	0%
②自分から進んで意見を述べたり、話し合いに参加できましたか。	62%	31%	7%	0%	57%	41%	2%	0%	60%	35%	5%	0%
③グループ内で自分の役割にスムーズに役割分担がスムーズに行き渡りましたか。	46%	47%	5%	1%	50%	45%	5%	0%	48%	46%	5%	1%
④ステップができるようになったら、作品が完成していきやすかったですか。	83%	16%	1%	0%	88%	10%	1%	0%	86%	13%	1%	0%
⑤作品を確認し、完成させていく過程で話し合い活動は有効でしたか。	69%	29%	1%	0%	78%	21%	1%	0%	73%	25%	1%	0%
⑥オリジナルワークシートは学習活動として有効でしたか。	62%	38%	0%	0%	64%	36%	0%	0%	63%	37%	0%	0%

アンケートの結果から、話し合い活動が創作活動において有効な方法だったと感じた生徒が多く、活発な話し合い活動によりグループごとの作品が完成できたという充実感を味わった生徒も多かった。しかし、自分の役割を確実にこなせなかったと答えた生徒もあり、教師が役割分担を明確に提示し、授業の中でのフォロー不足が原因だと考える。感想には、「班の仲間同士でコミュニケーションを取り、話し合い活動も活発に行うことができた」「仲間の新しい良さを発見することができた」という記述が見られた。

生徒の事後の感想（一部抜粋）

- ・ できないステップを互いに教え合いながら練習することができた。できたときには達成感があり、仲間に感謝した。
- ・ 自分の班のビデオを見て、もっと上手になろうと色々話し合い、自分たちなりの考え方ややり方でみんな笑顔で踊ることができた。
- ・ 来年はさらに難しいステップにも挑戦し、上半身や腕などを付けたレベルの高いダンスにしたい。
- ・ 自分の意見を積極的に発言することができた。
- ・ もっと自分から発言をすべきだった。

7 成果と課題

(1) 成果

グループの中で役割を明確に分担して練習をさせたり、話し合い活動をさせたりすることにより、生徒一人一人が自分の役割に責任をもって取り組むとともに、小集団の中で積極的に仲間とかわりながら学習する姿を多く見ることができた。

グループでの話し合いでは、教師から話し合いの視点やポイントについて明確に指示したことにより、深まりのある話し合いができた。

ICT機器を活用することで、自分やチームの動きを客観的に捉えたり、自分の課題に気付いたり、学習意欲や技能の向上につなげることができた。

(2) 課題

更に綿密な指導計画になるよう改善し、身に付けさせたい技能やねらいを明確にした授業を展

開していく必要がある。

短時間の中でポイントを絞った話し合い活動ができるようになるためには、保健体育科はもちろんであるが、全教科・特別活動等の中でも取り組む必要がある。

【MEMO】

第8分科会

福島市立福島第四中学校

研究主題

合理的な運動を実践することによって、運動することの楽しさや喜びを実感し、主体的にかかわり合う態度を育てる授業

日程

9:00	9:35	10:25	10:45	11:35	13:15	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第2学年	器械運動（マット運動）	武石 昌之	体育館
公開授業②	第3学年	球技 （ゴール型・バスケットボール）	安斎 美輝	体育館

学校所在地



交通機関

☆徒歩

JR福島駅下車 徒歩15分

☆路線バス

福島駅東口9番乗り場

福島交通

市内循環1コース又は2コース

「福高前」下車 徒歩5分

福島市立福島第四中学校



所在地 〒960 - 8013 福島県福島市南平 5 - 8
校長 福地 憲司
生徒数 524名
連絡先 TEL 024 - 535 - 4240 FAX 024 - 536 - 7497
E-mail fukushima-4j@fukushima-city.ed.jp
URL http://www.fukushima.gr.fks.ed.jp/?page_id=474

【教育目標】

自主自立の精神をもち、たくましく生きる生徒の育成

【学校紹介】

本校は昭和22年4月に福島市立福島第三中学校として創立、開校。同年9月に福島市立福島第四中学校と改称。昭和30年に現在の場所に校舎が移転し現在に至っている。福島市の中心部に位置しながら、自然豊かな信夫山中腹の校舎からは福島市が一望できる。

本校では、「四中スタンダードの実践」「いじめをしない、させない、許さない宣言」「あいさつ日本一運動」「部活動毎の朝のボランティア活動」を实践し、生徒の自主自立の精神を育てている。地域の小学校・高等学校等との連携を一層強化しながら、教職員一丸となり学校経営や教育活動等の充実・発展に努めている。

1 研究主題

合理的な運動を実践することによって、運動することの楽しさや喜びを実感し、主体的にかかわり合う態度を育てる授業

2 研究主題設定の理由

本校は、「自主自立の精神をもち、たくましく生きる生徒の育成」という教育目標を掲げ、自ら学習に取り組む生徒、品位ある行動をする生徒、進んで奉仕活動をする生徒、心身をたくましく鍛える生徒をめざす生徒像として指導に当たっている。

また、生徒会活動では「あいさつ日本一」をスローガンに、委員会活動の活発化を図りながら、責任感と実行力のある生徒の育成を目指して取り組んでいる。

本年度の現職の研究主題は「自ら学習に取り組む生徒を育てる指導の実践 ～かかわり合い、良さを実感する活動を通して～」であり、各教科部会の自主性を尊重しながら、全教員共通の研究主題の基、実践的研究を進めている。各教科で育てたい生徒像を掲げ、各教科の目指す授業実践を具体的に掲げて研究実践を行っている。保健体育科では、「基礎・基本の定着を目指し、運動に取り組む生徒」「主体的に運動に取り組む生徒」「体力向上を目指す生徒」を目指す生徒像と考えた。また、授業の実践では、体力向上策としての補強運動の工夫（授業のはじめに短時間で行う）学習訓練の徹底（活動の効率化を図る）学習形態の工夫（基礎・基本の定着を図る）を行っている。本校の現職の昨年度の課題としては、言語活動に積極的に取り組んでいても思考の深まりが見られないことや、学習した事項と実生活との関連が図られていないことなどが各教科から挙げられた。そこで今年度は、生徒同士の学び合いに焦点を当て、生徒の思考力の高まりや表現力の深まりを目指すとともに知識が実生活で有効にはたらくような関連付けができるよう工夫を進めている。また、授業では思考力・表現力の基盤となる基礎・基本の強化を図り、「わかった」「できた」という実感が伴う授業を多く実現させたいと考えている。学びがいのある学習課題や学びの手応えのある学習活動など、自ら学ぶ喜びや達成感が味わえるような手だてを工夫しながら、「自ら学習に取り組む生徒」を育てていきたいと考え研究を進めている。

これらのことから、「自ら学ぶ生徒」そして、「わかった」「できた」実感が伴う授業を考え、研究主題を設定した。

3 研究仮説

合理的に運動を実践できるように工夫することで運動の技能が身に付き、運動の楽しさや喜びを実感し、話し合い活動や学び合う活動で「わかった」「できた」など互いにかかわり合う態度を育成することができるだろう。

4 研究内容

(1) 特色ある年間指導計画・単元指導計画

実態（新体力テスト）を基にした自校の体力・運動能力の課題解決

(2) 運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導

仲間とかかわり合い主体的な活動ができる学習集団の育成

技能向上に結び付く知識，思考・判断を高める方法の工夫

(3) 指導と評価の一体化

教師や生徒の相互評価による適切な評価

指導方法の振り返り

5 実践事例

(1) 特色ある年間指導計画・単元指導計画

実態（新体力テスト）を基にした自校の体力・運動能力の課題解決

本県児童・生徒の体力低下の現状を踏まえ，対応策の一つとして「運動身体づくりプログラム」を作成し，各小学校で平成18年度から体育授業で実践してきた。その後，自校化していく中での課題も出てきたことで改善策を検討したり，平成23年の東日本大震災の影響による被災後の運動不足による児童・生徒の著しい体力低下もあり，様々な理由から平成26年3月に「運動身体づくりプログラム」の改訂版が作成された。

本校では，各小学校体育で経験してきたプログラムを継続する形で，全ての単元で準備運動と主運動の間に，体力向上を目指した運動を実施してきた。その内容は，できるだけ主運動に関連する動きを積極的に取り入れるよう工夫した。

【体づくり運動】

5分間走

- ・ 4月は，整列隊形のまま集団で行い，同じペースで走ることを目標とした。
- ・ 5月は，個人のペースで走ることを，走る距離を伸ばしていくことを目標とした。
- ・ 年間を通して5分間走を取り入れ，中学生期に身に付けたい持久力（心肺機能）の向上を図った。

【陸上競技】

スキップ，クロスステップ，片足バウンディング（片足けんけん），ダッシュ

4名でのリレー形式で行った。

【3年バスケットボール】

スキルアップ6種目×1分

- ・ サークルドリブルシュート，対面シュート，ピボット1対1，ドリブルスラロームからジャンプシュート，リバウンドからパス，移動してパスキャッチを行った。
- ・ 6種目の中に，ランニングやジャンプ，ストップからの切り返しなど，バスケットボールの動きの中から体力向上をねらいとした内容で行った。

【2年器械運動】

2人組柔軟体操

肩倒立からの起き上がり + その場ジャンプ

倒立（カエルの足打ち）

順次接触や腕支持など器械運動に必要な技能や体力の向上をねらいとした内容を行った。

(2) 運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導

仲間とかかわり合う活動ができる学習集団の育成

学習ノート・ワークシートを工夫することで、生徒自身がこの単元で何を学ぶのか、本時ではどのような活動があるのかを理解できるようにした。

また、ICTを活用する活動を取り入れることで、生徒の主体性やグループ活動の活性化につなげ、生徒同士や生徒と教材をつなげていくようにした。

技能向上に結びつく知識、思考・判断を高める方法の工夫

保健体育科の授業では、学び合いを有効に活用し、主体的に学習活動するために単元計画のどこで「思考・判断」に重点を置いた授業づくりをすべきかを検討して、授業研究を行った。

(3) 指導と評価の一体化

教師や生徒の相互評価による適切な評価と教師の指導方法の振り返り

各単元に入る前に、学習指導要領に示す目標を実現した「おおむね満足できる」状況の確認を行い、学習内容と評価の見直しをした。

生徒は、学習カードやワークシートなどに自己評価やグループでの相互評価の記録を残すことで、単元の終わりに振り返りができるようにした。

教師は、生徒が「おおむね満足できる」ところまで達成できたのか、また、「十分に満足できる」状況を具体的にイメージし、生徒を支援できたのかを振り返ることができるようにした。

6 実践の記録

(1) 特色ある年間指導計画・単元指導計画

実態（新体力テスト）を基にした自校の体力・運動能力の課題解決

【3年バスケットボール】

バスケットボール

1時間目：基本の練習では班の中で仲間の課題を指摘したり、有効な練習の方法を考えながら実施しよう。

基本の練習：(40秒+休憩10秒)×5回＝5分

【2面使用の時】

(1)ドリブルドリフティング
・顔を上げてドリブルを見て
・空拍子で強くドリフティング
・外側の手を伸ばしてドリフティング

(2)ドリブルドリフティング
・手のひらをドリフティングに向けて低い姿勢でドリフティング
・ドリフティングの最高まで

(3)ドリフティング 10回
・20秒で休憩
・ドリフティングでドリフティングを触らせない

(4)ドリブルドリフティングドリフティングドリフティング
・顔を上げてドリブルを見て
・ドリフティングドリフティングドリフティングを使って
・真上にドリフティング
・ドリフティングを指さす

(5)ドリブルドリフティングドリフティングドリフティング
・ドリフティングを受けたら早いドリフティングで
・真上にドリフティング
・ドリフティングを指で指す

(6)空間を握める動き
・パスをしたらドリフティング・ドリフティングのドリフティングに空いた空間へドリフティングをすに

【体づくり運動】【陸上競技】

5分間走

持久走で力を発揮することは、中学生期の精神的な部分でも重要と考え、心の持久力の強化という意味でも大事にしている。また、走ることは体力向上の基盤となると捉え、5分間走を取り入れてきた。

9月の長距離走の授業では能力別のグループに分けて行った。一定の速さで走るために、自己の能力に応じたグループを選択し、設定タイムを守りながらペース走に取り組むことができるようにした。

5分間走の目標距離	トラック1周ペース	左のペースで走ると (新体力テスト得点)	
		男子1500m	女子1000m
1500m (7周+100m)	40	5 00 (9点) (4 59 ~ 10点)	3 20 (10点) (3'49 ~ 10点)
1400m (7周)	42.9	5 22 (8点)	3 35 (10点)
1300m (6周+100m)	46.2	5 47 (7点)	3 51 (9点)
1200m (6周)	50	6 15 (6点)	4 10 (8点)
1100m (5周+100m)	54.5	6 49 (5点)	4 33 (7点)
1000m (5周)	60	7 30 (4点)	5 00 (5点)
900m (4周+100m)	66.7	8 21 (2点)	5 34 (4点)
800m (4周)	75	9 23 (1点)	6 15 (2点)

毎時間行っている5分間走のペースを、新体力テストの男子1500mと女子の1000mに置き換えて考え、10点満点と5点のペースになるように意識させ、目標を明確にさせることができた。

(2) 運動・スポーツに親しむ資質や能力を育む指導

仲間とかかわり合い主体的な活動ができる学習集団の育成

【3年バスケットボール】

バスケットボール

2・3時間目：基本練習のレベルアップと、3対3のバスゲームを通してボールの扱い方と動き方の復習をしよう。

1 基本の練習：(10秒+移動10秒)×6種目=5分 ※P1で評価の確認

2 ノードリブルゲームの対戦 ※Aゲーム対Bゲームで対戦

- ※ シュートを入れたら、インフラインで走んでいるチームにパスをして返す必要がある
- ※ 時限が満了するまで走りながら行う
- ※ 点数は両チーム
- ※ なかなかシュートが入らない場合は、練習時間を延長する

学習ノート・ワークシートには、学習の見通しと学習活動を明記することで、生徒自身がこの単元で何を学ぶのか、本時ではどのような活動があるのかを理解できるようにした。上位の生徒が、下位の生徒に声かけを積極的に行う姿も見られた。

【2年器械運動】

ビデオやweb上の動画などのICTの活用を取り入れることで、生徒の主体性やグループ活動の活性化につなげることができた。生徒同士や生徒と教材をつなげていくという点で有効である。



技能向上に結びつく知識，思考・判断を高める方法の工夫

指導計画と評価規準

	思考・判断	指導の重点
1	思考・判断の観点の評価に重点を置く授業を単元のどこに配置するか検討した。	単元計画の際、授業者は、学び合いに関する内容や関連事項をメモするようにした。
2	○自己の目標記録より低い	○斜め方向から直線的な助
3	○自己の目標記録に近い	○振り上げ足を前上方に大きく
4	○班ごとに練習をする ・班員全員が目標記録を上回るように、互いにアドバイス合う ○自己の課題を確認し、練習する	○班員に対してのアドバイスのポイントを理解している。 ○班員からアドバイスされた内容を理解している。
5	○班ごとに練習をする ・班員全員が目標記録を上回るように、互いにアドバイス合う ○試しの記録	○実際の動きと自分の動きのイメージのずれを修正するために、デジタルカメラを使用する
6	○記録会 ○自己の目標記録に挑戦する。	○班員に対してのアドバイスのポイントを理解している。 ○班員からアドバイスされた内容を理解している。

保健体育科の授業では、学び合いを有効に活用し、主体的に学習活動するために単元計画のどこで「思考・判断」に重点を置いた授業づくりをすべきかを検討して取り組んだ。

技能向上のために互いに教え合ったり，練習方法を考えたりするなど，生徒の主体的な活動が見られた。

(3) 指導と評価の一体化

教師や生徒の相互評価による適切な評価と教師の指導方法の振り返り

各単元に入る前に，学習指導要領に示す目標を実現した「おおむね満足できる」状況の確認を行い，学習内容と評価規準の見直しをした。

学習カードやワークシートなどに自己評価やグループでの相互評価の記録を残し、毎時の反省等の記録を残した。

【3年バスケットボール】

	昨年までに学習した内容	評価
レイアップシュート	ボールを見ないでドリブル 2拍子で強く踏み込み真上にジャンプ リングの近くまで手を伸ばして バックボードによっつけて	A・B・C A・B・C A・B・C A・B・C
ボール保持	トラベリングせずにシュートやパス ピポットを使ってパス	A・B・C A・B・C
もらい方	手のひらもパスサーに向けて、キャッチボイス 後ろにボールを逃らさない ボールをもらいにVの字に動く 空いているスペースに動く ボール保持者が困っていたらもらいに行く	A・B・C A・B・C A・B・C A・B・C A・B・C
守り方	ボールとゴールの間に立つ(インライン) ボールとマークマンを同時に見て サイドステップで守る	A・B・C A・B・C A・B・C
速攻	先を誘って走る 味方が走り込んだ先にパス	A・B・C A・B・C
速攻	空いている味方に確実にパス ゴールが空いているときにドリブルシュート ディフェンスが下がったときにジャンプシュート カットインプレーを使って スクリーンプレーを使って	A・B・C A・B・C A・B・C A・B・C A・B・C
リバウンド	ボックスアウトをしてディフェンスリバウンド 飛び込んでオフェンスリバウンド	A・B・C A・B・C

スキルテストの自己評価や個人・班の目標に対する評価を重ねることで、「できる」「わかる」の自己の成長を実感させようとした。

「授業の反省」の欄については、この時間で「どのような活動をしたのか」「どのような点を意識して活動したのか」などを振り返ることができるように、練習方法や専門用語、体の部位などの言葉が文章に記入できるように指導した。これらから、生徒の達成度や理解度を確認することができた。

教師は、生徒が「おおむね満足できる」ところまで達成できたのか、また、「十分に満足できる」状況を具体的にイメージし、生徒を支援できたのかを振り返ることができた。

学習評価は、学習指導の改善に効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施している。

7 成果と課題

(1) 成 果

実態（新体力テスト）を基にした自校の体力・運動能力の課題解決

- ・ 継続して取り組んでいくことで、5分間走など体力向上の運動は「あたりまえの活動」という意識レベルまでに成長した。
- ・ 5分間走での頑張りとは、どのようなことにも全力を出し切るという心の持久力強化という意味でも成果があった。
- ・ 体力の向上に関心をもたせることで、ウォーミングアップ時の補強運動に主運動に関連する動きを積極的に取り入れるようになった。

仲間とかかわり合い、主体的な活動ができる学習集団の育成

- ・ チームの技能を高めることは、一人一人の技能レベルを理解することにもつながり、称賛や

アドバイスの機会が増えチームワークの向上につながった。

- ・ 学習ノートやワークシートの活用は、活動内容を記録して振り返ることができ、修正やミスの繰り返しを減らすことができた。
- ・ 作戦タイムなどで具体的にイメージしたことを書き出したことが、課題解決の糸口となり仲間と協力する活動がよりスムーズに行うことができた。
- ・ ICT機器の活用により、一人一人が技能のポイントを理解して、意識しながら取り組むことができた。
- ・ 手本となる動画を提示したり、自分たちの演技をデジカメなどで撮影したりして、自分たちの動きをその場で見て、すぐに修正ができ練習意欲の向上にもつなげることができた。

技能向上につながる知識、思考・判断を高める方法の工夫



- ・ 個人やチームで「本時の反省」を学習ノートにまとめながら、次時の課題につながる練習内容を工夫する姿が見られた。
- ・ 学び合う場面では、ホワイトボード上でマグネットを動かしながら話し合う姿が見られた。
(バスケットボール)

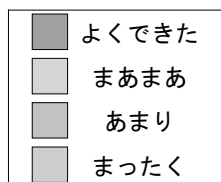
また、ホワイトボードをマットに見立ててマグネットを動かしながら、スペースを工夫しようとしていた。(器械運動)

- ・ 動きを撮影することで、繰り返し互いの動きを観察し確認することができた。
- ・ 前時に撮影した動画を活用し、練習のポイントを見つけようとしていた。
- ・ 互いのアドバイスから、自分たちの課題を見つけることができていた。
- ・ 生徒同士で気が付いた点を付箋に記入してアドバイスし合う活動は、技能ポイントが絞られており、例えば動き出すタイミングやスムーズに行うためのアドバイスがしやすく、受け取った側も把握しやすい。また、作業が短時間で速やかに行うことができ、振り返りに有効であった。

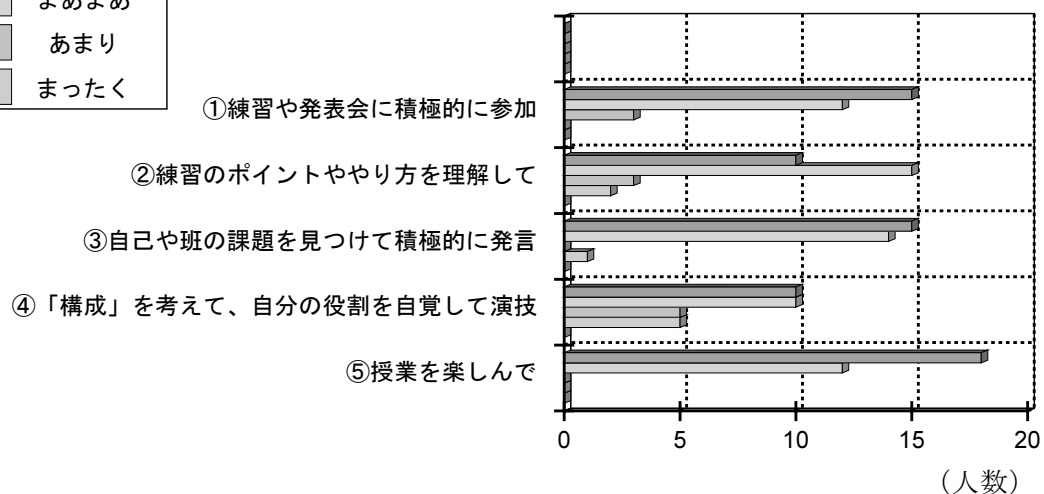


教師や生徒の相互評価による適切な評価と指導方法の振り返り

自分たちの演技を客観的に観察することで、修正点や課題を捉えることができた。これらを練習や発表につなげた結果、下図「1年男子マット運動に関するアンケート」の や の項目に見られるように「できる・できた」と実感できる生徒が増え、そのことが積極的な実践意欲につながった。



マット運動に関するアンケート



(2) 課 題

このような中で、特に思考・判断に重点を置いた授業については、運動量の確保という大きな課題がある。短時間で次の活動に移れるように各班にホワイトボードを用意し、ワークシートを併用しながら話し合いを進めるなど工夫してきたが、更なる運動量の確保につなげていかなければならない。

また、評価方法については、4名程度の小グループでの観察においては動きを見取りながら、記録を残すことができたが、球技などの5～10人程度の大きな集団になった場合、一人一人の活動を見取るには難しさがあった。人数や活動内容によって観察の視点を具体的に生徒へ示す必要がある。

今後このような点について研究を継続し、本研究主題に迫ることができるよう検討が必要である。

【MEMO】

高等学校部会



御倉邸（写真提供 福島市）

第9分科会

福島県立橘高等学校

研究主題

豊かなスポーツライフを実践するために知識を深めることができる体育授業

日程

9:00	9:45	10:35	10:55	11:45	13:00	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第2学年	球技 (ベースボール型・ソフトボール)	籠田あゆみ	校庭
公開授業②	第2学年	球技(ネット型・バレーボール)	山下 訓史	体育館

学校所在地



交通機関

☆徒歩

JR福島駅下車 徒歩20分

☆路線バス

福島駅東口9番乗り場

福島交通

市内循環1コース又は2コース

「体育館前」下車 徒歩2分

福島県立橘高等学校



所在地 〒960 - 8011 福島市宮下町 7 番41号
校 長 青 山 修 身
生徒数 955名 (24学級)
連絡先 TEL 024 - 535 - 3395 FAX 024 - 535 - 3397
E-mail tachibana-h@fcs.ed.jp
URL <http://www.tachibana-h.fks.ed.jp>

【教育目標】

自分で考え、自分で決断し、自分から積極的に参加・実行し、創造しようとする生徒 (自主)
自分の意思で、自分に課した普遍的命令に自分が服し、恣意・放縦を排除する生徒 (自律)
お互い独立した個人として尊重し、知性と個性を磨き合い、未来に羽ばたいてく生徒 (自立)

【学校紹介】

本校は明治30年 (1897年) 4月1日に現在の福島市立福島第一小学校地内に福島町立福島高等女学校として開校された。学制改革により、昭和24年に福島県立福島女子高等学校となり、平成9年に創立100周年を迎えた。その後、平成15年4月1日に福島県立橘高等学校へ校名変更し、男女共学となった。卒業生は3万7,000人を超え、県内有数の進学校として伝統が脈々と受け継がれている。

1 研究主題

豊かなスポーツライフを実践するために知識を深めることができる体育授業

2 研究主題設定の理由

(1) 本校の概要と生徒の特徴

本校は明治30年に開校し、学制改革によって、昭和24年には福島県立福島女子高等学校となった。3万人を超える多くの卒業生を輩出し、平成9年には創立100周年を迎えた。その後、平成15年に福島県立橘高等学校へ校名変更。男女共学となる。県内屈指の進学校としての伝統を受け継ぎ、来年で創立120周年を迎える。

本校は、「自由な気風」のもと、「自主・自律・自立」をモットーに、「自分で考え、自分で決断し、自分から積極的に参加・実行し、創造しようとする生徒(自主)」「自分の意思で、自分に課した普遍的命令に自分が服し、恣意・放縦を排除する生徒(自律)」「互いを独立した個人として尊重し、知性と個性を磨き合い、未来に羽ばたいていく生徒(自立)」の3つの精神を備えた人材の育成を目指し、教職員は、生徒一人一人を大切にしながら、生徒の可能性を引き出し伸張させるために様々な指導を行うとともに、生徒が切磋琢磨し合いながら自分を成長させる機会を大切にする教育活動を展開している。

生徒の特徴として、中学時代に生徒会役員を務めた生徒や、常にクラスのリーダーとして仲間を盛り上げてきた生徒などが数多く在籍し、学習面、学校行事、委員会活動等でその高いリーダーシップを発揮して各分野で成果をあげている。また、部活動においても運動系・文化系を問わず高い集中力を生かし、短時間で能率の良い練習を行うことによって、毎年全国大会・東北大会への出場を果たしている。

(2) 体育から見た生徒の実態

高等学校の体育の目標は、「運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに、技能を高め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育て、公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、健康・安全を確保して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる。」であり、学習に対する主体的な取組を促すことによって、学校の教育活動全体に運動を積極的に取り入れ、卒業後においても、実生活、実社会の中などで継続的なスポーツライフを営むことができるようにすることを目指したものである。

また、これらの資質・能力を育てるためには、「運動の楽しさや喜びを深く味わえるよう義務教育段階で培った基礎的な運動の技能や知識を生徒の状況に応じて伸張させるとともに、それらを活用して、自らの運動課題を解決するなどの学習をバランスよく行うことが重要である。」と述べられている。

これらを視点に本校生徒を見てみると、次のような実態があげられる。

体育の授業では、意欲的に学習に向かい、協力したり自分の役割を果たしたりするなどの態度面が身に付いている生徒が多い。

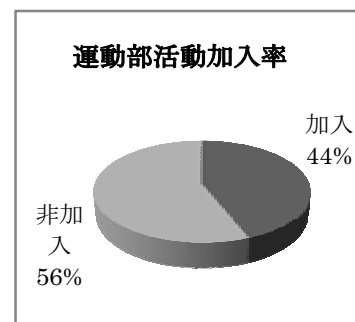
運動の技能については、義務教育段階で基礎的な運動の技能を身に付けてきている生徒とそうでない生徒が混在している。

知識を身に付けことができる素地をもっている生徒が多くいるが、「運動の行い方」や「ルール」という知識があまり身に付いていない。また、知識の理解をもとに運動の技能を身に付けたり、運動の技能を身に付けることで一層その理解を深めたりするなど、知識と技能を関連させて学習することの経験や意識が低い。

自らの運動課題を解決するなどの学習経験が少ない。

運動部への加入率が低い。(右図参照)

また、生徒が体育の授業やスポーツに対してどのような考えを持っているのかを知るために、次の「体育に関するアンケート」を行った。



【質問項目】

- 1 体育の授業において楽しいと感じるときはどんなときか。
- 2 保健体育の授業で、何を身に付けられると思うか。
- 3 卒業後に自分なりにスポーツにかかわっていくために、一番大事なものは何だと思っているか。

【結果】

「体育の授業で楽しいと感じるときはどんなときか」との問いでは、「技能を高められたとき」という技能に関する回答が、また「友達と協力できたとき」や「自分の責任が果たせたとき」「フェアプレイができたとき」などの態度に関する回答が高かった。その反面、「運動の行い方のポイントを知るなど知識を獲得できたとき」などの知識や「相手にあった作戦、自分に合った練習を選べたとき」などの思考・判断に関する回答が低かった。

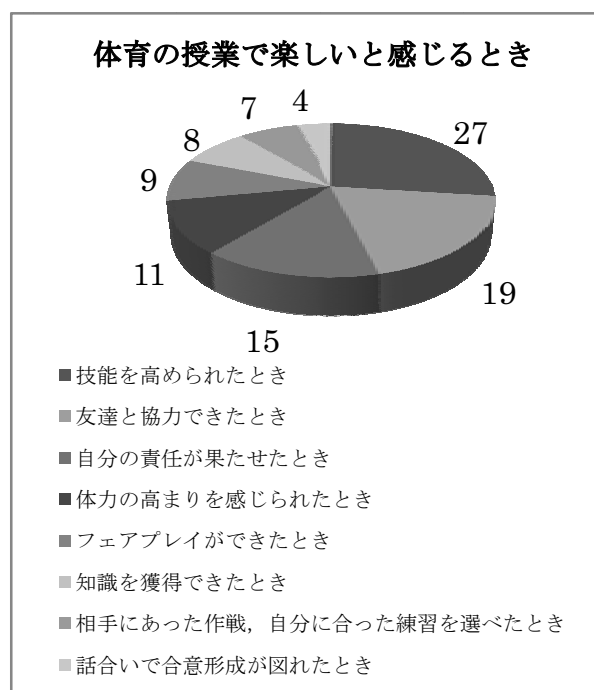
「技能」に関しては、「体育の授業で楽しいと感じるときは、どんなときか」との問いで27%と一番高く、「授業で何を身に付けられるか」との問いでも34%と一番高かった。

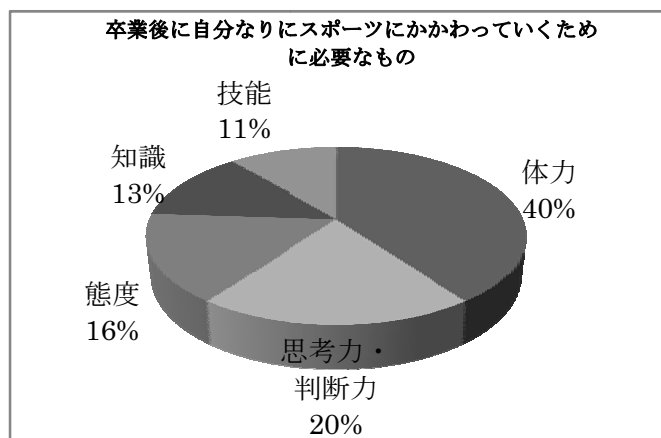
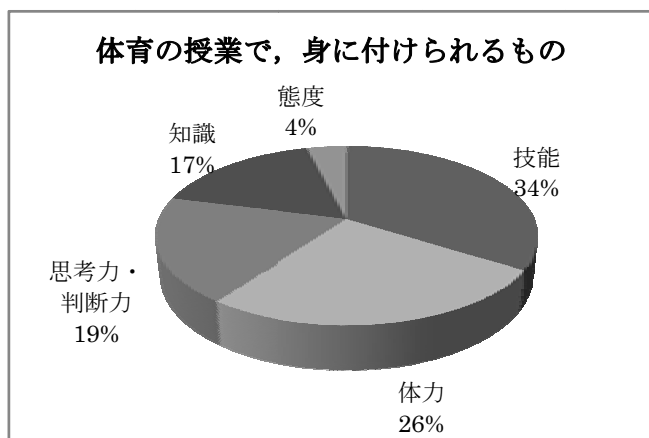
しかし「卒業後に自分なりにスポーツにかかわっていくために一番大事なものは何か」と

の問いに対して「技能」をあげている生徒の割合は11%と一番低かった。

生徒の意識から「体育の授業」と「生涯にわたる豊かなスポーツライフ」とのつながりが低いことが分かった。

「知識」に関しては、「体育の授業において楽しいと感じるときはどんなときか」の問いで8%、「授業で何を身に付けられるか」の問いでは17%、「卒業後に自分なりにスポーツにかかわっていくために一番大事なものは何か」の問いでは13%であった。いずれの質問でも、低い値であった。





(3) 本校の課題

これらのことから、次のような課題が浮かび上がってくる。

知識を身に付けることができる素地をもっている生徒が多いにもかかわらず、体育の授業や生涯にわたる豊かなスポーツライフにおいて、知識を身に付けることの重要性を認識している生徒が少ない。

「体育の授業」と「生涯にわたる豊かなスポーツライフ」とのかかわりに対して、関連付けて考えている生徒が少ない。

体育の授業が「技能重視」になっていることがうかがえる。

体育の授業が、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるものになっているのか、振り返る必要がある。

これらのことを踏まえ、本校の生徒が卒業後においても、実生活、実社会の中などで継続的なスポーツライフを実践することができるようにするためには、体育の授業において「運動の楽しさや喜びを深く味わえるよう義務教育段階で培った基礎的な運動の技能や知識を生徒の状況に応じて伸張させるとともに、それらを活用して、自らの運動課題を解決するなどの学習をバランスよく行うこと」を視野において授業実践することの大切さを改めて感じた。

その中でも、本校の生徒には「義務教育段階で培った知識の伸張」と「知識を活用して自らの運動課題を解決することの経験」が大切だと考える。その理由の一つは、これまでの学習経験において、「知識を活用することの経験不足」や「知識への関心の低さ」にある。二つ目の理由は、将来的に、生徒がスポーツにかかわりたいと感じたとき、本校の生徒にとって、それを支えるのは知識だと考えるからである。「スポーツをする」にも「スポーツをみる」にも「スポーツを支える」にも、知識という基盤があってこそ、スポーツの楽しさを深く味わうことができると思われる。

以上の理由から、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

体育の授業構築・実践において、次の三つの視点に重点を置いた指導などを展開していけば、生徒が、生涯において豊かなスポーツライフを実践していくための知識を深めることができるであろう。

- (1) 身に付けた知識を技能の習得などに活用できるようにするための単元計画の作成
- (2) 生徒が主体的に学ぶことができるための教師のかかわり方の工夫
- (3) 学習評価の工夫

4 研究内容

(1) 身に付けた知識を技能の習得などに活用できるようにするための単元計画の作成

知識の理解を基に運動の技能を身に付けたり、運動の技能を身に付けることで一層その理解を深めたりできるように、単元の前半に知識を身に付ける学習を位置付け、その後、技能や思考力・判断力を身に付ける学習を位置付ける。

また、単元計画には評価内容を位置付け、(3)の学習評価の工夫との関連を図る。

(2) 生徒が主体的に学ぶことができるための教師のかかわり方の工夫

人から与えられた知識ははがれやすいものであり、自分で獲得した知識ははがれにくいものである。そこで、運動の行い方などの知識を教師が一方的に教えるのではなく、学習活動や生徒同士の交流の中で気付かせるよう支援したり、全員で共有させることで深めていく場を設定したりすることで、生徒自身が知識を獲得し、深めていけるようにする。

(3) 学習評価の工夫

ア 指導機会と評価機会を明確にするために、単元計画に評価内容を位置付け、それらを意識した授業展開をする。

イ 知識を活用して技能や態度が高められるように、技能と態度の評価（観察評価）については学習期間を保証する。

ウ 一授業において、多数の観点を入れない。

エ 学習カード等を工夫し、生徒一人一人に学習した内容がどのくらい身に付いているかを評価し、指導と評価の一体化を図る。

5 実践事例

(1) ソフトボール

ア 生徒観（ソフトボールを選択した生徒の実態）

ソフトボールを選択した生徒は興味をもって選択しているものの、運動の行い方などがあまり身に付いていない生徒が多い。実態としては、小・中学校において、ベースボール型ゲームを学習してきている生徒が少なく、また、ベースボール型ゲームを学習してきてはいるものの、運動の行い方があまり身に付いていない生徒が多い。また、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合うという楽しさを味わった経験も少ない。

イ 教材観

「ベースボール型」とは、身体やバットの操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻守を規則的に交代し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合うゲームである。2学年次では、ソフトボールにおいて「状況に応じたバット操作と進塁をねらう動き、安定したボール操作、状況に応じた守備などによって攻防を展開すること」をねらいとしている。

ウ 指導観

そこで、この単元では、始めに「投げる、打つ、走る」といった局面ごとの技術の名称やそれぞれの技能の向上につながる重要な動きのポイントを知識として身に付けさせる。その後、動きのポイントをもとに運動の技能を身に付けたり、運動の技能を身に付けることで一層その

知識を深めたりできるようにしていく。

また、学習カードを使用し、生徒に自己評価させたり、本時の学習内容と身に付けたことを書かせたりすることで、生徒一人一人の学びを見取ることとする。

エ 授業の実際

本時は、身に付けた知識や技能を活用して課題を解決し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合う楽しさを味わうことができるように「1アウト、ランナー2塁からの攻防」という場を設定した。

その結果攻撃側の生徒は、「ねらった方向への打ち返し」を意識して活動することができた。また、守備側の生徒は、「タッチプレイかフォースプレイかの瞬間的な判断」を意識して活動することができた。しかし、その動きを実行しようとしても、技能が身に付いていなかったり、判断ミスにより失敗するチームもあった。

活動を通して、生徒は、課題解決のためには、技能を身に付けるための練習や打球やランナーの位置による様々なケースに対しての十分な理解が必要だということに気付き、次時の学習への意欲を高めることができた。

(2) バレーボール

ア 生徒観 (バレーボールを選択した生徒の実態)

バレーボールを選択した生徒は、男子と女子の割合がおおむね1対2となった。男子は体育の授業で経験してきた生徒が多く、女子は、部活動による経験者が多い。

そのような生徒の集団なので、「知識・理解」「技能」が、身に付いている生徒とそうでない生徒の差が大きい。そのため、試しのゲームを実際に行ってみると、プレイの面でも審判の面でも、バレーボール部に所属していた生徒の力に頼ってしまう現状がある。

イ 教材観

「ネット型」とは、コート上でネットをはさんで相対し、身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである。本校では選択種目として、バレーボール、バドミントン、卓球、テニスを設定している。

バレーボールは、道具を使用しないので、身に付けた知識を基にして、ネット型に共通する動き、(状況に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空間を作り出すなどの攻防を展開すること) や作戦・戦術の考え方を身に付けやすい教材だと考える。

ウ 指導観

バレーボールは、生徒が高等学校卒業後にかかわることが多いスポーツの一つである。例えば、会社や大学等でレクリエーションとして取り上げられることが多かったり、保護者となって学校のバレーボール大会に参加したりすることも多い。その際、男女差や経験差がある集団で「バレーボールを楽しむ」とは何かということを経験すること、そして、ゲームの審判や大会を運営することで人の役に立つことが、豊かなスポーツライフを実践することにつながると思う。

そこで、2学年のこの単元では、単元のはじめに試しのゲームを自分たちで行わせる。そこであげられた課題から、生徒に自分たちに必要な学習内容を実感させることで知識を深める大切さにも気付かせ、単元を進めていく。また、自分のチームの実態から目標を決めさせ、課題

解決のための練習やゲームを通して男女差や技能差がある集団での楽しさとは何かということを考えさせる。そして、単元の後半には審判の仕方を学習する時間を設定し、バレーボールのルールや用語をしっかりと身に付けさせ、単元の最後にはそれを活用して自分たちで試合ができるようにする。

エ 授業の実際

本単元では、単元の後半には審判も生徒が行う「リーグ戦」が行えるように、単元構成をした。また、最後の時間には、評価として「総括」を位置付け、生涯のかかわり方について指導することにより、体育の授業が、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるものになっているのか、教師の指導についても振り返ることができるようにした。

実際の授業では、男女が混在し、技能の定着も様々なメンバーで構成されるチームで、自分たちはどのようなゲーム内容を目指すのか、というチームの目標を立てさせたことにより、生徒は、バレーボールの経験や技能・知識のレベルなどについてチーム内で確認し、具体的な学習の内容を設定したり、役割分担等を決めたりすることができた。

学習指導要領解説内容	時間	指導内容	ワークシート	評価内容及び方法				
			記入	関・意・態	思・判	技能	知・理	
【関心・意欲・態度】	1	役割を積極的に引き受け、自己の役割を果たそうとすること(態度)						
フェアなプレイを大切にしようとする		健康・安全を確保すること(態度)						
役割を積極的に引き受け、自己の役割を果たそうとすること	2	体力の高め方(知識)	知識				体力の高め方	
話し合いに貢献しようとする		技術の名称や行い方(知識)						
健康・安全を確保すること	3	運動の行い方のポイントを知る(サービスとつなぎ)	知識				運動の行い方のポイント	
【思考・判断】		技能						
自己・相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶこと	4	運動の行い方のポイントを知る(ねらった場所への打ち返し)	知識				運動の行い方のポイント	
仲間に技術的な課題、有効な練習方法の選択について指摘すること		技能						
合意を形成するための適切なかかわり方を見付けること	5	運動の行い方のポイントを知る(高い位置からの打ち込み)	知識	健康安全の確保			運動の行い方のポイント	
健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選ぶこと		技能						
球技を継続して楽しむための自己のかかわり方を見付ける	6	運動観察の方法を理解する(知識・理解)	思考・判断		仲間の技術的な課題の指摘			
		仲間に技術的な課題を指摘している(思考・判断)						
【技能】バレーボール	7	運動の行い方のポイントを知る(フォーメーション)					運動の行い方のポイント	
ねらった場所へのサービス		技能						
空いた場所やねらった場所への打ち返し	8	グループの課題を見付けて、練習方法を選ぶ。(思考・判断)	思考・判断		課題を見付けて練習方法を選ぶ	技能		
攻撃につながる高さや位置へのつなぎ		話し合いに貢献しようとする(態度)						
ネット際の防御や攻撃	9	ゲームのルールの確認と審判法を知る。(知識・理解)	知識				審判法	
強い振りでの高い位置からの打ち込み								
ポジションに応じたボール操作	10	自己・相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶ。(思考・判断)	思考・判断		作戦や戦術を選ぶ	技能		
空いている場所へのカバーの動き								
フォーメーションの動き	11	フェアなプレイを大切にしようとする(態度)				技能		
【知識・理解】	12	合意を形成するための適切なかかわり方を見付ける。(思考・判断)	思考・判断	合意形成に貢献	合意形成するための関わり方			
技術の名称や行い方								
体力の高め方	13	生涯の関わり方を選ぶ(思考・判断)	思考・判断	総括	生涯のかかわり方を選ぶ	総括	総括	
運動観察の方法								
試合の行い方								

6 研究の成果と課題

(1) 成 果

ア ソフトボール

生徒は、授業で得た知識を活用しながら練習やゲームを行うことで、ルールと攻守の連係プレイの動き方などの理解を深めることができた。また、ソフトボールの特性を学んだことで、常に周囲の安全を確認しながら練習を行ったり、積極的にプレイすることの重要性を理解したりするなど、態度面での向上も見られた。

「1アウト、ランナー2塁」という場を設定したことで、生徒が、学習したことをゲームで生かす難しさや動きのポイントの理解の必要性を感じながら、学習を進めることができた。

ゲーム後に活動を振り返る言語活動の場を設定し、意見交換を行った。その際、なかなか話合いが進まないチームには、教師が「ランナーを進めるためにどの方向へ打ち返すのがよいのか」「自分の技能でできるのか」「打球の位置によって守備はどう動くのか」などの視点を与えると、話合いが深まった。結果として、自分を犠牲にして仲間を生かす攻撃の精神や守備でのカバーの必要性を理解し、意図的にプレイを組み立てる機会が見られるようになった。振り返る活動において、生徒が主体的に話合いを進めるために、教師が視点を与えるというかわりには効果的だったと考える。

イ バレーボール

生徒は、男女が共修する中で、既習の知識を生かして、個人的技能や集団的技能を發揮しながら攻防を繰り返したり、チームとしての戦術を展開したりして、バレーボールならではの楽しさを感じることができた。指導者が、バレーボールの特性として、相手に邪魔されることなく自分たちの技能や作戦・戦術を發揮できるという視点を示したところ、生徒は、生涯スポーツとして自分たちがかわりやすいことに気付くことができた。

既習の知識や技能を活用して運動課題を解決する学習を積極的に位置付けたことで、生徒同士が、既習内容を生かして教え合ったり、関わったりする姿が見られた。また、自分の役割に応じたボール操作や連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防の楽しさも感じ取っていた。

チームの目標を設定させたことで、学習に主体的に取り組んだり、作戦などについての話合いに貢献しようとしたりする生徒の姿を見ることができた。また、様々な技能や知識をもつ仲間と楽しくプレイすることを通して、フェアプレイを大切にしようとする、自己の責任を果たそうとする、などの態度の高まりがみられるようになった。

ウ 全 体

二つの単元において、身に付けた知識を活用できるようにするための単元計画を作成して授業を展開したことで、教師自身も、常にその視点をもって授業を行うことができた。また、授業のねらいも明確にすることができた。そのため、生徒が、課題解決や成功の体験を多く得ることができるようになった。

生徒に対して、生涯において豊かなスポーツライフを実践していくための視点である「する」「みる」「支える」というかわり方を伝えたことで、知識・理解に関する興味が高まったと感じる。

こうした授業を展開してきたことで、部活動において、生徒が効果的な練習方法を工夫した

り、既習の知識を体力づくりに生かしたりして効果を上げるようになった。

(2) 課 題

ア ソフトボール

「1アウト、ランナー2塁」という場を設定したが、生徒は、一気に得点をあげる方法を好む傾向があり、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合うというソフトボールの特性が浸透していないことがうかがえた。今後は、ソフトボールの特性である自分を犠牲にして仲間を生かし、得点チャンスを作ることの重要性を理解できるように、教師の場面設定などを工夫したい。

生徒にルールや審判法を教え、その後の練習やゲームの場で深めることをしてきたが、単元の中で、確実に理解させることは難しいと感じた。学校全体で、1学年と2・3学年の目指す姿を明確にして取り組んでいきたい。

イ バレーボール

「動きのポイント」を知識として身に付けさせた後、生徒がそれらを活用して技能を身に付けることができるように学習を進めてきたが、「わかる」けれども「できない」という生徒がいた。特に、個人的な技能の向上面ではなく、連係動作を身に付けることがなかなかできないということが課題として残った。

ウ 全 体

このような授業を展開してきたものの、スポーツへのかかわりを運動不足の解消やダイエットの一つとして理解している生徒が少なくない。今回の取組により、授業を通して、スポーツの知識としての理解を進めることはまだまだ十分とはいえないが、これらの研究内容を継続することで、豊かなスポーツライフを実現する過程の糸口を見つけられるように感じた。

今後も幅広い視点から、知識を深めることができる体育授業の研究を継続し「高等学校の体育授業」作りに取り組んでいきたいと考える。

【MEMO】

第10分科会

福島県立福島東高等学校

研究主題

自己や仲間の運動課題を見つけ、課題解決に主体的に取り組む学習により、豊かなスポーツライフを实践する資質や能力を高める体育授業

日程

9:00	9:45	10:35	10:45	11:35	13:00	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	第1学年	球技（ゴール型・バスケットボール）	菅野 真幸	体育館
公開授業②	第1学年	武道（柔道）	佐藤 裕隆	武道場

学校所在地



交通機関

☆路線バス
福島駅東口2番乗り場
福島交通
藤田・梁川・保原線
「東高校前」下車 徒歩2分

福島県立福島東高等学校



所在地 〒960 - 8107 福島県福島市浜田町12 - 21
校長 吉田 豊彦
生徒数 841名 (21学級)
連絡先 TEL 024 - 531 - 1551 FAX 024 - 533 - 7548
E-mail netmaster@fukushimahigashi-h.fks.ed.jp
URL <http://fukushimahigashi-h.fks.ed.jp>

【教育目標】

新しい時代における自己の役割を確かめ、社会に貢献できる有意な人間を育てるために、知・徳・体の調和を重んじ、豊かな教養と正しい判断力を身につけさせることを目標とする。

【学校紹介】

本校は、新しい構想に基づいたモデル校として、昭和55年に1学年普通科6クラスの男子校として開校した。県都である福島駅からは徒歩約20分の場所に位置し、近隣には中学校や高等学校が立ち並ぶ文教地区にある。福島市中心部の学校でありながら、野球、サッカー、ハンドボール、陸上競技がほぼ同時に実施できるグラウンド、第1・2体育館、テニスコート3面、屋外プールなど、施設・設備にも恵まれている。創立時からの卒業生の累計は1万人を超え、そのほとんどは4年制大学へ進学し、国内外を問わず各方面で活躍している。

平成7年度からは男女共学となり、福島東高校は新しい歴史を刻み続けている。

1 研究主題

自己や仲間の運動課題を見つけ、課題解決に主体的に取り組む学習により、豊かなスポーツライフを実践する資質や能力を高める体育授業

2 研究主題設定の理由

(1) 本校の教育方針と生徒の特徴から

本校は「創造 協調 躍進」を校訓とし、昭和55年の開校以来、今年度で創立37年を迎えた比較的新しい高校であるが、これまで本校を巣立っていった約12,000人の卒業生は、県内をはじめ国内外で活躍しており、その伝統は県内有数の進学校として脈々と受け継がれている。さらに、開校当初より「文武両道」をモットーに、生徒一人一人が「文」と「武」それぞれの能力を開花できるよう教職員全員で指導・支援に当たりながら、豊かな教養と鍛えた心技体を兼ね備えた社会に貢献できる有意な人材の育成を目標に教育活動を展開している。

また、本校生徒の特徴としては、中学校時代に生徒会やクラス役員などを務めた者や、運動部活動でチームの中心選手であった者が多い。それらの生徒が、学校行事をはじめ委員会活動や部活動などの様々な場面でリーダーシップを発揮し活躍することで、学校全体に自主自立の精神が醸成されている。部活動においては運動系、文化系を問わず毎年、東北大会や全国大会へ出場しており、最近では陸上競技部、弓道部、テニス部、山岳部、合唱部、放送委員会が全国大会出場を果たしている。平成28年度の運動部活動の加入率は、男子が約80%、女子が約42%である。

(2) 生徒の実態と教師の授業への取組から

平成23年度以降（東日本大震災以降）の本校の新体力テストの経年変化から、総合評価AB段階者の合計割合が減少傾向にあり、生徒の体力・運動能力に対する震災の影響が顕在化していることがわかった。このことから、自己の課題に応じて体力を高めることの必要性の認識も含めた「体力の向上を図る能力の育成」が十分図られていないことが考えられる。

全校生徒に対する「体育の授業は好きですか」という意識調査からは、男女共に体育に対しておおむね愛好的な意識をもっていることが分かった。しかしながら、各学年の体育に対する意識の構成割合に顕著な差異が見られないことから、高校3年間の授業を通じて、生徒達が体育に対してより愛好的な意識をもつような取組に課題があるのではないかと考えられる。

教師側の授業への課題として、生徒達が自己や仲間の運動課題の解決を目指して互いに助け合い教え合いながら、動きの獲得や技ができる喜びなどの成功体験を得ることによって、各運動領域の特性や魅力に深く触れる経験や機会が不足していることを感じており、生徒の学習への主体的な取組が十分図られていないことの原因の一つと考えられる。

以上の現状や課題を踏まえ、生徒が基礎的な運動の技能や知識を活用して、自己や仲間の運動課題を見付けるとともに、課題を指摘したり、課題解決のアイデアを伝えあったりする学習活動の充実を図ることにより、運動の楽しさや喜びを深く味わい、主体的に学習へ取り組めるよう、授業内容・指導方法を工夫・改善することが、本校生徒の「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実践するための資質や能力の育成」につながると考え、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

「平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果（以下、中学2年生の調査結果を引用）から、総合評価Aの生徒の場合、「ふだんの保健体育の授業では、友達と助け合いながら、役割を果たすような活動を行っている」、「ふだんの保健体育の授業では、友達同士やチームの中で話し合う活動を行っている」と回答した割合は、それぞれの質問項目で10～14ポイント程度、全国平均を上回っている。また、「保健体育の授業で学習している内容は、将来役に立つ」と回答している割合も、12～16ポイント程度、全国平均を上回っている。さらに、「体育の授業の楽しさ」を感じている生徒ほど、同じ質問項目に対して「行っている」と回答している割合が全国平均を上回っている。

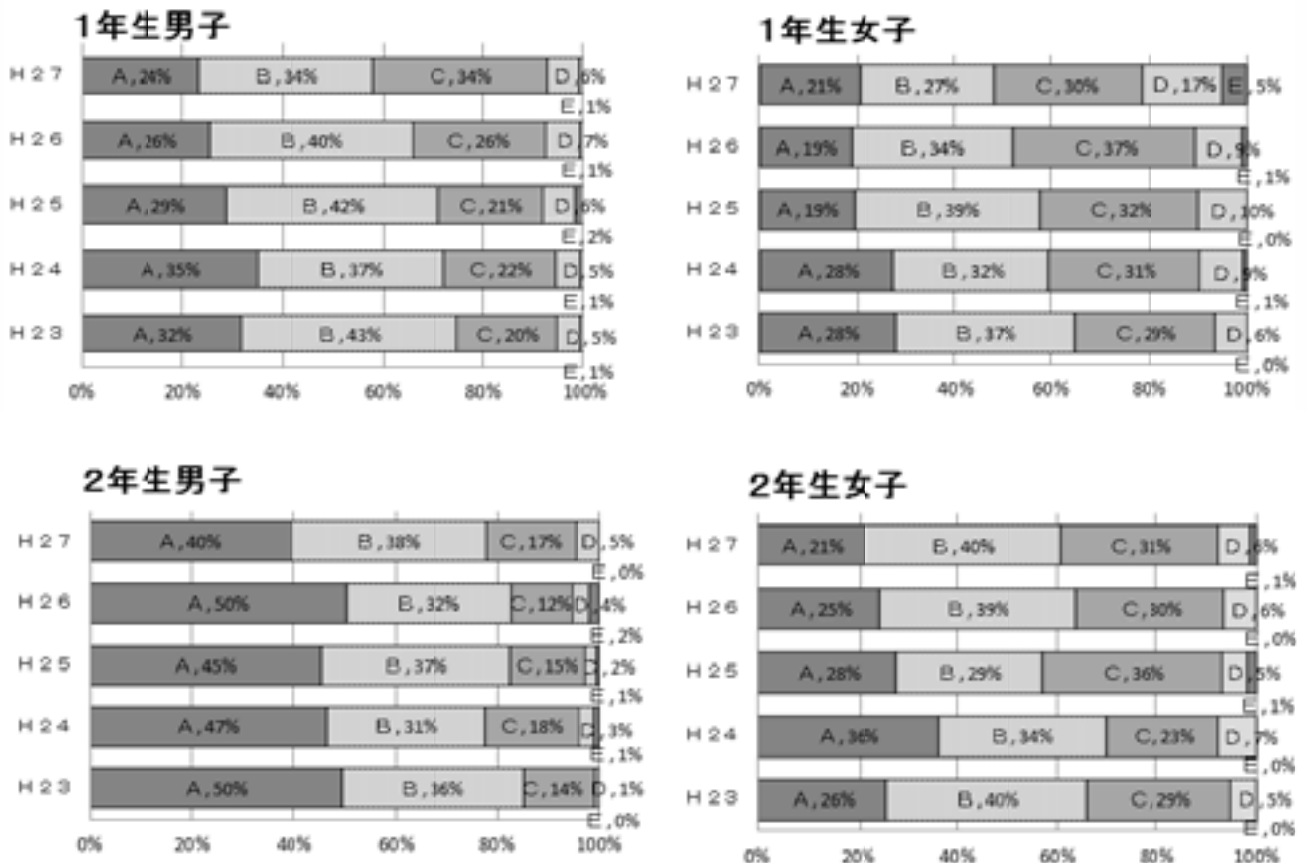
発達段階による体力・運動能力及び意識の違いを踏まえる必要はあるが、高校生についても中学生とほぼ同様の傾向を示すのではないかと考える。よって、生徒が運動の技能や知識を活用して、自己や仲間の運動課題を見付けたり、課題解決のアイデアを伝えあったりする学習活動の実践により、動きの獲得や技ができる喜びを感じ、運動の楽しさや喜びを深く味わうことで、学習に主体的に取り組む態度が育まれ、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実践するための資質や能力の育成を図ることにつながると思う。

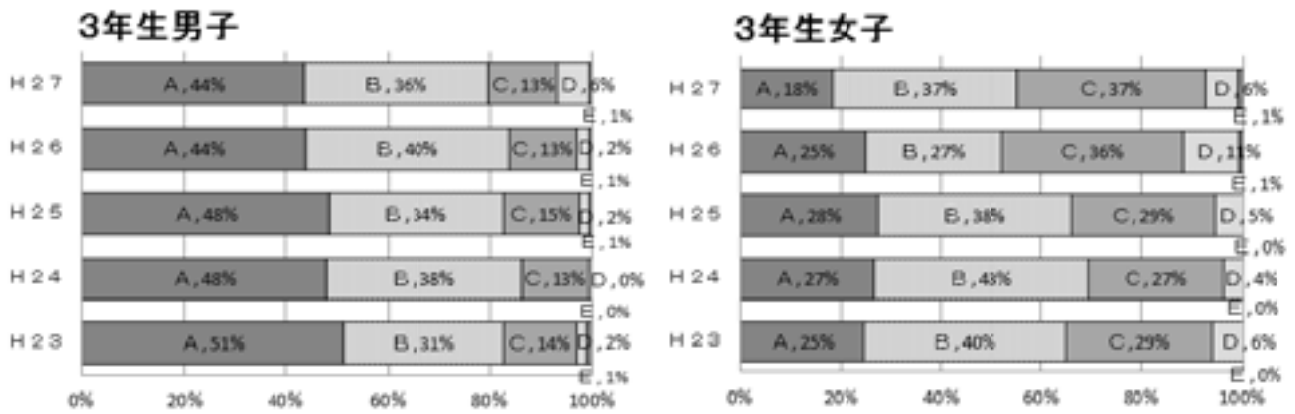
4 研究内容

実態を捉え、主体的・協働的な学びを促す指導計画と評価

(1) 新体力テストの経年変化からみた本校生徒の実態について（1～3年生男女）

以下の図1は、平成23～27年度までの、計5年間の新体力テストの経年変化を示したものである。全体的に総合評価A B段階者の合計割合が減少傾向にあり、特に平成27年度の1学年女子ではA B段階者の合計割合が50%を下回り、体力、運動能力の低下が顕著である。

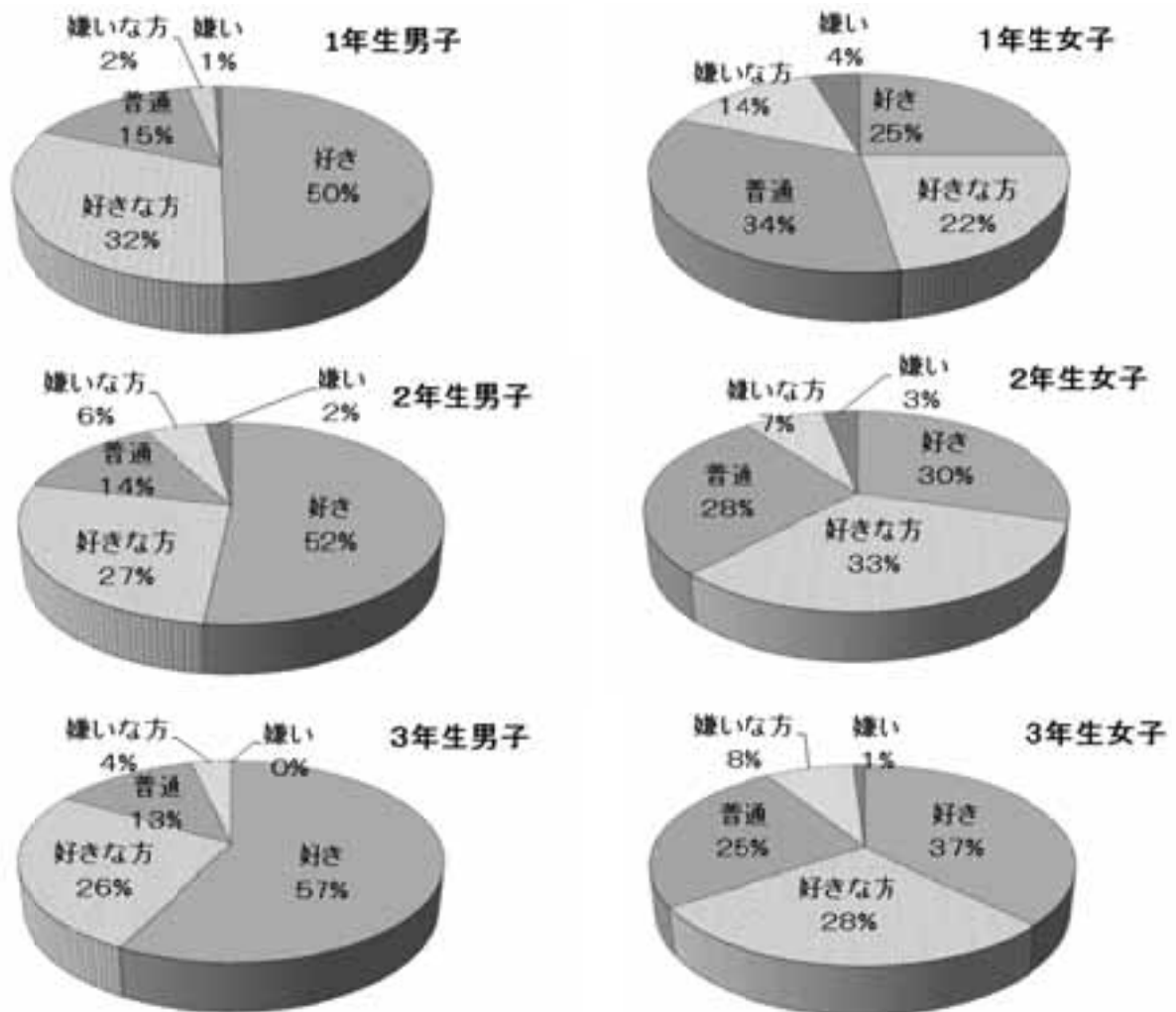




[図1] 平成23年度（東日本大震災）以降の新体力テスト総合評価の経年変化

(2) 体育の授業に関する意識調査からみた本校生徒の実態について（1～3年生男女）

以下の図2は、全生徒を対象に行った体育に関する意識調査の結果である。「体育が好きですか」という質問項目に対して「好き」または「好きな方」と回答した生徒の合計割合は、1年生男子が82%、2年生男子が79%、3年生男子が83%、1年生女子が47%、2年生女子が63%、3年生女子が65%であった。



[図2] 体育に関する意識調査結果「体育の授業は好きですか」

5 実践事例資料

第1学年「バスケットボール」指導内容・評価方法及び主な学習の流れ

指導内容及び学習の流れ、評価機会(バスケットボール)入学年次

	学習指導要領解説例示・内容	学習指導要領解説例示・内容
【技能】	<p>【ボール操作】</p> <p>※守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つこと</p> <p>①ゴールの枠内にシュートをコントロールすること</p> <p>②味方が操作しやすいパスを送ること</p> <p>③守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること</p> <p>【ボールを持たないときの動き】</p> <p>④ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れること</p> <p>⑤パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること</p> <p>※ボール保持者が進行できる空間を作り出すために、進行方向から離れること</p> <p>※ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守ること</p> <p>※ゴール前の空いている場所をカバーすること</p>	<p>【態度】</p> <p>③互いに助け合い高め合おうとする(互いに助け合い教え合うことは、相互の信頼関係を深めたり、課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすしたりすること)</p> <p>④健康・安全を確保する(用具の安全確認の仕方、段階的な練習の仕方、けがを防止するための留意点などを理解し、取り組めるようにすること)</p> <p>【知識】</p> <p>⑩12 球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力【中1・2内容】</p> <p>⑩3 運動観察の方法【中3内容】</p> <p>①技術などの名称や行い方(技能の向上につながる動きの重要なポイントがあること、また、それらをゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントとなること、それらを高めるための安全で合理的な練習の仕方があること)</p> <p>②体力の高め方(種目に必要な体力を技能に関連させながら高めることが重要であること)</p> <p>③課題解決の方法(自己に応じた目標の設定、目標を設定するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、ゲームなどを通して学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があること)</p> <p>※競技会の仕方(ゲームのルール、試合方式、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方)</p> <p>※審判の方法</p>
【態度】	<p>①球技の学習に自主的に取り組む(勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携したゲームが展開できるようにすることに自主的に取り組めるようにする)</p> <p>※フェアなプレイを大切にしようとする(ルールやマナーを大切にすることは、友情を深めたり連帯感を高めたりするなど、生涯にわたって運動を継続するための重要な要素となること)</p> <p>②役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとする(自己の責任を果たすことは、活動時間の確保につながることやチーム内の人間関係がよくなること、自主的な学習が成立すること)</p> <p>※合意形成に貢献しようとする(相互の信頼関係を深めるためには、仲間を尊重し相手の感情に配慮しながら発言したり、提案者の発言に同意したりして話し合いを進めることなどが大切であること)</p>	<p>【思考・判断】</p> <p>①提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶこと</p> <p>②仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘すること</p> <p>※作戦などの話し合いの部分で、合意を形成するための適切なかわり方を見付けること</p> <p>※健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選ぶこと</p> <p>※球技を継続して楽しむための自己に適したかわり方を見付けること</p>

◎【各例示の※印について】・・・球技の他の型で取り扱うか(【技能】は除く)、その次の年次以降の例示に関連させ取り扱うこととした。

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
技能	<p>攻防やゲームの様相 仲間と連携してゴール前の空間を使ったり、ゴール前の空間を作り出したして攻防を展開できるようにする。</p>													
技能	①ゴールの枠内にシュートをコントロールする		③守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープする					⑤パスを出した後に次のパスを受ける動きをする						
技能			指導内容の重点割合					指導内容の重点割合						
技能			②味方が操作しやすいパスを送る					④ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れる						
態度	<p>勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携したゲームが展開できるようにすることに自主的に取り組めるようにする。</p>													
態度	④安全確保、けが防止等	②自己の責任を果たす	③互いに助け合い教え合う		①自主的に取り組む									
知識	<p>技能向上につながる重要な動きのポイントがあること、種目に必要な体力を技能に関連させ高め、課題解決の方法には過程があること等を理解できるようにする。</p>													
知識	⑩12種目特性(確認)	①動きのポイント等	⑩3運動観察の方法(中学校の指導内容の確認)	①動きのポイント等		①動きのポイント等		①動きのポイント等		①動きのポイント等		①動きのポイント等		
知識	②体力の高め方	③課題解決の方法		③課題解決の方法		③課題解決の方法		③課題解決の方法		③課題解決の方法		③課題解決の方法		
思考・判断	<p>これまで学習した知識や技能を活用して、チームや自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。</p>													
思考・判断							②仲間の課題の指摘、有効な練習方法の選択		②仲間の課題の指摘、有効な練習方法の選択		②仲間の課題の指摘、有効な練習方法の選択		①チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶ	
評価方法	関意態		態④観察		態②③観察						態①観察			態①～④観察
評価方法	思判						②学習カード		②学習カード		②学習カード	①学習カード		
評価方法	技能			①観察		③観察		②観察				④⑤観察		態①～⑤観察
評価方法	知理	②学習カード	①③学習カード		①③学習カード		①③学習カード		①③学習カード		①③学習カード			

時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
ねらい	<p>中学校段階の学習を確認するとともに確実な定着を図る</p>							<p>自己や仲間の課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができるようにする</p>				<p>仲間と連携した動きを生かしてゲームを楽しむ</p>		
主な学習内容	<p>あいさつ、出欠確認と健康観察、準備運動・補強運動、本時の学習内容の確認</p>													
主な学習内容	<p>○オリエンテーション</p> <p>◆学習内容等の実態把握</p> <p>◆学習の進め方を知る</p> <p>◆種目特性(中学指導内容確認)</p> <p>◆体力の高め方</p> <p>◆安全確保</p>	<p>○班編成</p> <p>◆各役割の決定・内容確認</p> <p>技①:シュートコントロール</p> <p>◆シュートフォーム等</p> <p>○課題解決のためのタスクゲーム・ミニゲーム</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・ボールをキープするため、状況に応じてドリブルを使用しながら、既習の「技①」及び中学校でのパスの学習経験を生かして、シュート(得点)につなげる</p>	<p>技③:ボールをキープするドリブル</p> <p>◆ドリブルの基本技能等</p> <p>○課題解決のためのタスクゲーム・ミニゲーム</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・ボールをキープするため、状況に応じてドリブルを使用しながら、既習の「技①」及び中学校でのパスの学習経験を生かして、シュート(得点)につなげる</p>	<p>技②:味方が操作しやすいパスを送る</p> <p>◆パスの基本技能等</p> <p>○課題解決のためのタスクゲーム・ミニゲーム</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・味方が操作しやすいパスを送ることを意識し、既習の「技①③」を生かして、シュート(得点)につなげる</p>	<p>技⑤:パス後に次のパスを受ける動きをする</p> <p>技④:ゴールから離れる動きにより空間を作る</p> <p>◆パス&ラン、カット等</p> <p>○課題解決のためのタスクゲーム・ミニゲーム</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることによって空間を作り、既習の「技①②③」を生かして、シュート(得点)につなげる</p>	<p>○課題解決のためのタスクゲーム・ミニゲーム</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・ディフェンスを引き付けてゴールから離れる動きによってゴール前に広い空間を作り、既習の「技①②③⑤」を生かして、シュート(得点)につなげる</p>	<p>○班ごとの課題別練習</p> <p>◆提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶ</p> <p>○班対抗リーグ戦(5対5の公式ルールに近いゲーム)</p> <p>◆【ゲームのテーマ】</p> <p>・既習の「技①②③④⑤」を生かして、仲間と連携してゴール前の空間を使ったり、ゴール前の空間を作り出したして攻防を展開できるようにする</p>							
主な学習内容	<p>学習の振り返り、後片付け、整理運動、次時の確認、あいさつ</p>													

第1学年「バスケットボール」指導内容及び学習活動に即した評価規準

指導内容及び「学習活動に即した評価規準(第1学年 球技 ゴール型 バスケットボール)

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
<p>○上達していくためには繰り返し粘り強く取り組むことが大切であること。</p> <p>↓</p> <p>①球技の学習に自主的に取り組もうとしている。</p> <p>○自己の責任を果たすことは、活動時間の確保につながる。チーム内の人間関係がよくなること。自主的な学習が成立すること。</p> <p>↓</p> <p>②自己の責任を果たそうとしている。</p> <p>○互いに助け合い教え合うことは、相互の信頼関係を深めたり、課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすくなりやすくなること。</p> <p>↓</p> <p>③互いに助け合い教え合おうとしている。</p> <p>○用具の安全確認の仕方、段階的な練習の仕方、けがを防止するための留意点などを理解し、取り組めるようにすること。</p> <p>↓</p> <p>④健康・安全を確保している。</p> <p>指導内容</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div> <p>Ⓞ: 中学校学習指導要領解説で示されている指導内容</p> <p>● 数字 評価規準項目</p>	<p>○バスケットボールの技能の向上につながる重要な動きのポイントがあり、それらをゲーム中に適切に発揮することが攻防のポイントとなること。それらを高めるための安全で合理的な練習の仕方があること。</p> <p>↓</p> <p>①提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。</p> <p>Ⓞ運動観察の方法: ゲームの課題に応じて、ボール操作とボールを持たないときの動き並びにそれらに関連したプレイの判断に着目し観察することで、個人やチームの学習課題が明確になり、学習成果が高められること。</p> <p>↓</p> <p>②仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。</p>	<p>○ボールの持ち方、各関節をスムーズに連動させるシュートフォーム、バックボードを有効活用すること。</p> <p>↓</p> <p>①ゴールの枠内にシュートをコントロールすることができる。</p> <p>○上体が起きた安定したフォームから、強く、早く、正確なパスを送ること。味方の走る速度を弱めないパスを送ること。</p> <p>↓</p> <p>②味方が操作しやすいパスを送ることができる。</p> <p>○上体を立てて視野を広げ、膝を曲げ腰を落とした安定した姿勢でドリブルをすること。</p> <p>↓</p> <p>③守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすることができる。</p> <p>○味方からパスを受けるような動きをしながら左右に広がり、守備者を引き付けてゴールから離れること。</p> <p>↓</p> <p>④ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れることができる。</p> <p>○パスを出した後は、「ゴールの方向、パスの方向、ボールと反対方向、空いている場所」に動くこと。</p> <p>↓</p> <p>⑤パスを出した後に次のパスを受ける動きをすることができる。</p>	<p>○ゴールの枠内にシュートをコントロールすること。</p> <p>○味方が操作しやすいパスを送ること。</p> <p>○守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること。</p> <p>○ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れること。</p> <p>○パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること。</p> <p>↓</p> <p>①バスケットボールの技能の向上につながる動きの重要なポイントや、それらを高めるための安全で合理的な練習の仕方について、理解したことを書き出したりしている。</p> <p>○球技を継続することで、ゴール型では、主として巧緻性、敏捷性、スピード、全身持久力などが型に求められる動きに関連して高められること。</p> <p>○種目に必要な体力を技能に関連させながら高めることが重要であること。</p> <p>↓</p> <p>②バスケットボールに関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。</p> <p>○課題に応じて、ボール操作とボールを持たないときの動き、並びにそれらに関連したプレイの判断に着目し観察することで、個人やチームの学習課題が明確になり、学習成果が高められること。</p> <p>↓</p> <p>③運動観察やゲームなどを通して、課題解決のための練習法などについて、理解したことを書き出ししたりしている。</p>

第1学年「柔道」指導内容・評価方法及び主な学習の流れ

指導内容及び学習の流れ、評価機会(柔道)入学年次

	学習指導要領解説例示・内容	学習指導要領解説例示・内容
【技能】	<p>「相手の動きの変化に応じた基本動作」</p> <p>○基本動作 ※姿勢と組み立ては、相手の動きの変化に応じやすい自然体で組むこと ※進退動作では、相手の動きの変化に応じたり足、歩み足、継ぎ足、体の移動をすること ①崩しては、相手の動きの変化に応じて相手の体勢を不安定にし、技をかけやすい状態をつくること ○受け身 ②相手の投げ技に応じて前回り受け身、横受け身、後ろ受け身をとること</p> <p>「基本となる技(投げ技・固め技の基本となる技)」</p> <p>○投げ技 ③取は前回りさばきから体落としをかけて投げ、受は前回り受け身をとること ④取は前回りさばきから大腰をかけて投げ、受は前回り受け身をとること ○投げ技の連絡(※技能や体力の程度に応じて取り扱う技を選択する) ⑤二つの技を同じ方向にかける技の連絡 【例】・大内刈りから小内刈りへ連絡すること・大腰から体落としへ連絡すること ⑥二つの技を違う方向にかける技の連絡 【例】・体落としから小内刈りへ連絡すること・大内刈りから体落としへ連絡すること ○固め技の連絡(※2、3時間目は「基本となる技」の復習) ⑦取は相手の動きの変化に応じて、けさ固め、横四方固め、上四方固めの連絡を行うこと ⑧受はけさ固め、横四方固め、上四方固めで抑えられた状態から、相手の動きの変化に応じて、相手を体側や、頭方向に返すことによる逃げること ○投げ技から固め技への連絡 ※投げ技から固め技への連絡 【例】・体落としからけさ固めへ連絡すること・小内刈りから横四方固めへ連絡すること</p>	<p>④互いに助け合い高め合うとする(互いに助け合い教え合うことは、相互の信頼関係を深めたり、課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすくなること)</p> <p>※合意形成に貢献しようとする(相互の信頼関係を深めるためには、対立意見が出た場合でも、仲間を尊重し相手の感情に配慮しながら発言したり、提案者の発言に同意を示したりして話し合いを進めることなどが大切であること)</p> <p>⑤健康・安全を確保する(用具や施設の安全確認の仕方、段階的な練習の仕方、けがを防止するための留意点などを理解し、取り組めるようにすること)</p> <p>⑫12 武道の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力【中1・2内容】</p> <p>⑬3 運動観察の方法【中3内容】</p> <p>※伝統的な考え方(克己の心や道を追求するといった考え方などをもつ我が国固有の文化である武道を学習することは、これからの国際社会で生きていく上で有意義であること)</p> <p>①技の名称や見取り稽古(武道の各種目で用いられる技の名称や用語があること、それぞれの技には、技の向上につながる重要な動きのポイントがあること、それらを高めるための安全で合理的な練習の仕方があること、武道特有の練習方法として見取り稽古があること)</p> <p>【見取り稽古】:他人の稽古を見て、相手との距離の取り方や相手の隙をついて勢よく技をしかける機会、技のかけ方や武道特有の気合いなどを学ぶことが有効な方法であること</p> <p>②体力の高め方(種目に必要な体力を技能に関連させながら高めることが重要であること)</p> <p>③課題解決の方法(自己に応じた目標の設定、目標を設定するための課題の設定、課題解決のための練習法などの選択と実践、試合などを通じた学習成果の確認、新たな目標の設定といった過程があること)</p> <p>※試合の仕方(試合のルール、運営の仕方や役割に応じた行動の仕方)、※審判の方法</p>
	【態度】	<p>①武道の学習に自主的に取り組む(技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、得意技を身に付けることに自主的に取り組めるようになる)</p> <p>②相手を尊重し、礼法などの伝統的な行動の仕方を大切にしようとする(相手を尊重し、勝敗にかかわらず対戦相手に敬意を払うこと、自分で自分を律する克己の心を表すものとして礼儀を守るという考え方があること)</p> <p>③役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとする(自己の責任を果たすことは、活動時間の確保につながることや自主的な学習が成立すること)</p>

◎[各例示の※印について]・・・その次の年次以降の例示に関連させ取り扱うこととした。

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
技能	相手の動きの変化に応じた基本動作から、基本となる技、得意技や連絡技を用いて、相手を崩して投げたり、抑えたりするなどの攻防を展開できるようにする。													
		⑦⑧「固め技の基本となる技」の復習		⑦⑧ I 相手の動きの変化に応じた、けさ固め、横四方固め、上四方固めの抑え方と逃げ方				⑦⑧ II けさ固め、横四方固め、上四方固めの連絡技						
態度	技を高め勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、得意技を身に付けることに自主的に取り組めるようになる。													
	②相手に敬意を払う ⑤安全、けが防止等	③自己の責任を果たす	④互いに助け合い教え合う		①得意技を身に付けることに自主的に取り組む									
知識	技の向上につながる重要な動きのポイントがあること、種目に必要な体力を技能に関連させ高めると、課題解決の方法には過程があること等を理解できるようにする。													
	④12種目特性(確認) ②体力の高め方	①動きのポイント、安全な練習の仕方	④3運動観察の方法(中学校の指導内容の確認)	①動きのポイント、安全な練習の仕方			①見取り稽古の仕方 ③課題解決の方法	①動きのポイント、安全な練習の仕方		③課題解決の方法				
思考・判断	これまで学習した知識や技能を活用して、自己や仲間の課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができるようにする。													
							①技能・体力の程度に応じた得意技を見付ける		③仲間の課題の指摘、有効な練習方法の選択		③仲間の課題の指摘、有効な練習方法の選択	②自己に適した攻防の仕方を選ぶ		
評価方法	関意態		⑤観察		②③観察			①観察	④観察					①～⑤観察
	技能			①②観察		⑦⑧ I 観察				③④観察	⑦⑧ II 観察	⑤⑥観察		①～⑧観察
知	②学習カード	①学習カード		①学習カード		①③学習カード		①学習カード		③学習カード				

時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
ねらい	中学校段階の学習を確認するとともに確実な定着を図る							自己や仲間の課題に応じた運動の取り組み方を工夫することができるようにする			得意技や連絡技を使って、攻防を楽しむ			
主な学習内容	あいさつ、出欠確認と健康観察、準備運動・補強運動、本時の学習内容の確認													
	<p>○オリエンテーション ◆学習内容等の実態把握 ◆学習の進め方を知る ◆種目特性(中学指導内容確認) ◆体力の高め方 ◆相手への敬意 ◆安全確保</p>	<p>○班編成 ◆各役割の決定・内容確認 ◆安全確保 ◆固め技の復習 ◆受け身 ◆投げ技の復習</p>	<p>技⑦⑧ I: 相手の動きの変化に応じた固め技(基本技)の抑え方逃げ方 ◆相手の動きの変化に応じての、けさ固め、横四方固め、上四方固めの抑え方と逃げ方の確認と習得(かかり練習・約束練習) ◆安全に配慮した姿勢からの攻防(自由練習)</p> <p>技③④: 投げ技(基本技)の確認と習得 ◆支え技系、まわし技系、刈り技系の確認と習得(かかり練習・約束練習) ※生徒の学習経験、技能・体力の程度に応じた技を取り扱う ◆技能や体力の程度に応じて、得意技を見付ける</p> <p>技②: 受け身 ◆投げ技との関連を重視して、受け身の段階的な指導を行う ◆2人1組で、安全に投げる、投げられる感覚を身に付ける</p>	<p>技⑦⑧ II: 相手の動きの変化に応じた固め技の連絡 ◆相手の動きの変化に応じての、けさ固め、横四方固め、上四方固めへの連絡(かかり練習・約束練習) ◆安全に配慮した姿勢からの攻防(自由練習)</p> <p>技③④: 二つの投げ技の連絡 ◆「二つの技を同じ方向にかける技の連絡」、「二つの技を違う方向にかける技の連絡」(かかり練習・約束練習) ※生徒の学習経験、技能・体力の程度に応じた技を取り扱う ◆技能や体力の程度に応じて、得意技を見付けるとともに、練習方法を選択する</p> <p>技②: 受け身 ◆投げ技との関連を重視して、受け身の段階的な指導を行う ◆2人1組で、安全に投げる、投げられる感覚を身に付ける</p>	<p>○班ごとの課題別練習 ◆提供された攻防の仕方から、自己に適した攻防の仕方を選ぶ</p> <p>○固め技のみ簡単な試合 ◆技能、体格や体力の程度に応じて対戦する</p> <p>○投げ技の約束練習・自由練習 ◆技能、体格や体力の程度に応じて対戦する(約束練習、条件を設定した自由練習)</p> <p>※受け身については、投げ技に関連して実施する</p>									
50	学習の振り返り、後片付け、整理運動、次時の確認、あいさつ													

第1学年「柔道」指導内容及び学習活動に即した評価規準

指導内容及び「学習活動に即した評価規準(第1学年 武道:柔道)

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
<p>○上達していくためには繰り返し粘り強く取り組むことが大切であること。</p> <p>↓</p> <p>①得意技を身に付けることに主体的に取り組もうとしている。</p> <p>○相手を尊重し、勝敗にかかわらず対戦相手に敬意を払うこと。</p> <p>○自分で自分を律する克己の心を表すものとして礼儀を守るという考え方があること。</p> <p>↓</p> <p>②相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとしている。</p> <p>○自己の責任を果たすことは、活動時間の確保につながることや自主的な学習が成立すること。</p> <p>↓</p> <p>③自己の責任を果たそうとしている。</p> <p>○互いに助け合い教え合うことは、相互の信頼関係を深めたり、課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすくなりやすくなること。</p> <p>↓</p> <p>④互いに助け合い教え合おうとしている。</p> <p>○用具や施設の安全確認の仕方、段階的な練習の仕方、けがを防止するための留意点などを理解し、取り組めるようにする。</p> <p>↓</p> <p>⑤健康・安全を確保している。</p> <p>指導内容</p> <p>○: 中学校学習指導要領解説で示されている指導内容</p> <p>●数字 評価規準項目</p>	<p>○基本動作を確実に習得しながら自己の技能や体力の程度に応じた技を選び、それを得意技として身に付けることができるよう、課題に適した練習に繰り返し取り組み、見取り稽古や試合などを通して学習の成果を確認し、さらに練習を重ねたり、練習方法を見直したりする過程があること。</p> <p>↓</p> <p>①自己の技能・体力の程度に応じた得意技を見付けている。</p> <p>○柔道の技の向上につながる重要な動きやポイントがあること、それら高めるための安全で合理的な練習の仕方があること、武道特有の練習方法としての見取り稽古があること。</p> <p>↓</p> <p>②提供された攻防の仕方から、自己に適した攻防の仕方を選んでいる。</p> <p>○見取り稽古の方法: 他人の稽古を見て、相手との距離の取り方や相手の隙をついて勢いよく技をしかける機会、技のかけ方や武道特有の気合いなどを学ぶことが有効な方法であること。</p> <p>↓</p> <p>③仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。</p>	<p>④「崩し」から相手の不安定な姿勢をとらえて技をかけやすい状態をつくる「体さばき」、「技のかけ」。</p> <p>④「崩し」と「体さばき」と関連させての前横後ろ受け身(段階的に姿勢を高くする)。</p> <p>↓</p> <p>◇基本動作</p> <p>①崩しでは、相手の動きの変化に応じて相手の体勢を不安定にし、技をかけやすい状態をつくることができる。</p> <p>◇受け身</p> <p>②相手の投げ技に応じて前回り受け身、横受け身、後ろ受け身をとることができる。</p> <p>○「基本となる投げ技」についてののかり練習で、同じ技を繰り返し練習し、崩し、体さばき、かけ方、力の用い方を身に付ける(固定姿勢→移動しながら)。</p> <p>○約束練習で、相手の動きを利用して素早く技をかける機敏な動作、正しい姿勢、崩し、体さばき、かけ方、力の用い方などの調和的な動きなどを身に付ける。</p> <p>↓</p> <p>◇投げ技</p> <p>③取は前回りさばきから体落としをかけて投げ、受は前回り受け身をとることができる。</p> <p>④取は前回りさばきから大腰をかけて投げ、受は前回り受け身をとることができる。</p> <p>◇投げ技の連絡</p> <p>⑤二つの技を同じ方向にかける技の連絡ができる。</p> <p>⑥二つの技を違う方向にかける技の連絡ができる。</p> <p>○「基本となる固め技」についての、固め技の姿勢や体さばきを用いながら、固め技の連絡の仕方、返し方、逃げ方などを身に付ける。</p> <p>↓</p> <p>◇固め技の連絡</p> <p>⑦取は相手の動きの変化に応じて、けさ固め、横四方固め、上四方固めの連絡を行うことができる。</p> <p>⑧受はけさ固め、横四方固め、上四方固めで抑えられた状態から、相手の動きの変化に応じて、相手を体側や、頭方向に返すことによって逃げるることができる。</p>	<p>・基本動作 ・受け身 ・投げ技 ・投げ技の連絡 ・固め技の連絡</p> <p>↓</p> <p>①柔道の技能の向上につながる動きの重要なポイントや、それら高めるための安全で合理的な練習の仕方について、理解したことを書き出したりしている。</p> <p>○武道は対人的な動きを中心とした全身運動であり、体力要素の中でも、柔道では主として瞬発力、筋持久力、巧緻性などに強く影響されること。</p> <p>○種目に必要な体力を技能に関連させながら高めることが重要であること。</p> <p>↓</p> <p>②柔道に関連した体力の高め方について、理解したことを書き出したりしている。</p> <p>○自己に適した得意技に高めるために、相手との距離の取り方や相手の隙をついて勢いよく技をしかける機会、技のかけ方など着目し観察することで、個人や仲間の学習課題が明確になり、学習成果を高められること。</p> <p>↓</p> <p>③運動観察や見取り稽古などを通して、課題解決のための練習法などについて、理解したことを書き出したりしている。</p>

6 研究の成果と課題

(1) 主な取組と成果

- ・ 「運動観察」や「見取り稽古」について、観察や見取りのポイントを生徒に十分理解させた上で、自己や仲間の動きなどを観察したり、見取ったりする活動を行わせた。また、各運動種目の技能指導の際には、技能の向上につながる重要な動きのポイントや、それらをもつための合理的な練習の仕方など、知識に関する指導内容が生徒に分かりやすく的確に伝わるよう提示方法を工夫した。取組の成果として、自己や仲間の技能や運動能力の程度に応じて解決すべき課題を見い出せるようになるなど、言語活動の内容充実が図られたことで学習への理解が深まり、生徒の授業へ主体的に取り組む意欲を促すきっかけになったと考える。
- ・ 「深い学びの過程の実現」、「対話的な学びの過程の実現」、「主体的な学びの過程の実現」というアクティブラーニングの視点を踏まえ、単元や各授業のねらいに沿って生徒の主体的、協働的な学びが促されるよう、教師による発問、学習カード、教材・教具の工夫、体育理論で学習した知識を活用する活動などを取り入れ授業の見直しを図った。取組の成果として、各生徒の学習カードへの振り返りが、研究に取り組む以前と比べて具体的になるとともに、自己や仲間の課題に応じて段階的な解決方法を選択し、仲間と互いに助け合い教え合いながら課題解決への練習に取り組む姿が見られるようになるなど、深い学びや対話的な学びの過程が充実し、生徒の学習への興味や関心を引き出すことができたと考える。
- ・ 新体力テストの測定結果を振り返ることで、自己の体力の課題を把握させた。また、その現状を踏まえて、それぞれの運動の特性や魅力に触れるために必要となる体力を高められるような補強運動を、生徒自らが各種目の技能との関連を図りながら考え、体力・運動能力の向上に取り組む時間を設定した。取組の成果として、筋力、瞬発力（全身持久力、筋持久力）、調整力（平衡性、巧緻性、敏捷性）、柔軟性などが、「健康に生活するための体力」と「運動を行うための体力」に密接に関係していることへの理解が図られたと考える。

(2) 研究の総括と今後の方向性

本研究の実践を通じて、「運動観察」や「見取り稽古」などにより自己や仲間の運動課題を見付け、課題を指摘し合ったり、課題解決のアイデアを伝え合ったりするなど、仲間と互いに助け合い教え合う過程のなかで、生徒達が運動の楽しさや喜びを深く味わいながら、主体的に学習へ取り組む場面が多く見られるようになった。それに伴い、「公正、協力、責任、参画などに対する意欲」、「健康・安全への態度」、「運動の技能や知識を運動実践に活用するための思考力、判断力」といった豊かなスポーツライフの実践に必要な資質や能力について、各生徒によって個人差はあるものの、研究に取り組む以前と比べてそれぞれについて高まりを見取ることができた。

一方、運動に積極的ではない生徒に対しても、引き続き運動の楽しさや喜びを味わえるよう授業の工夫改善を図るとともに、運動やスポーツに対して「する」というかわり方だけでなく、「みる、支える」などの多様なかわり方を楽しむことができる資質や能力を高めることができるよう、更なる授業の充実に努めていきたい。

【MEMO】

特別支援学校部会



岩谷観音（写真提供 福島市）

第11分科会

福島大学附属特別支援学校

研究主題

生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

日程

8:40	9:10	10:00	10:10	10:55	11:10	12:00	13:00	15:00
受付	公開授業①	移動	公開授業②	移動	公開授業③	昼食	開会式 研究発表 研究協議 指導講評	閉会式

公開授業案内

	学年	内容	指導者	場所
公開授業①	高等部	いろいろなスポーツ ～球技～ (ふようベースボール)	中村 誠 (T 1) ほか	体育館
公開授業②	小学部	歩く, 走る, 跳ぶなどの基本的な運動	数間 靖徳 (T 1) ほか	体育館
公開授業③	中学部	簡単なスポーツ ～球技～ (ティーボール)	鈴木 直樹 (T 1) ほか	体育館

学校所在地



交通機関

☆路線バス
福島駅東口7番乗り場
福島交通
佐原, 佐原経由四季の里, 土湯温泉, 第二日東, 荒井行き
「福島ふそう前」下車 徒歩5分

福島大学附属特別支援学校



所在地 〒960 - 8164 福島市八木田字並柳71番地
校 長 飛 田 操
児童・生徒数 53名
連絡先 TEL 024 - 546 - 0535 FAX 024 - 546 - 5480
E-mail fuyo@ash.educ.fukushima-u.ac.jp
URL <http://www.ash.fukushima-u.ac.jp>

【教育目標】

- 1 自分を高めようと努力する人
- 2 他人をだいにしようとする人
- 3 社会につくそうと努力する人

【学校紹介】

本校は、昭和42年に附属小学校の特殊学級として設置されたのが始まりで、昭和52年に附属小・中学校の特殊学級を改組し、「福島大学教育学部附属養護学校」として新設された。平成17年に福島大学再編に伴い、校名が「福島大学附属養護学校」に変更。平成19年に学校教育法の一部改正に伴い、校名を「福島大学附属特別支援学校」と変更し、現在に至っている。

本校は、知的障がいの児童生徒に対して教育を行う施設であるとともに、福島大学の附属学校として教育の理論及び実践について研究をしている。また、学生の教育実習を行う学校として、教師を目指す学生の指導を行っている。

1 研究主題

生活年齢・発達の段階・障がい特性に応じて運動や課題に楽しく取り組む態度を育てる体育授業

2 研究主題設定の理由

「やったあ。やったあ」地区合同卓球大会の簡易卓球団体決勝戦で勝った瞬間、Aチームの中学部生徒A（以下A）が友達や教師とハイタッチしながら発した言葉である。満面の笑顔で友達と手を取り合って喜んでいて、A自身も1勝をあげ、チームの勝利に貢献することができた。

以前のAは、勝敗の理解が難しく、練習試合に負けても平然としていることが多かった。また、相手からの速い球に対応できないために練習試合では数点しか取れなかった。このような実態のAについて担任は、勝ったときの楽しさを感じることができるようするために、点数を理解できる同学年の女子とのかかわりを増やした。また、ゲームのペースがゆっくりなBチームと練習試合をする機会をもつようにした。そのことにより、友達の言葉からゲームの勝敗を理解して共に喜んだり悲しんだり、ゲームを楽しむ場面が見られた。技能面では、素早い動作で返球できるようにするために、自分の動きを「シュッ」という短い言葉で表し、言葉と動きを合わせる手だてを継続して行った。その結果、勝利の喜びを覚えたAは、「もっとやってみたい」という動機が高まるとともに、簡易卓球に必要な動きを徐々に身に付けていった。また、友達と練習や試合の内容を振り返り、次の機会に生かそうという意識も出てきた。こうした取り組みが団体優勝をもたらしたのである。

このようなAの姿は、児童生徒が本来もっている可能性を物語っていると考える。「もっとやってみたい」という動機が高まり、運動種目に合った動きや課題解決の方法が分かり、動きや態度を振り返りつつ繰り返し練習すれば、自分の力の高まりを実感しながら楽しく運動に取り組むことができる。楽しく運動に取り組めば、運動量は増加し技能も向上する。つまり、体力が向上する。事実、Aは返球の技術が向上したことによりラリーの回数が増え、運動量が格段に増加した。さらに、楽しく運動に取り組む効果は情意面にも表れた。自分の思い通りに打てるようになる成功体験が自信となったり、友達や教師にほめられて自己肯定感を感じたりする機会が多くなれば、普段の生活にも積極的な態度が表れる。また、運動を通して友達とかかわる経験は、望ましい人間関係を形成する能力を育てることになる。Aは簡易卓球の楽しさを感じたころから、昼休みに友達と誘い合って練習する姿が見られるようになった。昼休みが終わると、笑顔で友達と会話しながら教室に戻ってくるようになった。

教師には、こうした児童生徒の可能性を引き出し伸ばす役割がある。そのために、本校では「一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して」という主題を掲げ、「動機」と「振り返り」に焦点を当て、全教科・領域を対象とした研究を進めてきた。その一環として体育科・保健体育科の研究に取り組んでいる。児童生徒の実態の差が大きい体育科・保健体育科の場合、生活年齢や発達の段階、障がい特性等の実態を把握した上で、「動機付け」「できる状況づくり」「振り返り」の内容・方法を工夫していくことにより、児童生徒が運動に楽しく取り組むことができるようになることを考え、本研究主題を設定した。

3 研究仮説

体育科・保健体育科において、児童生徒一人一人の実態に応じた指導方針を設定し、動機付けやできる状況づくり、振り返りの内容・方法を工夫するとともに、学部教員全員が共通理解して支援すれば、児童生徒は運動や課題解決に楽しく取り組むことができるであろう。

4 研究内容

- (1) 児童生徒の実態に応じた指導方針の設定
 - ・ 個別の教育支援計画や個別の指導計画との関連付け
 - ・ 運動のチェックリストの作成・活用
- (2) 「動機」にかかわる実践の視点
 - ・ 自分からやってみたいと思う動機付け
 - ・ 目的意識をもって活動に取り組むことができる動機付け
 - ・ 動機を維持、また、活動によって変容した動機に対する手だてなど
- (3) 「できる状況づくり」にかかわる実践の視点
 - ・ 児童生徒一人一人が楽しめる運動の場の設定や教材・教具の工夫
 - ・ 児童生徒の発達段階や障がい特性に応じた支援策や活動形態の工夫
 - ・ 教師の言葉かけや仲間とのかかわらせ方の工夫
- (4) 「振り返り」にかかわる実践の視点
 - ・ 児童生徒の行動の見取りや価値付け
 - ・ 自己評価を促す工夫・充実
 - ・ 動機をもったり高めたりすることができる振り返りの仕方など



5 実践事例

実践事例 I (小学部の取組：サッカー遊び)

運動に楽しく取り組めるようにするために、段階的に設定する活動内容の工夫

(1) 指導内容の設定について

児童生徒の実態




対象児童 B (以下 B) は、音声言語による意思の表出は難しいが、教師や友達への関心が高く、一緒に活動しようと教師や友達の手を引いて誘ったり、できたことを身振りや単語の第一音を発声したりすることで、相手に伝えることができる。また、自分なりに目的をもち、友達や教師と一緒に活動することができる。一方で、初めて行う活動や自信がない活動に取り組むときには不安を感じて泣いたり、嫌がったりするなど消極的な様子を示すこともある。しかし、そのような苦手な活動に対しても、段階的に少しずつ取り組みながらできるようになることで自信をもつようになってきている。ボールを蹴ることに関して、ボールを蹴って軽く転がすことはできるが、片足立ちすることが苦手なため、足を大きく振ってボールを蹴ったり、特定の場所に向けて正確に蹴ったりすることは難しい。そのため、個別に支援していくことが必要である。

楽しさを感じることができるようにするための教師の意図

本題材「サッカー遊びをしよう」では、個々の実態に合った活動を設定しながら、ボールに慣れ親しむことをねらいとした。Bにとってサッカー遊びの楽しさとは、友達と一緒に活動できることやボールで的を倒すことができること、ボールを遠くまで転がすことができることであると思われる。そうした楽しさは、繰り返し活動に取り組むことでできることが広まり、楽しさをより実感できるようになると考えた。Bが運動に自信をもって楽しく活動に取り組むことができるようにするために、場の設定、教材教具の工夫を行う。

(2) 指導の工夫と変容

手 だ て	工 夫
<p>友達とペアを組み、相手を意識してパスをする活動を設定することで、パスをする向きや距離が分かるだろうと考えた。友達と活動することで、友達の所までボールを蹴りたいという意欲をもつことができるようにする。また、活動の見通しをもつことができるようにする。</p>	<p>相手を意識してパスすることができるようにする活動</p>
<p>強くボールを蹴るために教師が足を大きく振ってボールを蹴る手本を見せ、「ブーン」という擬音語を用いてイメージをもつことができるようにする。</p>	<p>擬音語を用いて強く蹴るイメージをもつことができるようにする活動</p>
<p>Bの好きなアニメキャラクターや新幹線が描かれた的に当てる活動を設定する。ボールが的に届けば的が倒せることが分かり、倒したいというBの意欲を引き出すことができるようにする。</p>	<p>ボールを蹴る方向を意識し、Bの意欲を引き出すことができるようにする活動</p>

変 容	
<p>・ 単元開始時は右足を半歩分軽く前に出す蹴り方のためボールが友達まで届かず、友達のすぐ近くまでボールを手で転がした後で、ボールを蹴ってパスをしていた。しかし、友達と一緒に繰り返し活動することで、友達の名前の第一音を呼びながら友達の位置を確認し、相手を意識して楽しく活動に取り組むことができた。こうした様子から、友達にボールを届けたいという動機の高まりが見られた。</p>	
<p>・ 擬音語を用いた練習に繰り返し取り組むことで、少しずつ足を大きく振り上げて蹴ることができるようになった。また、擬音語を用いることで、動きのイメージをもつことができ、自分でその動きを振り返ることにつながった。</p>	
<p>・ ペットボトルにキャラクターの的に設定したことで、好きなキャラクターの的に当てたいという意欲をもち、的に狙ってボールを蹴るようになってきた。的に倒れる動きや音があることで、ボールで倒したことを視覚的・聴覚的に実感し、振り返ることができた。</p>	

離れた場所からの的を倒すことができるように的の近くから蹴り始め、次第に距離を離していく。

ボールを強く蹴る必要性を実感できるようにする活動

ボールを強く蹴る必要性が分かるようにするために、ペットボトルの的よりも重いダンボールの的を用意し、軽い的から重い的へと段階的に設定する。

ボールを強く蹴る必要性を実感できるようにする活動

「足が大きく振れたね。」「新幹線を狙って倒したね。」と教師が具体的に伝えたり、タッチしたりして即時評価することで、より大きな満足感を得ることができるようにする。

自信を付け、達成感を実感できるようにする活動

- 離れた場所からの的に向かってボールを蹴るという活動内容は理解できたが、的に当てたい気持ちが強いいため、的のすぐ前でボールを蹴る姿が見られた。ボールを強く蹴る必要性に気付く様子は見られなかった。



- ペットボトルより重いダンボールの的を倒すには強い力で蹴らないと倒れないことを教師と一緒に体験する中で実感していった。活動を繰り返すことで教師の支えは不要になり、一人でボールを蹴ったり、数歩の助走をつけて蹴ったりすることができるようになった。強く蹴りたい、遠くまで蹴りたいという動機が高まり、思い通りに蹴ることができた時の心地よさを感じながら取り組むことができた。



- できたことを具体的に称賛されることで手をたたき、にっこりする様子が見られた。称賛されたことで、的に当てることへの動機が高まり、教師の支援を受けてボールを強く蹴ろうとしたり、早く練習に取り組むために自分からの的の準備をしたりする姿が見られた。

実践事例Ⅱ (中学部の取組：スキー)

楽しい、もっとやってみたい、上手になりたいという思いを引き出すための場の設定や支援の工夫

(1) 指導内容の設定について

児童生徒の実態

対象生徒C(以下C)は、小学生の時には、教師や保護者が支援してスキー靴を履き、保護者が後ろから体を抱え、10mほど滑ることができた。柔軟性があり、長座体前屈の動きでは、頭が足にぴったりと付くほどである。しかし、片足バランスの動きではすぐにバランスを崩してしまうなど、筋力が弱く、バランス感覚もあまり良くないため、負荷のかかる動きや素早い動きが苦手である。また、言語での指示を聞き取り、それを行動に移すことが難しい。そこで、初めての運動に取り組むときには、教師が体を補助して体の動かし方を伝えたり、教師や友達の見本を見たりすることで、運動の仕方を身に付けていくようにする。その際には、ポイントとなる動きを簡単な言葉で表しながら教え、繰り返し活動に取り組むことで動きを定着させるようにしている。

楽しさを感じることができるための教師の意図

スキー学習において生徒が感じる楽しさは、スキー場のゲレンデで、少しでも長い時間、転ばずに滑り続けることで味わえる風を切る感覚、思い通りに滑る心地よさである。そうした楽しさや心地よさを感じることができるように、以下のような場の設定をした。



斜面を滑り降りる練習をするための場の設定



(2) 指導の工夫と変容

手 だ て	工 夫
<p>上級生の見本を見ることで、どのような活動をするのかが分かり、活動に取り組むことができるようにする。</p>	
<p>友達とのかかわりの中から、動機を高めることができるようにする活動</p>	
<p>体重の掛け方やスキー板の動かし方を教師が補助することで、身に付けることができるようにする。</p>	
<p>《補助する際のポイント》</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 腰を支え、体重を山側に乗せることができるようにする活動 ・ スキー板を斜めにするように補助し、滑り落ちないようにする活動 	
<p>「手は膝」、「目は 先生」など、簡単な言葉でポイントを提示することで、Cが意識して姿勢を保つことができるようにする。</p>	
<p>《滑り下りる際のポイント》</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 手を膝に当て、上体を前傾にすることで、重心を安定させることができるようにする活動 	

変 容
<ul style="list-style-type: none"> ・ 横歩きでは、スキー板が交差してしまい、上手く歩くことができなかった。しかし、上級生が実際にやって見せることで、同じようにやってみようとする動機が高まり、何周も繰り返し歩くことでスキー板が交差する回数が減った。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 斜面を上る際には、恐怖心から近くにいた教師に頼ろうと体を預けてしまうことが多かった。教師の支えを受けながら練習を繰り返すことで、体の動かし方が分かり、一人で山側に体重を掛けられるようになってきた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めは、ポイントを頭では分かっているが、恐怖心から姿勢が崩れてしまったり、視線が下を向いてしまったりすることが多かった。繰り返し活動に取り組むことで、ポイントに気を付けて滑ることができるようになってきた。また、体育館で練習している上級生が一人で滑っている様子を見ることで、「カッコいいな、私もこうなりたいな」という思いをもち、更に動機が高まっている様子であった。

さらに、過去のスキー場での活動をVTRで見ることで、もっと上手になりたいという気持ちを高めることができるようにする。

1回目のスキー教室での課題を新たな目標として自覚することで、今までのポイントをより意識して取り組むことができるようにする。



新たに高い目標を意識できるようにする活動

一人で滑ることができたり、リフトに乗って滑り降りることができたりしたときには、複数の教師が大いに称賛することで、達成感を味わうことができるようにする。

一人で滑走し、達成感を得ることができるようにする活動

- ・ 1回目のスキー教室では、緩斜面での練習だけとなり、リフトに乗れるようになるまでには至らなかった。しかし、ゲレンデを滑ることができたことが自信となり、C自身が「リフトに乗りたい」という強い動機をもって、目線を前にするなどのポイントをより意識して活動に取り組むことができた。また、繰り返し練習に取り組むことで、体の動かし方が分かり、一人でマットの坂を滑り降りることができるようになった。

- ・ 一人で滑り降りることができたときには、C自身が「できた」という満足感があり、すぐに「やったー」と歓声を上げて喜ぶ姿が見られた。また、家庭でもできたことをうれしそうに話す様子が見られた。



実践事例Ⅲ (高等部の取組：陸上競技)

生徒が運動の目的と方法を理解し、運動する楽しさを味わうための場の設定と練習内容の工夫

(1) 指導内容の設定について

児童生徒の実態


対象生徒D(以下D)はダンスの授業でリズムに乗って体を動かしたり、身体の特定の部位を意識的にストレッチしたりすることができ、周りの生徒の見本となることもある。一方で、腹筋などの筋力トレーニングやランニングなどの同じ動きを繰り返す活動に対しては、体力があるにもかかわらず途中であきらめたり、飽きたりする傾向が見受けられた。そこで、教師の伴走や励まし、称賛等の言葉かけを継続して行うなどの個別の支援をすることでやり遂げてきた。また、教師の言葉かけや見本を組み合わせることで、技能を獲得してきた。

楽しさを感じることができるようにするための教師の意図

陸上競技の学習において生徒が感じる楽しさは、走っているときの心地よさ、仲間と互いに励まし合いながら走りきることやタイムを縮めることで得ることができる達成感、ライバルとの競争に勝ったときや賞に入ることで喜びであると考えた。この中で、Dにとっての楽しさとは、陸上競技に対する意欲を持続させつつ、仲間と互いに励まし合いながら走りきることによって得られる

達成感がまず大切であり、この感情が高まることで競争することへの楽しさも味わうことができるのではないかと捉え、具体的な手だてを講じることとした。

(2) 指導の工夫と変容

手だて	工夫
<p>走る距離を10mや30mなど短い距離に設定することで、走りきる達成感を味わうことができるようにする。</p>	
<p>Dの実態に合った活動を選定し、目標をもつことができるようにする活動</p>	
<p>短い距離を友達と競争しながら走ることで、走りきる喜びとともに、競争することへの楽しさにも気付くことができるようにする。</p>	
<p>仲間との活動をすることにより、動機が高まるようにする活動</p>	
<p>自分や友達の走る姿を動画で振り返り、活動の反省点を発表することで、自分の学びを本時や次時の活動に生かすことができるようにする。</p>	
<p>友達とのかかわりによって、熱心に取り組むことができるようにする活動</p>	
<p>大会当日の様子</p>	
	

変容
<ul style="list-style-type: none"> 距離が長いと走るのを諦めてしまっていたDだが、短い距離を設定したことで、ゴールが見て分かり、それを目指して走りきることができるようになった。さらに、ゴール後も息を切らしながらスタートラインまでジョギングで戻ってくる様子が見られたことから、もっとやりたいという気持ちが表れていると感じ取れた。また、ゴールまで走りきる経験を重ねることで、自信が付き、授業後には満足そうな表情を見せることが多くなった。 一緒に走る友達の組み合わせを替えることで、Dよりも速く走る生徒と一緒に走ったときには、負けて悔しい表情をする姿が見られた。また、前回の自分のタイムと比べることで、走るスピードに興味をもつようになり、走ることや走りきることへの動機が高まる様子が見られた。
<ul style="list-style-type: none"> 実際の走る姿を見ただけでは感想を述べられない生徒が多いため、振り返りを行う際にタブレット端末を活用した。そして、自分の走りを友達に見てもらい「D君も速くなったね」という感想を友達から聞いて、うれしそうにするDの姿が見られた。また、自分が友達の目標になっていることを知り、タイムの目標を決めて、活動に取り組む姿が見られるようになった。 県特別支援学校スポーツ大会当日は、100m走を最後まで力いっぱい走りきることができた。タイムは自己ベストとはいかなかったが、走りきった後のDは、達成感や満足感にあふれた表情をしていた。また、先輩や友達、教師からも称賛を受けると、笑顔でうれしそう様子が見られた。後日書いた振り返りの作文でも、走りきった喜びを文章で書き表すことができた。



6 研究の成果と研究の方向性

(1) 成 果

児童生徒の実態に合わせ、動機を高めるための工夫

小学部の実践より、強く蹴ることが難しい児童に対して、まずは倒れやすいペットボトルの的を使用した。その後、強く蹴る技を習得するに伴い、倒れにくい段ボールの的を用意し、それを倒すことで達成感を味わうことができるように指導を繰り返した。目で見て分かりやすい教材にしたことで、児童が蹴ることに対して自信をもち、自分から活動に取り組むことができたのではないかと考えられる。また、その的も生徒の興味のあるイラストを取り入れることで、倒したいという動機を高めることができたのではないかと考える。このことから、児童生徒の実態を日々の生活の中や体育の学習の中から把握することで、児童生徒の実態に合わせた活動や教材の工夫をすることができ、そのことが、技の習得や動機を高めることにつながったと考えられる。

友達とのかかわりで動機を高め、維持していくための工夫

中学部の実践より、一緒に取り組む仲間が頑張っている様子やリフトに乗っている仲間の様子を見ることで、「自分もやってみたい」という意欲が高まり、活動に取り組む姿が見られた。技を習得するまでに恐怖心や不安があった生徒だが、一緒に取り組む仲間の存在が動機を維持し、諦めずに活動に取り組むことにつながっていったのだと考えられる。個人種目であるスキーや陸上競技の活動でもこのような姿が見られ、仲間の存在の重要性を改めて感じた。このことが、「友達とやって楽しい、だからもっとやってみたい。」という動機が高まったり、活動を振り返って次への動機を高めたりすることにもつながると考える。

「できる状況づくり」で自信を持つことができるようにする工夫

小学部のボールを強く蹴る必要性を実感できるようにする工夫、中学部の滑り降りる時のポイントを簡単な言葉で意識させる工夫、高等部のタブレット端末を利用した振り返りの工夫などに共通するのは、児童生徒が自分の力でできる状況をつくることだった。児童生徒は、自分の力でできたことには自信をもつ。自信があることは生活の中で実行しようとする。実行を繰り返せば知識や技能は強化され体力も向上する。中には自分でステップアップしようとする児童生徒も出てくる。このように、児童生徒にとって「自分でできた。」という経験は、良い方向に循環していく起点となることが改めて実感できた。「できる状況づくり」には、場の設定や教材・教具の工夫、言葉かけなど授業に関するだけでなく、単元計画や活動の選択、グループの編成などの単元構想も含む。こうした点を今後も研究していきたい。

自分の動きを振り返り、次の活動への動機につなげる工夫

高等部の実践より、タブレット端末を活用することで、自分の動きを振り返り、イメージする動きに近づいているかをチェックしたり、友達や教師から称賛を受けたり、また、自分の力に合わせたタイムの設定をしたりすることで、次の活動に対する目標が明らかになり、更に意欲を高めて活動に取り組む姿が見られた。このことから、タブレット端末などの教具を使用することで、自分の動きを客観的に評価することが可能になり、技の習得につながる。それに伴い意欲が高まり、意欲が高まることで次の技の習得に挑戦しようとする意欲も高まっていくと考えられる。

(2) 平成28年度の研究の方向性

動機を高めるための「わかる」「できる」「ふりかえる」視点からの授業づくり

体育科・保健体育科を含む本校の主題研究において、これまでは「動機 活動 振り返り」というように、学習の動機付けをし、それを具現する活動を行い、その有効性を実感できる振り返りをする事で次の学習への動機が高まると捉えていた。しかし、研究を進めていく中で、児童生徒の意識は必ずしも「動機 活動 振り返り」の一方向ではないということが分かった。つまり、学習の動機を高める手だては、導入段階だけでなく活動中や振り返りの場面などそれぞれの場面であり、関連していることもあることが分かった。そうした種々の手だてを児童生徒の内面の動きから「わかる」「できる」「ふりかえる」という視点で下表のように整理した。今後は、これらの視点から児童生徒の可能性を引き出し伸ばす支援策を開発したり、有効な支援策を全教員で共有したりしていきたい。

姿	授業づくりのポイント	支援の具体例
わかる	<何を学ぶか> 児童生徒が学習の目標を把握できるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・運動のルールや場の工夫 ・実態に合った活動の選定 ・具体的にイメージできる視覚支援 ・勝敗や順位付けなどの価値付け提示 ・動きが身に付く活動の場の工夫 ・動きのレパートリーを増やす ・動きに気付くような言葉かけ ・動きを引き出す言葉かけ ・動きのポイントを示した掲示物 ・段階的に取り組める運動の行い方や場の工夫 ・良さに気づき、伝え合う活動 ・良い動きを全体に広める言葉かけ
	<何のために学ぶか> 児童生徒が学ぶ意味を理解できるための工夫	
できる	<どのように学んでできるか> 児童生徒がやり方を理解して主体的に行動できるための工夫	
えぶる りか か	<何を学んだか> 児童生徒が学んだことを評価できるための工夫	

動機チェックシートの活用

今までの実践で捉えた学習の動機を、「学習の自律性」「友達や教師との関係」「自己・教材との関係」の視点から「動機チェックシート」に表した。このチェックシートを活用して児童生徒の現在の学習の動機を捉えるとともに、単元の学習を通して目指す姿とその具現策を講じるための指標としていきたい。

福島大学附属特別支援学校 動機チェックシート Ver.1

児童生徒の現在の様子を観察し、「現在の学習の動機」が「児童生徒に持たせたい動機」にチェックを入れて下さい。

※自己決定的(他律的)		※自己決定的(自律的)				
動機なし	迷いや弱	積極	責任感	有能感	向上心	興味・関心、楽しさ
<input type="checkbox"/> やりたくない。 <input type="checkbox"/> 教師に言われたから。 <input type="checkbox"/> みんながやっているから。 <input type="checkbox"/> 教師に叱られるから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 分からないから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 先生に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 先生に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 先生に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 先生に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。	<input type="checkbox"/> 先生に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達に言われたから。 <input type="checkbox"/> 友達にほかにされるから。 <input type="checkbox"/> 友達嫌いなから。

児童生徒の学習の動機を高めるために...

わかる (目標や意味) <input type="checkbox"/> 何を学ぶか ・ 児童生徒が学習の目標を把握できるための工夫 <input type="checkbox"/> 何のために学ぶか ・ 児童生徒が学ぶ意味を理解できるための工夫。	できる (理解や行動) <input type="checkbox"/> どのように学んでできるか ・ 児童生徒がやり方を理解して主体的に行動できるための工夫	ふりかえる (評価) <input type="checkbox"/> 何を学んだか ・ 児童生徒が学んだことを評価できるための工夫
---	--	---

【MEMO】

分科会指導助言者紹介



花の写真館（写真提供 福島市）

■第1分科会【福島大学附属幼稚園】

氏名	菅 家 礼 子	(所属・役職) 福島大学 教授
略歴	昭和53年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 昭和55年4月 筑波大学体育研究科修士課程 修了 昭和55年4月 福島大学教育学部 助手 昭和58年10月 福島大学教育学部 講師 昭和63年10月 福島大学教育学部 助教授 平成12年1月 福島大学教育学部 教授 平成17年4月 福島大学人間発達文化学類 教授	
論文著書等	【著書】 保育者のための心理学 (共著), 学術図書出版, 1985 小学校・中学校 体育教育 (共著), 中央法規, 1991 体操の学習指導 (共著), 不昧堂出版, 1997 【論文】 体操における「左右振」の研究 (共著), スポーツ方法学研究, 日本スポーツ方法学会, 第3巻第1号, 1990 小学校教員養成における体育実技の試み (共著), 福島大学教育実践研究紀要, 第19号, 1991 「リズム体操の授業」 感性教育の視点を取り入れて (単著), 福島大学総合教育センター紀要, 創刊号, 2006	

■第2分科会【福島大学附属小学校】

氏名	佐 藤 靖	(所属・役職) 秋田大学 教授
略歴	昭和52年 東京教育大学体育学部体育学科 卒業 昭和55年 筑波大学大学院体育研究科修士課程 修了 昭和55年 筑波大学体育センター 準研究員 昭和56年 山形大学教養部 助手 昭和57年 山形大学教養部 講師 平成元年 秋田大学教育学部 助教授 平成10年 秋田大学教育文化学部 助教授 平成18年 秋田大学教育文化学部 教授 (現在に至る)	
論文著書等	【著書】 シュティラー, G. 他 (唐木國彦, 佐藤 靖他訳): ボールゲーム指導事典, 大修館書店, 1993. 大西武三, 佐藤 靖: ハンドボールの授業 (杉山重利, 高橋健夫他編: 新学習指導要領による高等学校体育の授業), 大修館書店, 2001 佐藤 靖: 戦術力の指導 (中村敏雄, 高橋健夫他監: 21世紀スポーツ大事典), 大修館書店, 2015. 【論文】 佐藤靖他: 「球技」の特性と分類に関する研究, スポーツ教育学研究, Vol.17, No.1, 1997. 佐藤 靖: ハンドボールにおける意味構造の例証分析的一考察, 伝承, No.2, 2002. 佐藤 靖: ボール運動・球技では, 何をこそ教え学ばせるべきか, 体育科教育, Vol.57, No.4, 2009.	

■第3分科会【福島市立北沢又小学校】

氏名	渡辺 敏明	(所属・役職) 信州大学 准教授
略歴	昭和60年 筑波大学体育専門学群 卒業 昭和63年 筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻(スポーツ運動学)修了 昭和63年 筑波大学体育センター 准研究員 平成元年 信州大学教育学部 助手 平成8年 文部省在外研究員(ドイツ, テュービンゲン大学) 平成9年 信州大学教育学部 講師 平成17年 信州大学教育学部 准教授	
論文 著書 等	【著書】 新しい体づくり運動の授業づくり(分担), 大修館書店, 2009 小学校体育ジャーナル, 学研教育みらい(シリーズ執筆) 【論文】 鉄棒運動における「け上がり」の教材づくりの工夫 信州大学教育学部紀要第114号, 2005 なわとび運動の初心者指導における教材づくりの工夫について 信州大学教育学部紀要第109号, 2003 器械運動の初心者指導における運動課題創作の視点 日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集, 2001 マット運動における前方倒立回転とびの指導実践の工夫について 信州大学教育学部 教育実践センター紀要第7号, 1999 習熟位相における運動投企の問題性 スポーツ教育学研究第9巻第1号, 1989	

■第4分科会【福島市立御山小学校】

氏名	吉永 武史	(所属・役職) 早稲田大学スポーツ科学学術院 准教授
略歴	平成9年 上智大学文学部社会学科 卒業 平成12年 筑波大学大学院修士課程体育研究科 修了 平成15年 筑波大学大学院博士課程体育科学研究科 単位取得満期退学 平成15年 筑波大学体育科学系 文部科学技官 平成16年 早稲田大学スポーツ科学部 助手 平成17年 東京女子体育大学 専任講師 平成18年 早稲田大学スポーツ科学学術院 専任講師 平成23年 早稲田大学スポーツ科学学術院 准教授	
論文 著書 等	吉永武史(2003) ゲームパフォーマンスを分析する, 高橋健夫編「体育授業を観察評価する」, 明和出版, pp.62-65. 吉永武史(2010) 単元計画(ユニットプラン)の作成, 高橋健夫ほか編「新版体育科教育学入門」, 大修館書店, pp.118-126. 高橋健夫・吉永武史編(2010) 小学校「戦術学習」を進めるフラッグフットボールの体育授業, 明治図書出版. 吉永武史(2016) 子供からみた体育の存在意義, 友添秀則・岡出美則編「新版教養としての体育原理」, 大修館書店, pp.88-93. 吉永武史(2008) 体育科教育学の研究: その現在, 現代スポーツ評論18: 100-109. 吉永武史(2011) 陣取り型のボールゲームが持つ学習可能性, 体育科教育59(4): 22-26. 吉永武史(2016) これからの時代に求められる資質・能力を育むための体育授業の在り方, 楽しい体育の授業29(7): 1. 鈴木康介・友添秀則・吉永武史・梶将徳(2016) 小学校高学年の体育授業における短距離走の学習指導プログラムの効果, スポーツ教育学研究36(1): 1-16.	

■第5分科会【福島市立平野小学校】

氏名	木下 英俊	(所属・役職) 宮城教育大学 教授
略歴	昭和60年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 昭和62年3月 筑波大学大学院体育研究科コーチ学専攻修士課程 修了 体育学修士 昭和62年4月 九州大谷短期大学 講師 平成4年9月 宮城教育大学 講師 平成7年10月 宮城教育大学 助教授 平成10年3月～11年1月 テュービンゲン大学 客員研究員 (文部省在外研究員) 平成19年4月 宮城教育大学教育学部 准教授 平成23年4月 宮城教育大学 教授 現在に至る	
論文著書等	【著書・翻訳書】 三木四郎ほか編著：中・高校器械運動の授業づくり。大修館書店。2006年；96 - 103頁を分担執筆 ウルリヒ・ゲーナー著，佐野淳，朝岡正雄監訳：スポーツ運動学入門。不昧堂出版。2003年；153 - 202頁を訳出 【論文】 木下英俊：運動学習における学習者の「動感メロディー」の構成化に関する発生運動学的一考察 - 跳び箱運動の事例から - 。宮城教育大学紀要第49巻。146 - 151頁，2015年 木下英俊：マット運動における倒立前転の技の構造と習得に関する発生運動学的一考察。宮城教育大学紀要。第47巻。151 - 162頁，2013年 木下英俊：コツ身体知に関する指導者自身の動感創発分析の意義について - マット運動伸膝後転の事例から - 。日本スポーツ運動学会。スポーツ運動学研究第23号。15 - 24頁，2010年	

■第6分科会【福島大学附属中学校】

氏名	内田 匡輔	(所属・役職) 東海大学 体育学部 体育学科 准教授
略歴	1994年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 1996年3月 筑波大学大学院体育学研究科 修士課程 修了 1996年4月 筑波大学附属聾学校 (現 聴覚特別支援学校) 中学部教諭 2000年4月 筑波大学附属中学校 教諭 2005年4月 東海大学体育学部体育学科 講師 2012年4月 東海大学体育学部体育学科 准教授	
論文著書等	【著書】 バリアフリーを目指す体育授業 (杏林書院 2001) 「生きる力」を育成する保健体育 (建学社 2002) 体育科教育学入門 (2010年刊行 大修館) 学校保健ハンドブック第6次改訂 (2014年刊行 ぎょうせい) 学校保健の世界 (2016年刊行 杏林書院) 特別支援教育時代の体育・スポーツ (2016年刊行 大修館書店) 【論文】 高等教育における障害学生の一般体育 (日本体育学会 2006, 2007, 2008) 子どもの生活リズム向上のための調査研究 (文部科学省委託事業 2008) 発達障害のある児童・生徒の身体活動に関する一考察 (日本体育学会2009) 発達障害児の身体活動に関する実践研究 (日本体育学会 2010) 体育科の指導における教材のくふう (2012年 聴覚障害 6月号 聾教育研究会) 支援が必要な大学生へのアダプテッド・スポーツを用いた体育授業 (2013年 東海大学研究紀要) 大学体育会運動部に所属する学生の学修姿勢の特徴	

■第7分科会【福島市立福島第一中学校】

氏名	寺 山 由 美	(所属・役職) 筑波大学体育系 准教授
略歴	平成4年 筑波大学体育専門学群 卒業 平成8年 大学院修士課程体育研究科 修了 平成14年 千葉大学教育学部 講師 平成18年 筑波大学人間総合科学研究科 講師 平成24年 筑波大学体育系 准教授	
論文 著書 等	【著書】 寺山由美 (共著) : 4-1「表現運動」はこうやって観察する, 動きの「感じ」と「気づき」を大切に表現運動の授業づくり (細江文利他編). 教育出版, 110-115, 2014 【論文】 ベテラン指導者の指導技術を探る: 「ダンス」指導時の事例から 寺山由美; 米澤麻佑子; 宗宮悠子; 大野ゆき 筑波大学体育科学系紀要 / 35 / p.81-89, 2012-03 表現・創作ダンスの学習における「即興表現」の指導とその捉え方 実践を続けてきた4人の教諭に着目して 寺山 由美; 細川 江利子 (社)日本女子体育連盟学術研究 / 27 / pp.21-38, 2011-01 創作を主とする舞踊教育の生成過程 「与える」から「引き出す」授業への萌芽 寺山由美 舞踊教育学研究 / (12) / p.5-18, 2010-01	

■第8分科会【福島市立福島第四中学校】

氏名	鬼 澤 陽 子	(所属・役職) 群馬大学 准教授
略歴	平成13年 筑波大学体育専門学群 卒業 平成15年 筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学専攻 修了 平成20年 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科体育学専攻 修了 平成20年 日本女子体育大学体育学部 講師 平成22年 群馬大学教育学部 講師 平成25年 群馬大学教育学部 准教授	
論文 著書 等	【著書】 鬼澤陽子 (2010) ゴール型ゲームの教材づくり・授業づくり. 高橋健夫ほか編, 新版 体育科教育学入門. 大修館書店. 鬼澤陽子 (2013) 教師用指導資料 小学校におけるボール運動領域の体育授業プログラム ボールゲーム・鬼遊び, ネット型 (ゲーム)・ベースボール型 (ゲーム) . 群馬大学・群馬県教育委員会編, デジタル教材作成協力者. 鬼澤陽子 (2014) 教師用指導資料 小学校体育 (運動領域) デジタル教材 低学年「ゲーム」. 文部科学省編, デジタル教材作成協力者. 【論文】 鬼澤陽子ほか (2010) バスケットボールの戦術的知識に関する映像を用いた状況判断テストの開発. 日本スポーツ教育学会第30回記念国際大会プロシーディングス. 鬼澤陽子ほか (2012) バスケットボール3対2アウトナンバーゲームにおいて学習した状況判断力の3対3オープンナンバーゲームへの転移可能性 - 小学校高学年を対象とした体育授業におけるゲームパフォーマンスの分析を通して - . 体育学研究57(1) : 59-69. 鬼澤陽子 (2016) 小学校6年生の「ボール運動」領域における「ゴール型: フラッグフットボール」と「ゴール型: バスケットボール」の連続単元の授業を対象とした実践例 体育授業における運動が苦手な児童の運動有能感を高めるための指導の在り方 . 平成27年度体育活動における課題対策推進事業研究成果報告書.	

■第9分科会【福島県立橘高等学校】

氏名	小川 宏	(所属・役職) 福島大学 教授
略歴	昭和63年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 平成2年3月 筑波大学大学院修士課程体育研究科 修了 平成2年4月 山形女子短期大学 講師 平成8年4月 福島大学教育学部 講師 平成9年7月 福島大学教育学部 助教授 平成19年4月 福島大学人間発達文化学類 准教授 平成23年4月 福島大学人間発達文化学類 教授	
論文著書等	【著書】 「スポーツによる地域貢献で大学は変わる」大修館書店(共著) 「バレーペディア2012年改訂版バレーボール百科事典」日本文化出版(共著) 「現代スポーツ評論第30号」創文企画(共著) ○「子どものからだと心白書2013」ブックハウスHD(共著) 【論文】 「小学校における「運動身体づくりプログラム」に関する調査研究」福島大学総合教育研究センター紀要, 2008(共著) 「ラリーポイント制によるバレーボールゲームの勝利確率について～シミュレーション値と実際値の比較から～」バレーボール研究第7巻第1号, 2005(共著) 「レクリエーションスポーツの教育的意義について～コミュニケーションを促進するための教材価値の観点から～」体育・スポーツ哲学研究第26巻第2号, 2004(単著) ○「中学校バレーボール教材における新ルールの効用」宇都宮大学教育学部教育実践研究指導センター紀要第21号, 1998(共著)	

■第10分科会【福島県立福島東高等学校】

氏名	山崎 俊輔	(所属・役職) 甲南大学(スポーツ・健康科学教育研究科学センター教授)
略歴	昭和54年3月 筑波大学体育専門学群 卒業 昭和54年4月 筑波大学大学院修士課程 入学 昭和56年3月 筑波大学大学院修士課程修了 卒業 昭和56年4月 甲南大学 助手 昭和62年4月 甲南大学 助教授 平成11年4月 甲南大学 教授	
論文著書等	【著書】 ○「柔道の視点 - 21世紀に向けて -」道和書院(2000年) 【論文】 ○ブータン柔道人の「柔道観」について - 草創期におけるブータン柔道について - スポーツ・健康科学教育研究センター論集(大学・研究所等紀要, 2015年3月) 第20号 ○(2011フランス在外研究を終えて)フランス柔道人の「柔道観」について - 2001年の調査との比較から - スポーツ・健康科学教育研究センター論集(大学・研究所等紀要, 2013年3月) 第19号 ○「ギニア, カメルーン柔道人グループの「柔道観」について - 各国柔道人との比較から -」スポーツ・健康科学教育研究センター論集(大学・研究所等紀要, 2011年3月) 第18号	

■第11分科会【福島大学附属特別支援学校】

氏名	澤 江 幸 則	(所属・役職) 筑波大学体育系 准教授
略歴	1993年 筑波大学大学院修士課程体育学専攻 修了 (体育学修士) 1993～1998年 横浜市リハビリテーション事業団北部地域療育センター児童指導員 1998～2002年 東北大学大学院博士後期課程教育心理学専攻 編入学・修了 (博士 (教育学)) 2003～2006年 文京学院大学 専任講師 2006～2012年 筑波大学人間総合科学研究科 講師 2012年～ 現職に至る。	
論文 著書 等	<p>【著書】 発達が気になる子の運動あそび88. 学研, 2014. <身体>に関する発達支援のユニバーサルデザイン. 金子書房, 2014. 身体性コンピテンスと未来の子どもの育ち. 明石書店, 2014. 気になる子の保育のための運動あそび・感覚あそび; その具体的な指導法. チャイルド本社, 2013. 不器用さのある発達障害の子どもたち 運動スキルの支援のためのガイドブック 自閉症スペクトラム障害・注意欠陥多動性障害・発達性協調運動障害. 東京書籍, 2012. など</p> <p>【論文】 澤江幸則: 小学校における不器用さに配慮した体育科教育の工夫. チャイルドヘルス, 18(6), 2015. 宮原資英, 七木田 敦, 澤江幸則: 発達性協調運動障害 (特集論文 DSM-5 対応 神経発達障害のすべて). こころの科学増刊, 90-94, 2014. 澤江幸則, 藤井彩乃: 自閉症スペクトラム障害のある子どもへの運動発達支援. 子どもと発達, 11(3): 167-171, 2013. など</p>	

廣告協贊





医王寺（写真提供 福島市）

クロールで25m泳ぐ近道。

クロールで25

浮く運動が苦手な児童に役立つ練習用具を提案します。卒業までに【全員が25m泳げる】のために。

がんばる先生応援サイトオープン！各学校の水泳授業情報を配信しています。

※現役の先生を対象とした会員登録制です

<http://www.swim-teacher.jp>

検索



★ご登録された方にスイムキャッププレゼント★

品名:クロールで25
品番:132139
サイズ:120~170cm
カラー:紺色のみ・男女兼用
仕様:オールインワン型水着
浮力シート8枚セット
価格:4,500円(本体価格)



泳げる近道 **1**
着るだけで体を4点の浮力で吊り上げ、水平姿勢(ストリームライン)をつくる水着です。
水平に浮く



泳げる近道 **2**
浮力が調節できる習得段階に合わせ浮力の調節ができます。最後は浮力シートなしで泳げるよう補助。



すまいるスイムシリーズ

【超はっ水で速乾・軽量】

速乾 軽量

超はっ水

超はっ水だからできる速乾・軽量！

着用者の90%以上が軽さを実感(※調査)。



水にぬれても、肌にはりつかずさらっとした軽い着心地
超はっ水だから…「着替えがラクラク!!」

*使用後の持ち運びもラクラク! *通常の水着より速く乾きます!

安全・安心!!「赤外線盗撮」から子供達を守ります。



●水を弾き軽い体が浮く感じ!



●はっ水効果は3年以上持続!

赤外線盗撮防止素材を採用! 安心・安全な水泳授業を応援!
フットマークだけのオリジナル新素材!

技術企画・開発(協賛特許) 朝倉染布株式会社 / 山田化学工業株式会社

フットマークの新素材は、赤外線を吸収する染料加工を施すことで悪質な赤外線盗撮を予防し、赤外線盗撮から子供達を守ります!

www.footmark.co.jp

※右記までご連絡下さい。資料等をお送り致します。

フットマーク株式会社 スクール販売部

東京都墨田区緑2-7-12 TEL:03-3634-0506

FOOTMARK®

70th
Gakken



学びたくなる、学びを。 **学研**

株式会社 学研教育みらい

ほしい情報が
ここにある！

学校教育事業部

〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

TEL 03-6431-1151(代表)

学研 学校教育ネット <http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

 facebook <https://www.facebook.com/gakkengakkokyoiku>

研究と実践の架け橋になる月刊専門誌

体育科教育

毎月14日発売

本体830円
(B5判)

【最近の主な特集】

- 10月号 21世紀型の体育理論を求めて
- 9月号 被災地の子どもへの支援に学校体育ができること
- 8月号 ①保健体育とLGBTを考える
②組立体操の問題から学校体育を組み立て直す
- 7月号 いま、水泳の授業をどう創るか
- 6月号 「チーム学校」と体育・保健・部活動
- 5月号 組体操・組立体操は変わるか、どう変わるべきか
- 4月号 ニュースポーツを体育の教材に!
- 3月号 武道とダンスの必修化を検証する …ほか



組立体操の指導法DVDシリーズ

日本体育大学

荒木達雄 [監修]

運動会で多発する組体操事故を防止するためにはどのような指導が求められているのか。安全で楽しい組体操の行い方や危険回避の方法、演技の構成例など専門家が映像でわかりやすくレクチャーする。 ●各巻 本体3,000円

- 1……安全性を重視した指導法 (16分)
- 2-①…組立体操の実例 (27分)
(幼児・小学校低学年向け)
- 2-②…組立体操の実例 (34分)
(小学校高学年・中学生向け)
- 3……組立体操の構成例 (20分)

の基本

組立体操

安全で楽しい

全4巻



大修館 体育・スポーツ関連書

運動部活動の理論と実践

友添秀則 [編著]

運動部活動は学校生活に彩りを添える教育活動である一方、“ブラック部活”などと問題視されている。本書は、多くの問題を抱える運動部活動を改善し、その意義を実現するために、部活の歴史とあるべき姿を明らかにし、さらには実務的な知識や科学的な指導法まで網羅した、これからの部活指導に必読の書である。



●A5判・304頁 本体2,300円

運動部活動の教育学入門

歴史とのダイアローグ

神谷拓 [著]

なぜ運動部活動は学校にあるのか。体罰・暴力、勝利至上主義などの問題はどうか。こうした問いに答え、学校教育の一環としての運動部活動を確立していくためには、「運動部活動の教育学」を開拓していく必要がある。



●A5判・336頁 本体2,800円

大塚製薬は、これからも 子どもたちの一生懸命を 応援します。



子どもたちが流した汗だけ、素敵な笑顔になる。

大塚製薬は、ジュニア選手の安全なスポーツ活動をサポートしています。

それは大塚製薬が製薬会社として健康に役立つ製品を通じ、

社会に貢献したいという想いからはじまっています。

スポーツで流す尊い汗が、子どもたちの成長や未来の希望につながるよう、

大塚製薬は応援していきます。

水分補給に適した飲料

汗として失われるのは、ただの"水"ではなく
ナトリウムやカリウムなどの"イオン"を含んだ水分です。
「ポカリスエット」なら水分といっしょに失われた、
ナトリウムやカリウムなどのイオンを、
適切な濃度で含んでいるので、
すみやかに効率よく、カラダに吸収されます。



ポカリスエットは(公財)日本学校体育研究連合会の推薦品です。

Gakushin®

SCHOOL SHOES
S-2800



SPES スペース
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

School Shoes としての耐久性
ただ長持ちさせるのではなく、
運動性能と安全性能も大切です。

協和株式会社 神戸市長田区西尻池町1丁目3番8号
TEL : 078-611-4376(代)

GOLDSTAR
SPORTS SCHOOL SHOES

GX



体育館
シューズ

SPES スペース
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

高機能・ジャストフィットを実現
超軽量モデル 片足 (24.5cm) 290g

ASTICO 岡山県岡山市中区江並417-1
株式会社 アスティコ TEL : 086-276-2010(代)

スクールシューズのプレミアムスタンダード
教育シューズ® PK-X3

極める



グリップ性
 耐久性
 超軽量

technology



着脱・フィット感

- 靴のペロ部分は、靴紐でペロがずれないように一体カットになっています。
- 履きやすいようにペロの先端に引き上げつまみが加工され巻き込みを防ぎます。



かかと加工

- 踵にネームスペースと踏みつけ防止加工を施しました。

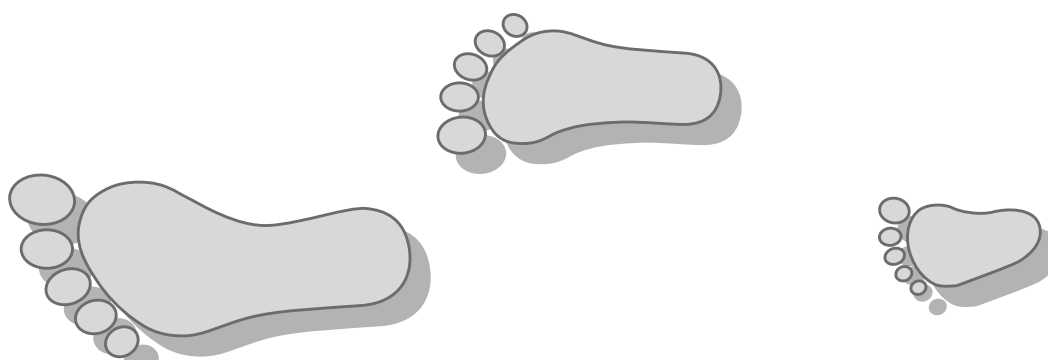


ソール

- 安定性**
サイドスタビライザーによる、ねじれの防止
- ノンマーキングオリジナルソール**
最適なグリップ力で、前後左右の激しい動きに対応します。

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員 TEL(086)243-2218
教育シューズ振興会 FAX(086)243-2253

(製造部)日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467
<http://www.nisshinrubber.co.jp>
 E-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp



【新体カテスト集計・分析システム】

(文部科学省発表新体カテスト準拠)

体力づくりをめざして

- 個人票はカット済み
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全バックアップ

集計・分析処理料金(1人分)

230円(税込)



みつめたい教育と未来

第一学習社

以下の資料をお届けします

- 学校総括表
- 順位一覧表・級門分布表
- 判定別一覧表
- 生徒指導カード(個人カード控え)
- クラス台帳
- 生徒指導台帳
- 部活分析表
- 運動部活別比較表
- 部活台帳
- 学校集計資料・保健部資料
- ★教育委員会提出資料を完備

TEL 082-234-6806 FAX 082-503-3084 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14

大阪支社 / 06-6380-1391

新潟営業所 / 025-290-6077

横浜営業所 / 045-953-6191

福岡営業所 / 092-771-1651

札幌営業所 / 011-811-1848

つくば営業所 / 029-853-1080

名古屋営業所 / 052-769-1339

金沢出張所 / 076-291-5775

仙台営業所 / 022-271-5313

東京営業所 / 03-5803-2131

神戸営業所 / 078-937-0255

沖縄出張所 / 098-896-0085

Blanc Roche

体操着・水着・上履き
カスタムシューズ
ユニフォーム



ブランロッシュ株式会社

〒176-0006 32-15, Sakae-chyo Nerima Tokyo

Tel: 03-3994-1055

<http://www.blanc-roche.com/>

<http://store.shopping.yahoo.co.jp/blanc-roche/>



足の成長を一番に考えた「教育シューズ」

教育シューズ® A イスMV3



安全で快適な
ポイント

- 1 通気性
- 2 安定性
- 3 クッション性
- 4 快適性

教育シューズ® プレミアム誕生!

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員
教育シューズ振興会
 TEL(086)243-2218 FAX(086)243-2253
 (製造部) 日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467
<http://www.nisshinrubber.co.jp>
 E-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp



主体的・協働的に学ぶ学習! アクティブ・ラーニングを先取り!

小学校体育科副読本

新版

学習指導要領準拠

体育の学習

細江文利 前東京学芸大学教授
 池田延行 国土館大学教授
 村田芳子 筑波大学名誉教授 編著

『体育の学習』ご採択校にデジタル教材を無料でご提供!

DVD 版

アプリ版



本書の特色

- 主体的な学習を可能にする詳しい学習の進め方!
- 協働的な学習を加速する豊富な学習資料!
- 運動の楽しさにふれ、技能が身につく!
- 運動技術を連続写真でわかりやすく解説!

児童書 / 1・2年各56P, 3・4年各64P, 5・6年各88P
 オールカラー / 各学年470円(税込)
 指導書 / 各学年...児童書+136P / 各学年2,300円(税込)

DVD版「デジタル体」は、児童書と指導書をセットでご採択いただいた学年につき指導書冊数分の枚数をお送りします。「アプリ版」は、児童書と指導書のご採択校へ認証コードを提供します。対応OS: iOS8/9, Windows8.1

詳細は
コチラ



光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町 14
 TEL.03-3262-3271 代表 FAX.03-3230-4190
 ホームページ <http://www.kobun.co.jp/>

祝 第55回全国学校体育研究大会(福島大会)



NEW 東書ニュービデオソフト DVD版 VS 小学校体育実技

いろいろな角度からとらえた映像が、運動の流れや体全身の動きを表示しつつ、細かい部分のようすまではっきりと映し出します。

体づくり運動
器械運動
水泳
ゲーム・ボール運動
陸上運動
表現運動



●全19巻 各9,500円(税別)



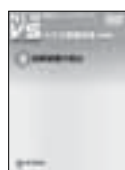
NEW 東書ニュービデオソフト DVD版 VS 小学校保健

日々の生活の中の食事、運動、睡眠、休養のバランスを意識することの大切さや自分たちの心と体に起こる変化のことを分かりやすく解説しています。

- ①けんこうな生活 (3年)
- ②育ちゆく体とわたし (4年)
- ③心の健康 (5年)
- ④けがの防止 (5年)
- ⑤病気の予防 (6年)



●全5巻 各15,000円(税別)



NEW 東書ニュービデオソフト DVD版 VS 中学校保健体育

中学校の保健の内容に対応した映像教材です。

●全10巻 各18,000円(税別)

- ①応急処置／②心肺蘇生法／③生殖機能の成熟と異性の尊重／④心の健康／⑤環境への適応能力／⑥生活に伴う廃棄物の衛生的管理／⑦交通事故の発生要因と回避／⑧犯罪被害の防止／⑨感染症の原因と予防／⑩保健・医療機関、医薬品の利用

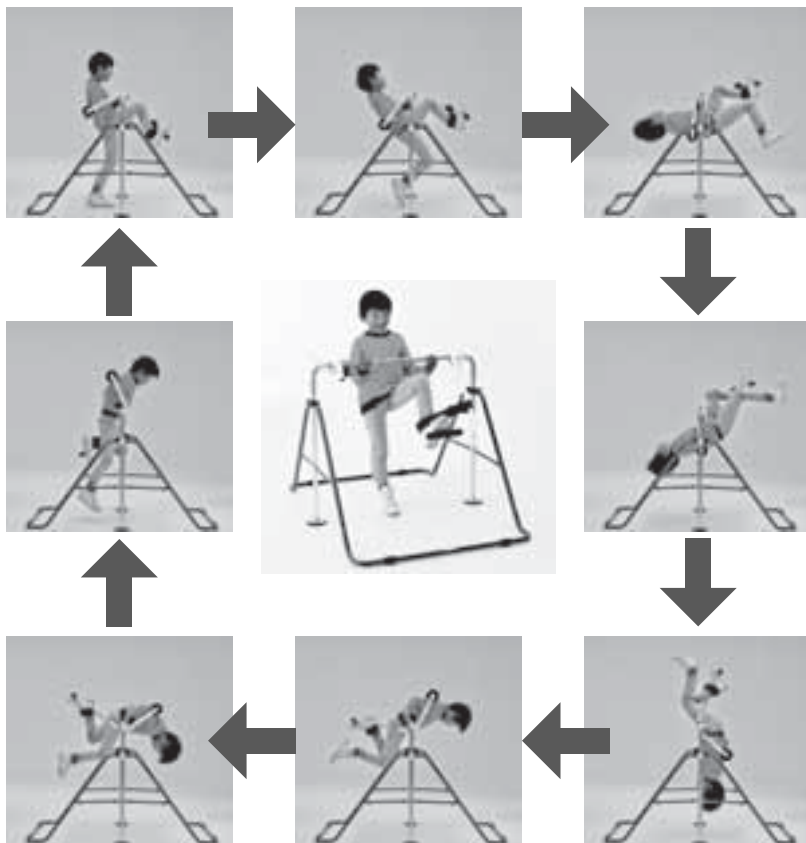
ビジュアル 新しい体育実技

教師用DVD-ROM4枚付 全1冊/B5判/336頁/4色刷
学習カード、図版集、動画集収録 定価 本体752円(税別)

- 写真点数3,500 圧倒的な迫力
鮮明な連続写真を豊富に掲載し、動きのポイントをわかりやすく提示。
- 2ステップ構成
新学習指導要領に合わせたステップ1(1学年～2学年用)、ステップ2(3学年用)の2ステップ構成。
- ご採用校には700点以上の動画を無料サービス
教師用DVD-ROMに14種目の動画データを収録しました。
動画データはWindows対応のWMV版と、iPadなどに対応するMP4版の2種類を収録。



小中企画部 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7481 Fax:03-5390-6012
<http://www.tokyo-shoseki.co.jp>



『できたっ!』を苦手な子どもにも

-セノーの逆上がり練習器

逆上がりのできない原因の一つとして『後方回転感覚の欠如』が挙げられます。セノーの逆上がり練習器は上半身は鉄棒から離れることのない後方回転を、下半身は蹴り出しの感覚をそれぞれ同時にサポート。回転するイメージをしっかりと身体に覚えさせます。

セノーの逆上がり練習器

後方回転サポート

蹴り出しのサポート

お腹と鉄棒が離れない

ワンタッチ装着

Lサイズ AT5000

Mサイズ AT5001

Sサイズ AT5002

本体価格 各 ¥25,000+税

セノー株式会社

〒270-2214 千葉県松戸市松飛台250番地

Tel:047-385-9110 Fax:047-385-9177

<http://www.senoh.jp>



運動・スポーツの教え方・学び方

新しい体育の授業づくり

編著者 勝亦紘一 中京大学名誉教授 家田重晴 中京大学教授

体育の授業や運動部の活動を通して、
生徒が楽しみながら生涯スポーツの基礎を築くための指導者の道標

ISBN 978-4-477-02631-2 B5判 / 208頁 2,000円(+税)



児童・生徒にはわかりやすく、
先生には扱いやすい準教科書

たのしい 1~6 体育

図説 新 中学校体育実技



B5判 / オールカラー / 52 ~ 84頁 457円(+税)
朱書きでポイントがわかる教師用指導書 B5判 84 ~ 116頁 1,714円(+税)

B5判 / オールカラー / 336頁 教師用指導書付き 727円(+税)

大日本図書
<http://www.dainippon-tosho.co.jp>

本社	〒112-0012 東京都文京区大塚 3-11-6	03(5940)8675
中部支社	〒464-0075 名古屋市千種区内山 1-14-19 高島ビル	052(733)6662
関西支社	〒530-0044 大阪市北区東天満 2-9-4 千代田ビル東館 6階	06(6354)7315
九州支社	〒810-0042 福岡市中央区赤坂 1-15-33 ダイアビル福岡赤坂 7階	092(688)9595

祝！スポーツクライミング 東京オリンピック正式種目採用決定

クライミングで 遊びながら 体力づくり



★クライミングの効果

- 腕・腹筋・背筋・脚の筋肉に加え、バランス感覚をフル活用することで、総合的に体力を向上します。
- 大きな達成感が、自分自身への信頼と自信（セルフエスティーム）を生み出します。
- 登っている人を応援、一緒に考えることでコミュニケーション能力が育まれます。

クライミングのことなら弊社におまかせください。20年間で400ヶ所以上のクライミング施設を施工し、年間50件以上の保守点検も実施。（国内シェア70%以上）

豊富な経験とノウハウで、安心のサポートをいたします。

東商アソシエート株式会社 クライミング事業部
 〒104-0032 東京都中央区日本橋茅場町3-12-2
 TEL:03-4321-0142 FAX:03-4321-0141
<http://www.climbing-tosho.com/>

わかる
できる
好きになる

児童書 学習内容が着実に身に付く2学年ごと編成

教師用指導書 今日の授業にすぐ使える6学年分の指導資料

学習指導要領完全準拠 小学校体育副読本

「たのしいたいいく」

- 学習内容が着実に身に付く2学年ごと編成。
- 運動イメージをとらえやすく、動きのコツがすぐわかるワイド判。
- 基礎・基本も工夫の例も満載。2段階での学習過程を強力に支援。
- 自発的な学習の意欲を高める「学習活動と振り返りのページ」
- チェック欄で、児童が身に付けるべき内容を明確に提示。
- 系統性・発展性に即した資料配列と紙面構成。
- 学校の実態に合わせて使える運動領域別編集。



判型：全学年 AB 判
オールカラー
1・2年生：56P
3・4年生：88P
5・6年生：112P
価格：444円＋税



株式会社文溪堂



EVERNEW.

子どもたちの笑顔のために
安心・安全なグッズを
お届けしています

〒136-0075
東京都江東区新砂 1-6-35
イーストスクエア東京ビル 6F
TEL 03-3649-3052
FAX 03-5683-5946
<http://www.evernew.co.jp>

本財団は「公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金」から
助成を受けております

祝

第55回 全国学校体育研究大会 福島大会

日本写真著作権協会会員

有限会社 **ワタナベスタジオ**

〒969-1612

福島県伊達郡桑折町字西大隅3-13

TEL 024-582-3152

FAX 024-582-3622

福島県学校生活協同組合

がんばろう
ふくしま!

安心して安全なゆとり生活を
応援します。

事業紹介

- ・組合員に対するサービス部門として、取り組んでいます。
- ・生命保険・自動車保険の保険料が割引になります。
- ・ユニセフ募金をはじめ日本生協連・県生協連と連帯して運動しています。
- ・学校生協で利用した購入金額に応じてポイントが付きます。

供給 購入価格に対して1%

供給 ・ 購入価格に対して0.1%

1000ポイント単位で学校生協指定の商品と交換します。

その他いろいろなサービスも行っています。

WEBでチェックして下さい

<http://www.f-gakuseikyo.or.jp>

お問い合わせ

福島県福島市南矢野目字道下35-1 TEL024-563-5755 FAX024-558-7811

祝

第55回全国学校体育研究大会 福島大会

子どもたちが元気に健やかに成長することを願い、この大会が開催されますこと、誠におめでとうございます。

（公財）日本教育弘済会は、教職員の皆様の相互扶助と、明日を担う子供たちの教育の充実と発展を支援する公益財団法人です。

教弘保険（教職員並びに教育関係職員のみが加入できる）の普及拡大を通して、教育の振興に寄与しています。

— 事 業 案 内 —

教育振興事業

貸与奨学金 ・ 給付奨学金 ・ 教育研究助成 ・ 教育文化事業

福 祉 事 業

宿泊助成（浅香荘・日教弘指定宿泊施設）、結婚・出産祝金、人間ドック助成

共 済 事 業（提携保険事業）

教育関係者だけが加入できる「教弘保険」

・ 新教弘保険 ・ ユース教弘保険 ・ 新教弘終身保険 ・ 新教弘医療保険他

公益財団法人日本教育公務員弘済会福島支部

福島市上浜町 10-38（教育会館内）

TEL 024(522)6522 FAX024(522)7751



The road to victory.

勝利への道

祝 第55回全国学校体育研究大会福島大会

クラロンは、
スポーツウェアでサポートします。

スポーツウェア企画・製造・販売



〒960-8164 福島市八木田字並柳 58 TEL 024-546-0135(代) FAX 024-545-1345

躍進!東稜



祝 第55回全国学校体育研究大会 福島大会

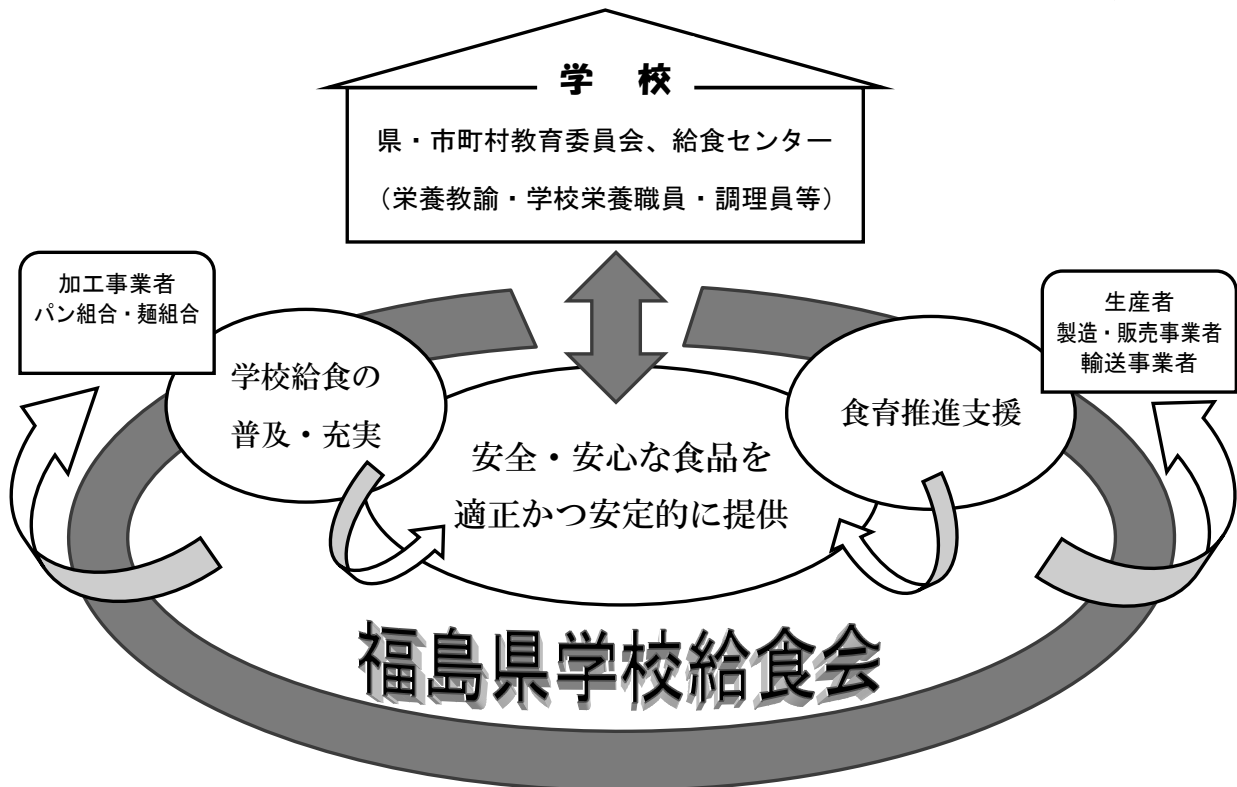
学校公開 11月3日(木) 第2回オープンスクール 11月13日(日)

福島東稜高等学校 〒960-8124 福島市山居上3 TEL024-535-3316

祝・第55回全国学校体育研究大会福島大会

県民の豊かな食生活の向上

学校給食を通じた 子どもたちの健やかな成長



福島県学校給食会は

- ◆ 安全で安心できる食品を、県内全域に、適正な価格で、安定的に提供します。
- ◆ 地域の製造・加工事業者等が協力・連携し、顔の見える、安心給食を提供します。
- ◆ 栄養バランスのとれた質の高い食材や献立を研究・開発し、提供します。
- ◆ 栄養教諭等の学校給食に関する研究・研修や教育活動を支援します。
- ◆ 学校給食情報の発信や国・県等の事業を受託し、学校給食の普及を推進します。

公益財団法人福島県学校給食会

〒960-1241 福島市松川町字平館 16-2

電話 024-567-4711 FAX 024-567-4451

E-mail: info@fgk.or.jp URL: <http://www.fgk.or.jp>



4年後、ライバルは世界だ。

— in ふくしま —

K&S ケースランキ
スポーツスペシャル
第32回

東日本女子駅伝



11/13 (日) ひる 12:00

フジテレビ系列
実況生中継

制作・著作:
福島テレビ

FILA
WORLD BRAND QUALITY



Galax
学校生活を、
もっと楽しく、もっと快適に。



ギャレックス株式会社

<http://www.galax.jp/> E-mail info@galax.jp

■本社	〒915-0803 福井県越前市平出1-12-22	TEL(0778)23-1100(代)	FAX(0778)23-7721
■大阪支店	〒541-0059 大阪市中央区博労町1-8-2 三共堺筋本町8階	TEL(06)6125-1155(代)	FAX(06)6125-1165
■東京支店	〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-13-9 FORECAST人形町2F	TEL(03)3669-5788(代)	FAX(03)3639-5002
■名古屋支店	〒464-0075 名古屋市千種区内山1-10-4 後藤ビル	TEL(052)745-8755	FAX(052)745-8756
■仙台支店	〒982-0251 仙台市太白区茂庭字人來田東39-1	TEL(022)307-4101	FAX(022)307-4103



Run on clouds.
Swiss Engineering

Onとの出会いで
あなたの走りが
あなたの日常が
かわります

Sports Amenity
Beech Forest

〒963-8875
福島県郡山市池ノ台1番1号 池ノ台ウィズワンビル
tel 024-954-6657 fax 024-954-6678



Women's



EHSG

検索

Onショッピングサイトは「EHSG」で検索、もしくはご覧のQRコードから。

Men's



祝

第55回

全国学校体育研究大会

福島大会



有限会社 吾妻印刷

グッドビジネスをあなたと、業務内容はホームページへ。

<http://www.azuma-pg.jp/>



●会社所在地／〒960-8074 福島県福島市西中央四丁目25

TEL.024-534-0342 FAX.024-536-0158 E-mail.azuma@azuma-pg.jp

企画から発送までのトータルサポート 吾妻印刷はお客様のニーズにお応えします

ヨロオドルスイミング

第55回全国学校体育研究大会
福島大会の成功をお祈りします

ピュアスポーツ

福島スイミング

福島市矢野目

024(555)0660

福島東スイミング

福島市丸子

024(552)1660

福島南スイミング

福島市大森

024(573)7320

有限会社 ヤマト設備

代表取締役 小原克史

〒960-8136 福島市八島町5番8号

TEL (024) 531-5282

FAX (024) 531-6602

携帯: 090-8252-8363

第26回全国菓子大博覧会
【名誉総裁賞受賞】

さつまいもと栗が織り成す
まろやかな食感、
上品な甘さの
スイートポテトです。



いもくり 佐太郎

しのぶの里の
民話のぬくもりを伝える銘菓



いもくり佐太郎

検索

<http://www.imokurisatarou.com/>

菓子処 桃里庵

レストラン 岩代家敷
大王

株式会社 ダイオー 福島県福島市下野寺字薬師堂後4 TEL 024-535-3311(代)

飲み放題コース
(2時間)

4,000^(税込)円~ ございます
本物の生ビールをどうぞ!

いい街 いい店 いい出逢い
ビアレストラン



ローゼンケラー

福島市栄町12-10(ひかりビル1階)

TEL.024-522-8611 ☎0120-262570

祝 開催

第55回全国学校体育研究大会福島大会

全国の体育の先生、ご苦労様です。
実り多き大会になることをご祈念申し上げます。

(株)オノヤスポーツ スポーツ用品販売・
スポーツ施設施行

本 社

福島市北矢野目字竹ノ花32-2
TEL 024-552-2433 fax 024-552-2430

MAXふくしま店

福島市曾根田町1-18 MAXふくしま 3階

伊 達 店

伊達市保原町泉町95-1

気仙沼店

気仙沼市赤岩杉ノ沢77-1

第55回全国学校体育研究大会福島大会開催 おめでとうございます。

福島県運動具商業協同組合では、安全に運動していただくために
体育器具の点検を推奨しております。

組合員名

(株)オノヤスポーツ (有)プロショップ信 (有)文化堂スポーツ
スポーツショップサイトウ オノヤスポーツ用品(株) (株)ワタナベスポーツ
(株)ノジリ (株)サトウスports (有)ヤマザキ コマツスポーツ
(有)村上運動具店 (株)サンメリット白河 (有)タナカスポーツ
(有)カンダヤ キサキスポーツ (有)バンダイスポーツ (株)若木
スポーツクラブタカハシ (有)ヤマト運道具店 オノセスports
(有)遠藤運動具店 (有)タカクニスports (有)ワールドスポーツ

各種宴会・ご法要のご会食は、当店にお任せ下さい。
仕出し、あつあつ釜めし、カニ料理でお馴染みの



和風料理 絹の里

福島市松川町下川崎字西原25-2
TEL 024 (567) 5520
FAX 024 (567) 5524
<http://www.kinunosato.com>

教材のことなら何でも揃う教材の総合センター

株式会社 共学社

二本松本社
〒964-0901

福島県二本松市表1-552-3

Tel 0243-23-3408(代) Fax 0243-23-3409

福島営業所
〒960-8252

福島県福島市御山字稲荷田10-10

Tel 024-535-7546(代) Fax 024-534-5936

伊達営業所
〒960-0687

福島県伊達市保原町字旭町77-1-5

Tel 024-574-3731 Fax 024-574-3732



いつも笑顔で

とらんぷく

トランスパック株式会社

代表取締役 赤間 健男

営業本部 〒960-1106 福島市下鳥渡新町4-1

トラック事業部 バス事業部

TEL (024) 573 - 8667 FAX (024) 544 - 6522

水と空気と熱で社会に貢献する企業



株式会社 光和設備工業所

代表取締役 古川 敏博

本社／福島市御山字上原2-10

福島東事務所／福島市五老内町2-6

田島営業所／南会津町田島字西上川原乙54-15

☎024(558)2000

☎024(535)2318

☎0241(62)0440

祝 第55回全国学校体育研究大会福島大会

誠実をモットーに教育に奉仕する

株式会社 福島教材社

〒960-8021 福島市霞町1-11
 TEL (024)534-4690(代) FAX (024)534-4696
 E-mail: fukukyo@beige.plala.or.jp



有限会社 ティーエス観光

TEL 024-566-3901
 福島県伊達郡川俣町字柏崎70-2

ゴリラタクシー

024-538-2331

ゴリラ運転代行サービス

福島 024-503-0263
 川俣 024-538-2331
 保原 024-575-1801

テレビユー福島が届ける朝の情報番組

げきん

MON→FRI

月～金 あさ9:55～放送

女子力アップの月曜日 HOTな発見の火曜日 出会いと別れの水曜日 ドキドキと笑いの木曜日 見ればおもしろい金曜日



奥秋直人 中嶋 絵美 ヒッキー北風
 (よしもとクリエイティブ・エージェンシー)

www.tuf.co.jp



TUFテレビユー福島



The longest journey begins with a single step !!

— 千里の道も一歩から —





すべてを地域のために

東邦銀行

75th
ANNIVERSARY

75年の感謝

東邦銀行はおかげさまで今年75周年を迎えます！

安心・安全 福島県公安委員会認定 250407号

渡辺代行

代行保険加入

080-5550-5372

〒960-2156 福島市荒井字地蔵原戊43-5

代表 渡辺 健



**グランパークホテル
エクセル福島恵比寿**

〒960-8051 福島県福島市曾根田町10番6号

TEL 024-533-4166

FAX 024-533-1180



進歩と調和

オフィス用品・IT関連等

進和ビジネス株式会社

代表取締役社長 冨塚 新吉

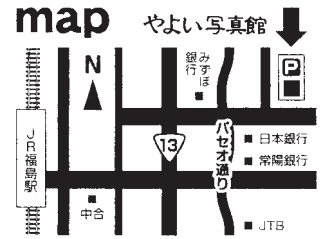
福島市鎌田字卸町23番地の6

TEL.024-552-5300(代) FAX.024-552-5310

<http://www.shinwa-b.co.jp>

思い出をつくり・思い出をのこす。

やよい写真館



福島市大町1-24(日本銀行北側) ☎521-2619

AM9:00~PM6:00(毎月第1・第3水曜日定休)



質の高い情報は 新聞だと思う。



福島民友

福島民友新聞社 〒960-8648 福島市柳町4-29



ご購入のお申し込みは ☎0120-152214へ

送迎から旅行まで、貸切バスのご用命はお気軽にお電話下さい。
一般貸切旅客自動車運送事業 東自旅-第247号

快適な旅をサポートします
手配旅行から企画旅行の手配
福島県知事登録旅行業第2-352号

(株)福島西交通

福島西交通観光

福島市笹木野字蜂久保30-3 TEL 525-1877 FAX 525-1878



太謝謝您了

営業時間
11:30~14:30【ラストオーダー14:00】
17:00~22:00【ラストオーダー20:30】
定休日/日曜日

〒960-8035 福島県福島市本町5-30コーワビル2・3F
TEL.024-524-1741 FAX.024-524-1745
<http://www.shiering.jp>

“石林”定休日変更のお知らせ 2016年9月から日曜定休となりました。

— 暮らしのとなりに、いつもふくしん —

○の福島信用金庫

〒960-8660 福島市万世町1-5

<http://www.shinkin.co.jp/fshinkin/>

KOBAYASHI

24時間
365日

出張修理
受付中!



LPガス



SS



車検整備



リース

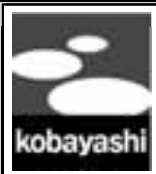
ecoショップ
OPEN!!

eco

省エネ



太陽光販売



株式会社 小林

〒960-1454 福島県伊達郡川俣町字八反田24

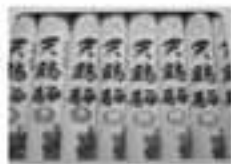
フリーダイヤル 0120-65-3341



携帯HP



天鶴麺



真心こめた贈り物に!!

有限会社 仲村商店

〒960-1108 福島県福島市成川字半夏田5

TEL 024-546-3121 FAX 024-546-8464

mail tensuru-nakamura.com

祝 第55回全国学校体育研究大会 福島大会

こだわりの
Tシャツプリント屋

部活動や楽しい仲間にお祭り、イベント活動に楽しいユニフォームなら…

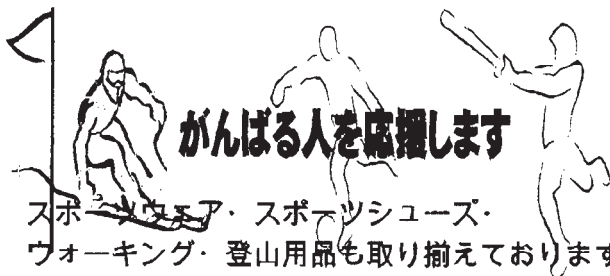


プロショップ信

福島市丸子字中町裏34-8

TEL. 024-553-4388

FAX. 024-553-3401



スポーツウェア・スポーツシューズ・ウォーキング・登山用品も取り揃えております

野球用品・スポーツ用品専門店
スポーツランド

TEL 024(536)1611

福島市南中央2-34-2 Fax(024)531-0351
営業時間11:00~20:00 土日祝10:00~19:00
定休日 火曜 第2月曜日(変更あり)



岩瀬書店

本社・外商センター
[営業本部]
外商部・企画商品課
[総合管理部]
〒960-8252
福島市御山字中川原 80-1
Tel. 024-533-1122
Fax. 024-533-0022

◆福島
八木田店 プラズゴ Tel. 024-546-0055
中合店 Tel. 024-521-3022
ヨーク・ニマル福島西店 Tel. 024-555-0886
福島駅西口店 Tel. 024-526-2610
鎌田店 Tel. 024-554-5566

◆郡山
富久山店 プラズゴ Tel. 024-936-2220
(マル好イア直通) Tel. 024-936-2226
外商部郡山 Tel. 024-936-2231

◆会津
会津若松駅前店 Tel. 0242-22-3366

◆喫茶
珈苑 Tel. 024-546-3390
ド・トルコ・ヒー郡山富久山店
Tel. 024-936-2240

岩瀬書店ホームページアドレス
<http://www.iwasebooks.co.jp/>

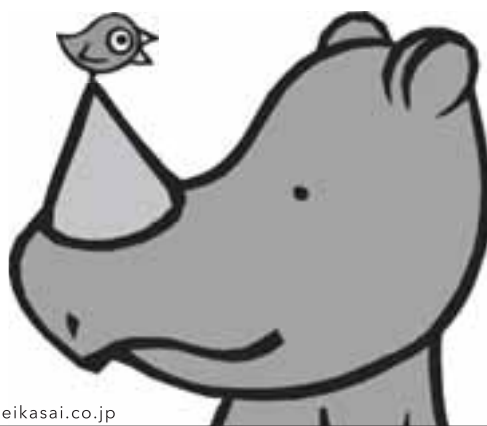


環境美化用品・業務用清掃用品

有限会社 日 征

〒960-8055 福島県福島市野田町2-7-38
TEL 024 - 534 - 1637
FAX 024 - 535 - 1597

一緒にずっと。
安心をもっと。



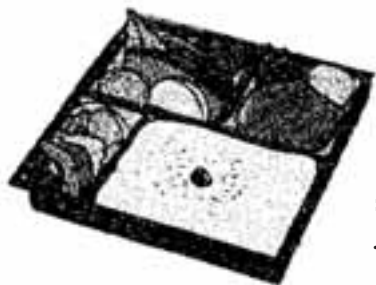
共栄火災

ほく、サイ吉
人々が気持ちよく
毎日を暮らせるよう、
安心のチカラで
そっと支えるサイ。
共栄火災のサイ吉です。

共栄火災海上保険株式会社

〒105-8604 東京都港区新橋 1-18-6 TEL.(03)3504-0131(大代表) www.kyoeikasai.co.jp

お弁当・オードブルなど…
ご予算・ご要望に合わせて、お作り致します！



有限会社 和 合

〒960-8204 福島市岡部字西原66
TEL 024-535-1928 FAX 024-535-1929



かほる

福島市置賜町8 第一清水ビル2F
☎024-522-3403
090-6227-9226

御盛会をお祈り申し上げます

真心でサービス

良質・良品年中お買得の店

福島市立大森小学校
標準服・運動着等販売指定店

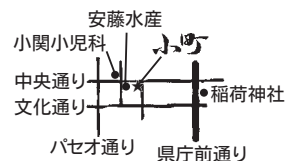


旬のお料理と
美味しいお酒
小酒
営業時間/午後5時～11時
定休日/日・祝祭日

〒960-8036

福島県福島市新町1-12

電話(024)573-5888



祝 第55回全国学校体育研究大会 福島大会



福島市松川町南諏訪原4-8 (松川小学校から徒歩3分)

☎(024)573-5120 ☎(024)573-5130

株式会社モリヨシ

介護保険制度適用 福祉用具貸与指定事業所

ケアサポート あい

福島市松川町下川崎字介在窪山45-1

☎(024)567-7800 ☎(024)597-7804

株式会社モリヨシ技研

四季の膳
郷音

福島市置賜町二一ー一
中央通り・立ち花館二F
電話(024)521-1507

**文房具、オフィス家具の
ことならお気軽に。**

★高級筆記具取り揃え
各種割引中!

トータル文具
ムツザキ

福島市早稲町
☎521-3121

中合様より吾妻陸橋挟んで南側。☒有ります。

取り扱い商品；紙・文具・事務用品
事務機&消耗品

ムトウ文具店

武藤 昭一

〒960-1421 福島県伊達郡川俣町字鉄炮町64
TEL (024)565-2048

知的散步
地元密着
良書豊富
快適選書

文化情報発信館
西澤書店

〒960-0868 福島県福島市太田町13-73
TEL/024-534-1111 FAX/024-534-1303 <http://selecton-fk.jp>

処方せん受付所 皮膚病・漢方相談・ぢ・肥満・はかりの

石井薬局

<営業時間>
朝7時30分～夜9時30分

川俣町中丁
☎024-565-2068
FAX.024-565-4152

薬剤師/佐藤 有一
登録販売者/佐藤 天

Don't Worry-Be Happy

THE CELECTON
FUKUSHIMA

ザ・セレクトン福島

〒960-8068 福島県福島市太田町13-73
TEL/024-534-1111 FAX/024-534-1303 <http://selecton-fk.jp>

株式会社 誉田

代表取締役 誉田 幸男

本社 / 伊達郡川俣町鉄炮町7 1
TEL(024)566-3111

駅前給油所 TEL(024)566-3131
ハイパス給油所 TEL(024)566-5100

建材部 TEL(024)566-3535
カインズホーム川俣店 TEL(024)566-5000

**福島県図書教材協会
県北支部**

祝
第55回全国学校体育研究大会
福島大会

うどん そば 仕出し 弁当

味処 みずほ

福島市土船中谷地48 TEL・FAX (024)593-2335



建設用資機材レンタル業 仮設工業会指定工場
警備業 一般貨物自動車運送事業

株式会社 サンビルド

代表取締役 新井 勇雄

〒960-2153 福島市庄野字辻屋敷1番地
本社 Tel (024)593-4531 Fax (024)593-4663

世界で飲まれている、
ヤクルトの
プロバイオティクス。

人も地球も健康に
Yakult



プロバイオティクスとは、腸内菌のバランスを改善することにより、ヒトによい働きをする生きた微生物やそれを含む食品のことです。腸に生きたままプロバイオティクスをとどけるヤクルトは、その働きが認められ、今や日本をはじめ世界33の国と地域で飲まれています。

福島ヤクルト販売株式会社 〒960-8252 福島市御山中川原116
TEL.024(535)8960

<商品のお申込み・お問合せは> ☎0120-8960-59 (受付時間 8:30~17:00
ヤクルト 土・日・祝日・年末年始を除く)

おしゃれ
のだや
N O D A Y A

スクール衣料品販売店

〒960-1101 福島市大森字館ノ内58-1
TEL. 024-546-2926 FAX. 024-546-3100



AKASHI School Uniform Company

動く、続ける、力になる。
Persistence is power.

体操着って、青春着。
仲間がいる。思い出がある。

SPORTS YACHT

GOOD SCHOOL LIFE
GOOD SCHOOL SPORTSWEAR
Licensed by DESCENTE

株式会社 明石スクールユニフォームカンパニー

本社 / 〒711-8611 岡山県倉敷市児島田の口1丁目3-44 TEL:086-477-7702(代) FAX:086-477-5663
福島営業所 / 〒960-8074 福島県福島市西中央3丁目72-3 TEL:024-533-4010 FAX:024-533-7778

URL:www.akashi-suc.jp

平成29年度 全国高等学校総合体育大会 **137-111**

繋がる絆 魅せよう僕らの若さ力。



はばたけ世界へ 南東北総体 2017

2017 **7/28** Fri ▶ **8/20** Sun

バスケットボールは7/27(木)▶8/2(水) ソフトテニスは7/22(土)▶7/29(土)

主催 | (公財)全国高等学校体育連盟
山形県、宮城県、福島県、和歌山県、
山形県教育委員会、宮城県教育委員会、
福島県教育委員会、和歌山県教育委員会、
関係中央競技団体

共催 | 読売新聞社
後援 | 文部科学省
(公財)日本体育協会
日本放送協会



©インターハイ

平成29年度 全国高等学校総合体育大会 **インターハイ**



絆が絆を越えよう僕らの若さ力

インターハイ
NEWS
vol. 1

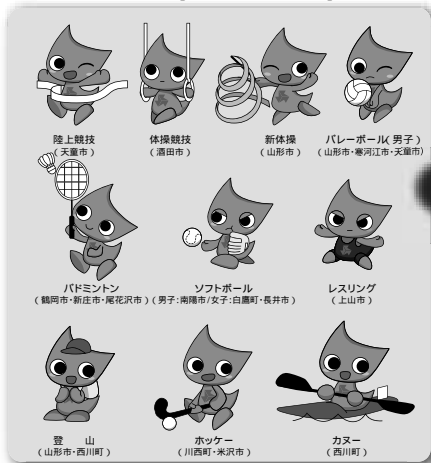
はばたけ世界へ 南東北総体 2017

平成29年 7/28 8/20

ソフトテニス 7/22(土)~7/29(土) バasketボール 7/27(木)~8/2(水) 自転車競技 7/26(水)~7/30(日)

開催競技

山形県(9競技10種目)



総合開会式

7月28日(金)(天童市)
山形県総合運動公園総合体育館

宮城県(11競技13種目)



和歌山県



福島県(10競技11種目)



大会愛称・スローガン・シンボルマーク・総合ポスター図案

大会愛称

はばたけ世界へ 南東北総体 2017

作者: 宮城県岩ヶ崎高等学校 千葉 穂乃香さん

スローガン

絆が絆を越えよう僕らの若さ力

作者: 山形県立寒河江高等学校 安孫子 ゆいさん
揮毫: 山形県立寒河江高等学校 吉川 実里さん

シンボルマーク



作者: 山形県立山形工業高等学校 花鳥賊 裕介さん

総合ポスター図案



作者: 福島県立会津高等学校 角田 雪恵さん

最優秀賞表彰式



山形県において最優秀賞表彰式が行われました

原稿採決決定当晩(平成27年3月)

編集・発行

平成29年度全国高等学校総合体育大会山形県実行委員会
平成29年度全国高等学校総合体育大会宮城県実行委員会
平成29年度全国高等学校総合体育大会福島県実行委員会

〒990-8570 山形県山形市松波2丁目8番1号
〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3丁目8番1号
〒960-8043 福島県福島市中町8番2号

023-630-3232
022-211-3604
024-521-8672

旅が、

未来の

わたしを

つくる。

東武トップツアーズは、全国学校体育研究大会を応援しています。

スリリングだったり、とてつもなくダイナミックだったり、
思いもよらない出逢いがあったり、かけがえのない何にも勝る感動と遭遇したり・・・
そんな旅のひとつひとつが、あなたの心を育て、あなたの未来を素敵に変える
きっかけになりますように・・・
私たちは真剣にプレゼンします。



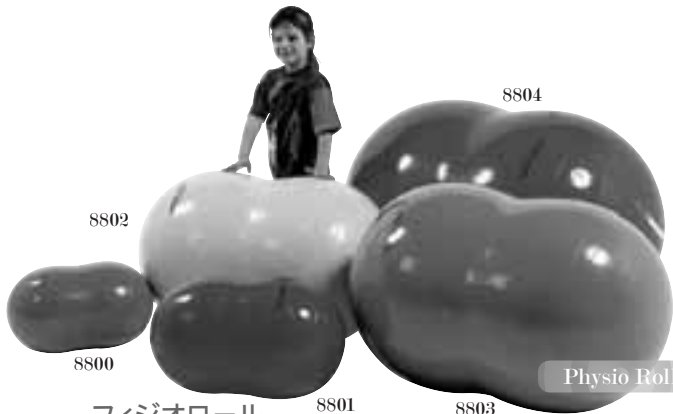
観光庁長官登録旅行業第38号 © JATA正会員・ボンド保証会員

東武トップツアーズ

TOBU TOP TOURS

www.tobutoptours.co.jp





フィジオロール

ギムニクオリジナルのユニークなピーナッツ型。厚みのある形状で耐久性に優れています。

品番	品名	色
8800	フィジオロール30	青
8801	フィジオロール40	赤
8802	フィジオロール55	黄
8803	フィジオロール70	青
8804	フィジオロール85	赤

日本Gボール協会認定

協会ホームページ
<http://www.g-ball.jp>

日本学校体育研究連合会認定

(公財)日本学校体育研究連合会
学体連ホームページ
<http://www.gakutairen.jp>



ギムニクプラス

ギムニクボールに比べると、より弾力性がありトレーニングやフィットネス初心者～中級者向き。カラーバリエーションが豊富。

Gymnic Plus



フィットボール

輝く真珠色が映える。フィットネスに最適なタイプ。ギムニクボールに比べるとより弾力性がある。

Fit Ball

品番	品名
9505	フィットボール55
9506	フィットボール65
9507	フィットボール75

品番	品名	色
9528	ギムニクプラス55	赤
9529	ギムニクプラス65	青
9530	ギムニクプラス75	黄

9539	ギムニクプラス55	緑
9540	ギムニクプラス65	緑
9541	ギムニクプラス75	緑
9542	ギムニクプラス65	黄
9543	ギムニクプラス65	黒

9535	ギムニクアルテ55
9536	ギムニクアルテ65
9537	ギムニクアルテ75



ギムニク

Gボールの代表的ボール。厚みのある形状で耐久性に優れています。弾力性、反発力が強いいため、強い負荷をかける運動に最適。

品番	品名	色
9545	ギムニク45	黄
9555	ギムニク55	赤
9565	ギムニク65	青
9575	ギムニク75	黄

オプティボール

ギムニクオリジナルの透明ボール。ギムニクボールと同じ、厚みがあり、強い負荷をかける運動に最適。

品番	品名
9655	オプティボール55
9665	オプティボール65
9675	オプティボール75

品番	品名
8975	パールシットイング55
8976	パールシットイング65
8977	パールシットイング75



Opti Ball



シットイング・ジム

厚みがあり、弾力性、反発力が強く大変珍しい足付きGボール。

品番	品名	
8935	シットイングジム35	
8945	シットイングジム45	黄
8955	シットイングジム55	赤
8965	シットイングジム65	青

Sit'n'Gym

トレーニングやフィットネスに最適なタイプ。大変珍しい足付きGボール。



パールシットイング

トレーニングやフィットネスに最適なタイプ。大変珍しい足付きGボール。

Pearl Sit'n'

CE すべての商品はヨーロッパの安全基準であるCE規格に合格しています。

GYMNIC BALANCE

輸入元 株式会社ギムニク
www.gymnic.com



Columbine

The Guardian of School Life

守る体操着

(公財)日本学校体育研究連合会賛助会員

(公財)日本学校体育研究連合会推薦品

児島株式会社

つねによりよい学校体育の環境づくりを提案しています。

本社 / 〒711-0911 岡山県倉敷市児島小川2-4-60 TEL 086-473-4634 FAX 086-472-0866
関東営業所 / 〒330-0855 埼玉県さいたま市大宮区上小町1085 TEL 048-642-5883 FAX 048-642-4766
盛岡営業所 / 〒020-0846 岩手県盛岡市流通センター北1-4-18 TEL 019-638-7501 FAX 019-637-0144

URL: <http://www.kojima-gp.co.jp> E-mail: gyomu4@kojima-gp.co.jp



JQA-EM 5215
ISO 14001:2004
児島株式会社、コロンバイナ様



JQA-QM7340
ISO 9001:2008
児島株式会社、コロンバイナ様、藤原さん